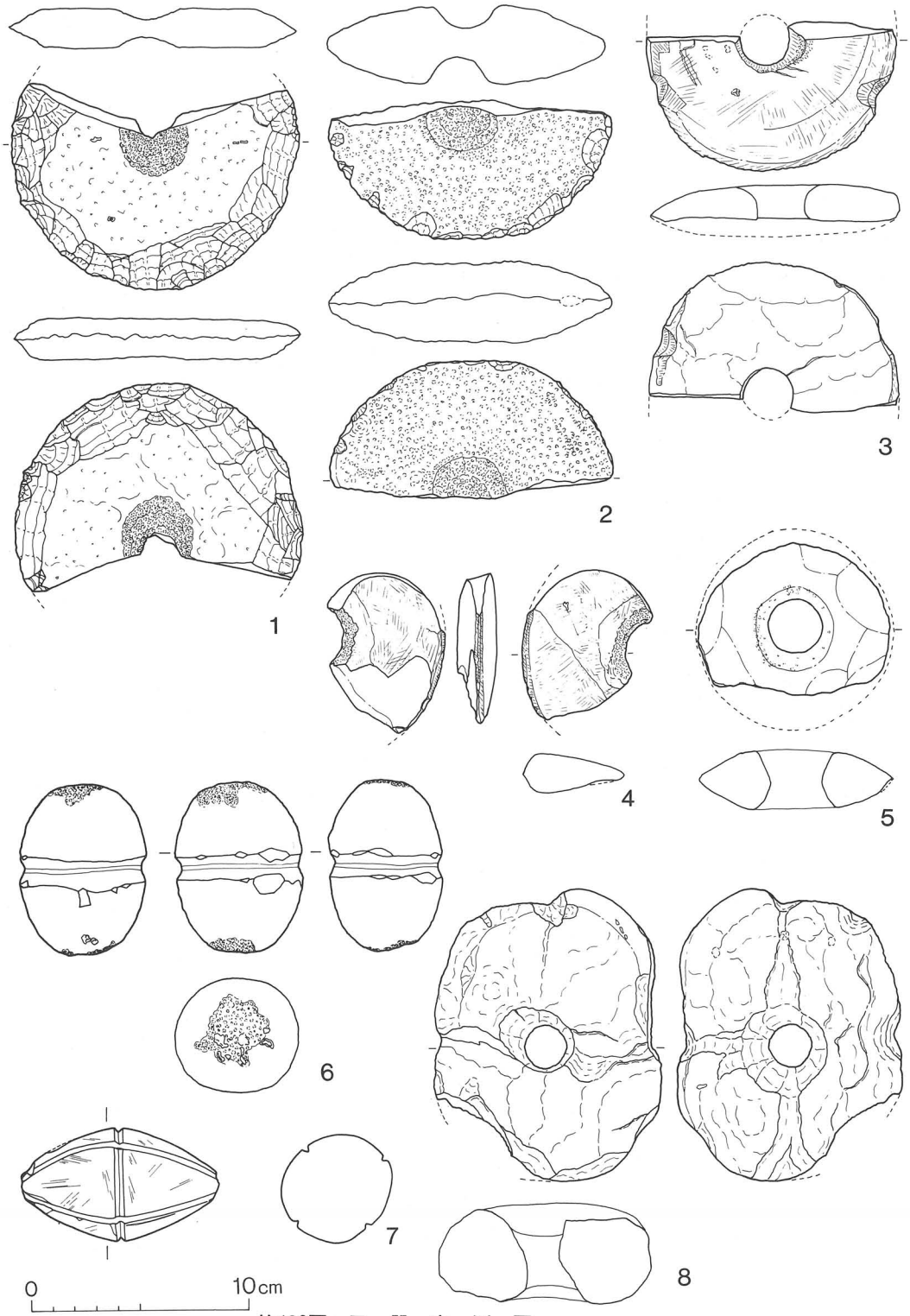
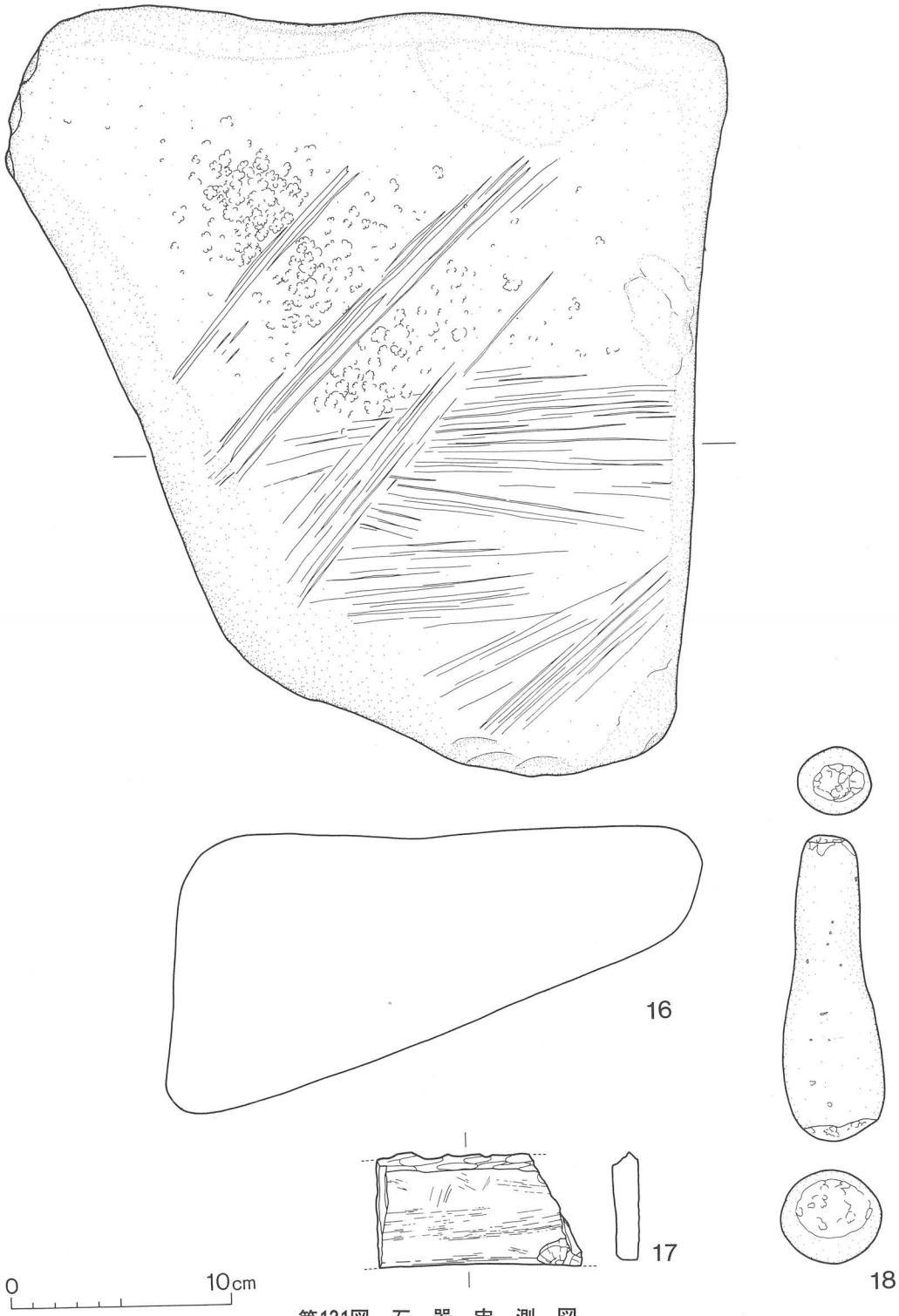
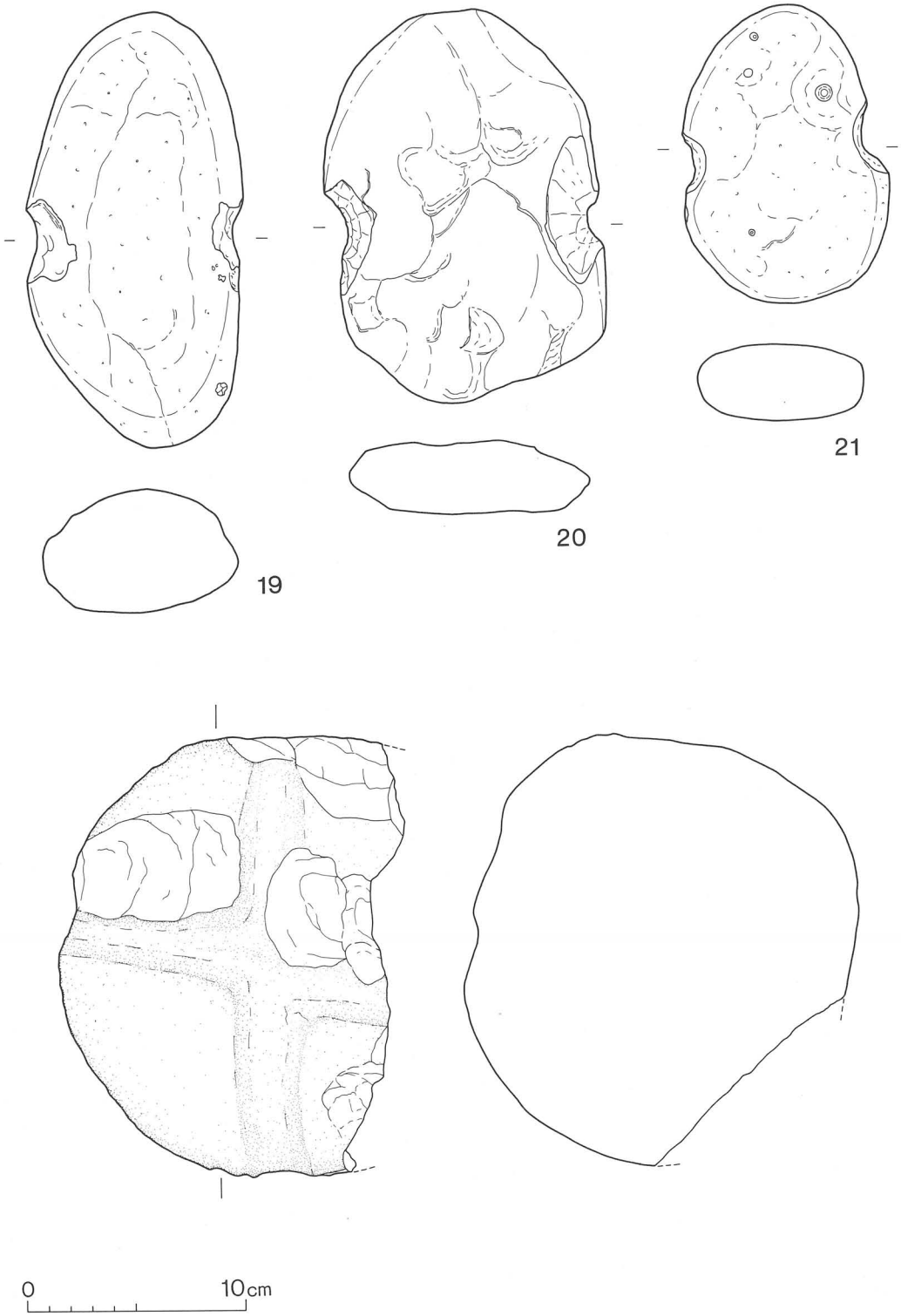


第129図　石　器　実　測　図

第130図　石　器　実　測　図



第131図　石　器　実　測　図



第132図　石　器　実　測　図

表14　蛤刃石斧観察表（Ⅰ）

挿図番号	法量（単位：cm，g）	石　材	出土層	成形・形態の特徴、その他
104－1	長さ(13.3)　幅　6.2 厚さ　4.5　重さ 600	玄武岩系	ハ－5区 弥生前期	完成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な研磨。刃縁は丁寧な研磨により、先端は使用により少々欠損、磨滅、使用痕あり。
2	長さ 20.0　幅　6.0 厚さ　3.9　重さ 805	〃	A－4区 弥生中期	完成品。胴材は敲打後、浅い研磨磨。一方の主面のみ基端下5cmが面的に凹んでおり、柄の装着に関連するのかもしれない。基端は敲打のみ。刃線は丁寧な研磨により、きれいな弧状を呈する先端には使用痕・欠損・磨滅がある。
105－3	長さ 16.5　幅　5.8 厚さ　4.5　重さ 700	〃	B－2区 弥生中期	完成品。頭部と刃部を欠く。
4	長さ 12.6　幅　6.1 厚さ　4.8　重さ 610	〃	ロ－6区 弥生中期	完成品。刃部を欠く。
5	長さ 14.0　幅　5.0 厚さ　3.7　重さ 480	〃	ロ－4区 弥生中期	完成品。刃部を欠く。
6	長さ 13.9　幅　6.0 厚さ　4.1　重さ 700	〃	ハ－5区 弥生前期	完成品。頭部と刃部を欠く。
7	長さ 14.8　幅　5.6 厚さ　4.3　重さ 690	〃	リ－3区 弥生後期	完成品。刃部を欠く。
8	長さ 12.6　幅　4.7 厚さ　3.5　重さ 350	〃	——	完成品。刃部を欠く。頭部付近に柄を着装していた痕跡が残る。
106－9	長さ 15.0　幅　6.4 厚さ　4.3　重さ 660	〃	ロ－5区 弥生中期	完成品？
10	長さ 12.2　幅　5.9 厚さ　4.2　重さ 525	〃	チ－4区 弥生後期	完成品？
11	長さ 12.5　幅　4.2 厚さ　3.3　重さ 335	〃	ロ－4区 弥生中期	完成品。全体の2/3が残る。
12	長さ 16.5　幅　5.4 厚さ　4.1　重さ 670	〃	ロ－5区 弥生中期	完成品。刃部を欠く。
13	長さ 16.8　幅　6,2 厚さ　4.5　重さ 610	〃	A－3区 弥生前期	完成品。刃部を欠く。
14	長さ 15.0　幅　6.2 厚さ　4.9　重さ 650	〃	ハ－3区 弥生前期	完成品。頭部を欠く。
15	長さ 12.8　幅　5.0 原さ　3.7　重さ 500	〃	ロ－4区 弥生中期	完成品。刃部を欠く。
16	長さ 12.8　幅　5.9 厚さ　3.6　重さ 510	〃	ハ－3区 弥生中期	完成品。刃部を欠く。
107－17	長さ(14.7)　幅　6.1 厚さ　4.3　重さ(650)	〃	ロ－6区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後比較的丁寧な研磨。基端端面も比較的丁寧に研磨。刃側は折損。
18	長さ(13.9)　幅　6.7 厚さ　4.9　重さ 635	〃	A－4区 弥生前期	完成品。折損品、全面敲打後浅し研磨。基部は丸く仕上げる。刃部は使用時に欠損。
19	長さ(12.4)　幅　6.2 厚さ　4.8　重さ 610	〃	イ－3区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な研磨。基端面は広く平坦であまりすぼまらない。刃部は使用時に欠損。
20	長さ(12.1)　幅　6.2 厚さ　4.5　重さ 525	〃	A－2区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、非常に丁寧な研磨。基端は広く、平坦だが、敲打後あまり研磨していない。刃部は使用時に欠損。
108－21	長さ(11.6)　幅　6.6 厚さ　4.6　重さ(600)	〃	ロ－5区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な研磨。一主面のみ残存。基端、刃部は欠損。

表15　蛤刃石斧観察表（II）

挿図番号	法量（単位：cm，g）	石　材	出土層	成形・形態の特徴、その他
108－22	長さ(10.7)　幅　5.9 厚さ(4.3)　重さ(487)	玄武岩系	A－2区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後丁寧な研磨。一主面のち残存。基端、刃部は欠損。
23	長さ(11.4)　幅　(6.1) 厚さ(4.4)　重さ(467)	〃	ロ－6区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後丁寧な研磨。刃縁は胴身径の約半分で丁寧な研磨による。使用期間は短かかったと思われる。
24	長さ(13.0)　幅　(5.5) 厚さ(4.2)　重さ(400)	〃	ハ－3区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。刃縁は丁寧な研磨による。先端は使用により少々欠損。
25	長さ(10.5)　幅　(6.2) 厚さ(4.7)　重さ(390)	〃	C－3区 弥生前期	完成品。折損品。胴身は敲打後、非常に丁寧な研磨。刃縁端は使用により少々欠損。
109－26	長さ(11.6)　幅　6.4 厚さ　4.6　重さ(480)	〃	A－2区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な研磨。刃縁は用による欠損。磨滅がある。
27	長さ(11.3)　幅　6.3 厚さ　4.8　重さ(560)	〃	C－2区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。刃縁は使用による欠損磨滅が少々ある。
28	長さ(10.4)　幅　5.8 厚さ　4.5　重さ(377)	〃	——	完成品。折損品。胴身は敲打後、非常に丁寧な研磨。刃縁は丁寧な研磨による。使用期間は短かいらしく、使用による先端の欠損、磨滅はあまり見られない。
29	長さ(8.8)　幅　(6.0) 厚さ　3.6　重さ(245)	〃	ハ－3区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。刃縁丁寧な研磨。使用痕少々あり。
30	長さ(11.5)　幅　5.7 厚さ　3.3　重さ(390)	〃	イ－2区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。基端は敲打のまま。刃部は欠損。
31	長さ(10.4)　幅　(5.7) 厚さ　4.4　重さ(400)	〃	B－5区 弥生前期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。基端は敲打そのまま。
110－32	長さ 11.9　幅　5.4 厚さ　4.2　重さ(465)	〃	A－2区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。刃縁は使用により先端が磨滅。
33	長さ 13.5　幅　4.8 厚さ　4.0　重さ 460	〃	ロ－6区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、わずかに研磨。刃縁付近は丁寧な研磨によるが、使用により先端は磨滅している。
34	長さ 15.0　幅　6.0 厚さ　4.6　重さ 601	〃	へ－区 弥生中期	完成品。剝離整形後、基端部、胴身部は敲打、研磨を施すが、雑な仕上べで剝離整形や剝打の凹部が目立つ。刃縁は丁寧な研磨により、きれいな孤状を呈する。使用による磨滅がわずかに見られる。
35	長さ(10.0)　幅　6.0 厚さ　4.1　重さ(446)	〃	A－3区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、簡単な研磨。刃部は丁寧な研磨によるが、使用により先端は欠損、磨滅している。
36	長さ(8.9)　幅　4.0 厚さ　4,2　重さ(320)	〃	イ－6区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨による。刃部は丁寧な研磨による。
37	長さ 10.0　幅　5.0 厚さ　3.0　重さ 240	〃	イ－3区 弥生中期	完成品。小形品。敲打後、胴身、基端とも軽く研磨しているが、剝離整形の凹部までが顕著に残る。刃部のみ丁寧な研磨によるが、使用時の欠損、磨滅が残る。
38	長さ(10.6)　幅　5.8 厚さ(3.5)　重さ(290)	〃	ロ－5区 弥生中期	完成品。折損品。胴身、刃縁とも丁寧な研磨による。刃縁は使用により少々欠損、磨滅さ。
111－39	長さ(11.0)　幅　5.8 厚さ(4.0)　重さ(260)	〃	イ－4区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。刃縁は丁寧な研磨による。使用期間は短かいと思われる。
40	長さ(8.6)　幅　(5.0) 厚さ(2.0)　重さ(70)	〃	ト－6区 弥生中期	完成品。折損品。胴身、刃縁とも非常に丁寧な研磨による。
41	長さ(10.5)　幅　(5.9) 厚さ(2.3)　重さ(185)	〃	ロ－6区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な研磨。

表16　蛤刃石斧観察表（Ⅲ）

挿図番号	法量（単位：cm，g）	石材	出土層	成形・形態の特徴、その他
111－42	長さ 15.0　幅 (5.8) 厚さ(2.5)　重さ(255)	玄武岩	チ－4区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。
43	長さ(7.5)　幅 5.6 厚さ(4.0)　重さ 162	〃	イ－4区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は丁寧な研磨だが、ほとんど欠損。
44	長さ(6.4)　幅 (5.6) 厚さ(3.4)　重さ(110)	〃	イ－3区 弥生中期	完成品。折損品。胴身、縁は非常に丁寧な研磨による。ほとんどを欠損。
45	長さ(8.4)　幅 (6.3) 厚さ(4.1)　重さ(295)	〃	イ－4区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な研磨。刃縁は丁寧な研磨によるかなり使用されたと思われ、先端は欠損、磨滅している。
46	長さ(6.7)　幅 (3.6) 厚さ(2.0)　重さ(45)	〃	ハ－5区 弥生中期	完成品。折損品。小形品。胴身、刃縁とも丁寧な研磨による。刃縁は使用により先端がかなり磨滅、欠損している。
112－47	長さ 9.4　幅 6.4 厚さ 4.1　重さ 420	〃	ロ－5区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な研磨。刃縁は使用時の欠損が目立ち、先端はく磨滅、使用時に中程で割れており、そこを丸味のある面にして擦捧様の転用品しとて使用。
48	長さ(8.7)　幅 (4.9) 厚さ(4.0)　重さ(255)	〃	ロ－5区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨、中程から下半分を欠損。
49	長さ(5.2)　幅 67 厚さ 4.8　重さ 240	〃	ト－2区 弥生後期	完成品。折損品。敲打後、丁寧な研磨。刃縁付近のみ残存。先端は使用時の欠損が多く、縁はなくなっている。
50	長さ(8.1)　幅 6.2 厚さ(4.9)　重さ 355	〃	A－2区 弥生中期	完成品。折損品。敲打後、丁寧な研磨。刃縁は使用痕及び使用時の欠損見られる。
51	長さ(6.2)　幅 6.0 厚さ(3.3)　重さ 170	〃	D－4区 弥生前期	完成品。折損品。敲打後、丁寧な研磨で仕上げる。刃縁は特に丁寧に仕上げており、使用痕が残る。
52	長さ(9.7)　幅 6.3 厚さ 4.3　重さ(425)	〃	ロ－2区 弥生前期	完成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な研磨。刃縁は使用時の欠損思われる。
53	長さ(8.8)　幅 5.7 厚さ 4.3	〃	イ－3区 弥生中期	完成品。刃部から約9cmを残し、他は欠損。
113－54	長さ(11.5)　幅 5.8 厚さ 4.6　重さ 570	〃	B－5区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。基端は長軸に対し、斜めに研磨で広く平坦に仕上げられている。刃縁は使用時に欠損。
55	長さ(9.5)　幅 4.6 厚さ 2.7　重さ 196	〃	A－2区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、研磨。基端は丸くあまり研磨していない。刃部は使用時に欠損。
56	長さ(12.6)　幅 4.1 厚さ 3.3　重さ 240	〃	リ－6区 弥生後期	完成品。折損品。胴身は敲打後、わずかに研磨。刃縁は丁寧な研磨によるが、使用により先端が磨滅して面なっている。横断面は円に近いだ円形で平面形は細長い。
57	長さ(10.2)　幅 (6.5) 厚さ(3.9)　重さ(375)	〃	ハ－。区 弥生前期	完成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な研磨。基端は敲打による円基。刃部は欠損するが、割れ口が磨滅しており、基端下5cmの両面に抉りが作られているため、敲石様の転用品にされた可能性が大きい。
58	長さ(10.3)　幅 6.2 厚さ(5.0)　重さ 430	〃	弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な研磨。刃縁は使用時に欠損。
59	長さ(9.4)　幅 5.6 厚さ 3.5　重さ 245	〃	ロ－2区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。刃縁は使用に欠損、磨滅。

表17　蛤刃石斧観察表(Ⅳ)

挿図番号	法量（単位：cm，g）	石　材	出土層	成形・形態の特徴、その他
113－60	長さ(7.0)　幅　6.0 厚さ　3.2　重さ(220)	玄武岩	弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な深い研磨刃縁は丁寧な研磨による。あまり使用しないうちに折へたらしく、刃先はきれいに残る。
61	長さ(9.0)　幅　(6.1) 厚さ(2.2)　重さ(215)	〃	ロ－4区 弥生中期	未成品。折損品。胴身は敲打後、丁寧な深い研磨。刃の研磨を始めているが、剝離整形段階の凹部が目立ち、明確な刃縁はついていない。
114－62	長さ(14.0)　幅　50 厚さ　4.3　重さ 400	〃	ハ－5区 弥生中期	欠損品。全面敲打によって仕上げる。刃部は使用中に欠損。刃部欠損部より約3cm上方に凹折痕が一周しており、二次的に再用された可能性もある。
63	長さ 13.6　幅　6.4 厚さ　5.2　重さ 700	〃	ハ－4区 弥生前期	未成品。手頃な原石を利用し、簡単な剝離整形後、胴身部全面を敲打し3一部浅い研磨を施す。基端面は丸く研磨。下半部はこれから研磨で研ぎ出すところか。
64	長さ(11.4)　幅　6.8 厚さ　4.2　重さ 580	〃	ハ－3区 弥生中期	欠損品。胴身は敲打後浅い研磨。基端は打製成形。下半部は使用時に欠損したものか。
65	長さ　9.7　幅　5.2 厚さ　3.8　重さ385	〃	SZ-020 弥生中期	完成品。胴身は敲打後、浅い研磨。刃縁付近は両主面側からの丁寧な研磨。一部小さな使用時欠損あり。
66	長さ 13.6　幅　5.7 厚さ　4.2　重さ 520	〃	——	完成品。胴身は敲打後、浅い研磨。刃縁付近は両主面側からの丁寧な研磨だが、使い込まれたらしく、先端が丸い。横断面は角丸方形
67	長さ(11.1)　幅　4.7 厚さ　3.5　重さ 320	〃	ト－4区 弥生後期	未成品。欠損品。丸味を帯びた自然石を利用。刃縁形成のために大きな剝離を施すが、途中で放棄。
115－68	長さ(12.0)　幅　(5.6) 厚さ(4.5)　重さ(580)	〃	ロ－3区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。基端は敲打のままで幅広の円基。
69	長さ(13.3)　幅　(5.7) 厚さ(4.1)　重さ(570)	〃	イ－4区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。基端下4ｍに浅い抉りが一周する。緊縛のためか。
70	長さ(12.5)　幅　6.5 厚さ　4.0　重さ(560)	〃	イ－3区 弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、浅い研磨。基端は敲打のまま。
71	長さ(11.6)　幅　5.9 厚さ　3.5　重さ(390)	〃	弥生中期	完成品。折損品。胴身は敲打後、軽い研磨。刃縁は使用時に欠損。
116－72	長さ　9.5　幅　4.7 厚さ　3.4　重さ 240	〃	B－5区 弥生中期	完成品。全体に敲打後、浅い研磨で整形小形品。刃縁は使い込まれて、先端は丸い。
73	長さ　9.4　幅　5.4 厚さ　4.8　重さ 415	〃	A－6区 弥生前期	完成品。全体に敲打後、浅い研磨で整形。刃縁はなく先端に丸い面が作られ、石斧にさては全長が短かすぎることから、擦棒様の転用品として使われたと考えられる。
74	長さ 12.6　幅　5.2 厚さ　3.9　重さ 540	〃	イ－6区 弥生中期	未成品。荒割り敲打ののち、研磨が始まる。刃部はまだつけられていない。
75	長さ 13.1　幅　6.3 厚さ　4.8　重さ 708	〃	D－4区 弥生中期	未成品。全体に敲打後、浅い研磨づ整形。刃縁はまだついていない。
76	長さ　9.5　幅　4.7 厚さ　3.6　重さ 290	〃	ハ－6区 弥生中期	完成品。小形品。全体に敲打後、簡単な研磨で何上げる。刃縁はなく、先端は狭いながらも丸い面になっている。擦棒様の転用品として使われた可能性が大きい。

表18　蛤刃石斧観察表（V）

挿図番号	法量（単位：cm，g）	石材	出土層	成形・形態の特徴、その他
116－77	長さ 11.1　幅 4.6 厚さ 3.6　重さ 315	玄武岩	ハ－5区 弥生中期	完成品。小形品。全体に敲打後、浅い研磨で整形。基端下3～4cmの二側面に抉り様の敲打が入る。刃縁は欠損しているが、先端は磨滅しており、擦棒様の転用品として使われた可能性が大きい。
78	長さ 11.5　幅 6.0 厚さ 3.7　重さ 355	〃	イ－3区 弥生中期	未成品。小形品。荒割後、敲打して簡単に研磨。ただし、荒割面が残っており、刃縁もついていない。
79	長さ 10.3　幅 5.4 厚さ 3.7　重さ 390	〃	イ－2区 弥生中期	完成品。胴身は敲打後、軽く研磨。もとは大形品と思われるが、使用中の欠損によって、擦棒様の転用品にしている。基端、刃側の両方とも磨滅があり、使用されたと考えられる。
117－80	長さ 13.1　幅 7.0 厚さ 5.4　重さ 810	〃	ハ－3区 弥生中期	未成品。手頃な礫を原石として使用。全体に剝離整形を行う。
81	長さ(11.3)　幅 7.0 厚さ 2.8　重さ(360)	〃	A－2区 弥生前期	未成品。折損品。一主、側面に自然風化面が残る。他主面は荒割ところどころ剝離整形を行う。
82	長さ 32.7　幅 8.4 厚さ 6.6　重さ3300	〃	D－6区 弥生前期	未成品。手頃な大きさの原石を利用し、簡単な剝離整形後全面に細かい敲打。刃縁は両主面からの剝離整形を行うが、不完全で縁は明確でない。特に巨大な一点である。
118－83	長さ 15.2　幅 9.3 厚さ 8.2　重さ 1930	〃	リ－4区 弥生後期	未成品。荒割り段階。敲打は見られない。
84	長さ 16.5　幅 8.1 厚さ 6.0　重さ 1288	〃	イ－3区 弥生中期	未成品。敲打段階で欠損したものか？
85	長さ 17.8　幅 7.1 厚さ 6.0　重さ 1190	〃	A－4区 弥生中期	未成品。荒割りのうち、一部敲打が始まる。自然面も残る。
86	長さ 16.0　幅 9.1 厚さ 5.8　重さ 1650	〃	弥生前期 ～　中期	未成品。敲打段階。一部に自然面を残す。
119－87	長さ(13.1)　幅 5.6 厚さ 5.2　重さ(700)	〃	ハ－3区 弥生中期	未成品打損品。柱状原石を利用して、角陵部をわずかに剝離整形した段階で欠損、放棄。柱状片刃の可能性もある。
88	長さ 15.4　幅 6.7 厚さ 4.4　重さ 690	〃	ハ－6区 弥生中期	未成品。横断面台形の柱状原石を利用し、一角陵部をわずかに剝離整形した段階で放棄。
89	長さ 14.0　幅 9.6 厚さ 4.5　重さ 950	〃	ニ－5区 弥生中期	未成品。一主面は風化自然面を利用し、他主面は荒割による成形。周縁を剝離整形した後、一部敲打により、側面を成形。
90	長さ(8.0)　幅 5.7 厚さ 5.1　重さ(430)	〃	ロ－2区 弥生前期	未成品。打損品。角礫の一端を割り取って、柱状石材を作る。一部角陵を剝離。
120－91	長さ 17.5　幅 7.2 厚さ 3.9　重さ 740	〃	ロ－4区 弥生中期	未成品。一主、側面は自然風化面で、別の主、側面は荒割による。刃縁は両主面から一打ずつの剝離を行う。
92	長さ 14.6　幅 8.3 厚さ 4.7　重さ 950	〃	ロ－4区 弥生中期	未成品。全体に自然面が残るが、周縁部に剝離整形を行う。

表19　蛤刃石斧観察表（Ⅵ）

挿図番号	法量（単位：cm，g）	石材	出土層	成形・形態の特徴、その他
120－93	長さ(11.0)　幅　6.3 厚さ　3.4　重さ	玄武岩	イ－2区 弥生中期	未成品。折損品。両主面と一側面に自然風化面が残る。刃縁、側縁・側縁付近は一部剝離整形。
94	長さ(9.5)　幅　7.7 厚さ4.4　重さ 550	〃	ロ－3区 弥生中期	未成品。折損品。両主面と一側面に自然風化面が残る。刃縁付近は一部剝離整形。
95	長さ 13.6　幅　5.5 厚さ　4.2　重さ 390	〃	——	未成品。一主面のみ荒割形成で他は自然風化面。一部剝離整形を施した段階で放棄。
121－96	長さ 15.1　幅　6.7 厚さ　4.2　重さ 650	〃	チ－6区 弥生後期	未成品。荒割で二主面を形成し、周縁は細かい剝離整形。一側面に然風化面が残る。
97	長さ(13.9)　幅　7.2 厚さ　3.6　重さ(560)	〃	弥生中期	未成品。二主面と一側面は自然風化面が残る。
98	長さ 12.4　幅　7.2 厚さ　4.8　重 600	〃	ロ－3区 弥生中期	未成品。荒割後周縁を剝離整形した殺階で放棄。まだ剝離が大きく、細かい整形はまだ見られない。
99	長さ(9.3)　幅　6.5 厚さ　2.9　重さ(230)	〃	イ－4区 弥生中期	未成品。折損品。両主面に自然風化面が残る。側縁と基端面は両主面側からの剝離整形による。
100	長さ(12.6)　幅　8.5 厚さ　4.4　重さ(690)	〃	ニ－3区 弥生中期	未成品。折損品。両主面に自然風化面が残る。両主面側からの剝離整形で側縁形成。
122－101	長さ 22.6　幅　7.2 厚さ　3.5　重さ 1000	〃	ト－2区 弥生後期	未成品。全体がほぼ自然化面で、周縁と刃縁に簡単な剝離整形を行う。
102	長さ(9.8)　幅　5.5 厚さ　4.2　重さ(300)	〃	A－2区 弥生中期	未成品。折損。全体がほぼ自然風化面で、ところどころに剝離整形を行う。
103	長さ(10.6)　幅　8.3 厚さ　5.9　重さ(880)	〃	ロ－6区 弥生中期	未成品。折損品。全体がほぼ自然風化面で、ところどころに剝離整形を行う。
104	長さ(11.0)　幅　7.0 厚さ(4.5)　重さ(600)	〃	イ－2区 弥生中期	未成品。折損品。剝離整形後全体に敲打を施す。研磨はまだ見られない。
123－105	長さ(12.0)　幅(7.3) 厚さ(2.9)　重さ(370)	〃	ロ－6区 弥生中期	完成品。折損品。幅広で扁平な個体、胴身、刃縁とも丁寧な研磨で仕上げる。刃縁端は使用により欠損、磨滅が見られる。
106	長さ 12.3　幅　6.7 厚さ　3.4　重さ 440	〃	A－2区 弥生前期	未成品。幅広で扁平な個体。手頃な原石を利用し、表面を少々研磨する。刃部はまだ剝離整形の段階で見られない。胴身、基端の成形はほぼ完璧であるため、一度刃部を欠損した個体を短かめにして再度刃をつけようとしている可能性もある。
107	長さ(13.3)　幅　7.2 厚さ　2.8　重さ(420)	〃	ハ－5区 弥生中期	未成品。幅広で扁平な個体。胴身部は浅い研磨調整で剝雑整形。敲打の痕跡が目立つ。刃部はまだ剝離整形の途中。

表20　石包丁観察表（大形）

（法量単位：cm，g）

挿図番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	出土地点・層	成形・形態の特徴　その他
124—1	12.8	30.0	2.5	950	スレート	弥生前期 SZ—017	周縁を剝離成形した後、凸部を軽く研磨。刃は斜方向の研磨で内彎する。有柄を意識した成形。使用痕の光沢あり。
2	(6)	(7.1)	0.8	40	スレート	リ—6区 弥生後期	表裏面とも大部分は自然面が残る。刃と周縁の一定幅のみ研磨。直線刃
3	10.2	21.9	1.5	375	安山岩	SZ—016 弥生前期	刃は研磨により、内彎。両面とも自然面が大きく残るが、背は軽く研磨。左右辺は抉りを意識した成形。
4	13	(13.7)	1.7	(314)	安山岩	ニ—3区 弥生中期	周縁は弧状に剝離成形。刃は研磨により、やや内彎。
5	8.6	(10.4)	1.8	(—)	安山岩	E区 弥生中期	周縁は剝離成形。上下両端に研磨による刃がつく。一方は直線刃で他方は内彎刃。使用痕の光沢あり。
6	8.3	(9.9)	1.4	(—)	スレート	SZ—017 弥生中期	周縁はほとんど主要剝離時の形状を利用。刃の部分のみ研磨。ほぼ直線刃。
7	(14.1)	(11.4)	1.6	(375)	安山岩	ハ—4区 弥生中期	周縁は剝離成形。刃部側下半部を研磨し、刃はさらに丁寧な研磨で、外彎する。使用痕の光沢あり。
125—8	11	13.6	1.4	250	デイサイト	ロ—4区 弥生中期	全打製成形。刃は主として片面から大きな剝離を繰り返し、補助的に裏面からも小さな剝離をしている。内彎刃。使用痕の光沢あり。
9	11.5	(9)	1.8	(267)	片状砂岩	ト—2区 弥生後期	周縁は剝離成形。表面を軽く研磨しているが、ほとんど自然面。刃は研磨により直線刃。
10	(8.1)	(9.2)	1.3	(110)	スレート	ハ—3区 弥生中期	全打製成形。刃は大きな剝離を施したところへ、両面から細かい剝離を繰り返している。内彎刃。使用痕の光沢あり。
11	9	(12.8)	1.3	(200.5	スレート	A—4区 弥生中期	周縁は剝離成形で、全体形は楕円状。凸部に軽い縦方向の研磨。刃付近は丁寧な横方向の研磨で、刃先は剝離段階がそのまま残る。外彎刃。
12	(7.7)	(6.7)	(0.56)	(47.2)	スレート	イ—4区 弥生中期	石理による剝片に研磨による刃をつける。直線刃。
13	8	(9)	1.8	(174)	デイサイト	イ—5区 弥生中期	周縁は剝離成形。全体に軽い研磨を施し、片面下半部に丁寧な研磨。刃はさらに丁寧な研磨による。使用痕の光沢あり。
14	5.4	7.1	0.55	(27.2)	スレート	弥生中期	周縁は孤状に剝離成形。刃は真線で研磨による。
15	8.2	(4.95)	1.15	(83.6)	スレート	イ—3区 弥生中期	両面・峰とも丁寧な研磨で全磨製。刃は両面を研磨によって徐々に薄くして成形。直線刃。使用痕の光沢あり。
16	7.9	(1.4)	1.3	(—)	スレート	——	完成品が縦方向に割れたと思われる。
17	11.6	(13.5)	0.9	212	スレート	SZ—014 弥生中期	周縁は一度に力を加えて丸くカット（方法不明）し、軽く研磨。刃は研磨により、やや内彎。
18	(7.7)	(6.3)	0.75	(42.2)	スレート	ロ—6区 弥生中期	両面とも丁寧な不定方向の研磨。刃は丁寧な研磨で直線。使用痕の光沢あり。
19	(6.95)	(10.7)	0.92	(102.5)	スレート	ハ—2区 弥生中期	全面軽く研磨。刃は研磨による。直線刃。大部分欠損で、刃こぼれが著しい。
20	(8)	(10.3)	1.0	(153)	デイサイト	D区 弥生中期	表裏面は自然面が残る。刃は研磨による。やや外彎刃。
126—21	17.4	23	2.8	2015	スレート	ロ—5区 弥生前期	板状石材の上下を両面から剝離。刃を意識した剝離と思われるが、明確に刃とは断言できず、包丁未成品とした。

表21　石包丁観察表（小形）

（法量単位：cm，g）

挿図番号	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	出土地点・層	成形・形態の特徴　その他
126—22	4.7	11.9	2.2	185	デイサイト	A—6区 弥生前～中期	比較的厚みのある剝片の主要剝離面に軽く研磨を施し、そこへ孔を配する位置を示す程度に2ケ所に浅い穿孔途中の孔を配している。まだ刃はついておらず未成品。
23	7.5	12.5	1.2	174.8	片状砂岩	ロ—2区 弥生中期	周縁は剝離整形。上方は自然面が残るが、下半部は両面とも研磨。刃は直線で研磨による。孔は1つで両面穿孔。未成品。
24	(5.95)		0.7	(54.5)	スレート	イ—2区 弥生中期	周縁は一度に力を加えて孤状に成形。孔を穿つ位置を迷ったのか、上下2ケ所に穿孔途中の浅い孔が見られる。刃はまだついておらず、未成品。
25	4.4	11	0.9	63	スレート	ロ—4区 弥生中期	周縁は剝離整形。孔は1つで両面穿孔。直線刃を意識していると思われるが、まだ刃がついていない。未成品。
26	4.5	11.5	0.85	64.7	礫　岩	ロ—5区 弥生前期	全面磨製。刃・背は丁寧な研磨。やや外彎刃。孔は2つで両面穿孔。使い込まれたらしく、全体的に摩耗が見られる。
27	8.2	(9.1)	0.47	(62.5)	スレート	ハ—5区 弥生前期	両面は軽い研磨。刃は直線で、縦のち横方向の研磨で整形。孔は両面穿孔。使用痕の光沢あり。
28	8.2	(13)	0.5	45.5	スレート	A—3区 弥生中期	周縁は剝離成形。片面の凸部のみ軽く研磨。刃は両側からの丁寧な研磨により、外彎する。孔は両面穿孔。
29	8.25	(3.6)	0.72	(28.3)	スレート	A—2区 弥生前期	片面は全面、片面は下半部を軽く研磨。刃は丁寧な研磨による。外彎刃。小片にして再利用された可能性が大きい。
30	4.3	(3.8)	0.41	(10.2)	スレート	D—4区 弥生前期	薄い石材を利用。孔は両面穿孔。研磨はまだ見られず、刃は直線を意識していると思われるが、未だついていない。未成品。
31	(5.6)	(7.1)	1.0	(53)	スレート	イ—5区 弥生中期	片面は全面に軽い研磨。刃は研磨による直線刃。孔は両面穿孔。使用痕の光沢あり。
32	5.4	(4.5)	0.4	(17.2)	スレート	イ—6区 弥生中期	背は擦り切り技法による。両面とも自然面が大きく残るが、軽く研磨している。刃は研磨による。孔は両面穿孔。二次加工で小片化して再利用している可能性あり。
33	(3.6)	(5.3)	0.6	(—)	スレート	E区 弥生中期	板状石を利用。孔は両面穿孔。まだ刃がついておらず、未成品。
34	2.5	(6.4)	0.46	(12.8)	スレート	ロ—5区 弥生中期	刃、背とも擦り切り技法で成形。擦り切り痕をそのまま刃に利用しものか。未成品であるかは不明。孔は両面穿孔。
35	4.02	(4)	0.5	(13.9)	スレート	ロ—3区 弥生中期	周縁は剝離成形。片面にのみ研磨。孔は両面穿孔。刃は直線で打製による。使い込まれたらしく刃先に摩耗が見られる。
36	7.6	(3.4)	0.5	(17.2)	スレート	ト—2区 弥生後期	全面軽い研磨。刃は研磨により直線刃。擦り切り技法で小片化し、再利用している。
37	(3)	(3)	0.4	(6.9)	スレート	弥生中期	周縁は擦り切り技法で成形。表面は軽い研磨。刃は垂直研磨で直線刃。孔は両面穿孔。
38	3.6	(4.2)	0.7	(11.2)	片状砂岩	A—2区 弥生中期	背は擦り切り技法による。全体に研磨を施している。刃部は研磨による直線刃。孔は両面穿孔。
39	(6.55)	(7.8)	1.0	(70)	片状砂岩	ロ—4区 弥生中期	背は擦り切り技法により、さらに垂直研磨。全面軽い研磨。刃は研磨による。外彎刃か。孔は両面穿孔。
40	7.3	(10.5)	1.2	(106)	片状砂岩	ニ—3区 弥生中期	周縁は剝離成形。片面はほぼ全面、もう片面は下側の約3分の1程度研磨。刃は研磨により外彎磨。孔は1つで両面穿孔。もう1つの孔が欠損部分にあったとしても、距離が離れすぎているため、未成品の可能性もある。

11　玉作関係遺物

第133図～第163図には弥生時代前期～中期の玉作関係遺物を図示した（カラー図版８、図版102～図版106）。これらの多くは貝層（第１図）中から検出したものである。出土層については表22～表24にまとめた。いずれも管玉を作ろうとした資料で、緑色凝灰岩系、もしくは碧玉を材料としていると考えられる。

完成品、及びそれに近い未製品をみると径が2.0～3.0㎜の細身の一群（１～12）、径が4.0～5.0㎜の一群（13～35）、径が5.0㎜を越える一群（36、37、38）の３種がある。長さは１が5.0㎜で最小で、35が最も長く1.2㎝を測る。管玉は両端部から穿孔が行われるが、この穿孔途中で割れたものの最も多いのは、径4.0～5.0㎜の一群である。このことは、穿孔後さらに外面を研磨し、径2.0～3.0㎜の製品を作ろうとしたとも考えられ、製品としては、径4.0～5.0㎜の一群は元来存在しなかった可能性がある。両者の孔の径があまり変らないことも、これを裏付けているように思われる。

西川津遺跡出土の管玉に関係する遺物から、概ね、原石→擦り切り施構とその部分への打撃による剝片作り→剝片の全面研磨→擦り切り施構による棒状材作り→管玉の長さの決定、横方向の擦り切り施構による棒状材の切断→研磨・両端からの穿孔→仕上げ磨きという製作工程が復元できよう。

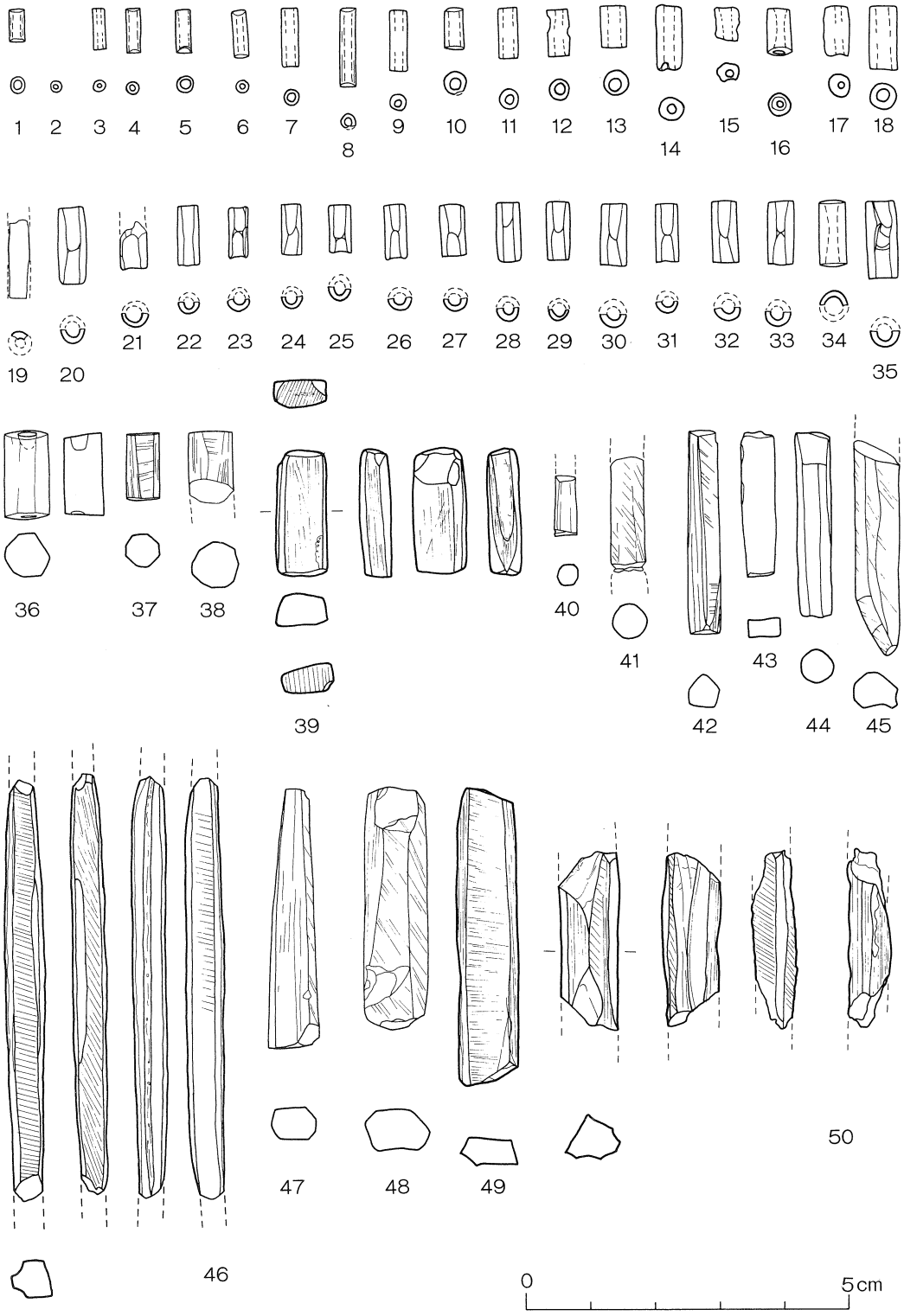
119～124は原産地で採集された状態の原石に近いものと思われる。拳大前後のものである。119～123でみるかぎり原産地で拳大のサイズに加工して持ち運ばれたと考えられるが、124は石器（チョッパー）である可能性もすてきれない。

90～118は剝片の段階のものである。平均すれば1.0㎝ほどの厚みの剝片を作っている。但し、106、111、112は他の資料に比較して約２倍の厚みがあり、一端に施溝が残っていることよりもう一工程前の段階のものであろう。横長剝片と縦長剝片の区別は特にないように思われる。

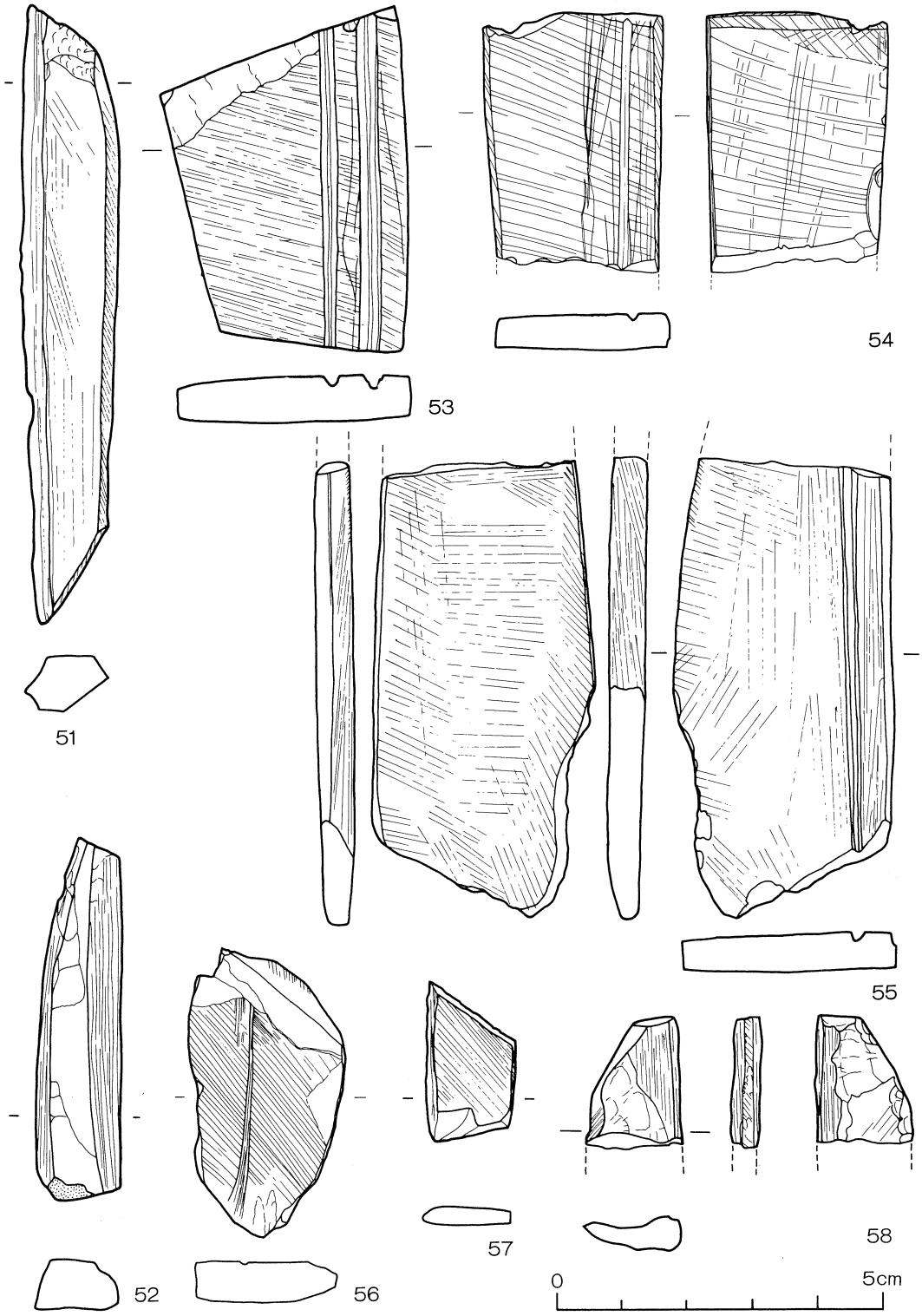
63～89は剝片を研磨する段階のものである。全面を研磨するのを原則としているようだ。このうち73と82の一面には石包丁の穿孔途中の孔に酷似した凹みがみられる。

53～62は研磨後、施溝しはじめた段階のものである。59～62は施溝の為の目印の線を入れた段階のものであろう。53、54は二本の施溝がみられる。

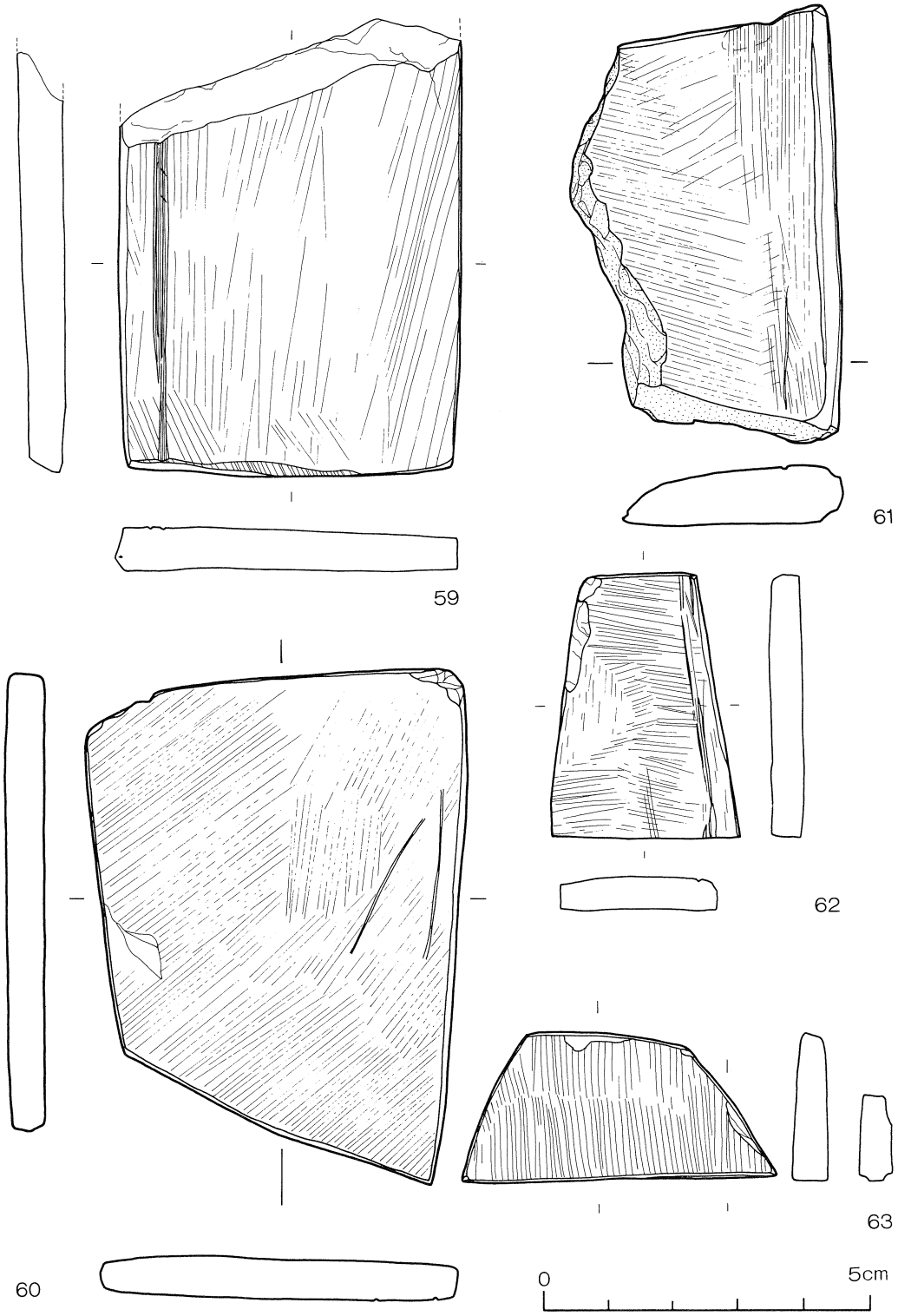
42～52は棒状材で、これによると両面から施溝し切断していることが知られる。37～41は管玉の長さが決定され、研磨がはじまった段階のものである。41には横方向の施溝痕が残る。



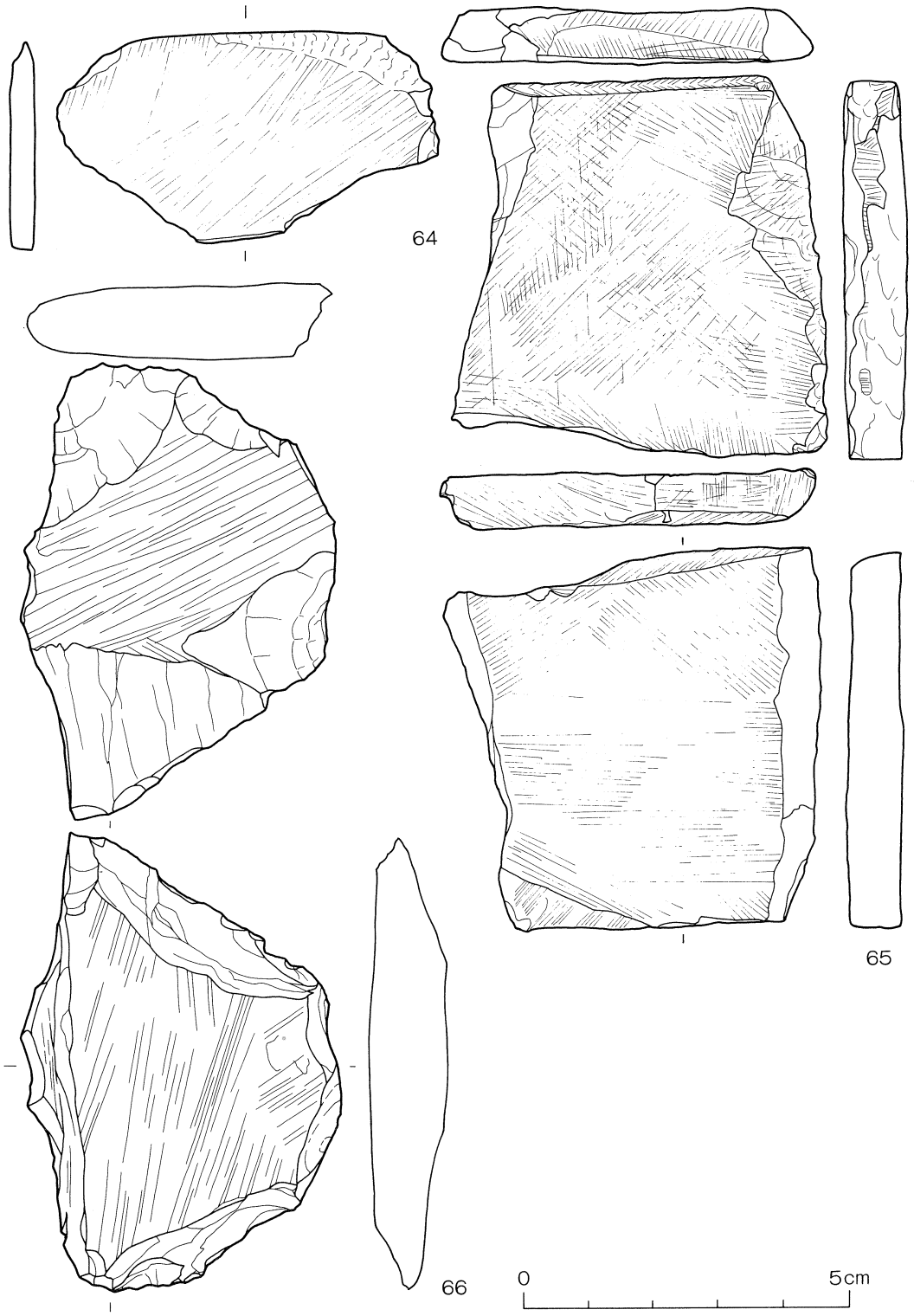
第133図　玉作関係遺物実測図(1)



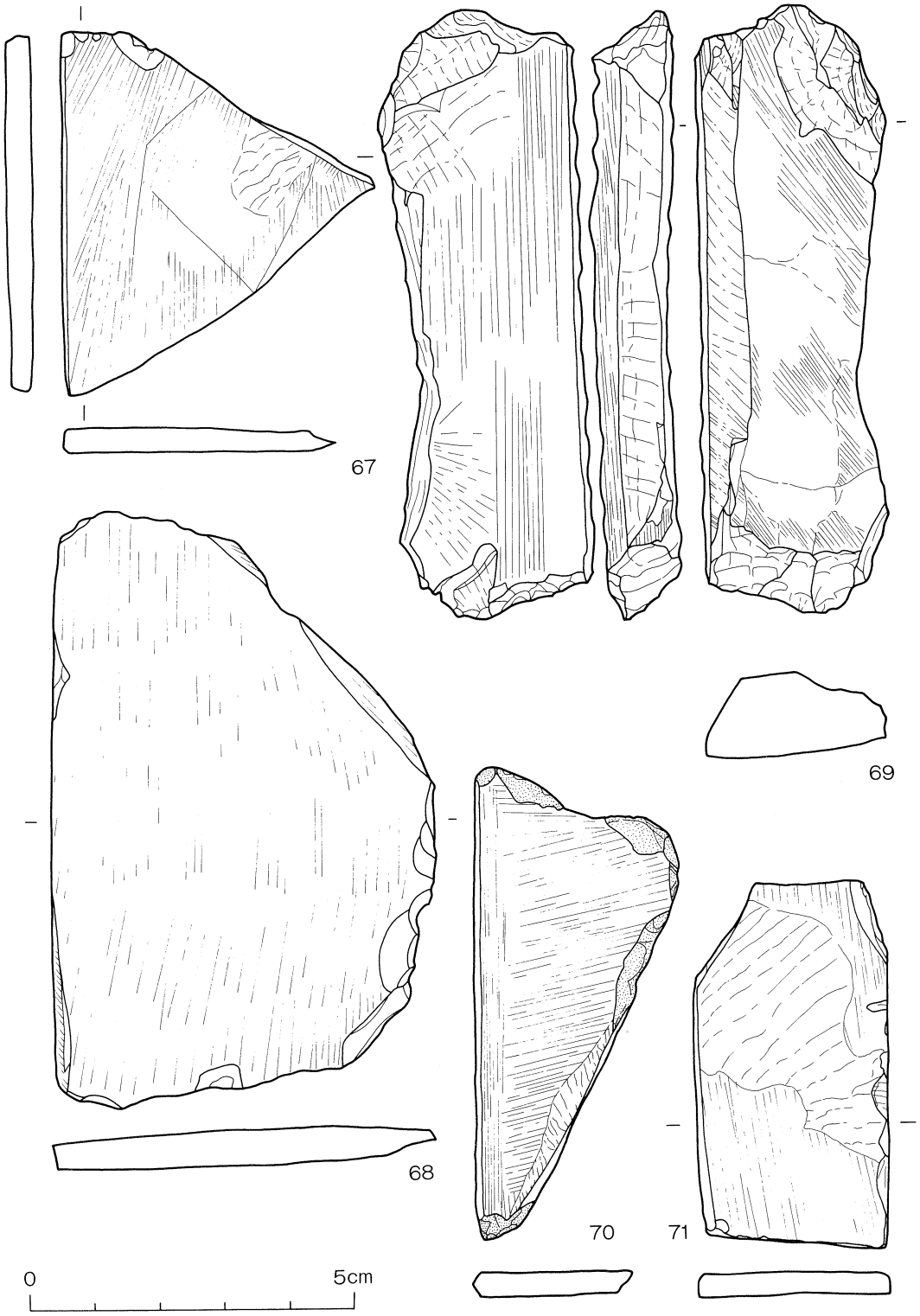
第134図　玉作関係遺物実測図(2)



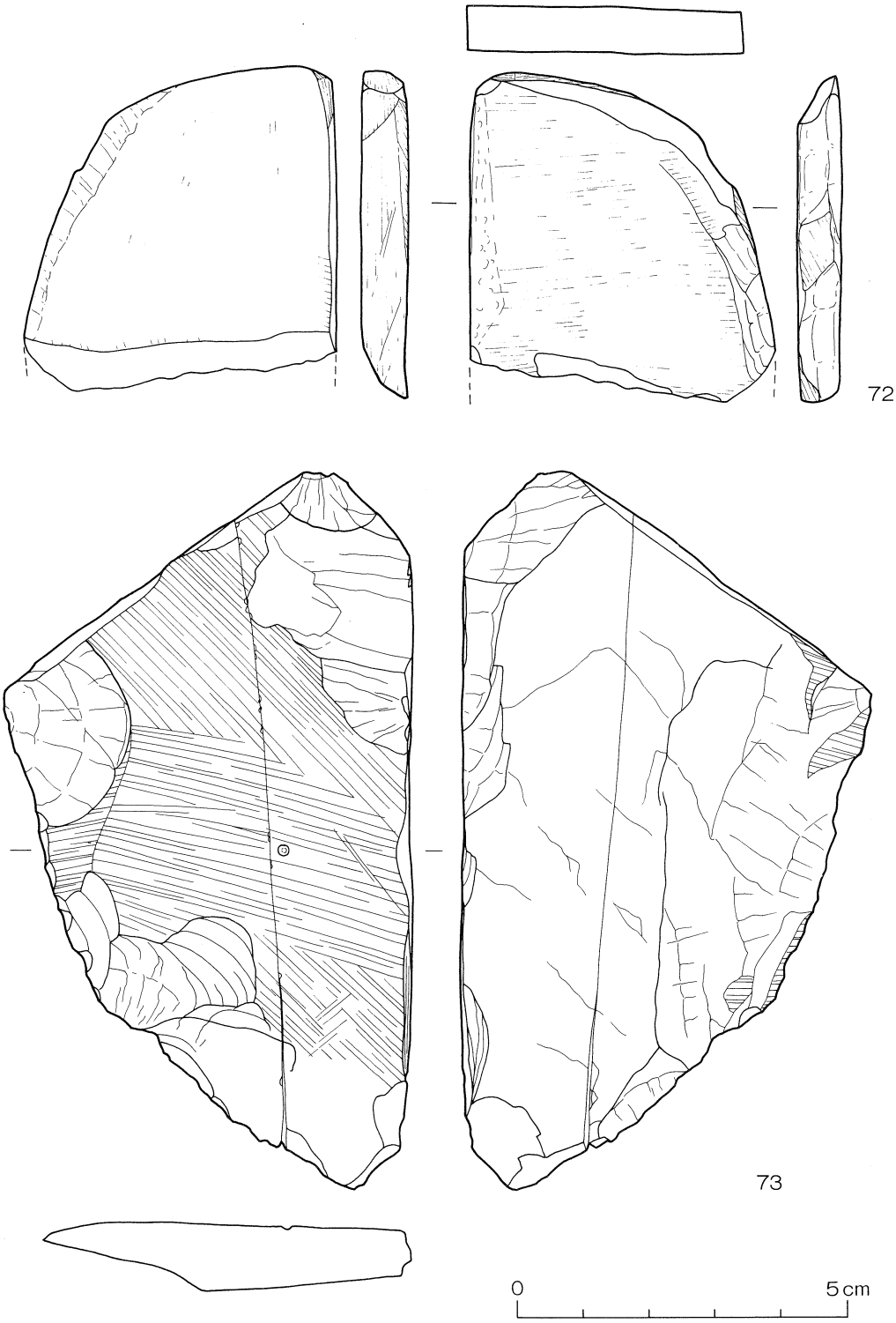
第135図　玉作関係遺物実測図(3)



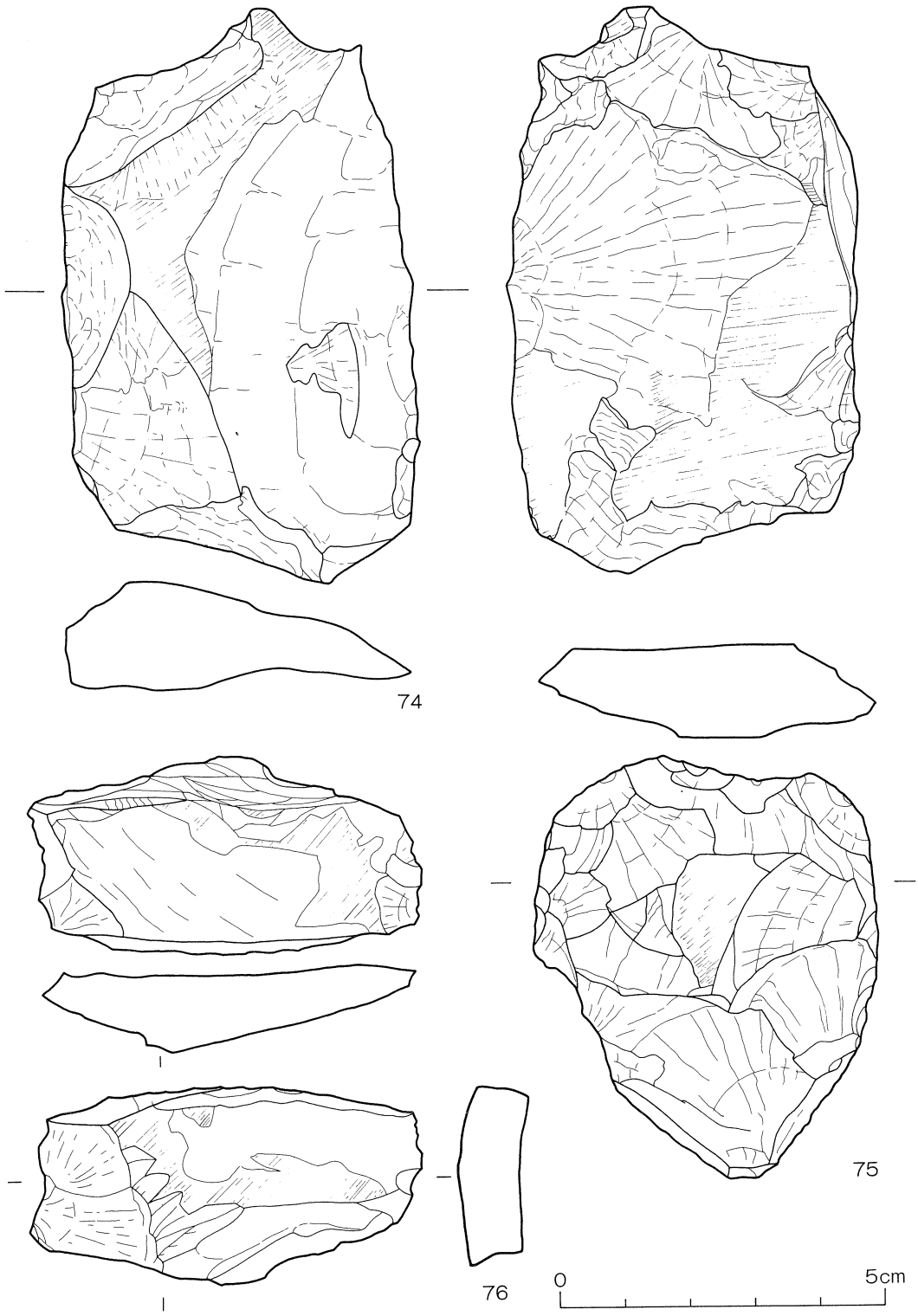
第136図　玉作関係遺物実測図(4)



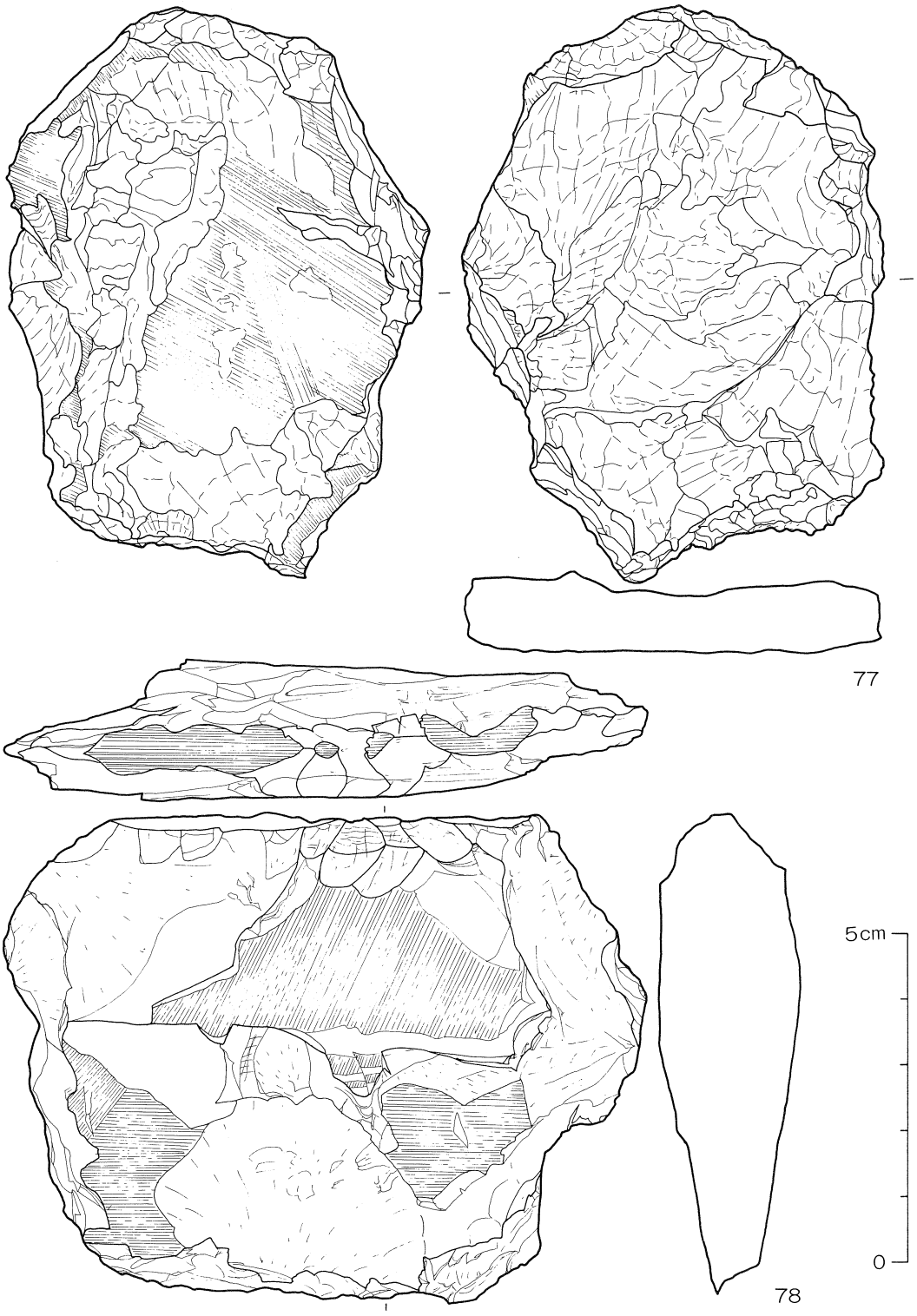
第137図　玉作関係遺物実測図(5)



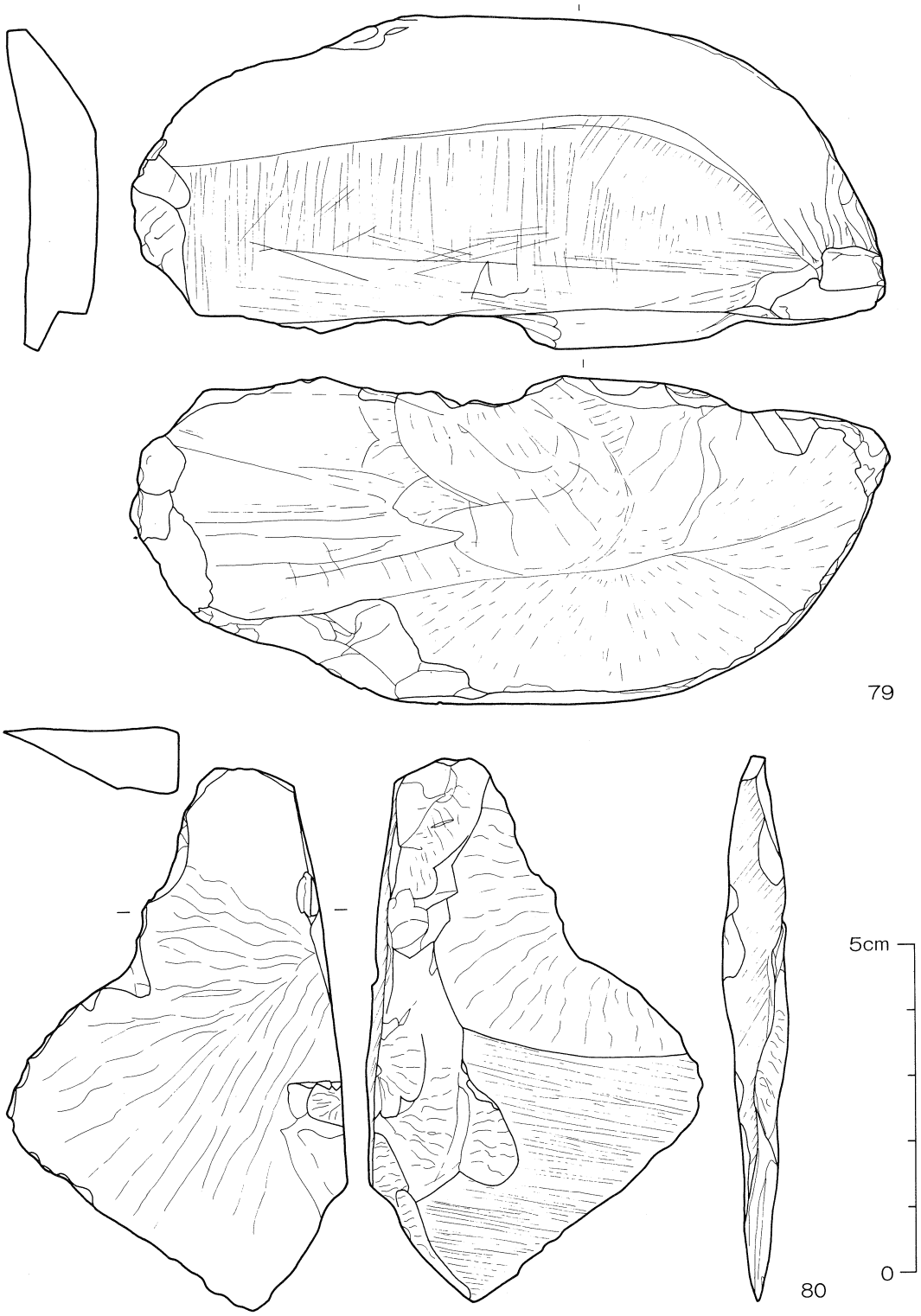
第138図　玉作関係遺物実測図(6)



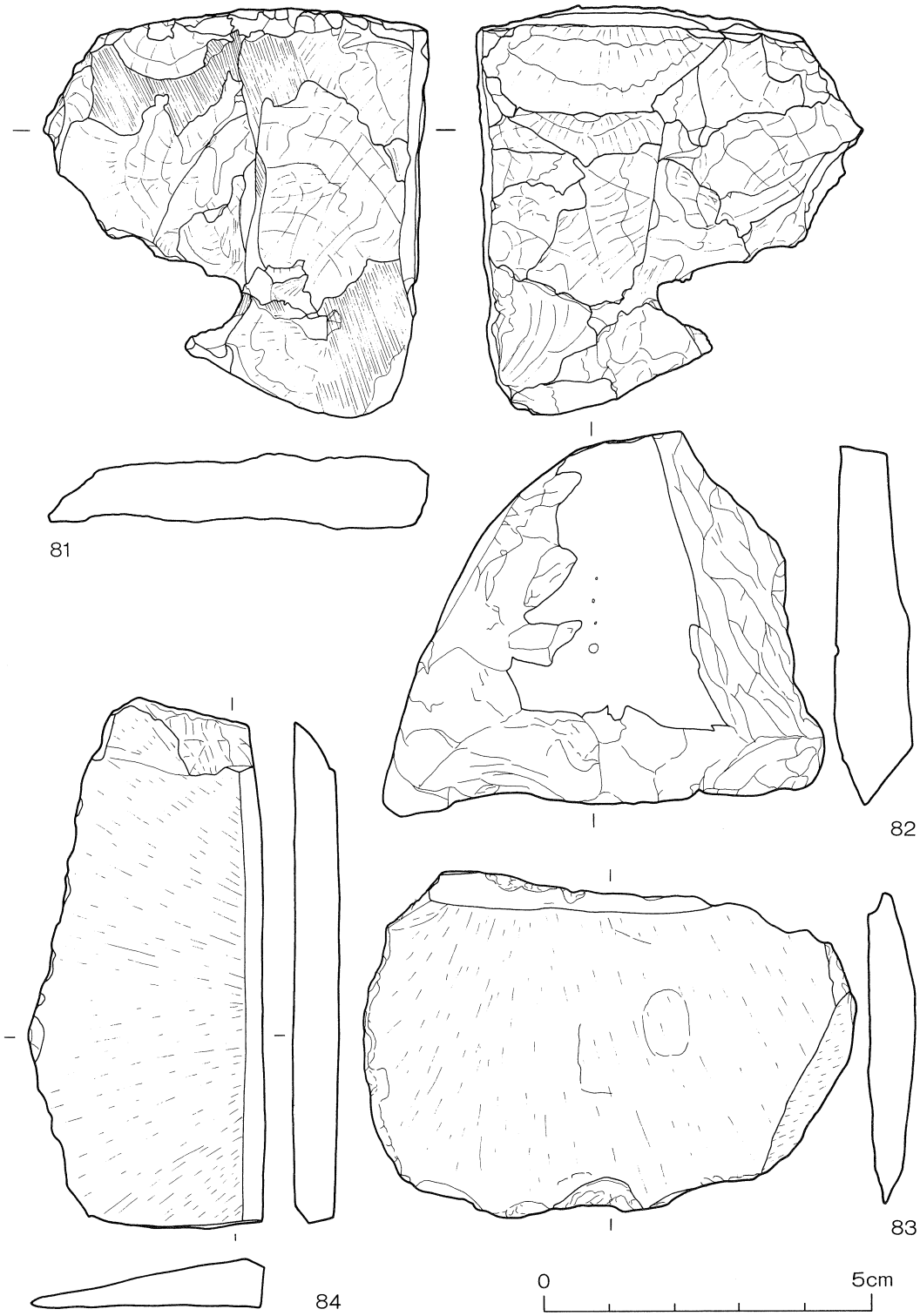
第139図　玉作関係遺物実測図(7)



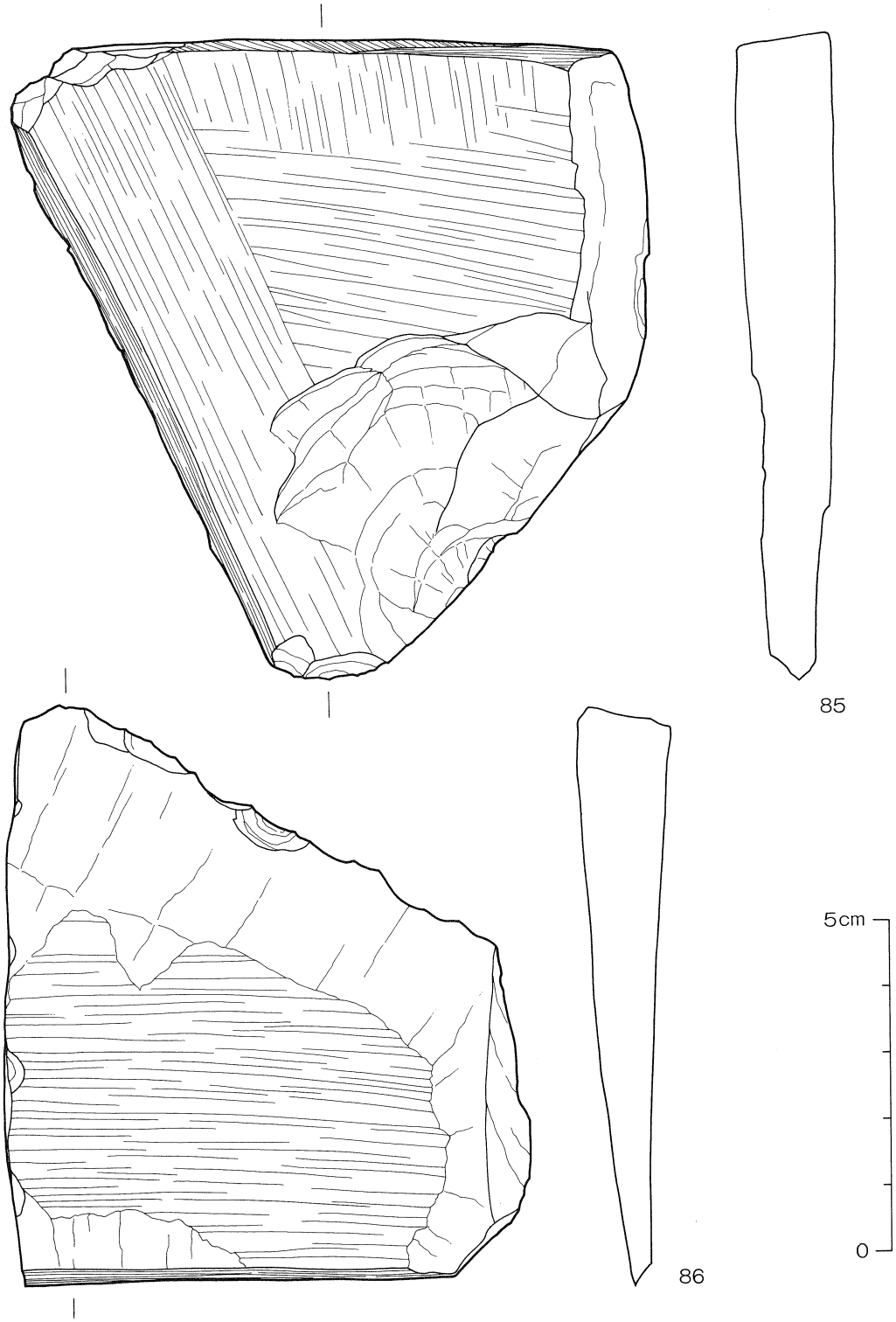
第140図　玉作関係遺物実測図(8)



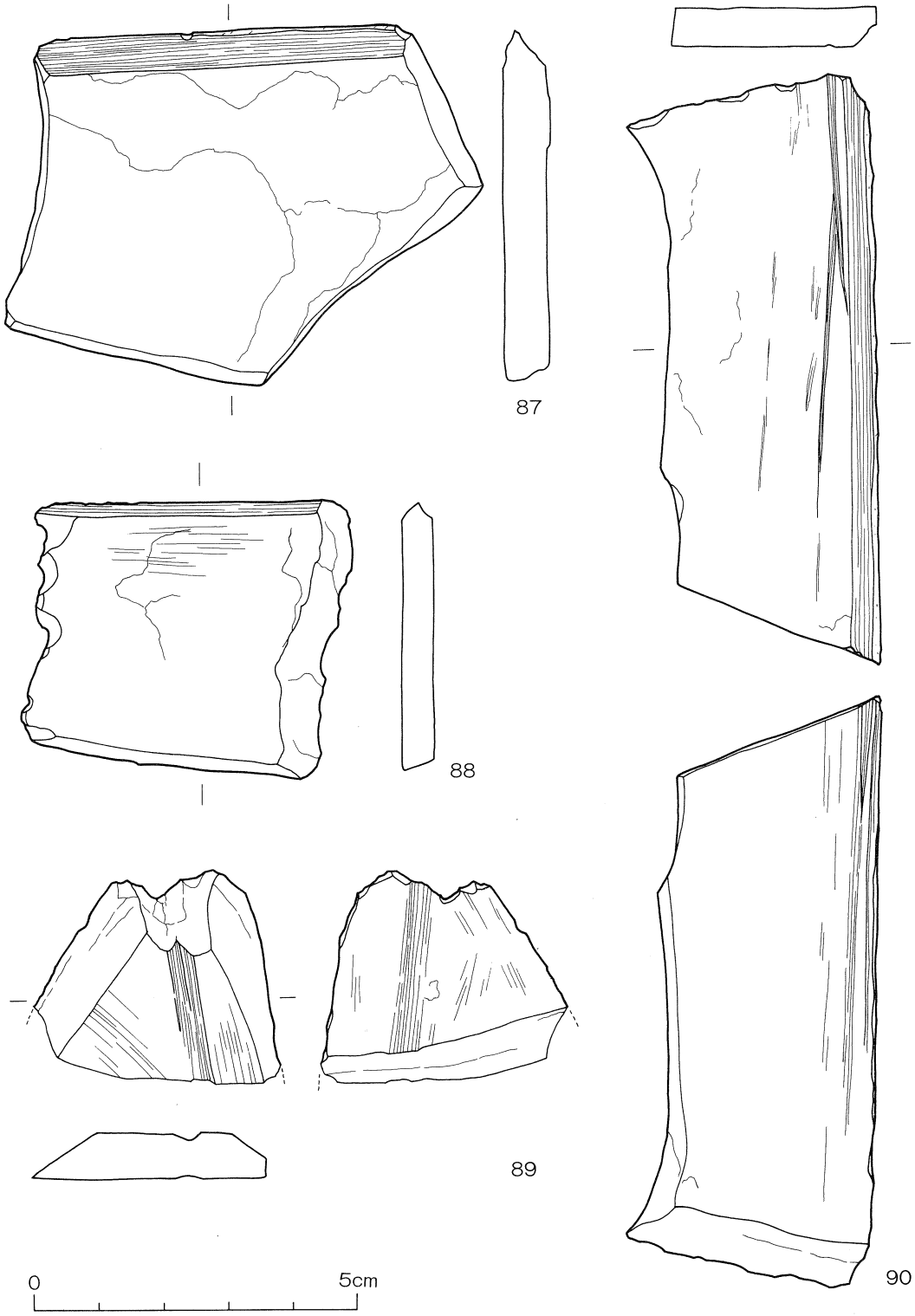
第141図　玉作関係遺物実測図(9)



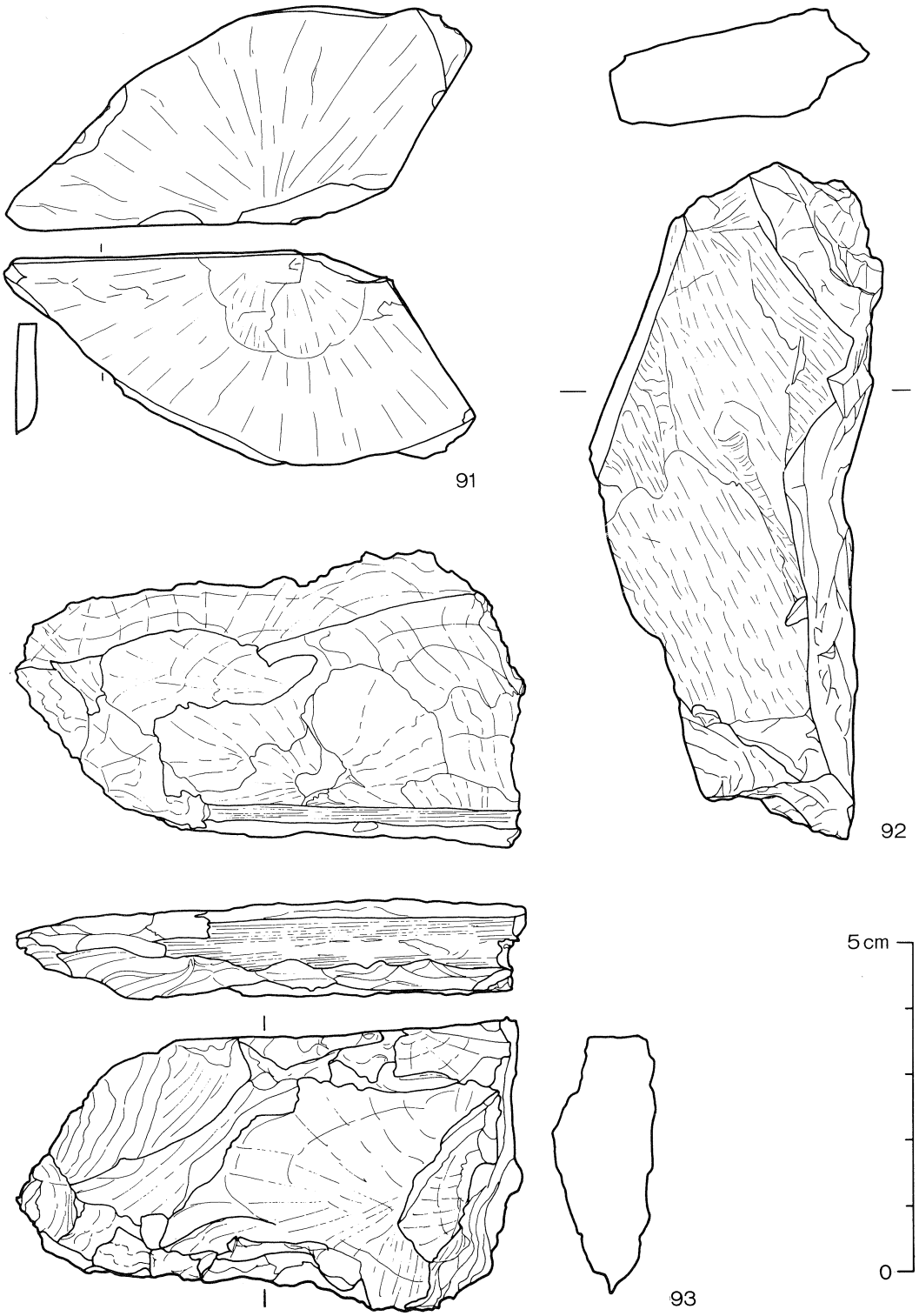
第142図　玉作関係遺物実測図(10)



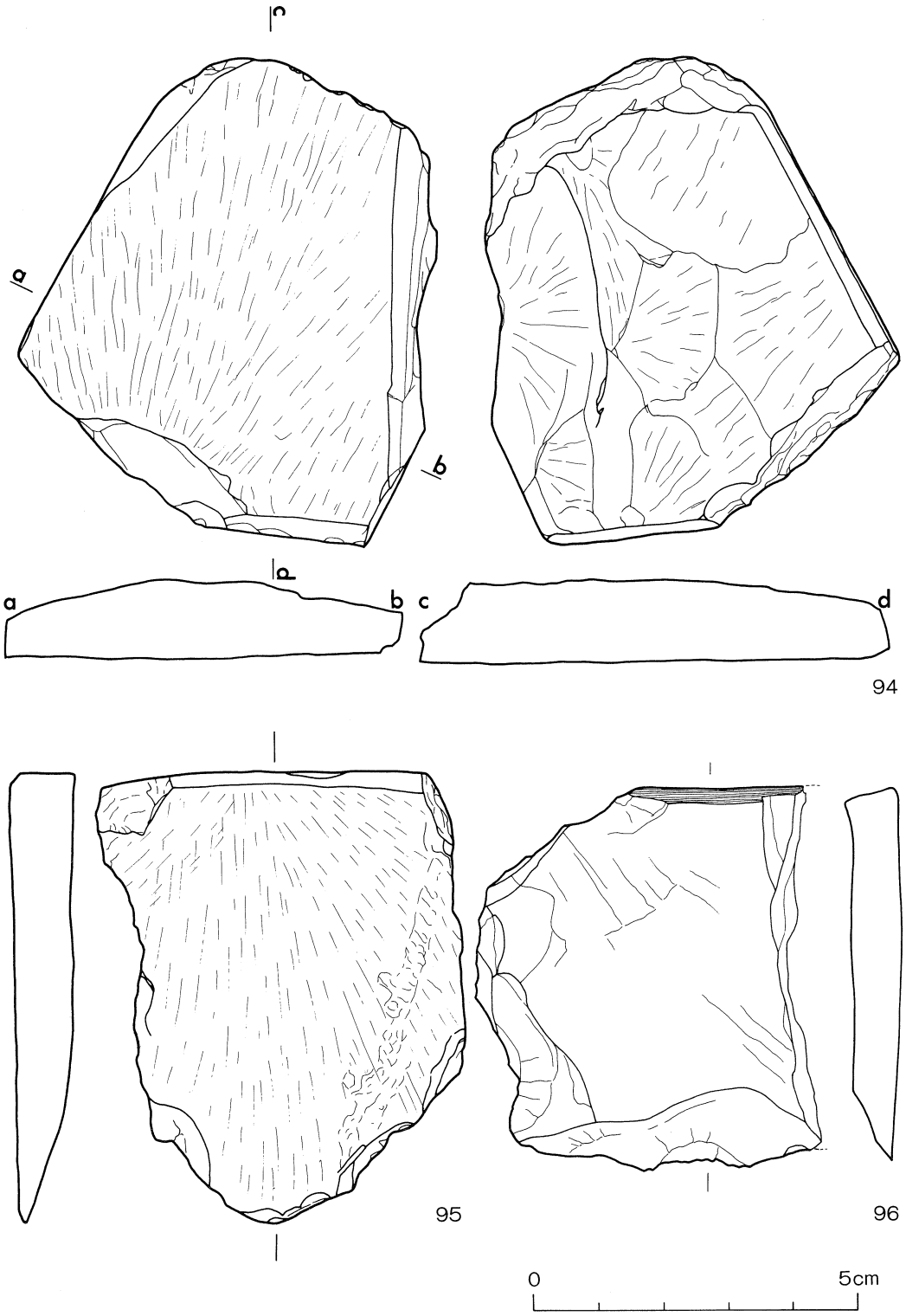
第143図　玉作関係遺物実測図(11)



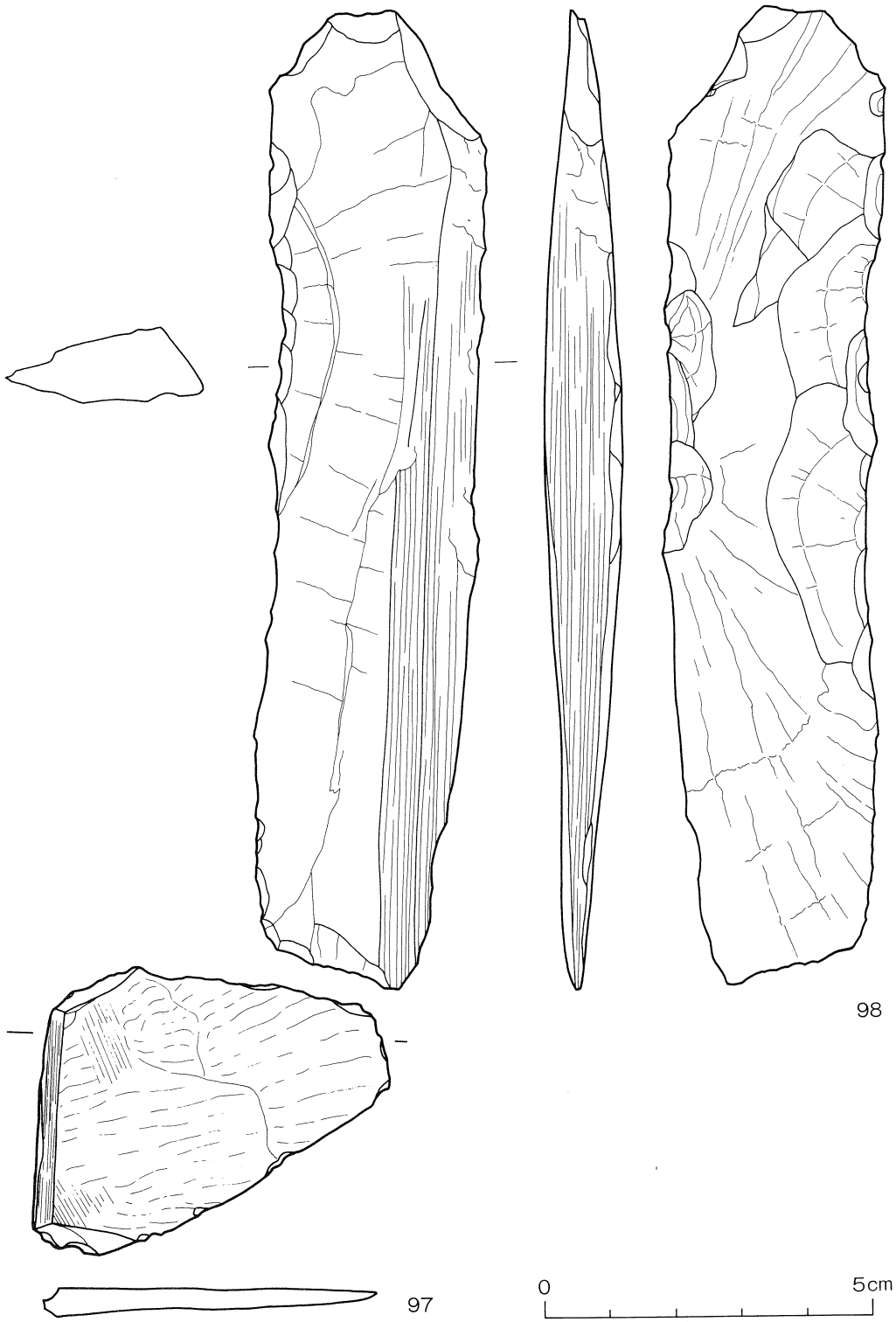
第144図　玉作関係遺物実測図（12）



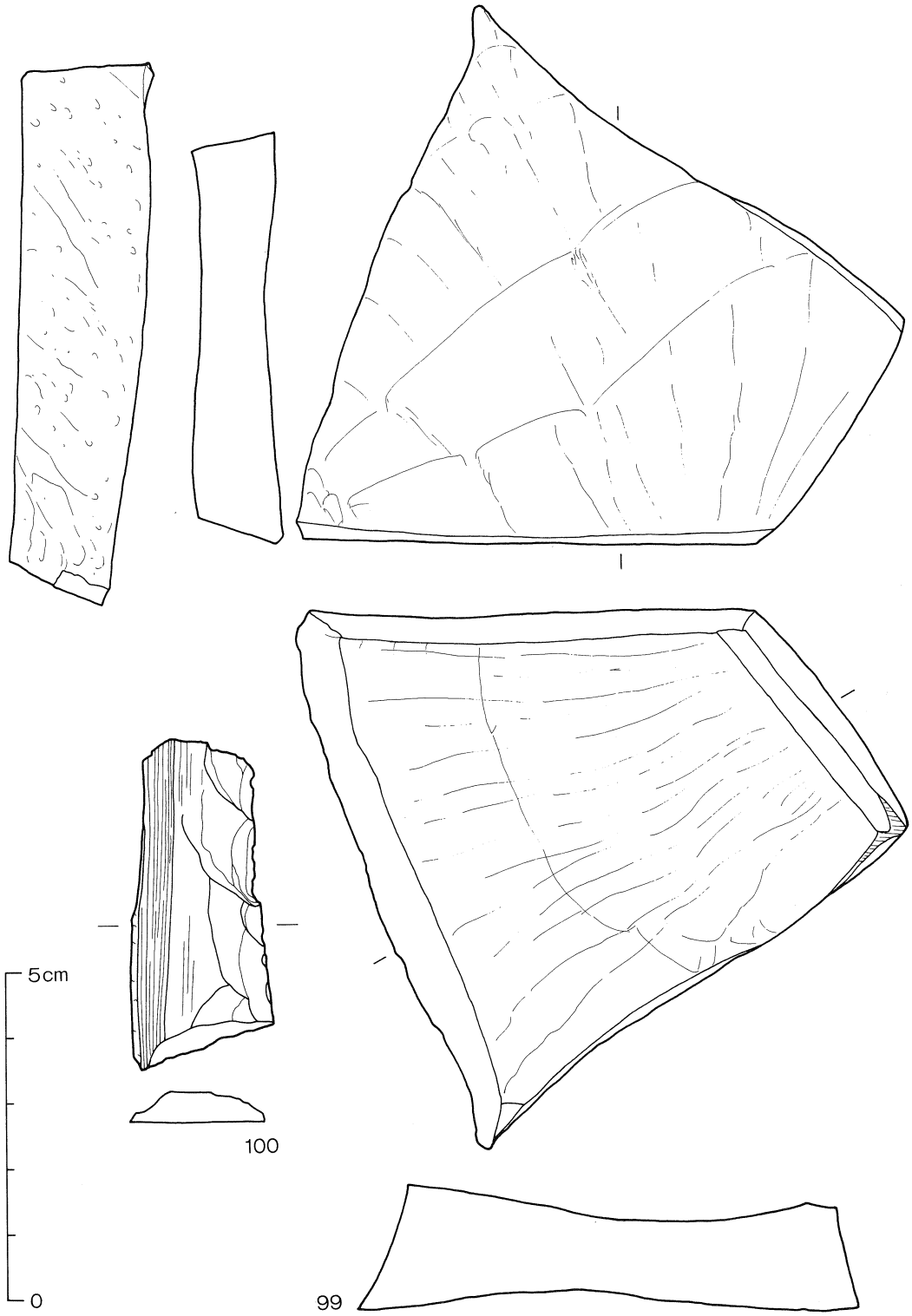
第145図　玉作関係遺物実測図（13）



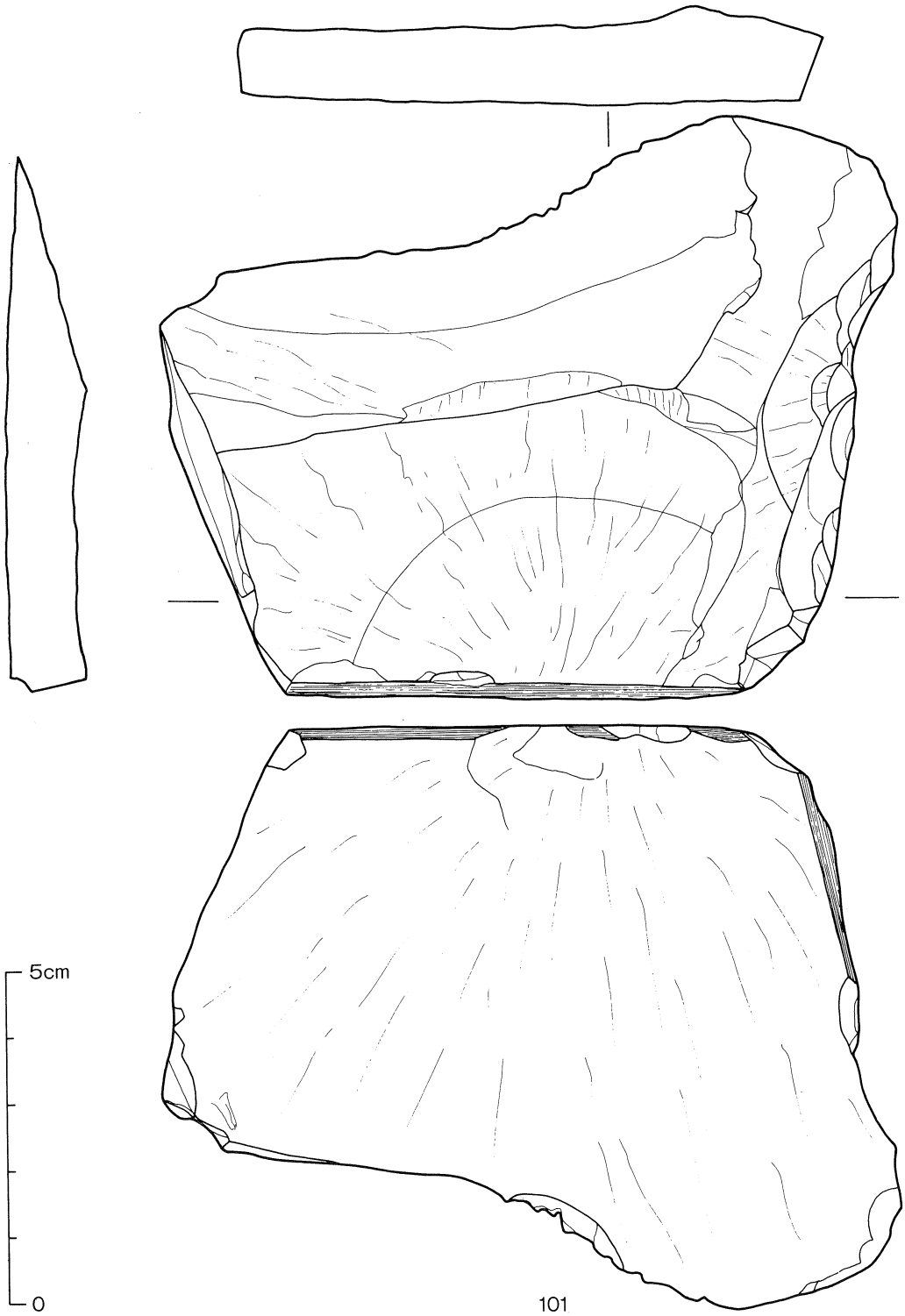
第146図　玉作関係遺物実測図(14)



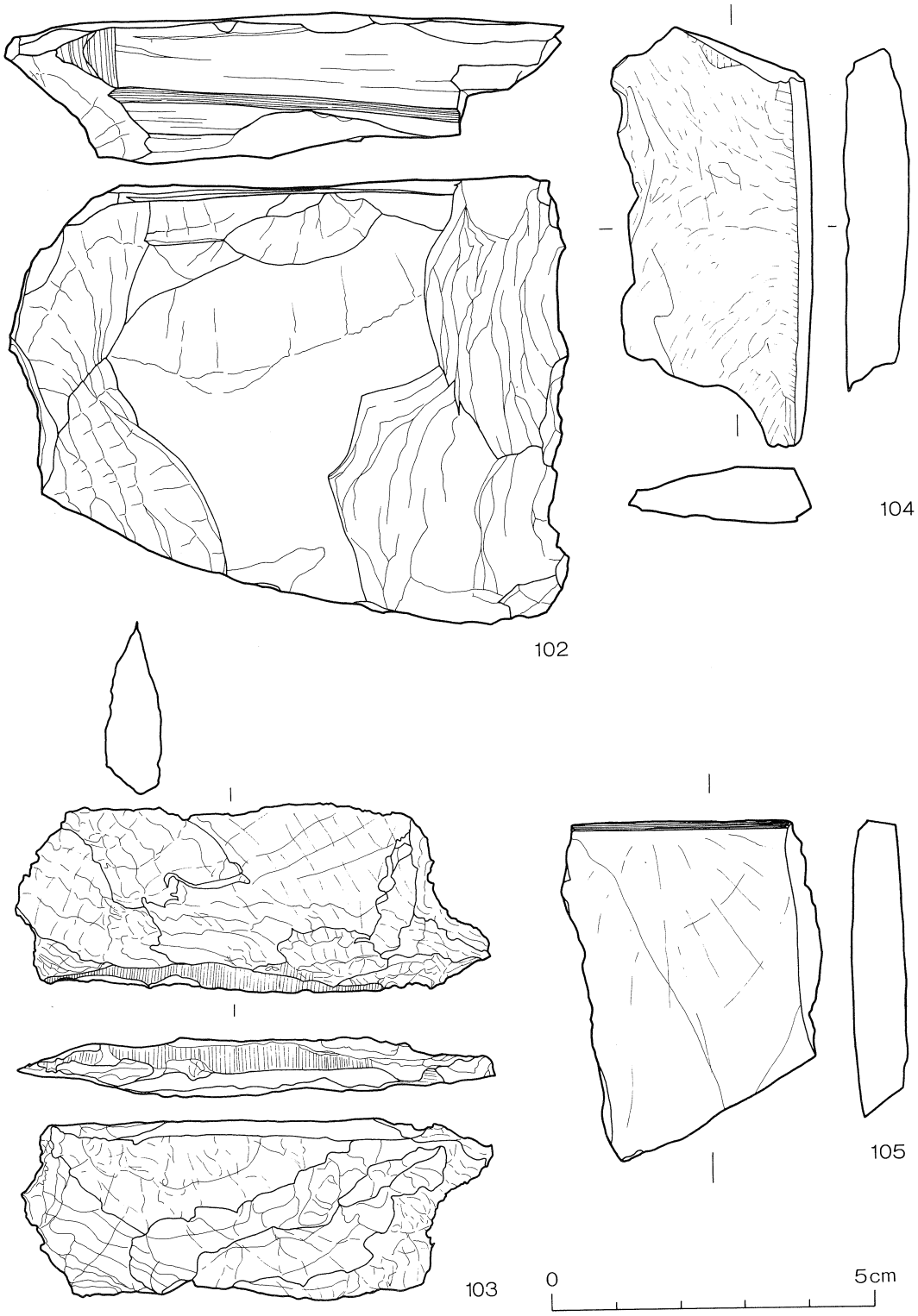
第147図　玉作関係遺物実測図(15)



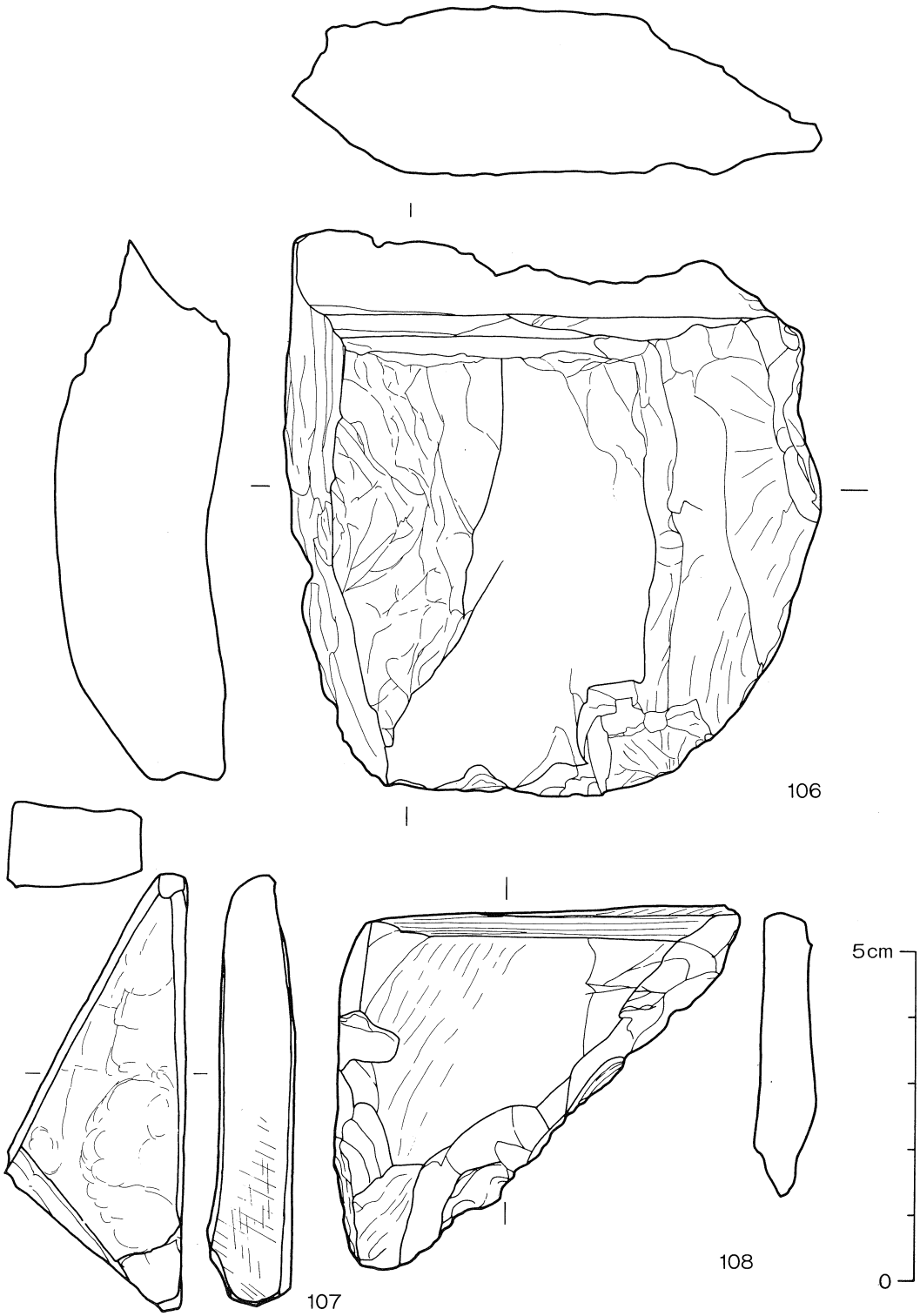
第148図　玉作関係遺物実測図（16）



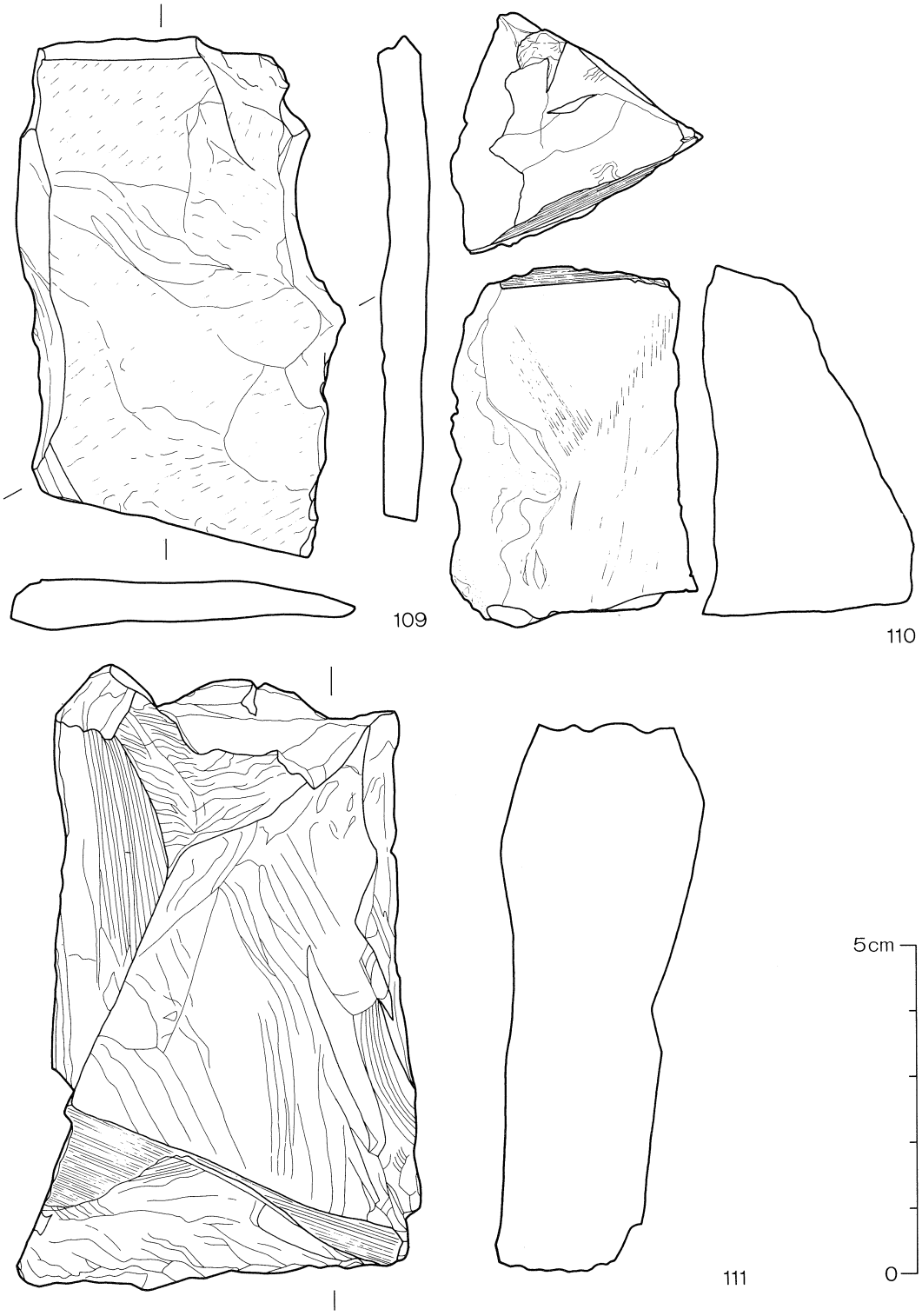
第149図　玉作関係遺物実測図(17)



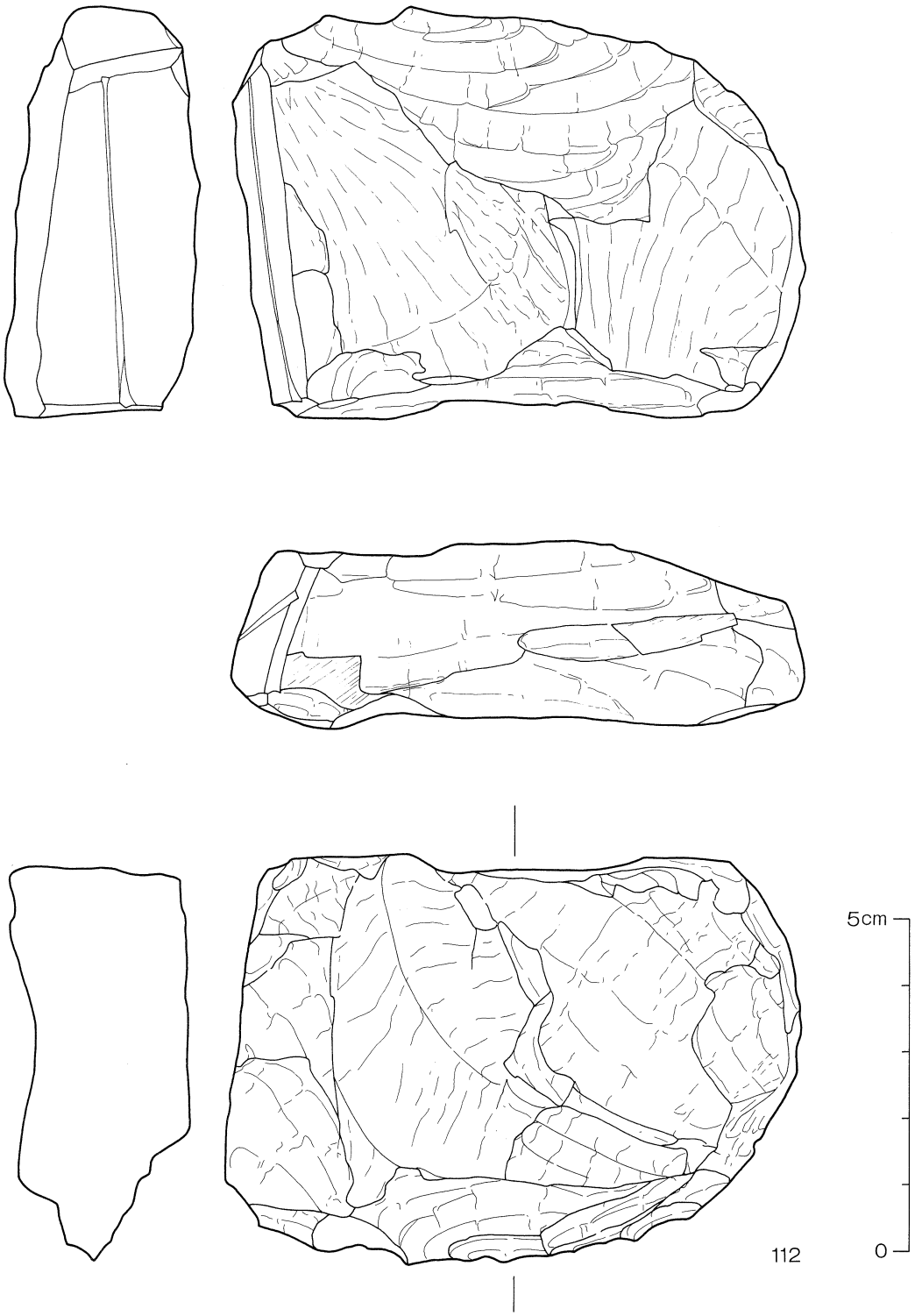
第150図　玉作関係遺物実測図（18）



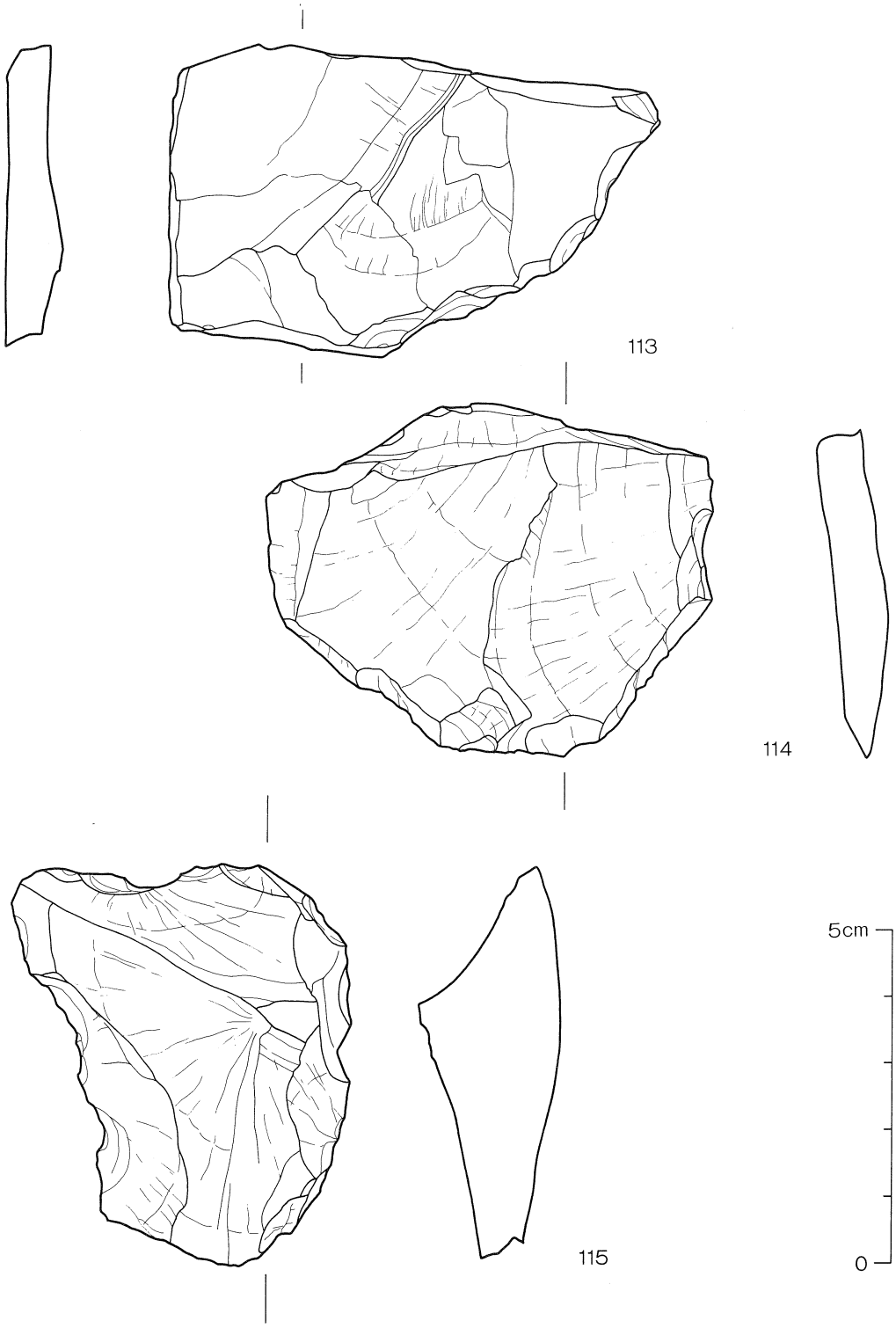
第151図　玉作関係遺物実測図（19）



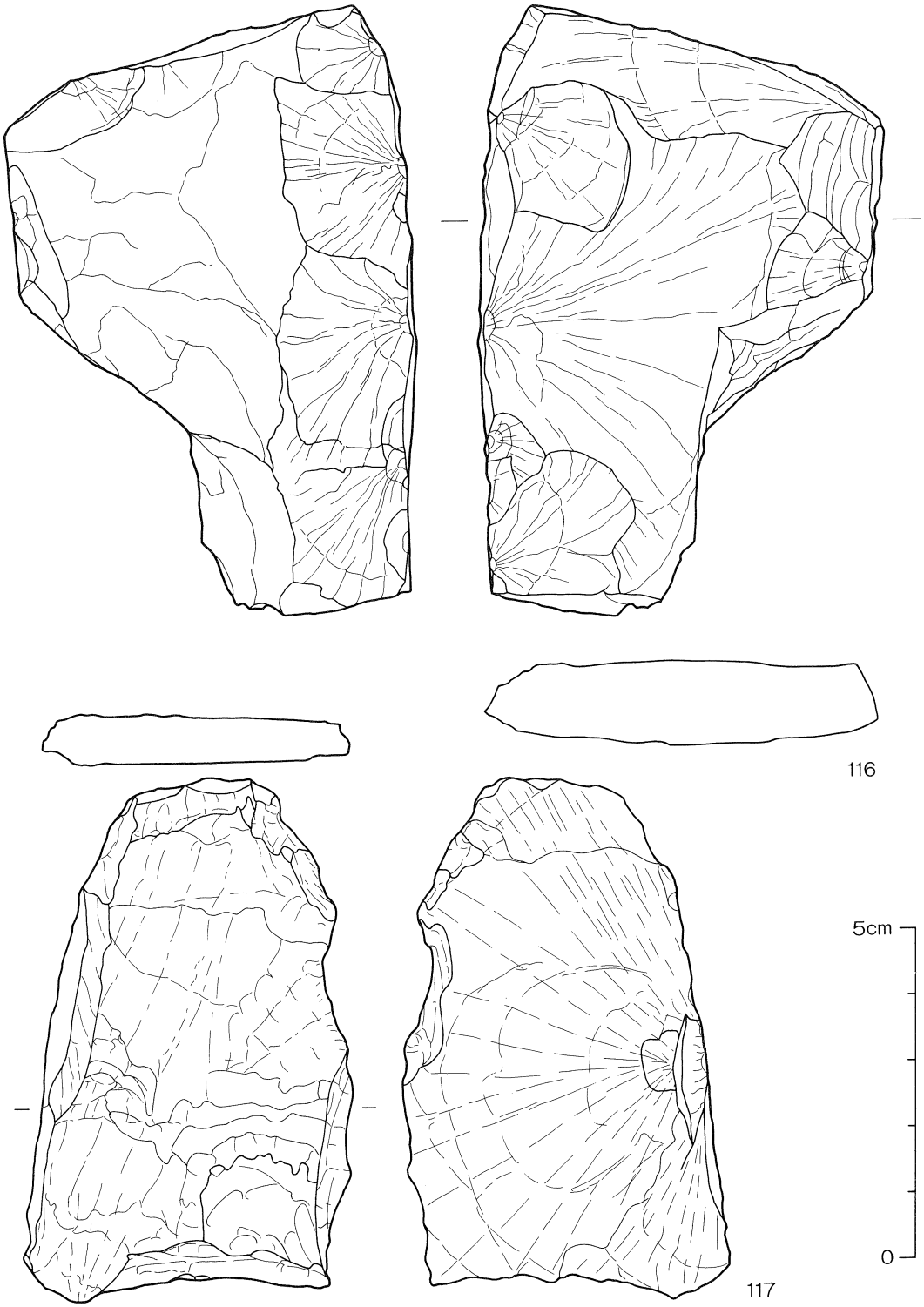
第152図　玉作関係遺物実測図（20）



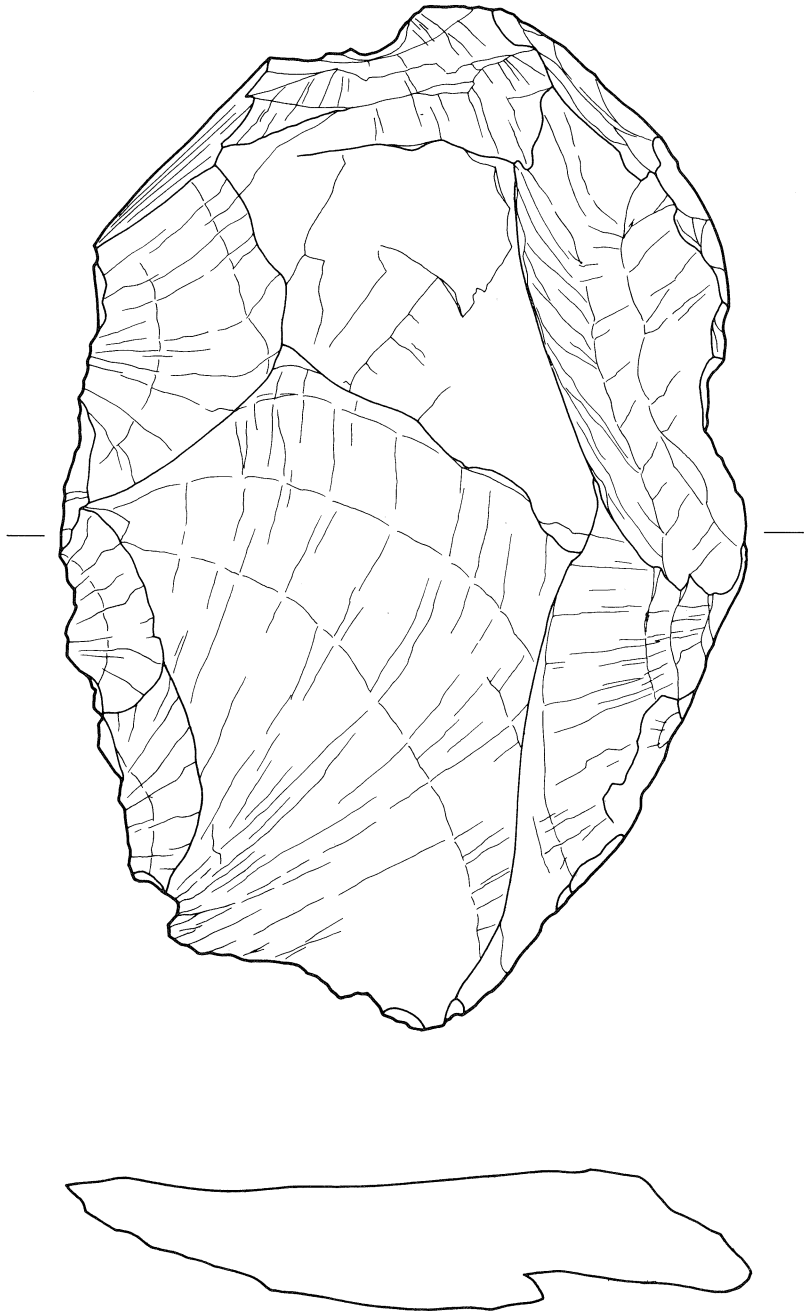
第153図　玉作関係遺物実測図(21)



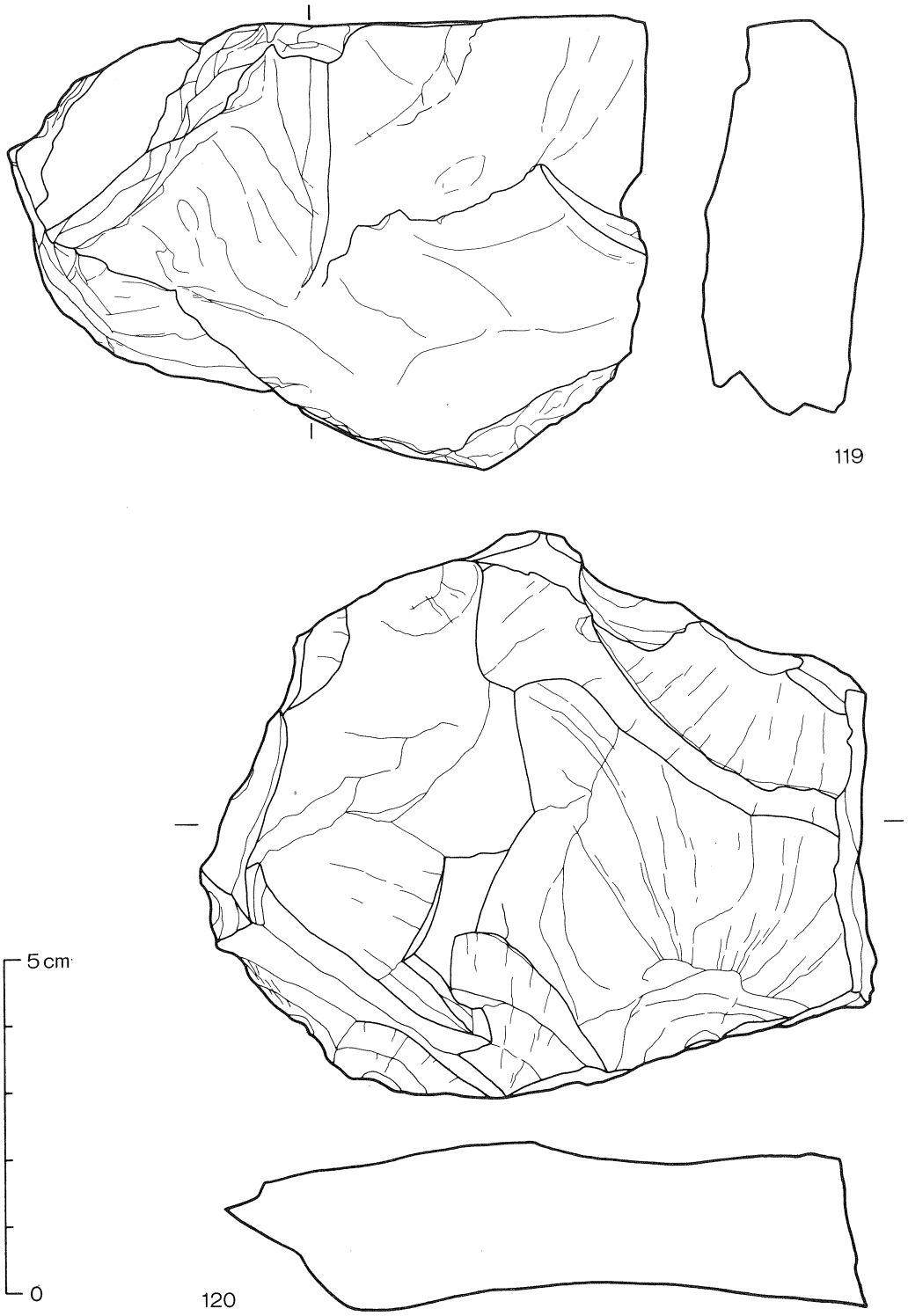
第154図　玉作関係遺物実測図(22)



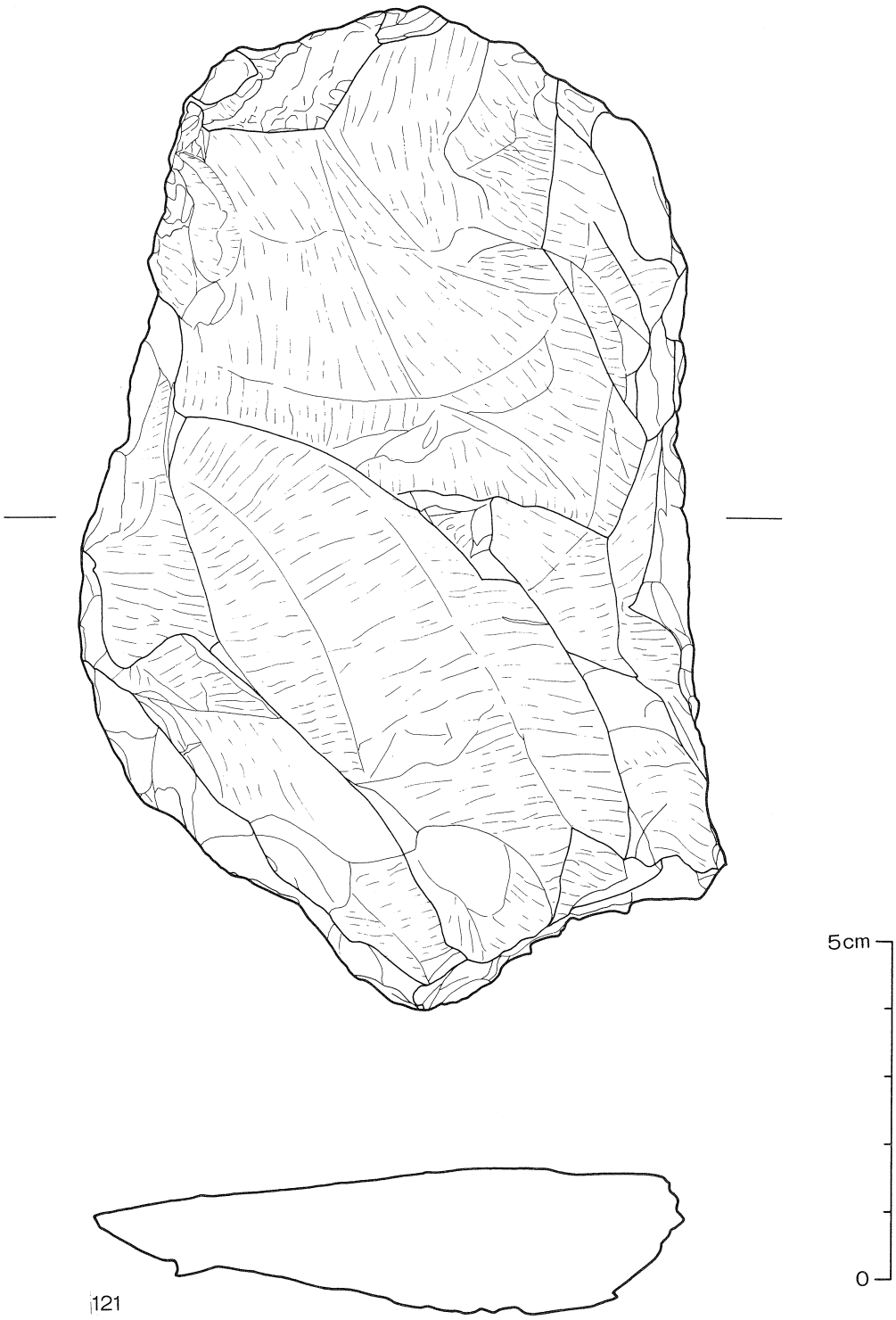
第155図　玉作関係遺物実測図（23）



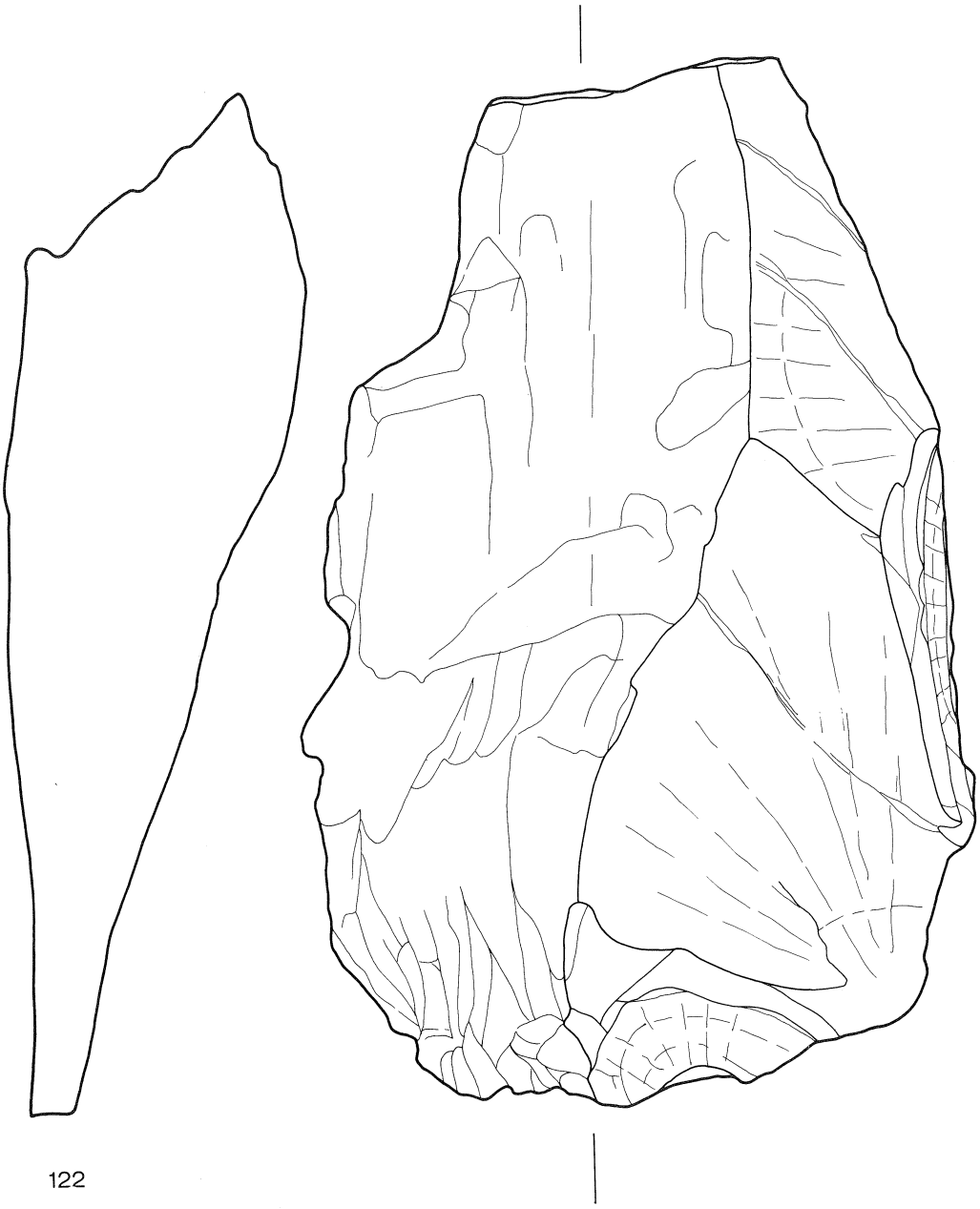
第156図　玉作関係遺物実測図(24)

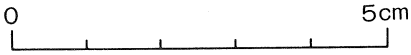


第157図　玉作関係遺物実測図(25)

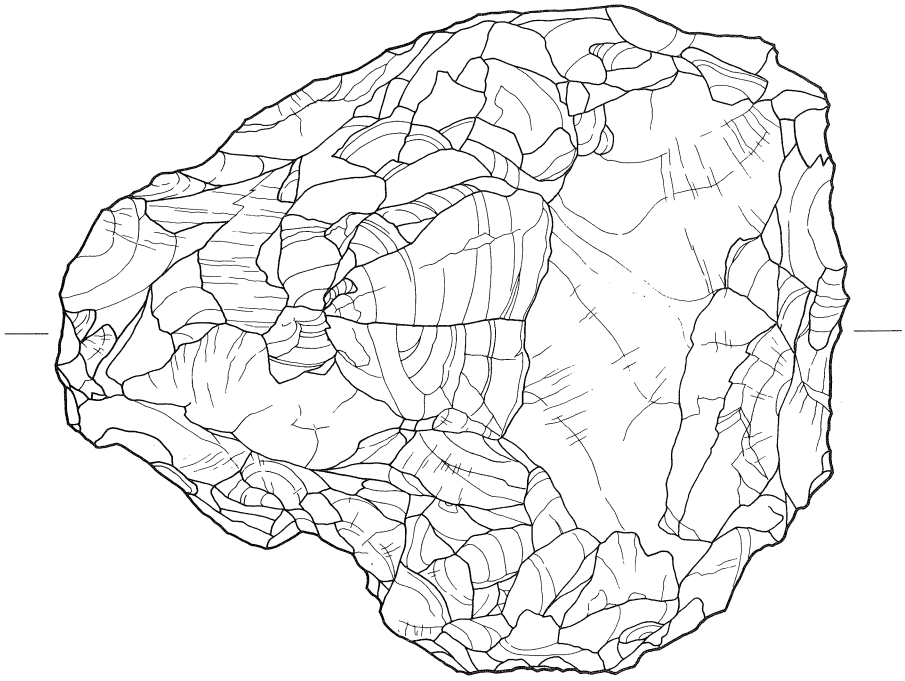


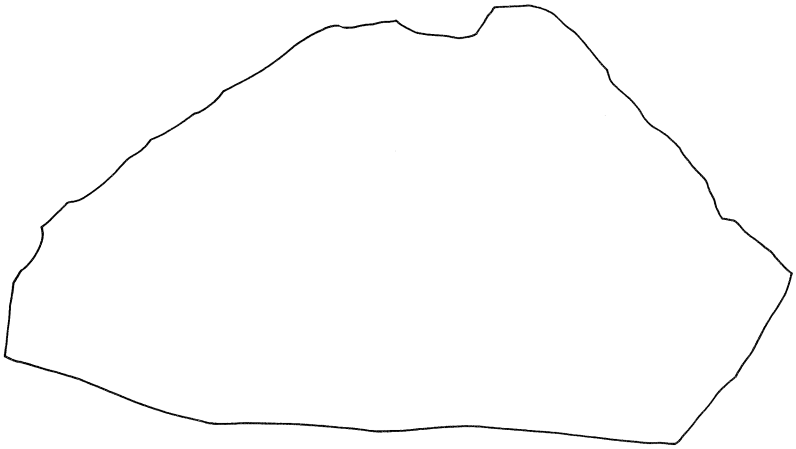
第158図　玉作関係遺物実測図(26)





第159図　玉作関係遺物実測図（27）

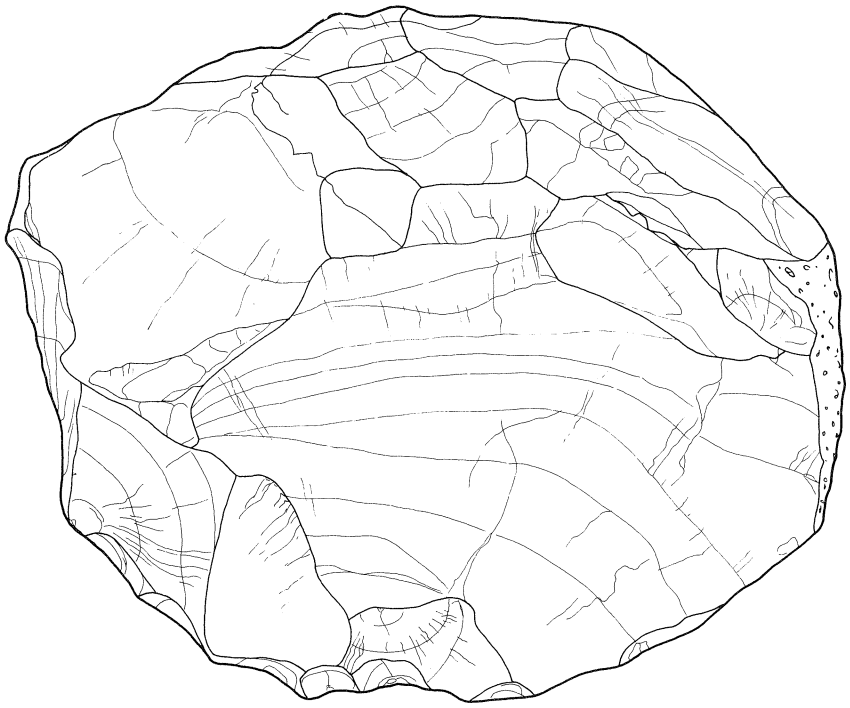


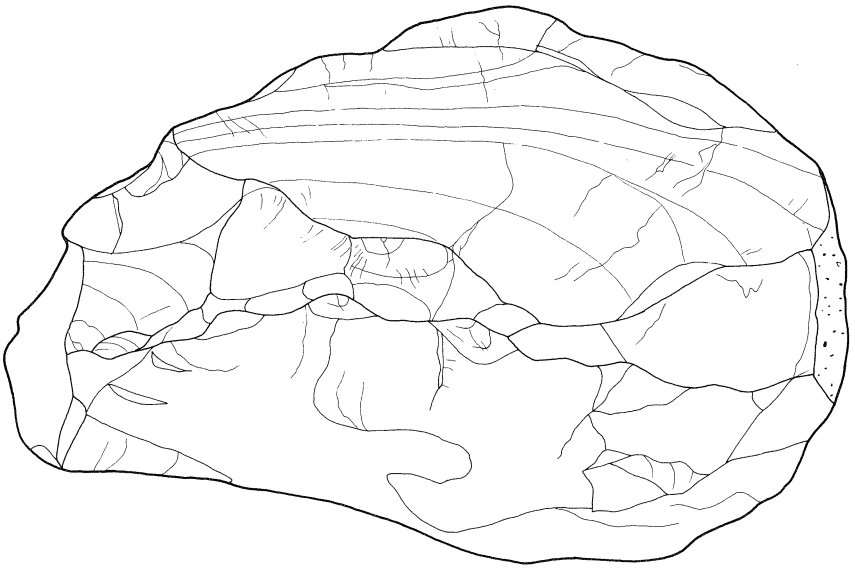


123

0　　5cm

第160図　玉作関係遺物実測図(28)

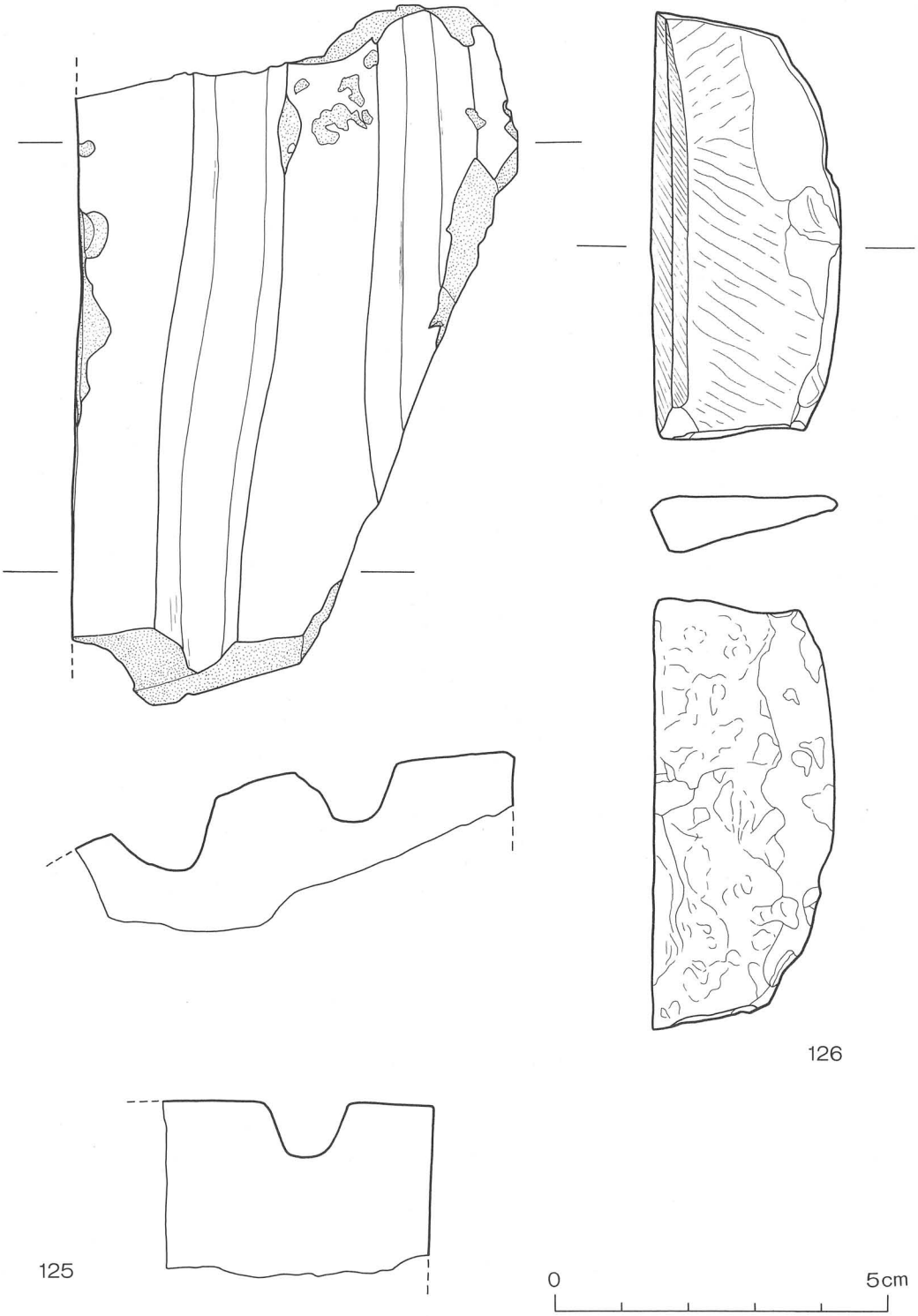




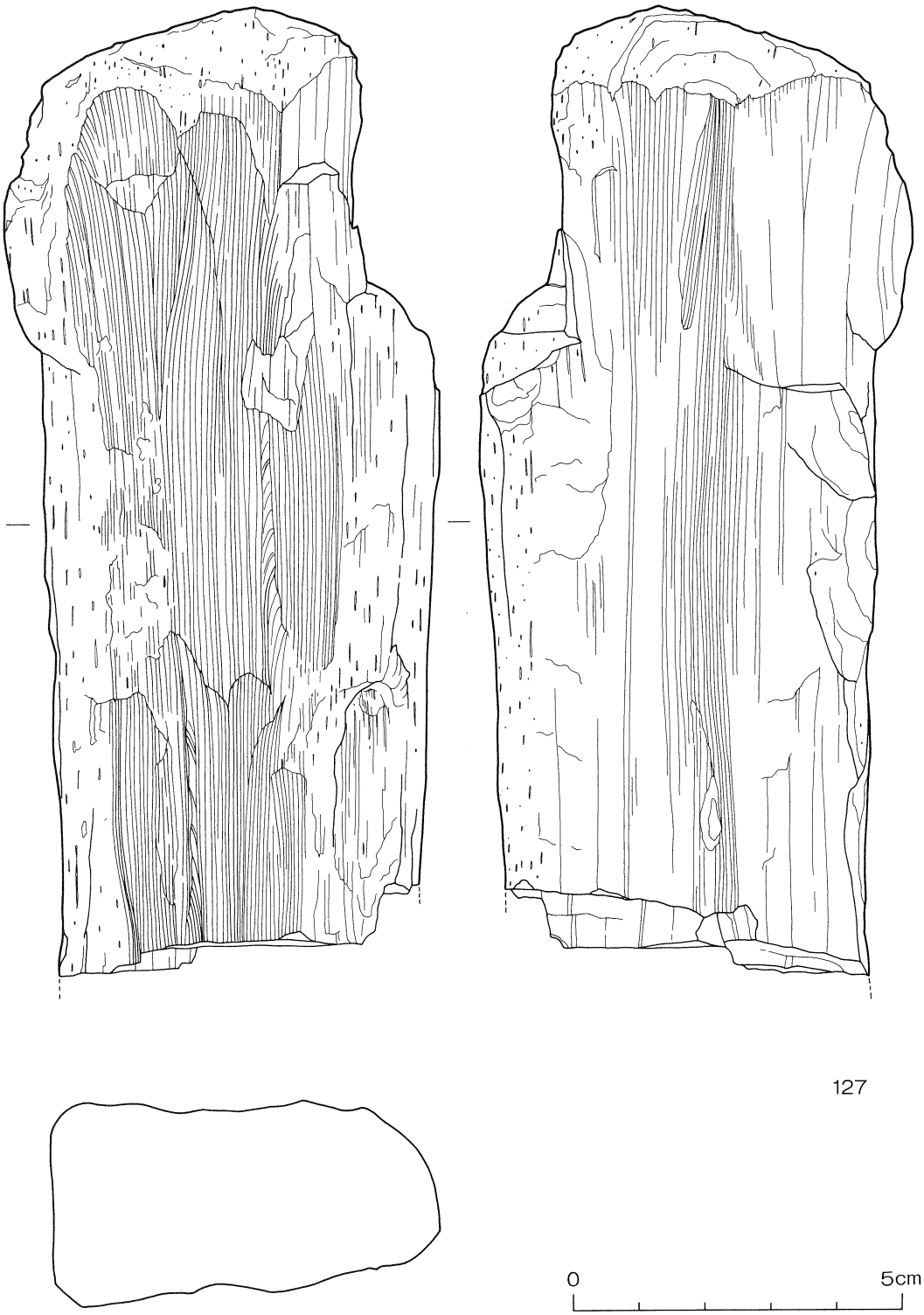
124

0　　5cm

第161図　玉作関係遺物実測図（29）



第162図　玉作関係遺物実測図(30)



第163図　玉作関係遺物実測図（31）

表22　玉および玉未成品観察表（Ⅰ）

挿図番号	長さ	幅	径(厚)	重さ	色調	石材	出土地点	時期	備考
133－1	0.5	0.2	0.2			碧玉	A－6区貝層C	中期	
2	0.7	0.2	0.2			〃	貝層A	〃	
3	0.6	0.2	0.2	0.04	農緑色	〃	A－6区貝層C	〃	
4	0.7	0.2	0.2			〃	A－6区　〃	〃	
5	0.7	0.2	0.2	0.04	濁緑色	〃	ハ－4区貝層Ⅰ	中期	
6	0.8	0.2	0.2	—	—	〃	A－5区貝層C	〃	
7	0.9	0.3	0.3	0.09	黒灰色	頁岩？	A－5区　〃	〃	
8	1.2	0.3	0.2			〃？	貝層A	〃	
9	0.9	0.3	0.3	0.09	緑灰色	碧玉	A－5区貝層C	〃	
10	0.7	0.3	0.4			〃	A－6区　〃	〃	
11	0.8	0.3	0.3	0.13	黒色	頁岩？	A－6区　〃	〃	
12	0.7	0.3	0.3	0.12	淡黒色	頁岩	A－6区　〃	〃	
13	0.7	0.4	0.4	0.15	淡黒色	〃	A－6区　〃	〃	
14	1.0	0.4	0.4	0.15	褐緑色	緑色凝灰岩？	D－2区貝層F	前期	焼成か？
15	0.5	0.4	0.4	0.01	黒色	木製？	——	——	
16	0.7	0.4	0.4	0.12		緑色凝灰岩	A－5区貝層C	中期	
17	0.9	0.4	0.4	0.13	灰色	緑色凝灰岩	ハ－5区貝層Ⅰ	前期	焼成か？
18	1.0	0.4	0.4	0.23	褐緑色	〃	ハ－5区　〃	〃	
19	欠損	欠損	欠損	(0.09)	緑色	碧玉	ハ－5区　〃	〃	半分欠損
20	1.2	0.5	0.5	0.1	濃褐色	緑色凝灰色	ハ－5区　〃	〃	〃
21	(0.7)	0.4	(0.4)		淡緑灰色	〃	ハ－5区　〃	〃	〃
22	0.9	0.3	0.3	0.06	淡黒色	碧玉	ハ－4区　〃	〃	〃
23	0.8	0.3	0.3	0.05	濃褐色	緑色凝灰岩	ロ－2区貝層H	〃	〃
24	0.8	0.3	0.3	0.075	淡緑灰色	〃	ハ－4区貝層Ⅰ	〃	〃
25	0.7	0.4	0.3	0.07	緑灰色	〃	ハ－4区　〃	〃	〃
26	0.8	0.3	0.4	0.9	淡緑灰色	〃	ハ－5区　〃	〃	〃
27	0.8	0.4	0.4	0.08	濃緑色	〃	ハ－5区　〃	〃	〃
28	0.9	0.4	0.4	0.1	濃緑色	〃	ハ－5区　〃	〃	〃
29	0.9	0.4	0.4			〃	ハ－5区　〃	〃	〃
30	0.9	0.4	0.4	0.17		〃	——	——	〃
31	0.9	0.4	0.3	0.08	淡緑灰色	〃	ハ－5区貝層Ⅰ	前期	〃
32	0.7	0.4	0.3	0.05	濁緑褐色	〃	〃　〃	〃	〃
33	1.0	0.4	0.4	0.15	緑灰色	〃	D－2区貝層F	〃	〃
34	1.1	0.4	0.4			〃	A－5区貝層C	中期	〃
35	1.2	0.5	0.5	0.15	淡黒色	緑色凝灰岩？	不明		〃
36	1.3	0.7	0.6	1.1		緑色凝灰岩	A－6区貝層C	中期	穿孔途中
37	1.1	0.5	0.5	0.5	淡緑灰色	〃	SK01	〃	未穿孔
38	(1.2)	0.7	0.7			〃	D－4区	前期	未穿孔
39	2.0	0.8	0.5			〃	D－5区貝層C	中期	
40	(1.0)	0.4	0.3	(0.2)		緑色凝灰岩？	A－6区　〃	〃	
41	(1.7)	0.6	0.5	(0.7)		緑色凝灰岩	A－6区　〃	〃	
42	3.1	0.5	0.5	1.5		〃	D－5区貝層G	前期	
43	2.2	0.5	0.3	0.75		碧玉	チ－2区	中～後期	
44	2.8	0.5	0.5		淡緑色	緑色凝灰岩	B－5区	前～中期	
45	2.8	0.7	0.6	1.9	淡緑灰色	〃	——	——	

表23　玉および玉未成品観察表（II）

挿図番号	長さ	幅	径(厚)	重さ	色調	石材	出土地点	時期	備考
133—46	(6.4)	0.6	0.5			緑色凝灰岩	B－5区貝層C	中期	
47	4.0	0.8	0.5	2.7		〃	C－6区	〃	
48	3.7	1.1	0.6	5.0		〃	D－4区	前一中期	
49	4.5	0.9	0.4	3.7		〃	海崎No.12	前期	
50	2.7	0.9	0.7			〃	A－4区貝層C	中期	
134—51	9.5	1.5	0.9	14.1		〃	——	——	
52	5.6	1.3	0.8	8.1		〃	ロ－3区	前一中期	
53	3.7	5.2	0.7	22.2	濃緑灰色	碧玉？	B－5区	中期	擦り切り溝2条
54	2.8	(3.9)	0.5	(10.0)	淡緑灰岩	緑色凝灰岩	イ－3区	〃	擦り切り溝2条
55	(7.0)	3.3	0.6	(—)		〃	SZ014内	〃	擦り切り溝1条
56	4.2	2.4	0.6	8.9		〃	A－5区貝層C	〃	擦り切り溝1条
57	2.5	1.4	0.3	1.3		頁岩	A－6区貝層C	〃	
58	2.0	1.5	0.5			緑色凝灰岩	SK01	〃	
135—59	3.7	5.2	0.7	22.2	濃緑灰色	〃	B－5区	前～中期	
60	7.8	6.8	0.6	50.0		〃	ニ－5区	中期	
61	6.7	4.2	0.9	35.9		〃	イ－4区	〃	
62	4.1	3.0	0.5	10.6	〃	イ－5区	〃		
63	4.8	2.3	0.6	8.4		〃	イ－6区	〃	
136—64	5.9	3.2	0.4	11.9		〃	ハ－5区	貝層I	前期
65	5.8	5.9	0.8			〃	——	——	
66	7.0	5.0	1.1	40.0	淡緑灰色	〃	ロ－5区	前一中期	
137—67	5.6	4.8	0.4	6.6		〃	イ－4区	中期	
68	5.9	9.2	0.6	46.6		〃	ロ－6区	——	
69	9.3	2.8	1.3			〃	ハ－6区	——	
70	7.2	3.3	0.4	1.5		〃	ロ－2区	中期	
71	5.6	3.0	0.4	13.1		〃	B－5区	〃	
138—72	(4.9)	4.7	0.7	(—)		〃	SZ020付近	〃	
73	6.2	10.7	1.0	80	淡緑色	〃	イ－4区	〃	穿孔中の浅い小穴あり
139—74	8.8	5.5	1.7			〃	イ－6区	〃	
75	6.4	5.3	1.4	50	淡緑灰色	〃	A－6区	〃	
76	6.0	3.0	0.9	14.3		〃	C－6区	〃	
140—77	8.8	6.4	1.2			〃	——	〃	
78	9.9	7.5	2.2	181.2		〃	ロ－6区	〃	
141—79	11.7	5.0	1.1	89.6		〃	ハ－6区	〃	
80	8.4	5.2	1.0	27.5		〃	A－2区	〃	
142—81	6.2	5.8	1.0			〃	イ－6区	前一中期	
82	5.8	68	1.1	48.6		〃	A－3区	〃	穿孔中の浅い小穴あり
83	7.6	5.2	0.7	32.5		〃	イ－4区	中期	
84	8.0	3.6	0.7	21.8		〃	A－5区	〃	
143—85	9.7	9.7	1.5	170.0	淡緑灰色	〃	〃		
86	8.8	8.0	1.4	100.0	淡緑灰色	〃	ハ－6区	〃	
144—87	5.6	7.4	7.0	50.0	黒灰色	頁岩	イ－2区	〃	
88	4.3	4.6	0.5	17.0	黒灰色	〃	——	——	
89	(3.8)	(3.2)	0.7	(10.0)	黒灰色	〃	ロ－4区	中期	
90	3.8	9.0	0.6	38.0	黒灰色	〃	ハ－4区	〃	

表24　玉および玉未成品観察表（Ⅲ）（玉砥石も含む）

挿図番号	長さ	幅	径(厚)	重さ	色調	石材	出土地点	時期	備考
145—91	7.2	3.3	0.4	15.9		緑色凝灰岩	——	前期	
92	10.4	4.3	1.6	71.8		〃	ロ—4区	中期	
93	7.8	4.3	1.5			〃	ロ—4区	〃	
146—94	7.0	6.2	1.3	72.0		〃	ニ—5区	〃	
95	6.9	7.7	1.0	50.3		〃	ロ—6区		
96	5.9	(4.9)	0.8	(40.0)	淡緑灰色	〃	イ—2区	〃	
147—97	5.4	4.3	0.4	14.5		〃	イ—5区	〃	
98	14.8	3.2	1.2	55.0	淡緑灰色	〃	ロ—5区	〃	
148—99	9.4	8.2	2.0			〃	ＳＺ020付近		
100	2.2	5.0	0.5	8.0	黒灰色	頁岩	ロ—4区	〃	
149—101	11.2	8.8	1.5	150.2		緑色凝灰岩	ロ—6区	〃	
150—102	8.6	6.9	2.1	150.0	淡緑灰色	〃	イ—4区	〃	
103	7.3	2.7	0.9			〃	イ—5区ＳＺ	〃	
104	6.5	3.0	1.0	20.6		〃	第2土器群中	前～中期	
105	5.2	4.0	0.8	24.0		〃	ＳＺ—015	中期	
151—106	9.6	8.2	2.6	215.7		〃	——	——	
107	6.5	2.7	1.3			〃	ＳＺ020付近	中期	
108	5.6	6.2	0.9	34.3		〃	イ—3区	前期	
152—109	8.0	5.1	0.7	41.2		〃	イ—6区	中期	
110	3.8	5.4	3.1	65.5		碧玉	イ—5区	〃	
111	9.6	6.2	3.1	240.0		緑色凝灰色	Ａ—2区	〃	
153—112	8.7	6.1	2.7			〃	ＳＺ020付近	〃	
154—113	7.4	4.7	0.9	35.0	淡緑灰色	〃	ヘ—3区	〃	
114	6.7	5.3	1.2	42.0	淡緑灰色	〃	ＳＺ020付近		
115	5.1	6.0	2.2	52.0		〃	ロ—3区	〃	
155—116	6.1	9.2	1.3	90.0		緑色凝灰岩？	Ａ—3区	前—中期	
117	8.0	4.9	0.8			緑色凝灰色	——	中期	
156—118	9.2	13.5	1.8	220.0	淡緑灰色	〃	イ—4区	〃	
157—119	9.7	6.9	2.4	149.0		〃	ホ—2区	中～後期	
120	8.5	10.0	2.3	215.0	淡灰色	〃	ハ—5区	前—中期	
158—121	14.8	9.2	2.2	312.0		〃	ロ—6区	中期	
159—122	9.2	14.0	3.9	480.0		〃	——	——	
160—123	10.5	8.8	5.7	610.0	濃緑色	碧玉	イ—5区	中期	
161—124	9.2	11.3	7.4	690.0	〃	〃	イ—5区	中期	
162—125	(10.5)	(6.7)	(2.5)	(180.0)	淡褐色		ハ—5区	前期	筋砥石
126	6.4	2.8	0.9	19.7	淡灰色		ロ—4区	前～中期	内磨砥石か？
163—127	(14.6)	6.1	3.1	(440.0)	淡褐色	珪化木	イ—3区	中期	仕上げ砥石

125と127は玉作用の砥石と考えられる。125は筋砥石、127は珪化木で両面に使用痕が認められる。126は石鋸と考えた。

12 骨 角 器

第164図～第179図及び図版107～112に骨角器を図示した（カラー図版2、3）。骨角器には釣針、オコシ、刺突具、縫針、装身具類、矢筈等があり、完成品と加工途中のものがある。

a．釣針

1～20、85、87は釣針とその未製品である。西川津遺跡出土獣骨製釣針の分類に従う[註1]と、1～6は単式のA類、7～10、12は単式で逆刺が外側につく長さ5.0cm以上のB類、11は単式で逆刺が内側に2ヶ所みられるC類、13～20は結合式のD類であろう。

A類の1～6は長さ2.0cm前後の小形品で、いずれも猪牙製と考えられる。このうち1については釣針以外の骨角器の破片である可能性もあるが、一応ここでは釣針A類として扱っておくことにしたい。2、3、4、5は完形である。

B類は完成品の欠損品が多い。全様を知るものはないが、弥生時代中期の例から7～12をB類と考えた。いずれも鹿角製であり欠損品が多いのはこの材の為かも知れない。12は長さ7.0cmである。

11はC類が加工途中で欠損したものと考えられる。現存する長さは5.5cmを測る。鹿角製である。

D類の資料は完成品、未成品を含め比較的豊富な出土をみた。いずれも軸部は鹿角製、鈎部は猪牙製の原則が守られている。

13、14はセット関係にあり、出土状態もそれを窺わせた（カラー図版1の下）。13は長さ13.4cmの鹿角製軸部、14は長さ9.4cmの逆刺が外側に2ヶ所つく猪牙製の鈎部である軸部と結合される部分には乳白色の接着材と糸で緊縛した痕跡が残る。軸部が結合される鈎部には結合の為の溝はみられない。鈎部の尻部には径0.3cmの孔があけられている。この孔は擬餌用の孔と考えられる[註2]。15は長さ10.4cmの軸部で完成品である。13の完成品と比較すると、鈎部と結合される部分は弧を描き、鈎部にあわせて加工されたことが知られる。

16、17は猪牙製鈎部の未成品である。14と異なるのは16、17とも内側に逆刺がつくと考えられることである。16は2ヶ所、17は1ヶ所の逆刺が加工途中である。従って逆刺の位置を重視すれば、D類はさらに細分することができよう。17のような鈎部のカーブは15の軸部にふさわしい。

18、19、20は鹿角製軸部の未製品である。20は軸部の長さを決定し、枝角を切り落とした段階のものである。長さ17.8cm。18は20のような材をタテ割に二分した一方を加工しはじめている。恐らく20は二つの軸部を作ろうとした材料であろう。8歳以上に成長した鹿

角の上方部を利用している。これに対し19は6～7歳の鹿角の先端を利用している為に、18のようにタテ割りをしないまま軸部を作ろうとしていると考えられる。

b．オコシ

21、22、56、57はアワビオコシ等のオコシ類である。21は長さ16.3cm、22は19.6cmを測る。21は角坐や角坐骨の部分を握りとした落角前の鹿角を利用、22は鯨骨製と考えられる。いずれも先端には使用痕がみられる。56、57はヘラの可能性もあり、57はヤスの未成品とも受け取れる。

c．刺突具

23～42、84、86は刺突具類である。このうち、23、25、86は鹿角の先端を利用し全体はよく磨かれている。25は鹿角をタテ方向に半截しているが、23、86は角の枝をそのまま利用したものである。いずれも基部に孔が穿たれているが、裏面には貫通させず、「L」の字状に基部に向かってあけられていることが共通している。長さは14～16cmである。25は孔の付近に二条の浅い沈線が刻まれている。これに対し84は長さが24.5cmと長く直線的である。材質も鯨骨と考えられる。前3者と同様に基部に孔が穿たれている。基部より0.4cmの位置に一条の浅い沈線がめぐり、さらに4.0cmあたりに「井」状のマークが線刻されている。銛とも考えられるが、貝層から多量に検出されたウニを刺突した可能性もあろう。

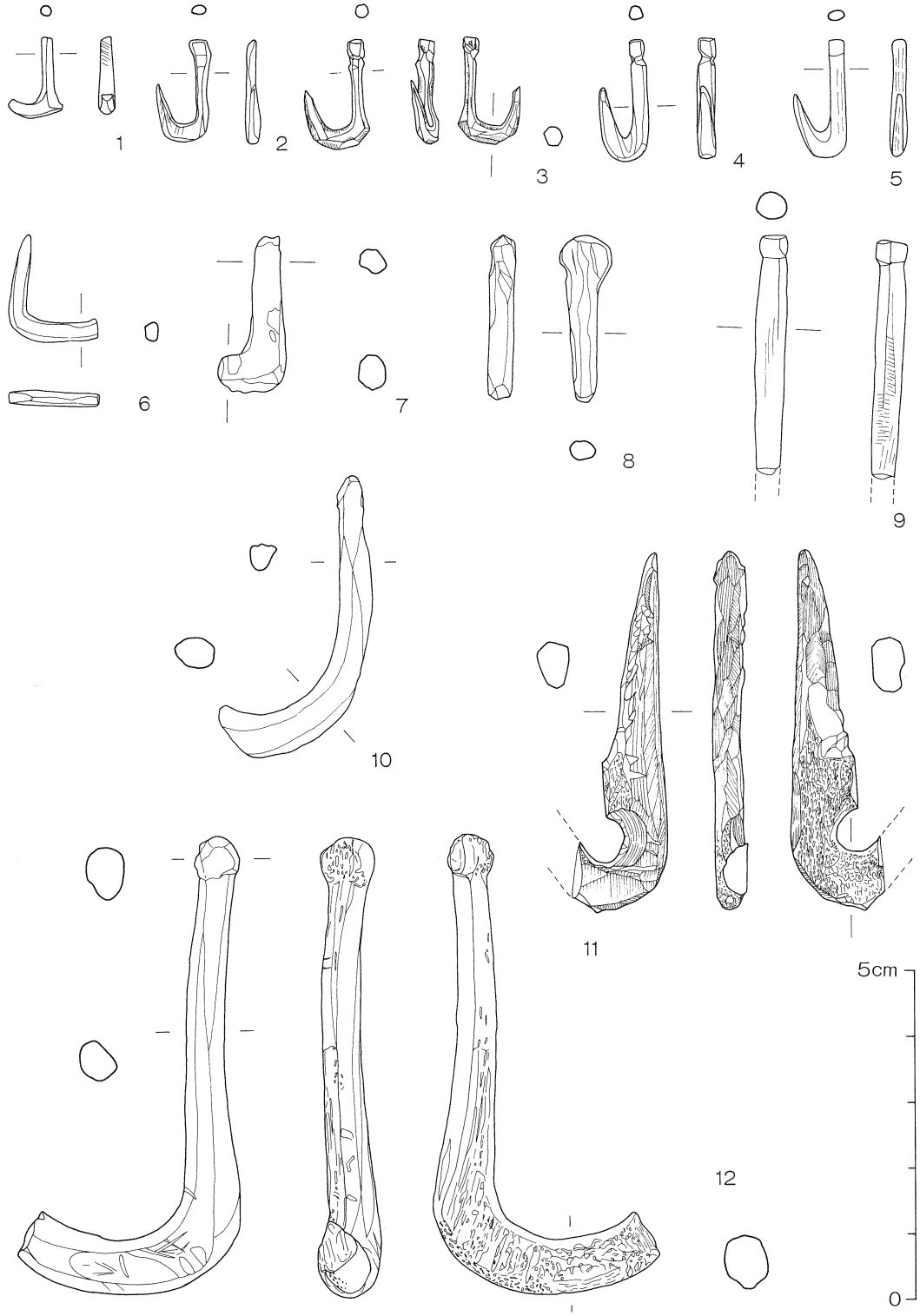
24、26～42はヤス類、及びその未成品と考えられるものである。26のように長さ13.4cmのものから、42のように長さ3.9cmの短かいものまである。ヤス類のほとんどは鹿のような獣骨を材としているが、31のようにエイの刺尾をそのまま利用したものもある。31は長さ7.1cmを測る。基部にあたる約2.5cmの一面を削り平坦面を作っている。その裏面には接着材として用いられた黒漆と思われる黒色物と、緊縛した糸の痕跡が残っているので、2～3本を一セットとしたヤスが推定できる。33は2本ヤスの良好である。長さ7.4cmと4.3cmの長短二種を一つの柄につけた例で、釣針14にみられたような乳白色の接着材の痕跡と、緊縛した桜の樹皮がまきつけられた状態で出土した。材は鹿角製であろう。

d．矢筈

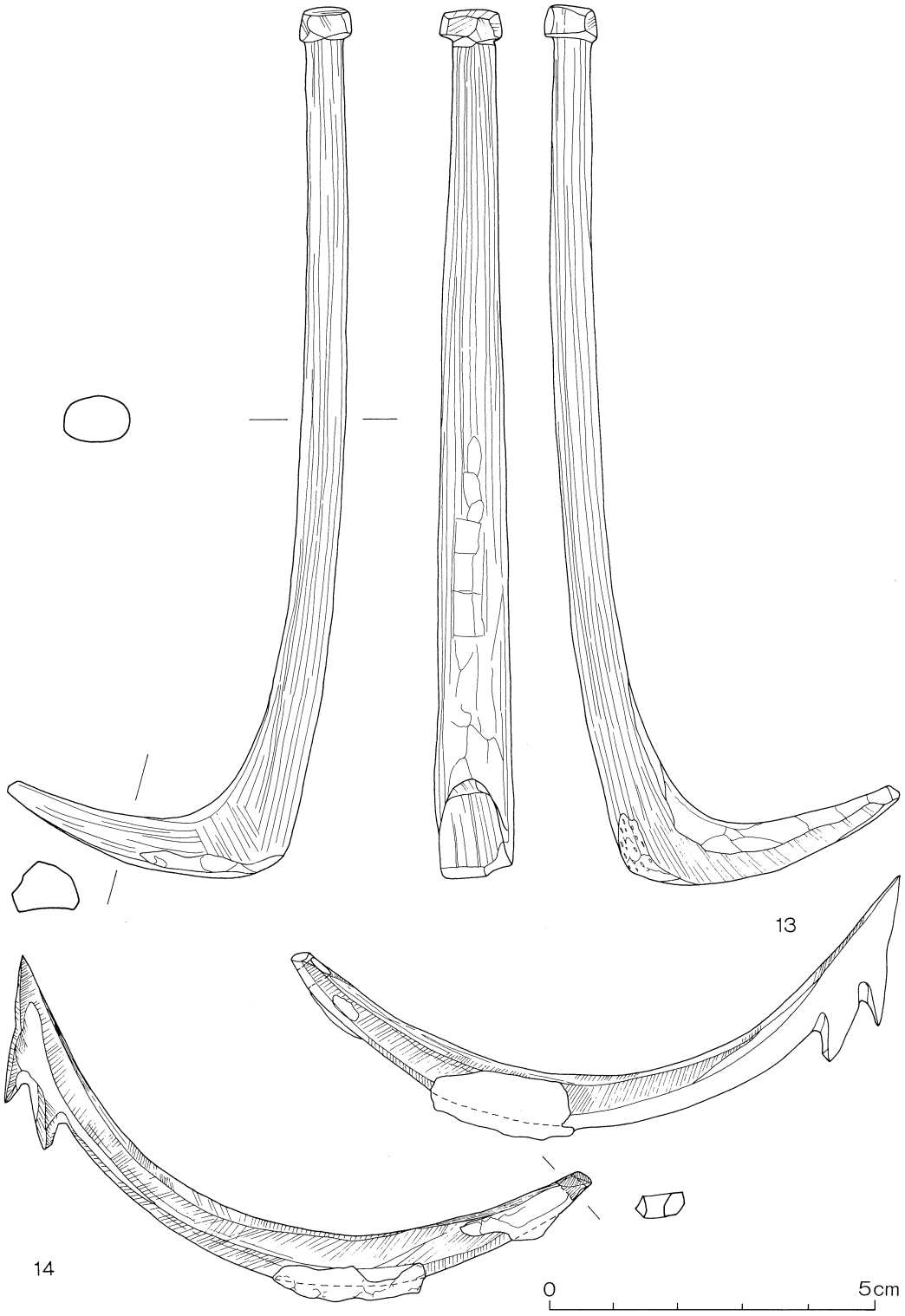
60～63は矢筈である。いずれも鹿角製と考えられる。60は2孔、61は4孔がみられる。60は縁を凸凹で、61はそれぞれの孔の位置に4条ずつの沈線で装飾している。60は完形で長さ4.1cm、61はさらに長いものであろう。62、63はこれらの孔に装着されていたものである。

e．縫針

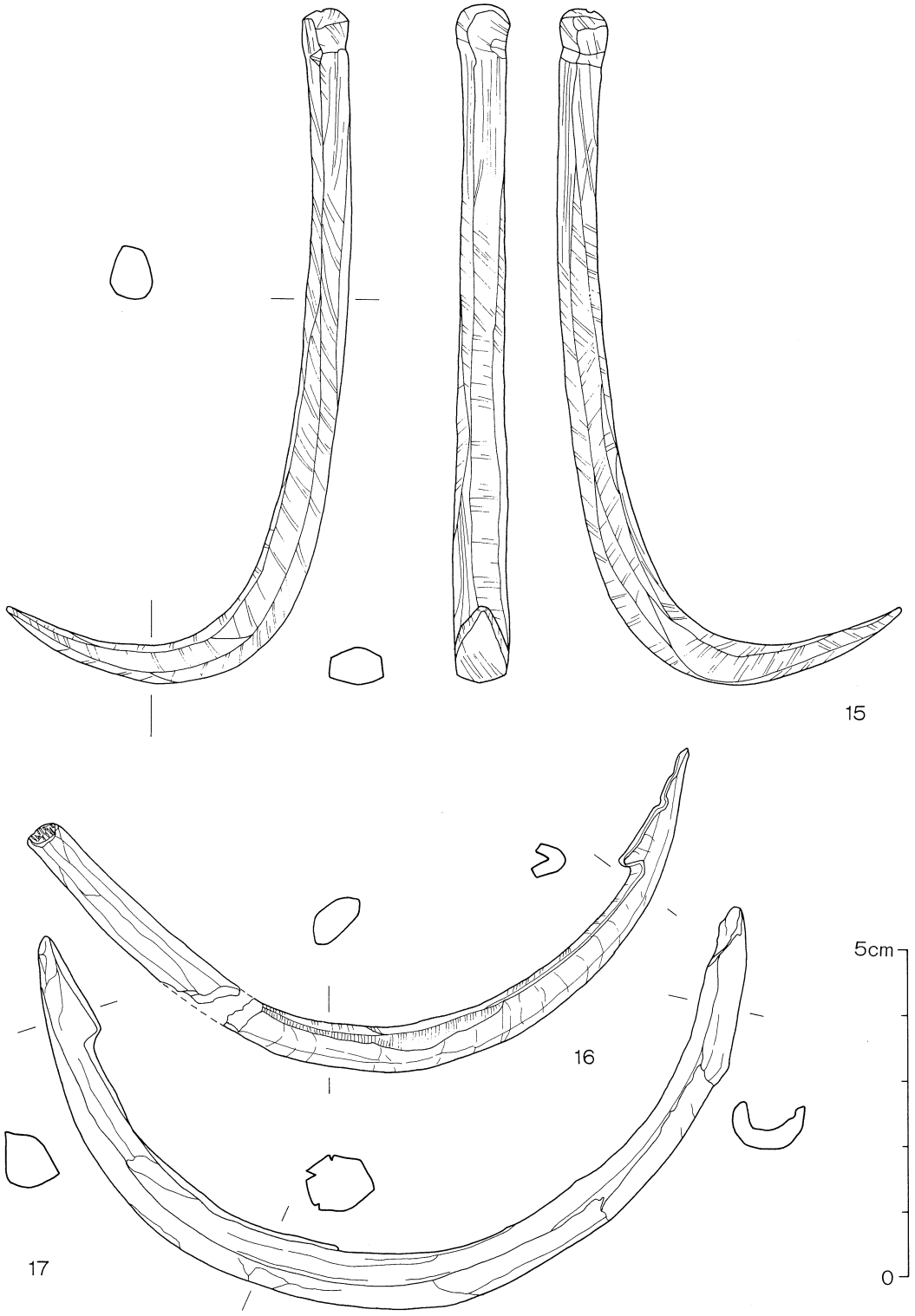
44～52は獣骨製の縫針である。46は最も短かいもので3.1cm、44は最長のもので復元す



第164図　骨　角　器　実　測　図（1）

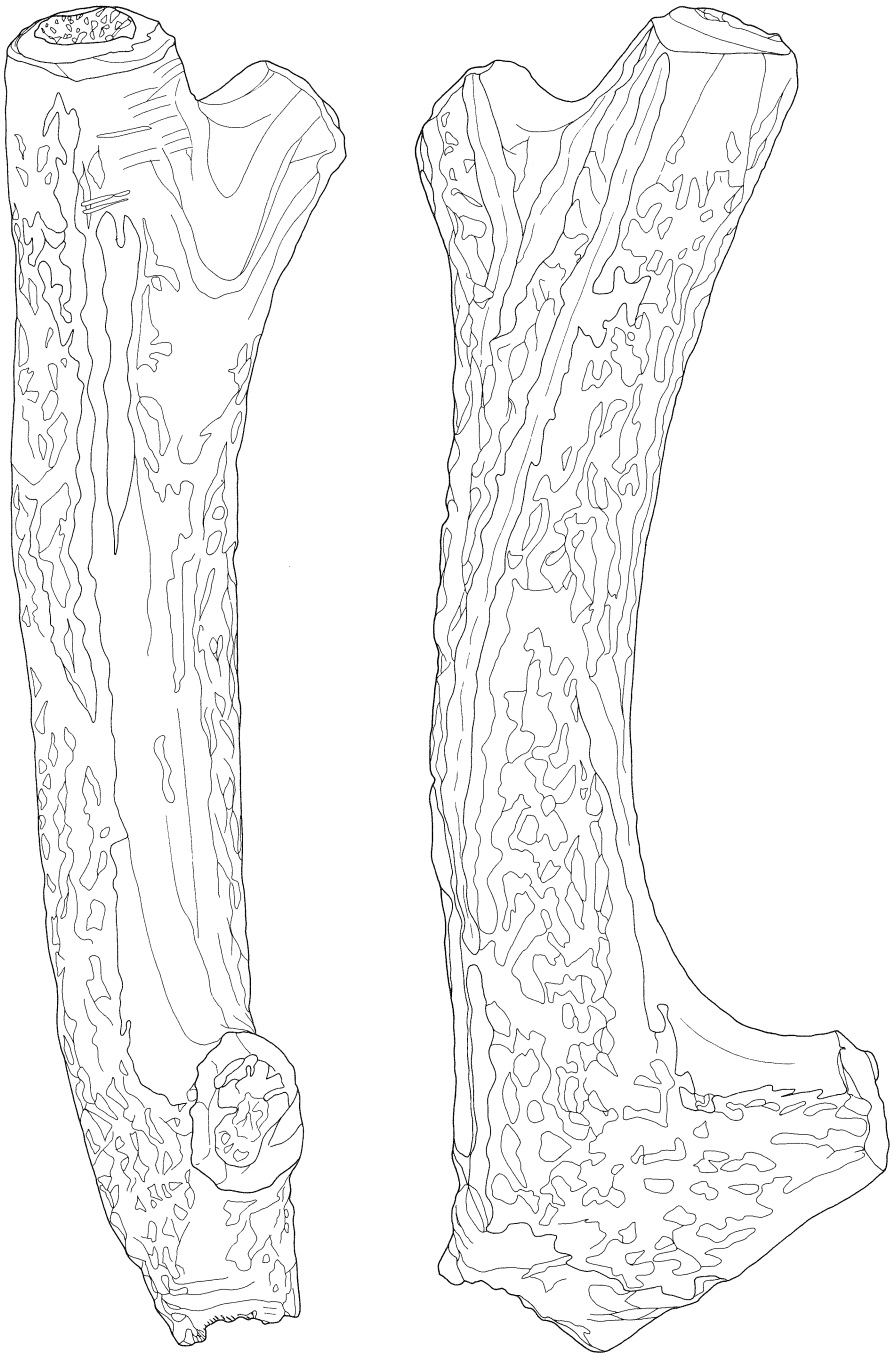


第165図　骨　角　器　実　測　図（2）



第166図　骨　角　器　実　測　図（3）

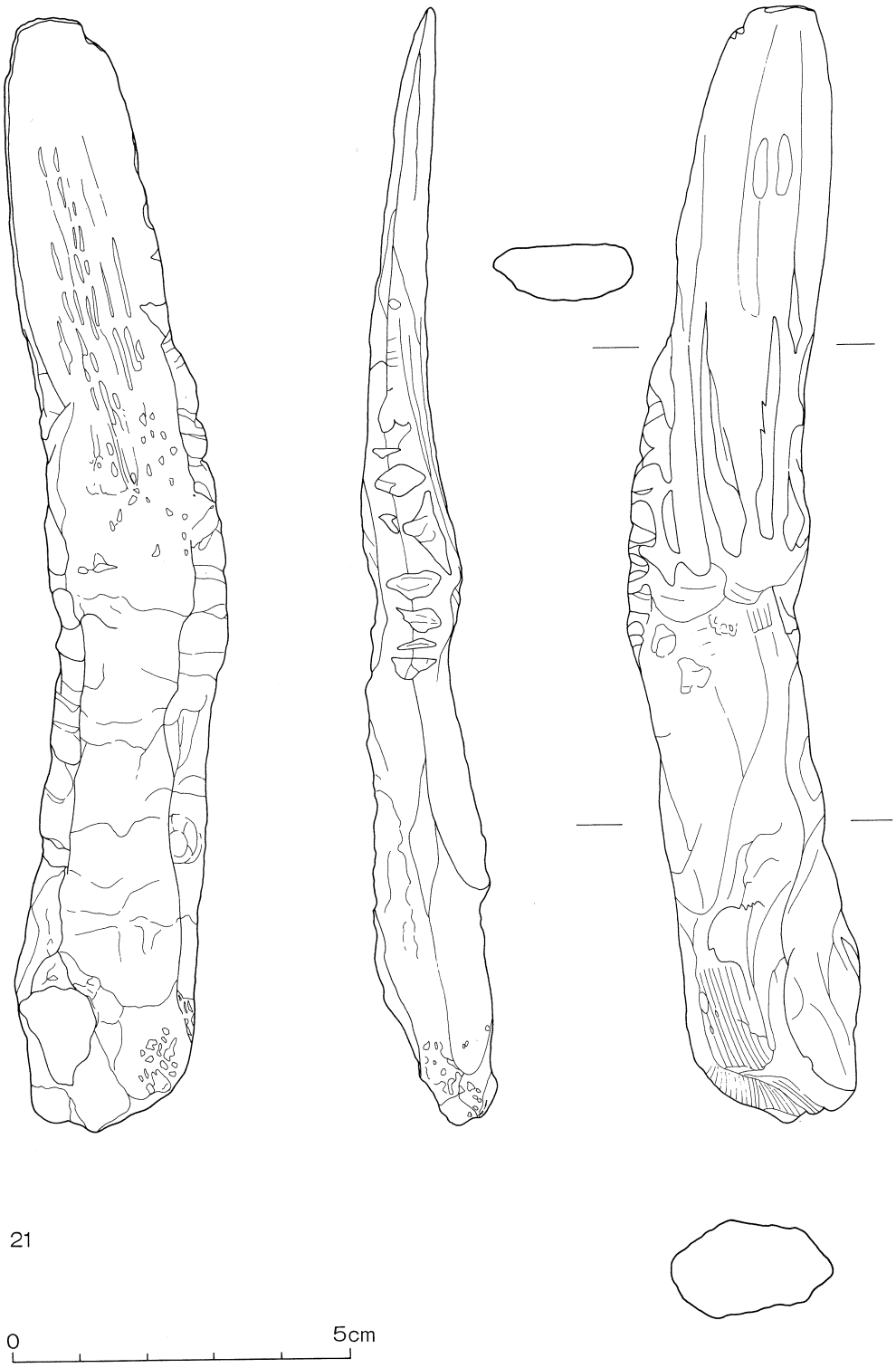
第167図　骨　角　器　実　測　図（4）



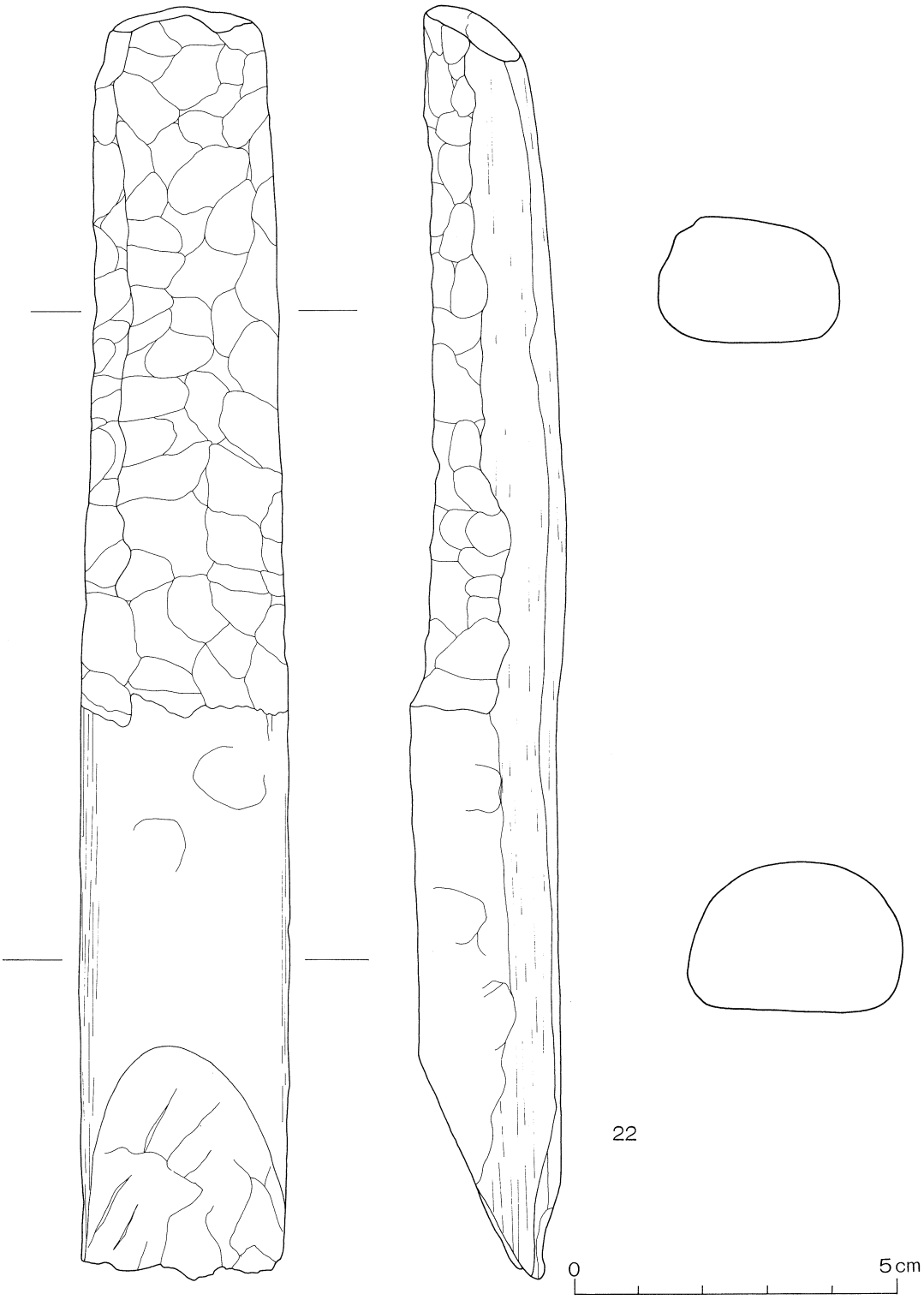
20

0　　5cm

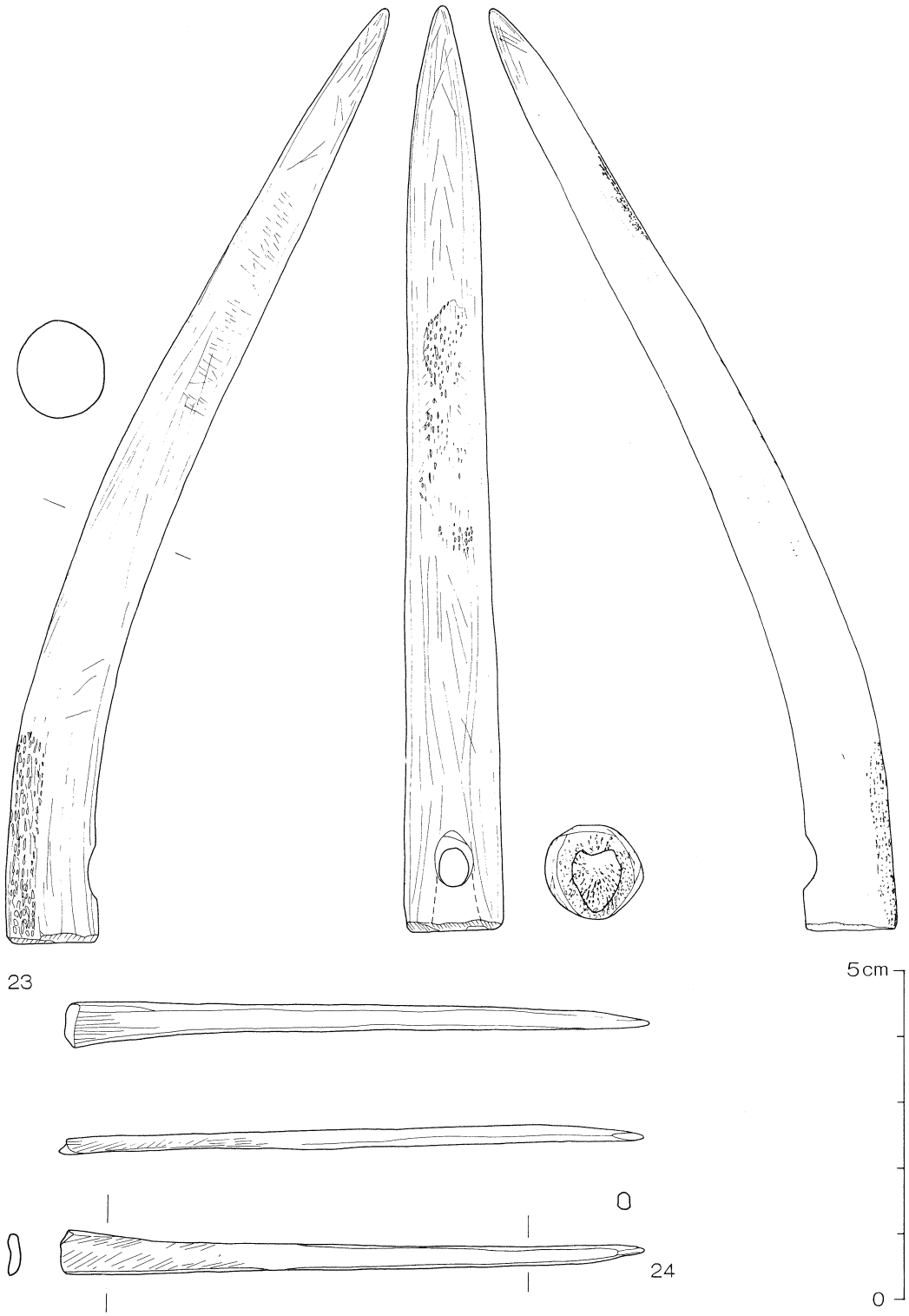
第168図　骨　角　器　実　測　図（5）



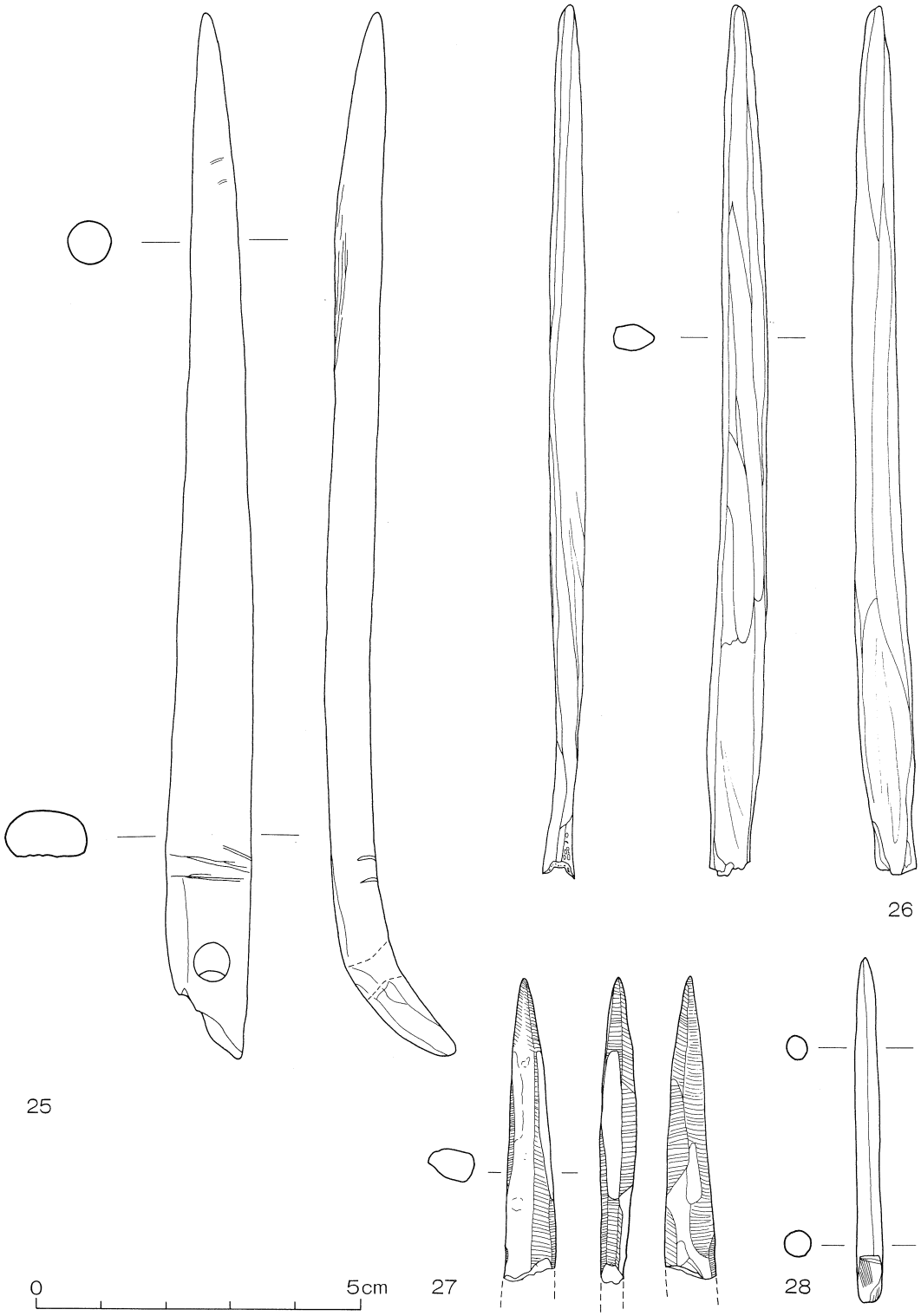
第169図　骨　角　器　実　測　図（6）



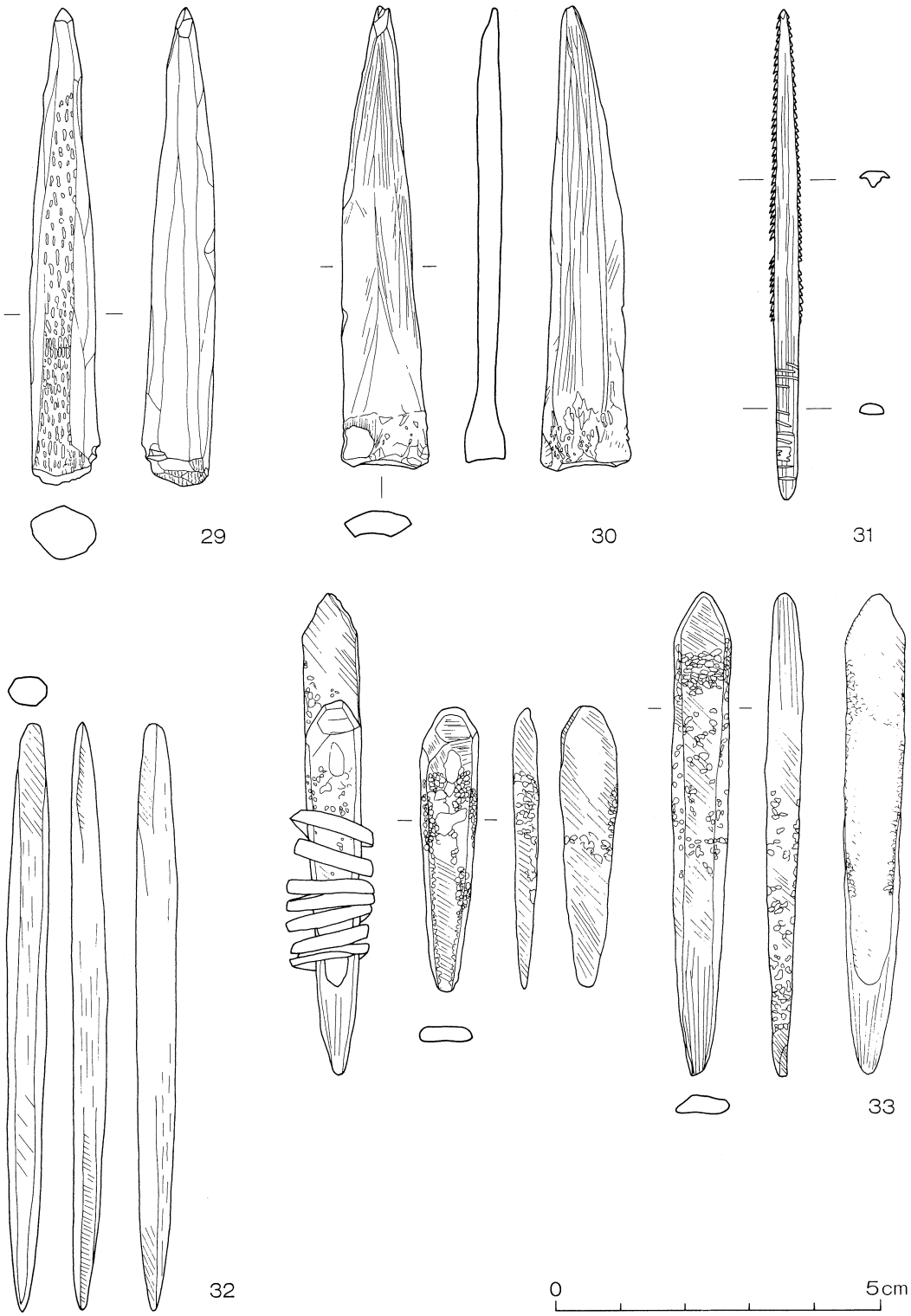
第170図　骨　角　器　実　測　図（7）



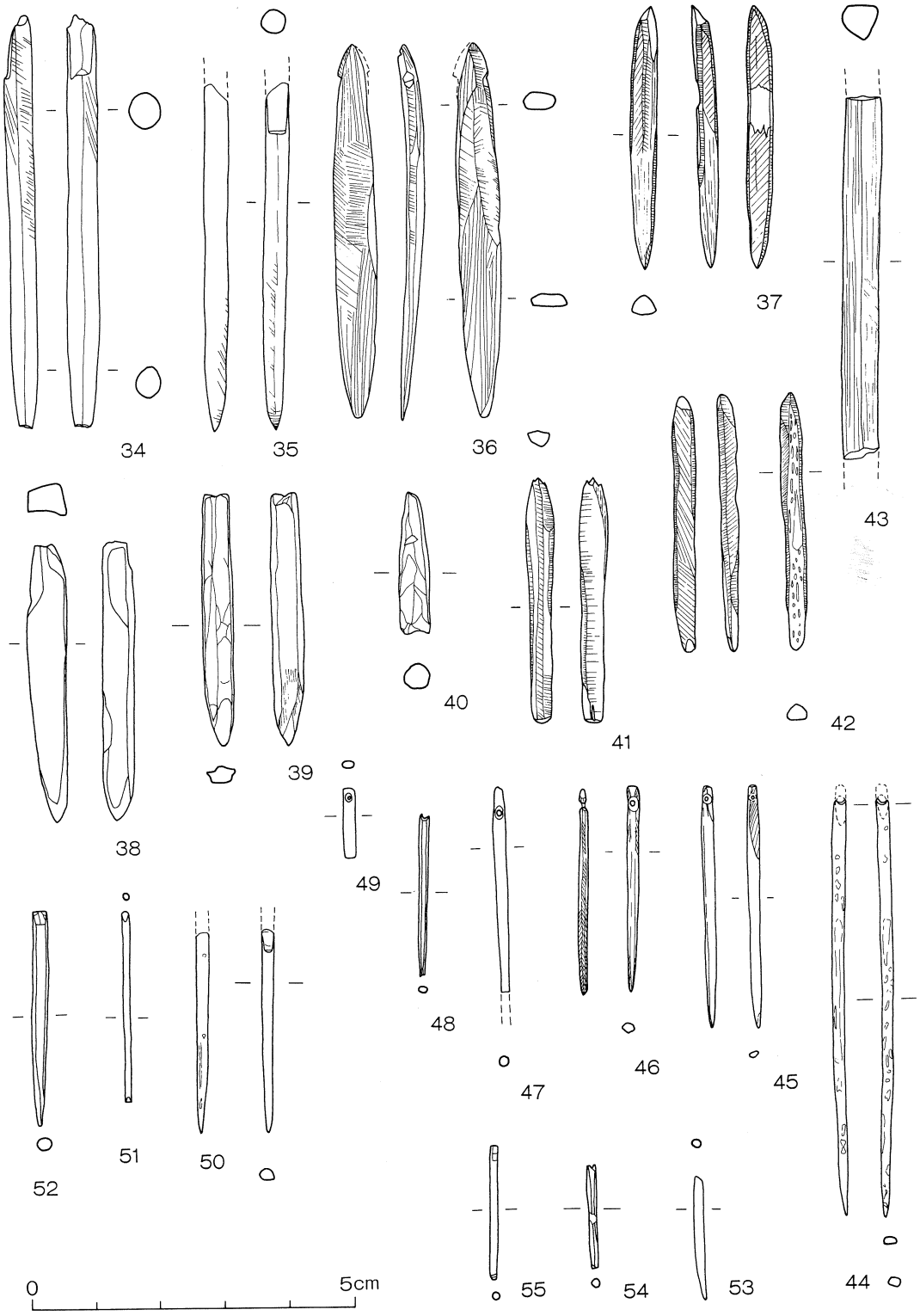
第171図　骨　角　器　実　測　図　(8)



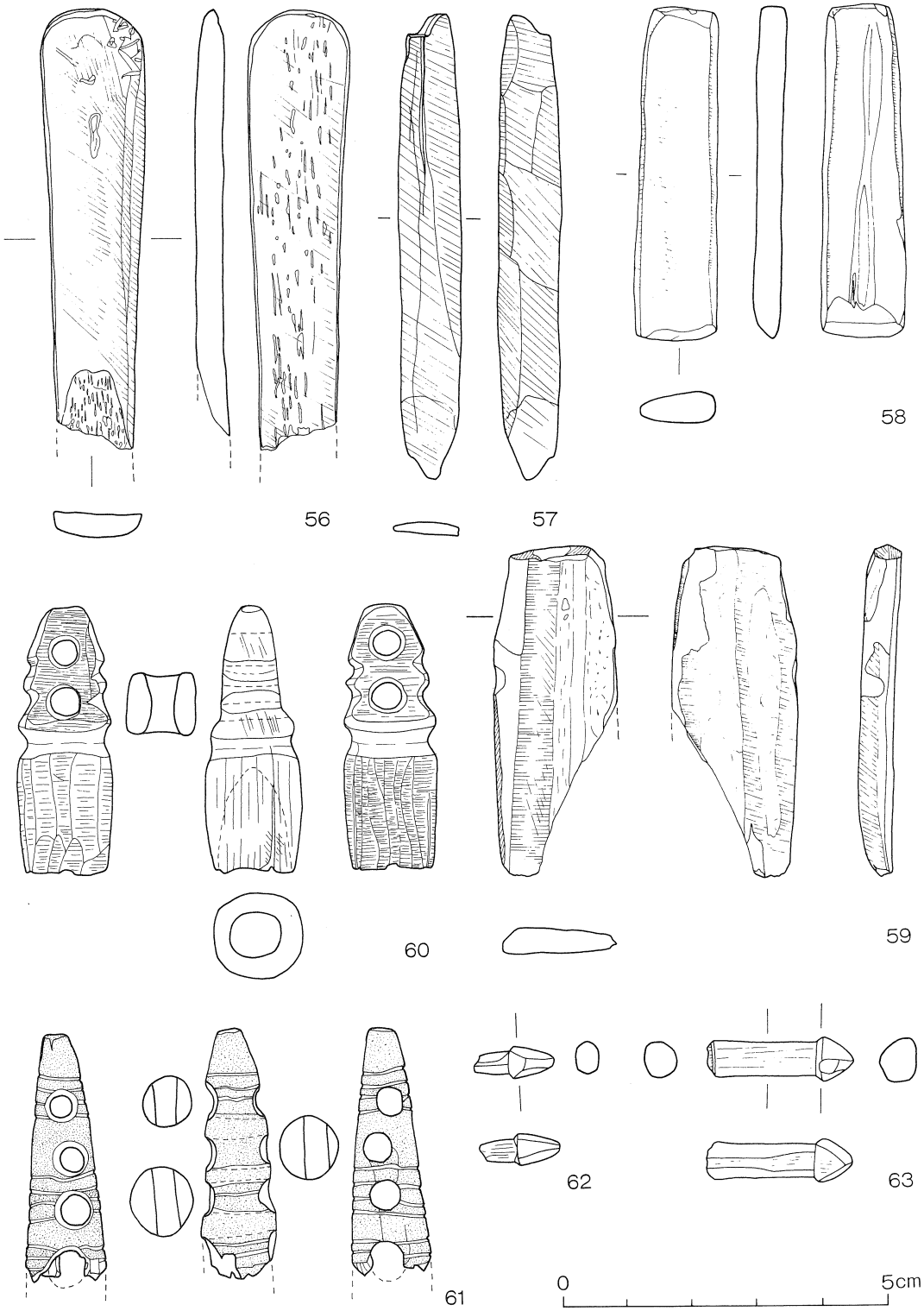
第172図　骨　角　器　実　測　図（9）



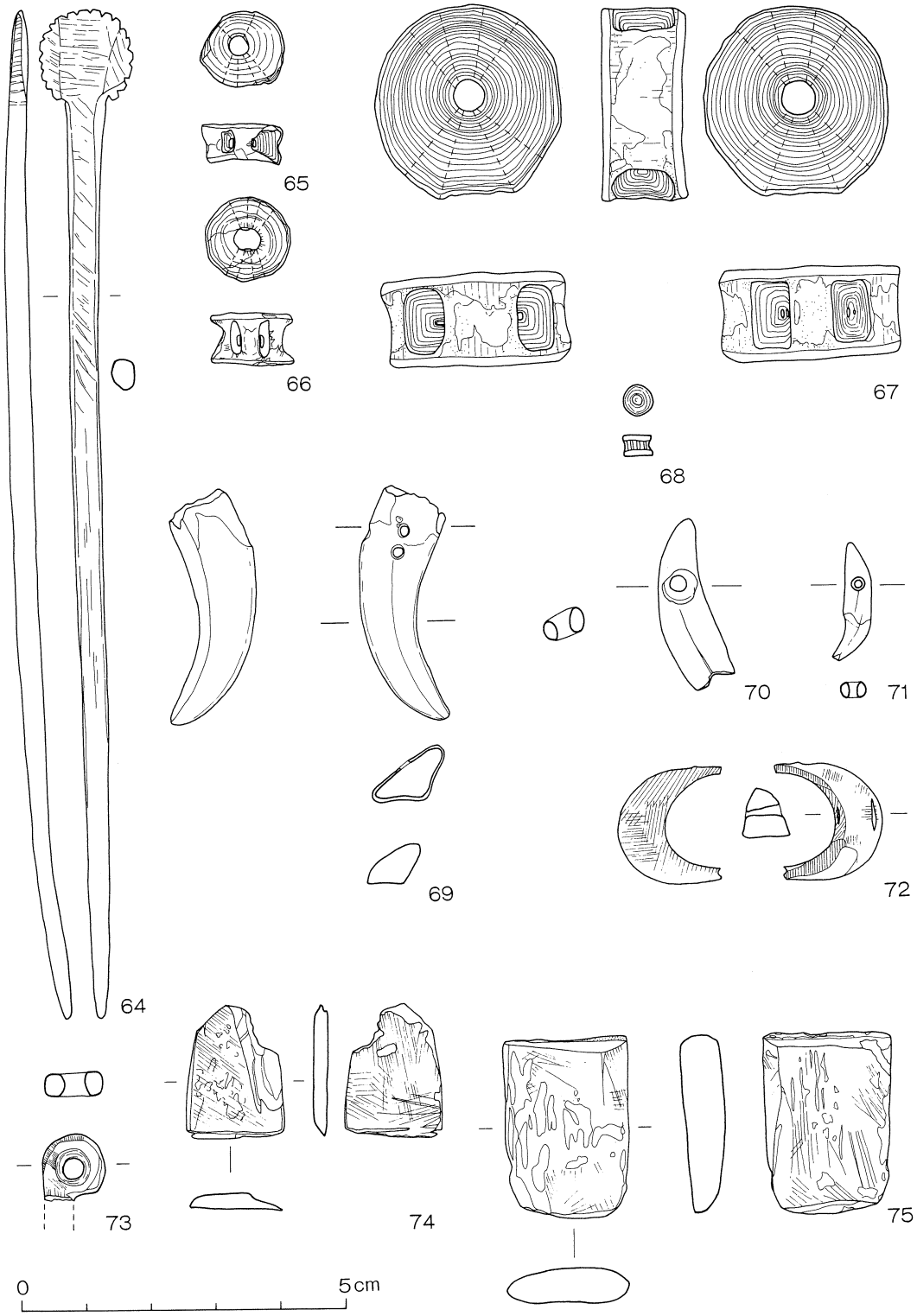
第173図　骨　角　器　実　測　図（10）



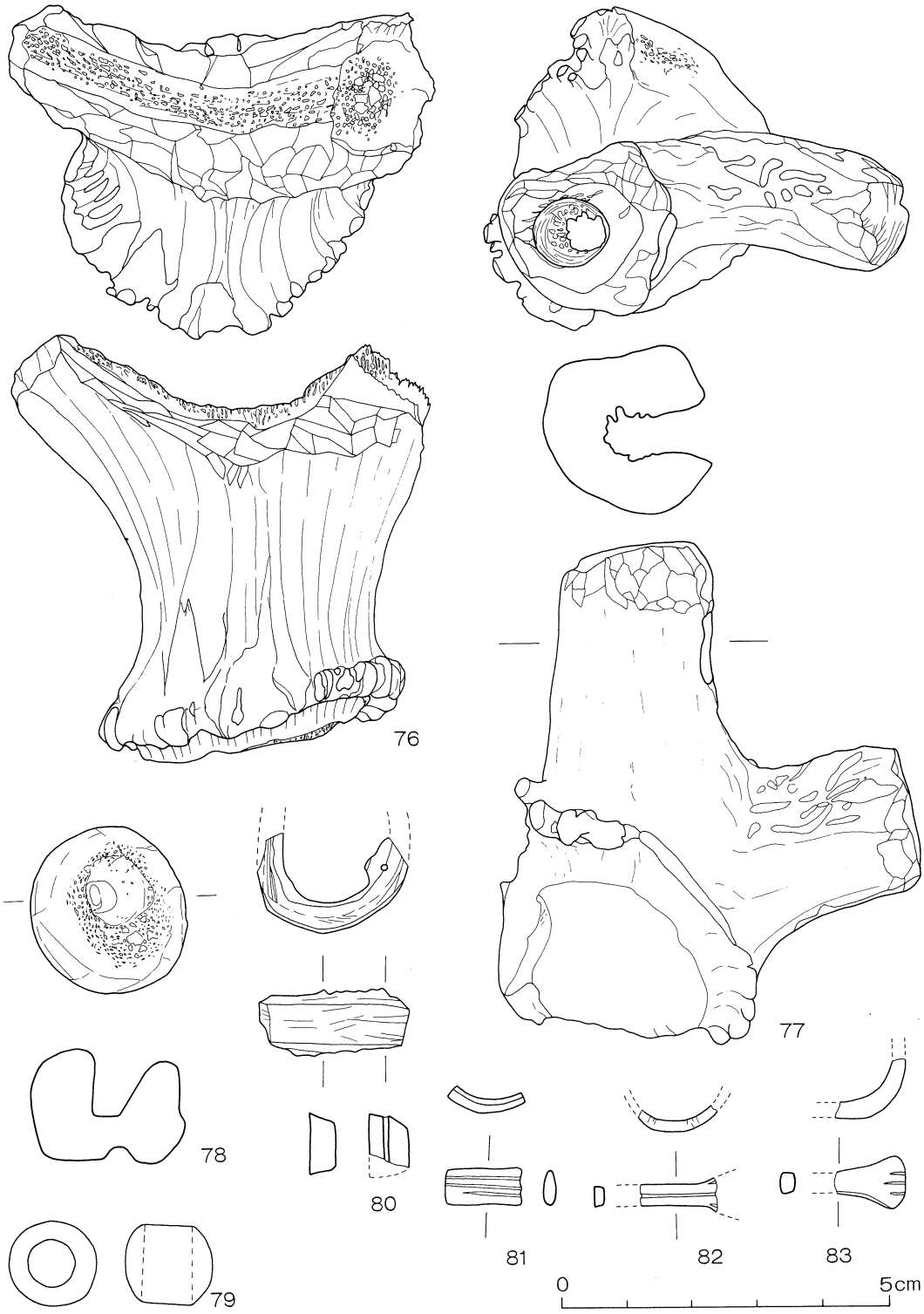
第174図　骨　角　器　実　測　図（11）



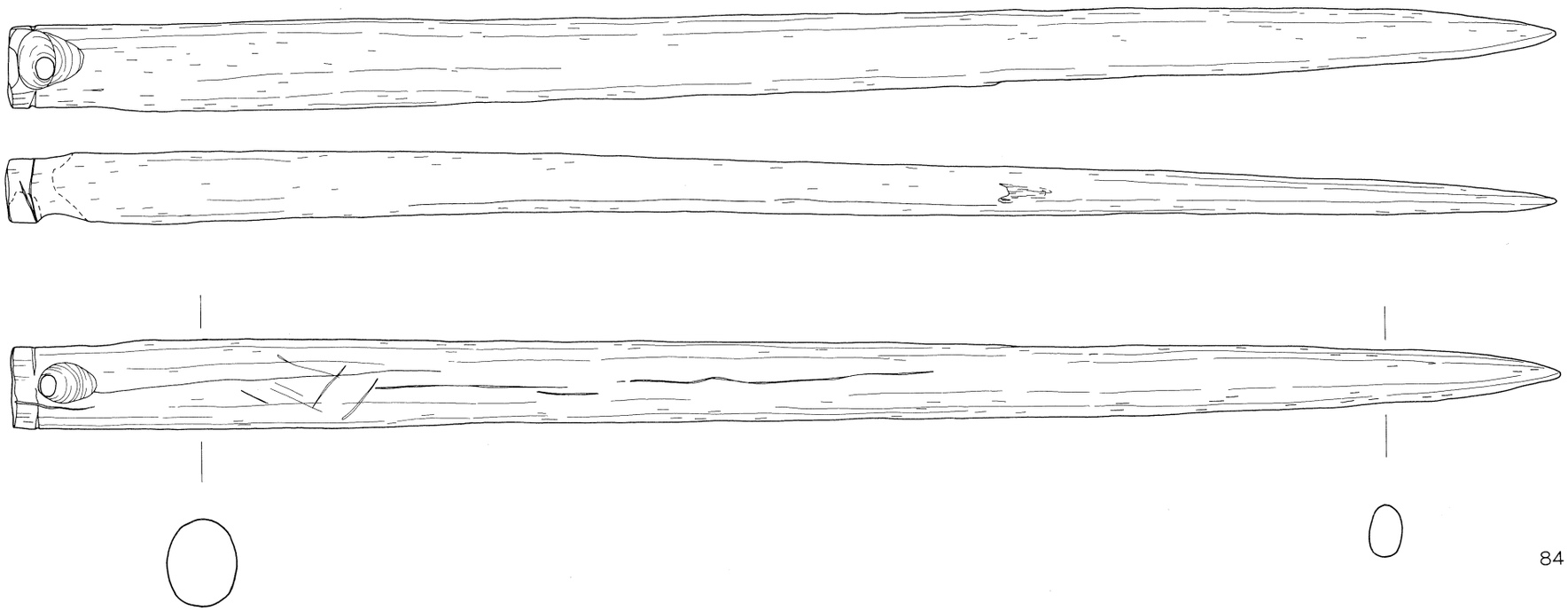
第175図　骨　角　器　実　測　図（12）

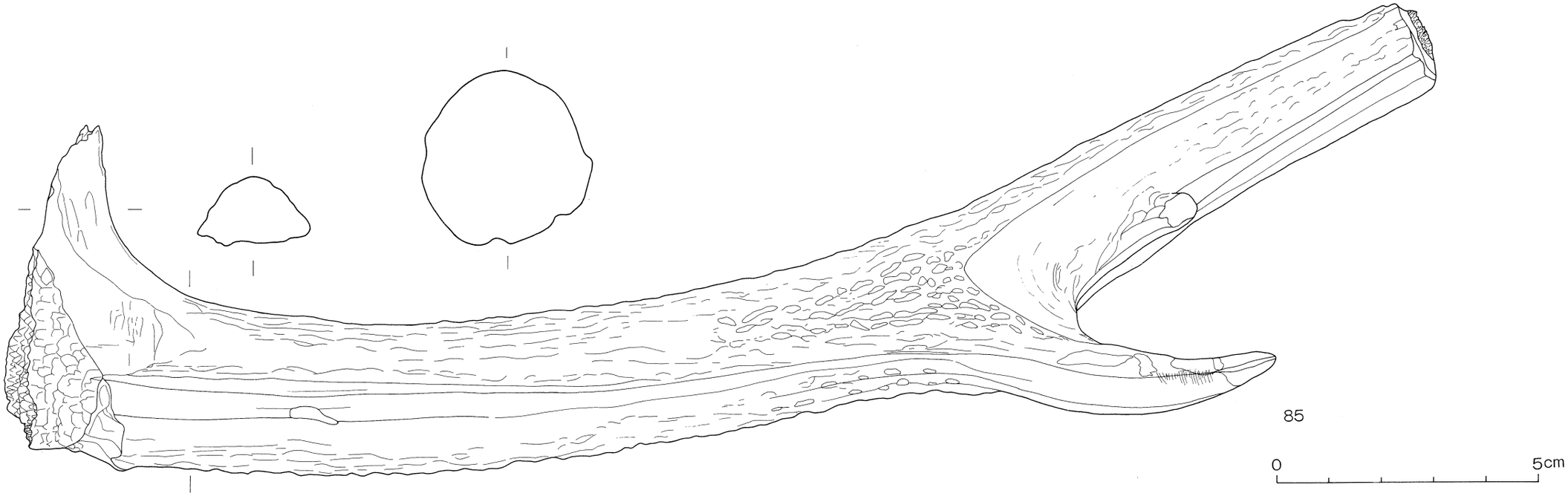


第176図　骨　角　器　実　測　図（13）

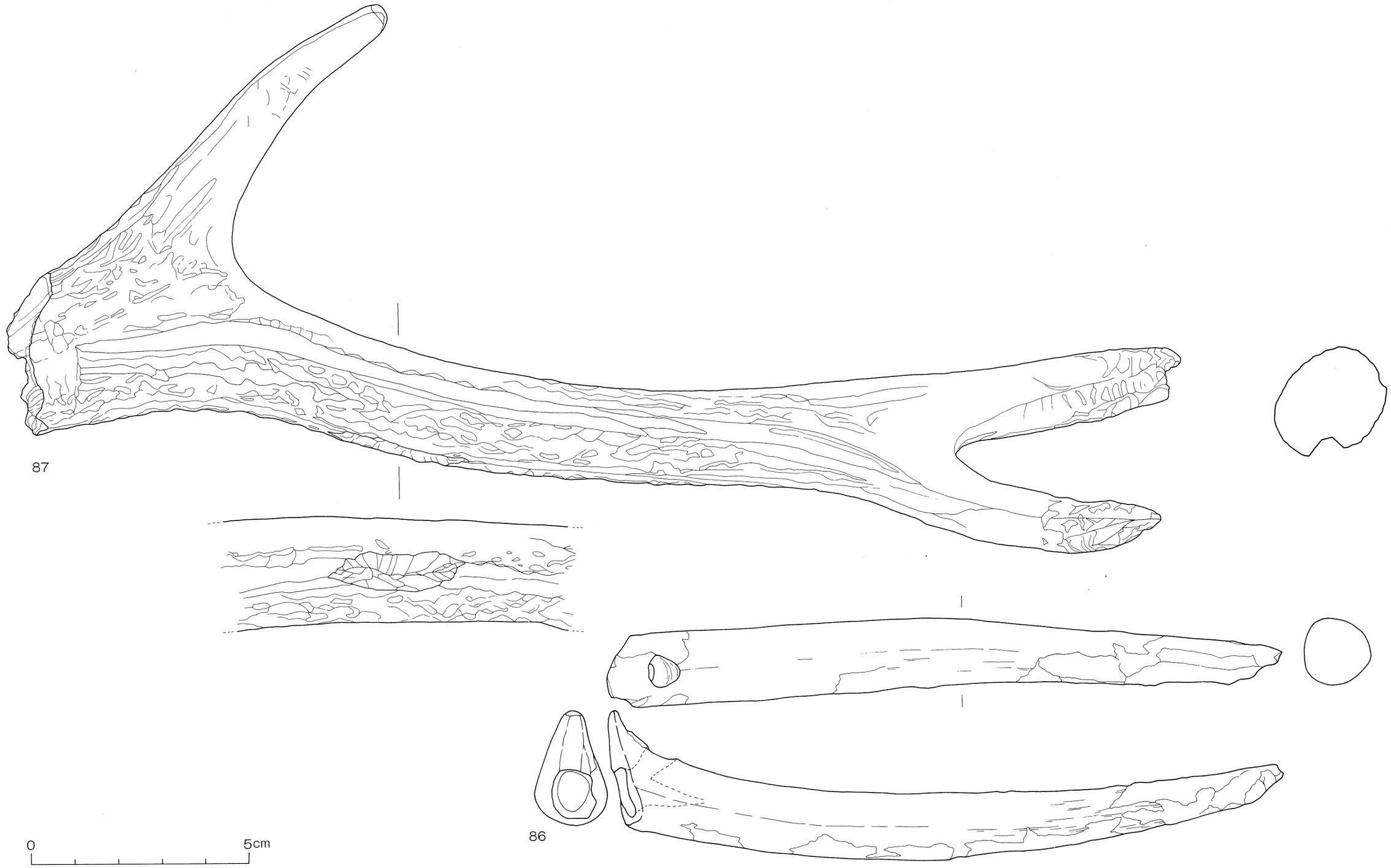


第177図　骨　角　器　実　測　図（14）





第178図　骨　角　器　実　測　図（15）



第179図 骨 角 器 実 測 図（16）

表25　骨角器一覧表

挿図番号	種類	長さ(cm)	重さ(g)	特徴・材質	備考
164—1	釣針	1.2	0.1	A類　猪牙	55
2	〃	1.5	0.1	A類　猪牙	51
3	〃	1.1	0.22	A類　猪牙	
4	〃	1.8	0.23	A類　猪牙	16—A
5	〃	1.7	0.17	A類　猪牙	53—A
6	〃	1.4	0.2	A類　猪牙	57
7	〃	2.4	0.95	B類　鹿骨	4
8	〃	2.5	0.6	B類　鹿骨	8
9	〃	4.5	0.95	B類　鹿骨	47
10	〃	4.2	1.3	B類　鹿骨	6
11	〃	5.5	2.55	C類　鹿骨	
12	〃	6.9	4.9	B類　鹿骨	65
165—13	〃	13.2	19.8	D類　鹿骨	68
14	〃	8.5	9.6	D類　猪牙	
166—15	〃	10.3	10.4	D類　鹿骨	63
16	〃	4.7	5.2	D類　猪牙	
17	〃	10.8	12.55	D類　猪牙	
167—18	〃	10.5	12.2	D類　鹿骨	66
19	〃	16.3	44.7	D類　鹿骨	71
168—20	〃	17.7	100.0	D類　鹿骨	5
169—21	アワビオコシ	16.5	52.0	鹿骨	1
170—22	〃	19.6	138.0	鯨骨	14
171—23	刺突具	14.1	19.35	鹿骨	67
24	〃	9.0	1.2		43
172—25	〃	15.8	10.8	鹿骨	23A
26	〃	13.3	5.2		64
27	〃	4.7	1.6		23—B
28	〃	5.3	0.73		28
173—29	〃	7.3	5.3	鹿骨	26
30	〃	7.0	4.05		24—A
31	〃	7.5	0.75	エイ棘尾	20—A
32	〃	9.0	3.0		44
33	〃	——	——	鹿骨	
174—34	〃	6.4	1.8		32
35	〃	5.4	0.8		24—B
36	〃	5.7	1.0		45
37	〃	4.0	0.42		21—A
38	〃	4.3	1.55		12
39	〃	3.9	0.6		9
40	〃	2.2	0.38		10
41	〃	3.8	0.4		27—A
42	〃	4.0	0.18		20—B
43	〃	5.6	2.6		60
44	縫針	6.4	0.2		18—A
174—45	縫針	1.3	1.85		17—A
46	〃	3.2	0.05		
47	〃	3.1	0.08		48
48	〃	2.5	0.05		38
49	〃	1.1	0.02		61
50	〃	3.2	0.05		19—A
51	〃	2.9	0.03		37
52	〃	3.3	0.2		42
53	〃	2.0	0.05		59
54	〃	1.6	0.03		41
55	〃	2.1	0.05		39
175—56	ヘラ？	6.7	5.07	鹿骨	34
57	〃	7.2	1.7	未成品？	16—B
58	骨斧	5.1	4.95		19—B
59	〃	5.1	4.1		25—A
60	矢筈	4.1	5.6		
61	〃	3.9	2.3		
62	〃	1.3	0.15		25—B
63	〃	2.2	0.75		29
176—64	装身具	15.4	3.8	かんざし	11
65	〃	1.3	0.23	魚骨 ピアス	49
66	〃	1.3	0.45	魚骨　〃	46
67	〃	0.3	5.8	魚骨(鮫)〃	
68	〃	0.5	0.07	魚骨　〃	36
69	〃	3.6	1.65	牙玉？	53—B
70	〃	2.6	1.25	牙玉	15
71	〃	1.8	0.3	牙玉	18—B
72	〃	1.8	1.0		54
73	〃	1.0	0.42		13
74	〃	2.1	0.9		21—B
75	〃	2.8	3.9		30
177—76	〃	6.5	82.0	鹿骨	3
77	〃	6.6	100.0	鹿骨 ペンダント	7
78	〃	2.6	6.8	鹿骨　玉？	62
79	〃	1.3	1.85	玉	17—B
80	〃	2.3	1.8	指輪？	31
81	〃	1.1	0.2	指輪？	22
82	〃	1.2	0.1	指輪？	33
83	〃	1.0	0.27	指輪？	27—B
178—84	刺突具	23.9	37.2	エイ棘尾	69
85	釣針	27.3	170.0	鹿骨	2
189—86	〃	15.6	42.0	鹿骨	73
87	刺突具	26.2	225.0	鹿骨	74

れば6.6cmとなる。43は孔をあけようとしているので、縫針の未成品と考えた。

f．骨斧

58、59はその形態より骨斧と考えられるものである。58は完形で長さ5.1cm、刃部幅1.3cm、厚さ0.4cmの扁平片刃である。59はもう少し幅の広いもので刃部は欠損している。

g．装身具

64～83は装身具類、及びその未製品である。64は長さ15.5cmを測る簪である。頭部に周縁にキザミ目を入れた径1.5cmの装飾をつけている。65～68はサメ等の脊椎骨を利用した大小のピアス。69、70、71は牙玉である。72、73、76、77はペンダントと考えた。76、77は落角の角坐に近い部分で、77は孔がみられる。78、80～83は一応指輪としておきたい。78、80は未製品、81、82、83は外面に沈線をめぐらした完成品が破損したものであろう。79は獣骨製の玉である。74、75は装身具類の加工途中のものと考えた。

h．その他

85、87は漁具や装身具を作る為の鹿角と考えた。いずれも粗い加工痕がみられる。このうち87の一部には長さ3.0cm、幅0.8cm、深さ0.8cmの範囲に金属器を利用したと思われる加工痕がみられる。タテ方向に二分しようとしたかもしれない。

i．祭祀獣骨

図版113には、イノシシ及びシカの下顎骨に穿孔したものを掲げた。多くはイノシシの成獣であるが、シカの幼獣の例もある。この種の資料は長崎県菜畑遺跡[註3]や、奈良県唐古遺跡[註4]等に出土例がある。菜畑遺跡出土例の場合、3頭のイノシシの下顎骨に穿孔し棒で数珠つなぎをした例が報告されており、図版113―1のように左右の下顎骨のそろった例は同様な祭祀があったことを想像させる。

註

1　内田律雄『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区2）』島根県教育委員会　昭和63年3月

2　西本豊弘氏の御教示による。

3　『菜畑』唐津市　昭和57年

4　小林行雄他『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都大学文学部考古学研究報告第16冊　昭和18年

13 人骨・獣魚骨

いずれも、弥生時代前期層、および前期の貝層中からの出土である。特に魚骨はすべて貝層洗浄中に検出されたものである。

人骨

資料１ａ、１ｂ（第180図、図版116）。同一人物の左右の上腕骨である。完存する。１ａは左、１ｂが右である。長さは28.0㎝と短い。左右とも三角筋粗面が認められるが著しくない。これらのことより、身長が150㎝前後の成人女性骨と考えられる。

資料２ａ、２ｂ、２ｃ（第180図、図版117）は、成人の椎骨である。いずれも肋骨窩はみられない。それぞれ、第３、第４、第５腰椎と考えられる。資料１ａ、１ｂと同じ層で、比較的近くより出土していることから、資料１と資料２は同一人物の可能性がある。

資料３（第180図、図版118）。現存部長さ22.0㎝、上腕骨の一部と考えられる。貝層Ｆ（弥生前期）より出土。滑車と骨頭から約⅓を欠く。肘頭窩の一部が残る。わずかに三角筋粗面が認められ、成長途上の女性と考えられる。一部に傷が残る。

資料４（第180図、図版118）。両骨端を欠くが内側唇、外側唇が認められ、成人の左大腿骨と考えられる。貝層Ｉ（弥生前期）より出土。現存部長さ26.3㎝。

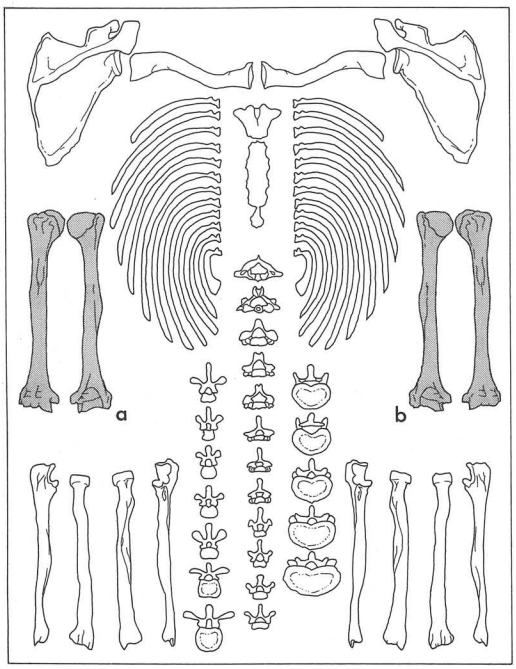
以上の他に２点人骨と思われる資料があるが詳しい同定はできなかった。

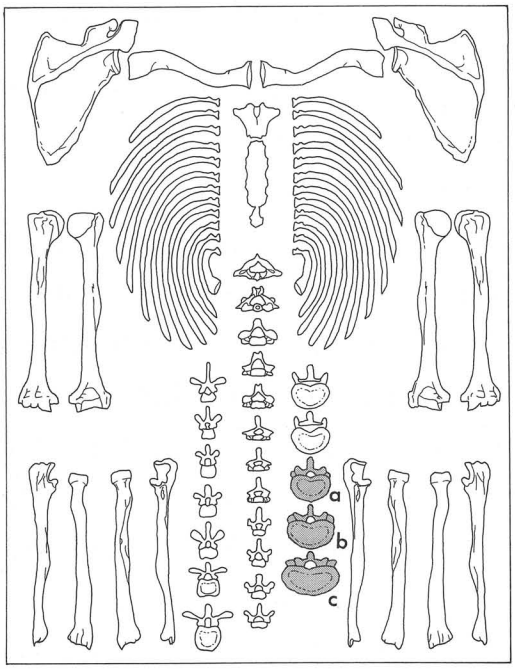
獣骨

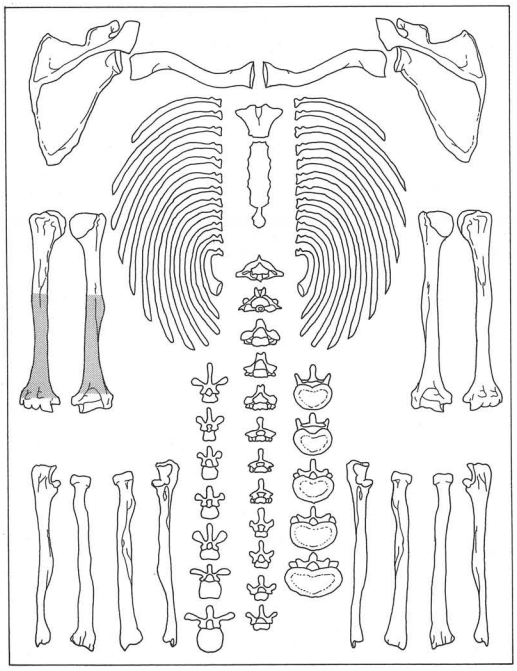
図版119～122には獣骨の主なものを掲げた。イノシシ（図版119）、シカ（図版120）、イヌ（図版121—１～５）、アナグマ（図版121—６）、テン（図版121—７～10）、タヌキ（図版121—11～14）、ムササビ（図版122—１～６）、ニホンザル（図版122—12）の他、水鳥類（図版122—７～11）がある。量的に多いのはイノシシとシカである。また、カメ（図版124—18）がある。

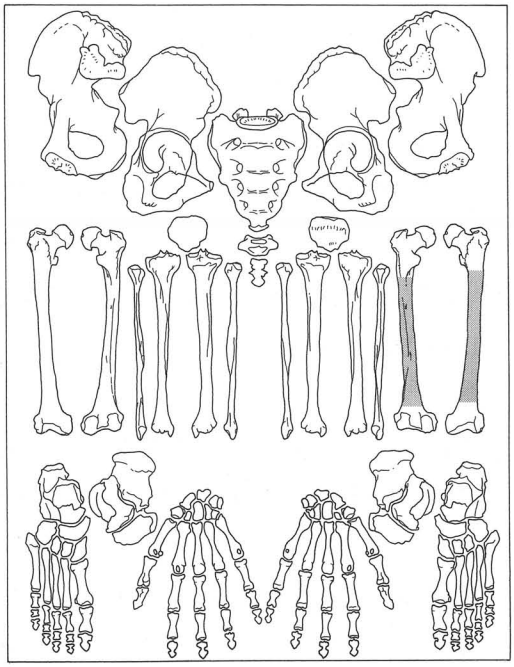
魚骨

図版123～125に魚骨の主要なものを掲げた。クロダイ（図版113—１～30）、コブダイ（図版123—31）、コイ科（図版124—１～８）、スズキ（図版124—９）、サメ（図版124—10）、コチ（図版124—12）、ダツ（図版124—13、14）、エイ（図版124—16、17）、ナマズ（図版124—11）等がある。このうち、クロダイやフナ・コイといった淡水～汽水に生息する魚の骨が量的に多い。また、図版125の中には、メバルやカサゴといった魚種も多数含まれると思われる。骨角器や土錘のような漁撈具と魚骨との関係は、さらに詳しい同定、整理をすすめてから考察したいと考えている。









第180図　人骨資料1　人骨資料2　人骨資料3　人骨資料4

14 貝 製 品

貝製品には、腕輪、指輪、小玉等がある（第181図、第182図、第188図）。小玉の一部を除いて、いずれも弥生時代前期の貝層（第１図）中から出土した。また、小玉についてはカラー図版７で示し、その計測値は表26に掲げた。

a．ゴホウラ製腕輪

１はゴホウラ製腕輪である（カラー図版７）。貝層Ｉより１点のみ出土した。完形品である。長さ7.8㎝、幅4.7㎝、中央での厚さ2.4㎝を測る。全体に乳白色を呈す。重量は26.87ｇである。外唇部と螺塔部を除き、殻高方向に両面を切り落とし、内部の殻軸部を取り除いた後に、全体に研磨を施して作られたものと考えられる。外面の一部に一大結節の痕跡が認められる。

弥生時代のゴホウラ製腕輪は、島根県下ではこれまで平田市猪目洞穴遺跡において、弥生時代後期の埋葬人骨に装着されたものが知られている。それは立岩型と呼ばれるもので、西川津遺跡出土資料とはやや形態を異にする。西川津遺跡出土例は、近県では前期末の岡山県邑久郡門田貝塚出土資料等、諸岡型に属するであろう。この西川津遺跡出土資料は、日本における最北部の出土例となった。

１の出土した貝層Ｉは、供伴した弥生土器によって前期末を下限とするが、同時に人骨も出土しており（Ｐ267～268、図版116～118）、その関係が注目されるところであるが、貝層Ｉ、およびその付近が埋葬施設として利用された形跡はなかった。

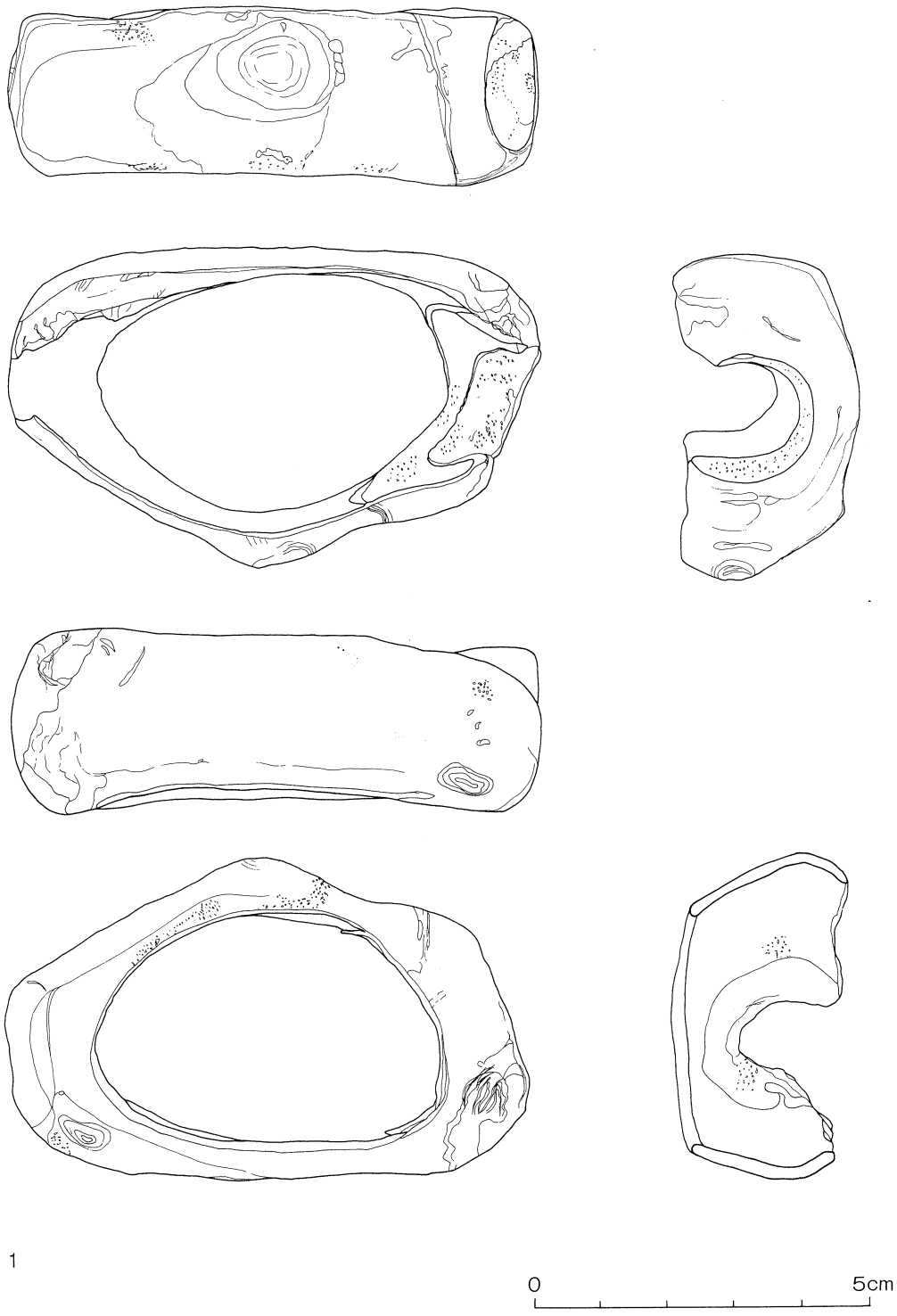
b．二枚貝製腕輪

２～７は、いずれもアカガイ製の二枚貝製腕輪と考えられる。このうち、２と６は未成品の一部、３、４、５は完成品の破損したものであろう。乳白色を呈し、もろい。

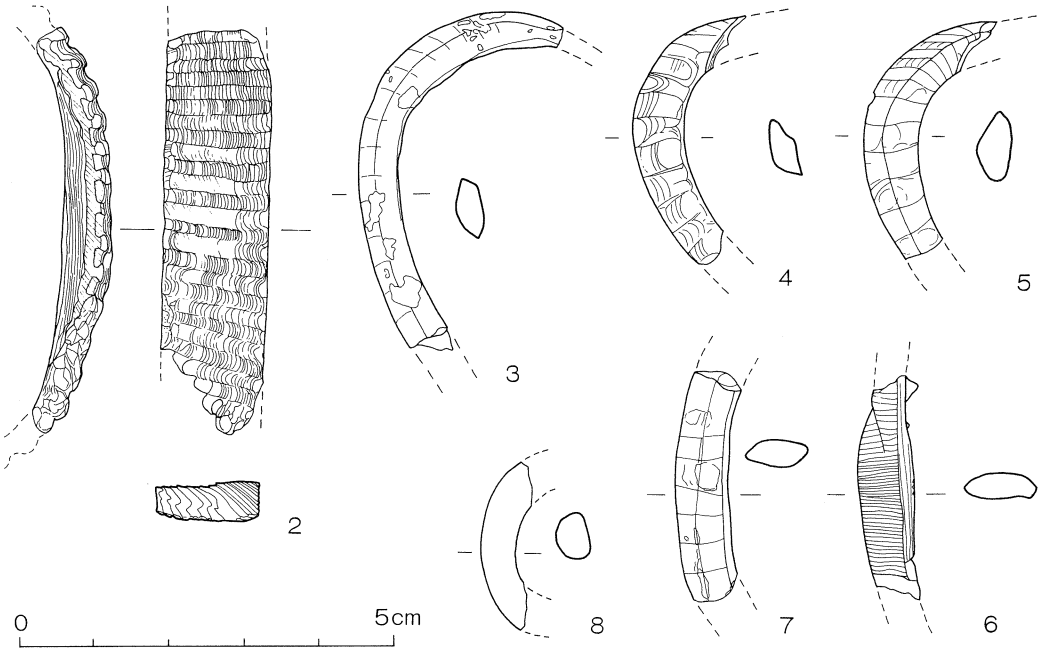
２、６は、腕輪の未成品と考えられるものである。２は幅1.4㎝に輪切りされているが、内外面の磨きはみられない。６も幅0.9㎝に切られているが、内外面の磨きはみられない。２は外面に放射肋がみられ、６は靱帯に近い部分であろう。これらの未成品からすると、二枚貝製の腕輪には、幅の広いものと狭いものの二種があったことになるが、前者は完成品としては検出できなかった。あるいは、さらに二分して３～７と同様な幅の狭いものを作ろうとする過程の可能性もあろう。

３、４、５、７は、幅の狭い腕輪の一群の完成品である。全体によく研磨されているが、外面に２でみられたような放射肋の痕跡がみられる。

c．指輪



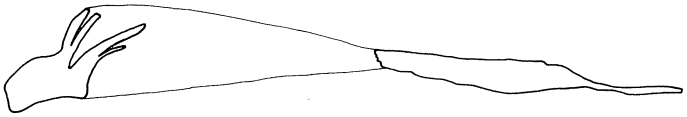
第181図　貝　製　品　実　測　図（1）

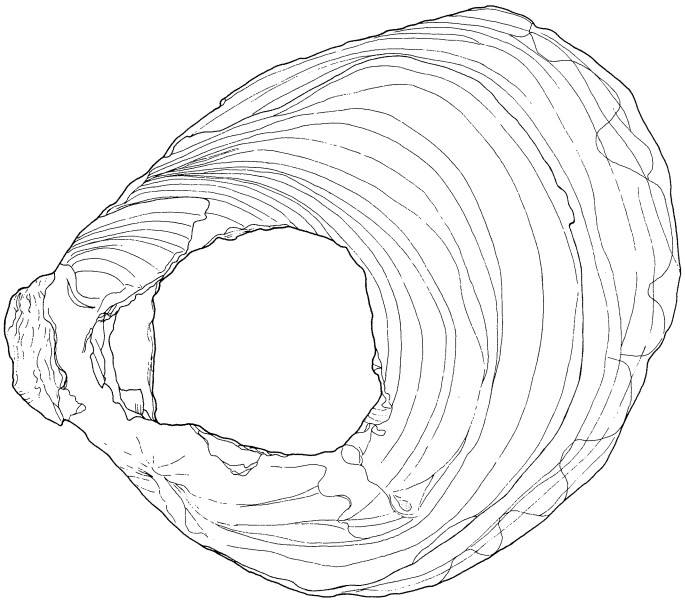


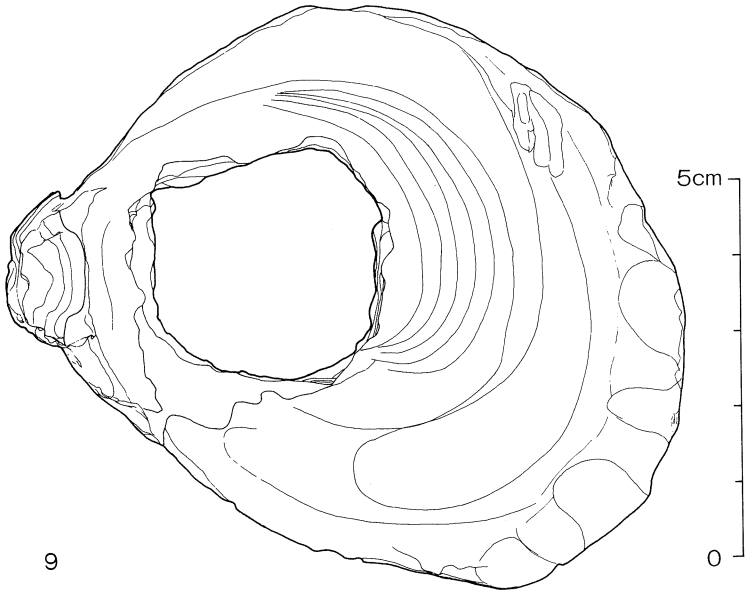
第182図　貝製品実測図(2)

表26　　貝製薄玉一覧　　(法量単位；mm)

番号	計測値 径	計測値 孔径	計測値 厚さ	貝層	時期	備考
1	6.1	2.7	1.8	F	弥生前期	D－1区貝層Ⅰ
2	5.7	2.3	1.6	〃	〃	〃
3	6.0	2.4	1.9	〃	〃	〃
4	5.9	2.5	1.7	〃	〃	〃
5	5.6	2.8	2.0	〃	〃	〃
6	5.9	2.2	1.7	〃	〃	〃
7	6.5	2.9	1.5	〃	〃	〃
8	5.9	2.3	1.3	〃	〃	〃
9	5.7	2.0	1.5	〃	〃	〃
10	6.3	2.7	1.6	〃	〃	〃
11	5.9	2.2	1.8	〃	〃	〃
12	5.8	2.4	1.8	〃	〃	〃
13	5.7	2.4	1.9	〃	〃	〃
14	6.1	2.4	1.6	〃	〃	〃
15	4.0	2.1	1.1	〃	〃	D－2区貝層上層
16	6.1	3.4	1.6	〃	〃	D－3区貝層下層
17	4.0	2.0	1.3	〃	〃	〃
18	3.0	1.8	0.7	〃	〃	C－2区貝層
19	6.0	2.7	2.0	〃	〃	〃
20	4.5	2.2	1.3	G	〃	D－4区貝層
21	3.6	2.0	1.2	〃	〃	〃
22	3.9	1.9	1.8	〃	〃	〃
23	4.5	2.1	0.8	〃	〃	〃
24	4.9	2.3	1.9	〃	〃	C－5区貝層Ⅱ
25	3.1	1.6	1.7	H	弥生前期	ロ－2区サンプル
26	3.2	1.9	0.9	〃	〃	〃
27	3.4	1.7	0.7	I	〃	ハ－5区貝Ⅱ層
28	3.2	1.9	0.3	〃	〃	〃　貝Ⅰ層
29	3.3	1.8	0.6	〃	〃	〃　貝Ⅱ層
30	3.8	2.0	0.5	〃	〃	〃　貝Ⅰ層
31	2.7	1.7	0.7	〃	〃	〃　貝層トレ
32	3.3	1.6	0.7	〃	〃	〃　貝Ⅱ層
33	2.5	1.6	1.5	〃	〃	〃　〃
34	2.9	1.5	0.4	〃	〃	〃　貝Ⅰ層
35	2.8	1.6	0.4	〃	〃	〃　貝Ⅱ一貝
36	2.8	1.3	1.1	〃	〃	〃　〃
37	2.6	1.5	0.4	〃	〃	〃　貝Ⅲ層
38	2.5	1.4	0.7	〃	〃	〃　貝Ⅱ層
39	1.9	1.3	0.7	〃	〃	〃　貝層トレ
40	3.2	1.7	0.3	〃	〃	〃　貝Ⅱ層
41	5.6	2.2	2.1	C	弥生中期	
42	4.0	2.3	1.5	〃	〃	B－5区貝層Ⅱ
43	3.7	1.5	1.2	〃	〃	A－6区貝層Ⅰ
44	4.0	1.8	0.7	〃	〃	〃
45	3.8	1.6	1.3	〃	〃	〃
46	3.3	1.3	0.8	〃	〃	〃　貝層Ⅱ
47	4.0	1.9	0.3	A	〃	
48	4.3	3.1	0.7	不明	不明	出土層不明







第183図　貝　製　品　実　測　図（3）

8はそのサイズや形態から指輪と考えられるものである。長さ2.2cm、太さ0.6×0.4cmを残すが、もとは、最大径2.5～3.0cmの指輪であったと推定される。

d．小玉

カラー図版7に小玉を掲げた。表26のデータによれば、外径は最大で6.5cm、最小で1.9cmのものがあり、孔径は、外径にほぼ比例している。これらのデータにはバラツキがあり、いくつかのグループに分けることはできにくい。このことからある程度厚みのある貝を一旦、一方が細くなった管状に加工したものを輪切りにして製作されたことが推測されよう。

e．貝錘

9はイタボガキを使用した貝錘に推定しておきたい。中央に約3.0×3.0cmの方形の人工的な孔が穿たれている。

15　西川津遺跡弥生層出土の貝類について

島根大学理学部地質学教室　高安　克己・角館　正勝

Ⅰ　はじめに

西川津遺跡の弥生層出土の貝類について種の同定と出土数の概略的な量比について調査を行なったので報告する。一般に遺跡の貝層は自然貝層と異なり、貝殻の集積までに人為的な選別、運搬、食用やその他の利用のための加工などが加わっており、その意味するところは複雑である。本報告では西川津遺跡の貝層構成種の特徴を述べたあと、食用されたと思われる主な貝類と、その捕採場所について若干の考察を行なう。

Ⅱ　西川津遺跡出土貝類の特徴

検討した貝類は、弥生時代前期の貝層F、G、H、I、同中期の貝層A、C（貝層BとDの試料はCに含めた）、および同後期の貝層Eから出土した試料である。同定した種は、表27およびⅣ節で述べてあるように約75種である。個体数は貝層F、I、Cが多く、種数も多い。貝層Eは個体数はわずかであり、種数も少なく保存も悪い。いずれの貝層でも巻貝類が種数、個体数とも二枚貝類より豊富である。出土する貝類は、ほぼ、現在でも山陰沿岸に生息するものであり、とくに南方系や北方系と限定される種は含まれない。また、貝殻Eは別として、時代や貝層の違いによる種組成の変化も認められない。

それぞれの種についての分布や生態的特性についてはⅣ節で述べるが、Ⅲ節の議論のためにそれらを整理すると、およそ次のように類別できる。

（1）岩礁や礫地に生息し、潮間帯付近で採取可能な貝類

これらはさらに、現在の島根半島北岸のように外洋水の影響のある場所に生息するものと、境水道や美保湾に面した島根半島南岸のように沿岸水の影響を受ける場所に生息するものとに分けられる。

a．外洋水の影響が強いところに生息するもの

主なものではアワビ類、ベッコウガサガイ、マツバガイ、クボガイ、ヘソアキクボガイ、オオコシダカガンガラ、サザエ、キクスズメガイ、レイシガイ、イボニシなどの巻貝類であり、食用になるものも多く含まれる。本遺跡ではこのグループが種類も多く個体数も一般に多いことが特徴のひとつとなっている。

b．沿岸水の影響を受けるところに生息するもの

主なものではコシダカガンボラ、スガイ、イガイなどで、食用種も多い。a．に比べると種数は少ないが、イガイやスガイなどは本遺跡で多く出土する。

（2）砂底や砂泥底に生息し、潮間帯付近で採取可能な貝類

これらもさらに外洋水の影響の強いところ、たとえば島根半島北岸に分布する小さな砂浜など、と沿岸水の影響があるところ、たとえば弓浜半島の外浜など、に分けることができる。

a．外洋水の影響が強いところに生息するもの

サトウガイ、チョウセンハマグリなどで代表され、いずれも食用になる。本遺跡では一部の貝層でかなり多く出土するが、一般にはそれほど多くない。

b．沿岸水の影響を受けるところに生息するもの

ハマグリ、カガミガイ、イソシジミガイ、オオノガイなどの二枚貝類である。いずれも食用になるが、イソシジミガイを除くと本遺跡からの出土は少ない。イソシジミガイは内湾的環境のところにも生息する。

（3）砂底や砂泥底のやや深場に生息する貝類

具体的には弓浜半島沖合の美保湾などが想定される。水深5 m以深で、採取は素潜りでも不可能ではないが、漁具を使った方がより効果的であろう。主なものでは、アカニシ、タマキガイ、イタヤガイ類、バイなどで、このうち、イタヤガイやバイなどは前2者に比べるとやや深いところに多く生息している。アカニシは多く出土するが他は少ない。

（4）海藻の上や間で生活している微小な貝類

食用としないが、海藻や他の海産物とともに運ばれ、遺物に混入したものと思われる。本遺跡では個体数は少ないが種数は多い。たとえばハナチグサガイ、イワカワチグサガイ、マツムシガイ、ボサツガイ、ノミニナ、フトコロガイなど。

（5）汽水の内湾に生息する貝類

現在の中海のような環境が想定される。ウミニナ、マガキ、イタボガキ、サルボウなどであるが、本遺跡からの出土は少ない。

（6）汽水から淡水への移行の水域に生息している貝類

現在の宍道湖にほぼ相当する環境である。岩礁や礫上に生息するイシマキガイ、主に泥底や藻上を好むミズゴマツボ、沿岸のアシ原に生息するカワザンショウガイ、砂泥底に密生するヤマトシジミなどで、いずれも本遺跡では多く出土する。とくにヤマトシジミは多い。

（7）淡水の川や沼などに生息する貝類

オオタニシ、カワニナ、モノアラガイ、ヒラマキミズマイマイ、マツカサガイなどで、本遺跡ではカワニナとマツカサガイが多く出土する。

なお、検討した標本には貝類以外の有殻生物も含まれていた。なかでもカメノテ、フジツボ、ウニ類が多く出土した。

Ⅲ　食用された主な貝類とその捕採場所

ほとんどの貝類は食べることができるが、日常的に食用されるには、特別な漁具がなくても捕採が可能な浅所に生息していること、同一種が密集して生息していて限られた場所で大量に捕採できること、また、そのような場所が遺跡からあまり離れていないこと、などの条件が必要である。もちろん、肉が多く、味も良いことも重要であろう。本遺跡で圧倒的に出土量が多いヤマトシジミは上記の条件を十分に満たしており、弥生時代においても蛋白源としての主要な水産物であったと考えられる。

ヤマトシジミ以外にもイシマキガイ、ミズゴマツボ、カワザンショウガイなど、汽水から淡水への移行水域に生息する貝類がかなり多く検出された。これらは食用貝とは考え難く、また、ヤマトシジミとは異なる底質のところに生息するので、ヤマトシジミの捕採に関連して遺跡に搬入され、遺物に混入したものとも思えない。むしろ、遺跡が汽水から淡水への移行水域に接していて、これらの貝類がそこに自生していた、と考えた方が無理がない。もちろん、ヤマトシジミも遺跡の近傍に密集して生息していたに違いない。ただし、このことを立証するには、遺跡付近の同時代の水中堆積物から自然貝層としてこれらの貝類を確認する必要がある。

ヤマトシジミ以外で食用されたと考えられる主な貝類は、サザエ、レイシガイ、イボニシ、イガイ、アカニシ、カワニナ、マツカサガイなどである。

サザエ、レイシガイ、イボニシは、いわゆる〝いそもの〟で、おそらく島根半島北岸の岩礁海岸で捕採され、遺跡に搬入されたものであろう。このような〝いそもの〟の中には、他に、アワビ類、ベッコウガサガイ、マツバガイ、オオコシダカガンガラ、クボガイなどがあるが、上記のものに比べて少ない。イガイも〝いそもの〟のひとつと言って良いが、これは半島北岸ばかりでなく美保湾から中海に面した岩礁地帯にも広く分布しており、密集して生息していることから、さかんに捕採され食用されていたであろう。半島南岸の岩礁地帯ではスガイも捕採、食用されていたと思われる。また、貝類ではないが、岩礁地帯でふつうに見られるカメノテ、フジツボ、ウニ類も日常的に食用されていたであろう。

アカニシはやや深物の砂地に生息しているが、大型の巻貝で発見しやすく、また肉も多く比較的美味であることから捕採の対象になっていたと思われる。砂泥底の浅所からはイ

ソシジミ、ハマグリ、チョウセンハマグリ、サルボウガイ、サトウガイなどを採取して食べていたと考えられる。しかし、イソシジミとサトウガイが一部の貝層で多産する以外は、一般にあまり多く出土しない。おそらく、イソシジミはハマグリとともに境水道から弓ヶ浜半島の外浜一帯で捕採されたものであろう。チョウセンハマグリとサトウガイは外洋水を好む種で、島根半島の小規模な砂浜海岸が主要な産地であったと思われる。中海では近年までサルボウガイが多産し、また現在でも大根島周辺から北部水域ではアサリやカキなど重要な食用種が生息しているが、弥生時代の本遺跡ではこれらの貝類をさかんに食用にしていた形跡がみられない。地質学的資料にもとづく弥生時代の中海の古地理は現状にほぼ近い形をしているが（大西　1985)、水質環境は現在とは多少異なり、サルボウガイやアサリにとっては生息しにくい環境であったかも知れない。この点は今後、多くの資料を集めて検討してみる必要がある。

カワニナやマツカサガイは淡水性の貝類で、遺跡近傍の朝酌川水系で採取され、食用とされていたものと考えられる。カワニナは現在でも遺跡周辺の河川に多いが、寄生虫の中間宿主になることで通常は食用としない。また、マツカサガイは清澄な淡水域を好む種で、宍道湖周辺ではほとんど現生していない。両種が食用されていた弥生時代は、朝酌川水系の水質環境が現在よりかなり良好であったと考えられる。

以上のように、貝層の構成種とその量から見た限りでは、本遺跡の弥生時代の食用貝は、おそらく遺跡近くで容易にかつ大量に捕採できたと思われるヤマトシジミを中心とし、島根半島沿岸で採れる〝いそもの〟と遺跡周辺の河川で採れる淡水貝類、および若干の砂泥底に生息する貝類を加えたもの、ということができる。

なお、本遺跡では通常食用にしないさまざまな微小な巻貝が検出された。これは、海藻などの海産物にともなって遺跡に搬入され，遺物に混入したものと考えられ、当時の食生活や海藻の利用法（たとえば製塩など）を検討する上でひとつの鍵を握るものであろう。

Ⅳ　西川津遺跡産貝類各説

以下に、各々の貝類標本について簡単な解説を記す。種の同定や現在の分布、生態的特性等については末尾に掲げた図鑑や文献を参考にした。

1　アワビ類　〝*Haliotis*〟　spp.（図版127、第5図）

標本はすべて破片であり、風化もはげしく種を特定するのは難しい。呼吸孔が管状に突出しないトコブシ様のものや、螺塔が比較的大きくなるものなど、いくつかの種が含まれていると思われる。

現在、山陰海岸でふつうに見られる種はマダカアワビ *Nordotis madaka* (Habe)、クロ

アワビ *N. discus discus* (Reeve)、メガイアワビ *N. gigantea* (Gmelin)、およびトコブシ *Sulculus diversicolor aquatilis* (Reeve) である。いずれも外洋性の岩礁地帯に生息するが、潮間帯のような採取が容易と考えられるところにはクロアワビ、メガイアワビ、トコブシの3種が多い。マダカアワビは、通常10～50*m*の深度に生息しており、また、本種の特徴である太くて高い呼吸孔をもつ殻片が検出できないことから、標本中に本種が含まれる可能性は低い。

2　ベッコウガサガイ　*Cellana grata grata* (Gould)（図版127、第2図）

殻高が比較的高い中型のかさ貝で、結節状の多数の放射肋を殻表にもつ。北海道南部以南に分布し、潮間帯の岩礁に付着している。食用にされる。別名ベッコウザラガイ。現生のものは殻内面の筋肉痕に囲まれた部分が暗褐色をしているが、遺跡産の標本では脱色している。

3　マツバガイ　*Cellana nigrolineata* (Reeve)（図版127、第1図）

日本本土のかさ貝では最大のもので、別名をウシノツメとも言う。北海道を除く各地と朝鮮半島に分布し、潮間帯の岩礁にしっかりと固着している。食用にされる。殻表に放射状の多くの松葉模様があるのが特徴で、遺跡産の標本でもそれが良く保存されている。

4　イシダタミガイ　*Monodonta labio* (Linné)（図版127、第12図）

北海道南部以南に分布し、潮間帯の岩礁や転石上に生息する。殻表には低平で細長い顆粒が石畳状に配列する。顆粒が丸くもりあがる熱帯型のものと区別して forma confusa Taparone-Canefri とする。いわゆる〝いそもの〟のひとつとして食用にされるが、美味でない。

5　ハナチグサガイ　*Cantharidus callichroa callichroa* (Philippi)（図版127、第6図）

北海道南部かと九州に分布する小型の巻貝で、潮下帯の海藻上に生息、食用にされたとは考えられず、他の海産物に付着していたものがまぎれ込んだものと思われる。

6　シリブトチグサガイ　*Cantharidus callichroa bibalteatus* (Pilsbry)（図版127、第7図）

前種に似るが、殻表に数本の螺溝をめぐらす。分布域も前種と同じであるが、本亜種は主に岩礁上に生息する。

7　チグサガイ　*Cantharidus japonicus* (A. Adams)（図版127、第8図）

前2者よりやや大型で殻高も高い。分布域、生態ともにハナチグサガイと同様。

8　イワカワチグサガイ　*Iwakawatrochus urbanus* (Gould)（図版127、第9図）

微小な巻貝で、本州中部以南に分布。潮下帯の海藻上に生息している。螺層に明らかな

螺肋があるのが特徴。チグサガイのなかまは、前述したように、すべて他の海産物に付着して遺跡遺物にまぎれこんだものと思われる。

9　クボガイ　*Chlorotsoma argyrostoma lischkei*（Tapparone-Canefri）（図版127、第3図）

北海道南部以南に分布し、潮間帯下部の礫地に生息。食用され、"いそもの" のなかでは美味。遺跡標本では破片が多い。

10　ヘソアキクボガイ　*Cholorostoma argyrostoma* turbinatum（A. Adams）（図版127、第4図）

分布域、生態ともにクボガイとほぼ同様で、食用にされる。本遺跡での出土はクボガイよりも稀。ただし、体層以外の破片では両者が区別できない場合が多い。

11　コシダカガンガラ　*Omphalius rusticus*（Gmelin）（図版127、第11図）

日本全国に分布し、潮下帯の岩礫地に生息する。次の種に比べると、やや内湾的環境を好む。"いそもの" として食用。

12　オオコシダカガンガラ　*Omphalius pfeifferi carpenteri*（Dunker）（図版127、第10図）

本州から九州にかけての日本海沿岸に分布。外海に面した岩礫地の潮間帯から潮下帯に生息。"いそもの" のなかでも美味。本遺跡からの出土も多く、多くは殻口部が欠損していたり、大型のものは殻頂部が欠損しているものもあるので、明らかに食用されていたと考えられる。

13　キサゴ　*Umbonium*（*Suchium*）*costatum*（Kiener）（図版127、第13図）

北海道南部以南に分布し、外洋に面した潮下帯の砂底に生息する。肉は美味であるが、本遺跡では幼貝と考えられる標本が貝層Cから1個体産出しただけであった。保存が悪く、内湾の潮間帯に生息するイボキサゴ　*U.*（*S.*）*moniliferum*（Lamarck）との区別がつきにくいが、臍盤の発達が悪いのでキサゴとした。

14　キサゴの一種　*Umbonium*（*Suchium*）sp.

わずかに破片が産するのみで、キサゴかイボキサゴか判別ができない。

15　サザエ　*Turbo*（*Batillus*）*cornutus* Lightfoot（図版127、第14、15図）

日本海側では北海道西南部以南に分布。外海に面した岩礁地帯の潮間帯から水深40*m*付近まで生息。本遺跡では蓋も含めて最も出土量が多い貝類であり、現在と同様に重要な食用種であったと考えられる。なお、本遺跡産の標本は有棘型のものが多く、荒い波を受けるような環境から採取されたと思われる。

16　スガイ　*Lunella coronata coreenis*（Récluz）（図版127、第16図）

北海道南部から九州に分布し、内海の潮間帯の岩礫地に生息。"いそもの" として食用にする。本遺跡でもふつうに産し、スガイのものと思われる蓋（図版127、第17図）も比較的多い。

17　イシマキガイ　*Clithon retropictus*（v. Martens）（図版127、第18図）

本州中部以南の汽水から淡水域に生息。現在の宍道湖でもふつうに見られる。貝層Eを除く各層からかなり多量に出土するが、食用にしていたか否かは不明。本種は石灰質の蓋をもつが、本遺跡からはこの蓋がほとんど出土していないことも興味がもたれる。

18　オオタニシ　*Cipangopaludina japonica japonica*（v. Martens）（図版128、第2図）

本州から九州に分布。池や沼に生息。本遺跡からは成貝は検出されず、わずかに幼貝と胎児殻と思われる個体が貝層Iから出土した。

19　カワニナ　*Semisulcospira libertina*（Gould）（図版128、第1図）

全国の淡水域にふつうに見られる。本遺跡からは貝層Eを除く各層から多量に出土。幼貝から成貝まで含まれる。寄生虫の中間宿主になっており、現在ではふつうは食用にしない。

20　タマキビガイ　*Littorina brevicula*（Philippi）（図版128、第3図）

全国に分布し、岩礁地帯の飛沫帯に密集して生息。春の産卵期には水の中に入る。一部の貝層では比較的ふつうに出土するが、後述する微小な貝類と同様、食用されていたとは考え難い。

21　エゾタマキビガイの近似種　*Littorina* cf. *squalida* Broderip et Sowerby（図版128、第4図）

かなり大型のタマキビ類で、エゾタマキビに類似するが標本が風化していて種の同定は困難である。貝層Iから1個体のみ出土。エゾタマキビは東北地方以北の岩礁地帯に現生している。

22　ミズゴマツボ　*Stenothyra recondida* Lindholm（図版128、第5図）

日本全国の汽水域に分布し、藻上や泥上に生息する。殻高5～6㎜の微小な巻貝で、本遺跡からは貝層E以外で、かなり多量に出土する。食用されたとは考えられず、また、他の有用水産物に付着して遺物にまぎれ込んだとも考え難い。貝類を捨てた場所に生息していたものではないだろうか。

23　イリエツボ　*Sinusicola yendoi*（Yokoyama）（図版128、第6図）

北海道以外の内湾の潮間帯、砂泥底に生息する微小な巻貝。東京や大阪の沖積層から化石としても産出している。本遺跡では貝層Cで1個体のみ検出した。

24　キンスジチョウジガイ　*Apataxia cerithiformis* Dunker（図版128、第7図）

房総半島以南の各地に分布し、潮間帯の砂地に生息する。殻高10㎜程度の小型巻貝。貝層Iに1個体のみ検出。

25　カワザンショウガイ　*Assiminea lutea japonica* v. Martens（図版128、第8図）

日本各地に分布し、アシ原の発達している河口付近の汽水域にふつうに見られる。貝層Eを除く各貝層でみられ、ミズゴマツボ同様に、貝の捨て場の環境を示す示標のひとつとみなせる。

26　〝ムカデガイ（ヘビガイ）〟の一種 〝*Vermetus*〟 sp.（図版128、第9図）

岩礁に固着する巻貝のなかまで、貝層Iより破片が検出されただけである。食べられるが、固着した貝殻を岩からはがし採るのは困難であるため、もし食用としていたならば採取場所で殻から〝肉〟をはずしていたであろう。

27　カワアイガイ　*Cerithideopsilla djadjariensis*（K. Martin）（図版128、第10図）

関東より南の湾奥の泥質干潟に分布している。貝層Fより不完全な2個体を検出したのみ。

28　ウミニナ　*Batillaria multiformis*（Lischke）（図版128、第11図）

北海道南部以南の砂泥質干潟に分布している。食用になる。食べる時は、ふつう殻頂部を割り、〝味〟を吸い出す。本遺跡産のものも殻頂部を欠損していることが多いが、同様な食べ方をしていたかどうか不明。前種と同様、干潟では密集してみられるが、潮差が少なく干潟がほとんど発達しない山陰地方では一般的な貝ではなく、本遺跡での産出も多くない。

29　コウロギガイ　*Cerithium kobelti*（Dunker）（図版128、第12図）

関東から南に分布し、潮間帯から水深約20㎞までの岩礁に生息する。しばしばヤドカリの棲殻となる。本遺跡での産出は少ない。

30　キクスズメガイ　*Sabia conica*（Schumacker）（図版128、第14図）

北海道南部以南に分布し、アワビ類やサザエ類の殻表に付着している。本遺跡でも多く検出される。

31　チャイロキヌタガイの近似種　*Palmadusta* cf. *artuffeli*（Jousseaume）（図版128、第15図）

殻表が風化、脱色しているため種の確定はむづかしいが、殻の形態から標記のように同

定した。チャイロキヌタガイは房総以南に分布する小形のタカラガイ類で、山陰海岸でもふつうに見られる。

32　アカニシ　*Papana venosa*（Valenciennes）（図版128、第19図）

北海道南部以南に分干し、水深5～20*m*の砂泥底に生息する。肉は美味で、本遺跡でもかなり多く出土する。一般に殻口部分が欠損し、大型の標本では体層が大きく破壊している。殻の破片も多い。

33　レイシガイ　*Reishia bronni*（Dunker）（図版128、第17図）

北海道南部以南に分布し、潮間帯下部の岩礁に生息。次に述べるイボニシに類似するが、本種の方が結節が丸くて大きいこと、成貝ではより大型になることで区別できる。現生標本では殻口内部の色でも区別できるが、遺跡標本では脱色している。食用になるが味は辛い。本遺跡からも多く出土している。

34　イボニシ　*Reishia clavigera*（Kuster）（図版128、第16図）

分布、生態ともレイシガイと同じ。味も同様で、本遺跡から多数出土する。なお、アカニシ、レイシガイ、イボニシなどのアクキガイ科の貝からは紫色の染料がとれる。

35　ウニレイシガイ　*Mancinella echinata*（Blainville）（図版128、第18図）

関東以南に分布する比較的小型の巻貝で、水深20*m*以浅の岩礁に生息する。貝層Aから1個体のみ出土。

36　マツムシガイ　*Pyrene testudinaria tylerae*（Griffith et Pidgeon）（図版128、第20図）

関東以南の岩礁の潮間帯から水深20*m*程度のところにすみ、海藻の間や石の下に多い。小型の巻貝で、他の海産物に伴ってまぎれ込んだものと思われる。本遺跡からの産出は稀である。なお、以下に述べるボサツガイ、ノミニナモドキ、ノミニナ、サラサノミニナ、クダマキマツシマ、フトコロガイなどタモトガイ科の小型の巻貝は、みな　本種と同様に他の海産物に伴って遺跡に搬入されたものと思われる。

37　ボサツガイ　*Anachis misera*（Sowerby）（図版128、第21図）

分布、生態ともマツムシガイに類似、本遺跡からの出土は稀。

38　ノミニナモドキ　*Zafra mitriformis* A. Adams（図版128、第22図）

39　ノミニナ　*Zafra pumila*（Dunker）（図版128、第23図）

以上の2種は、いずれも関東以南に分布し、潮間帯の岩礁の海藻中に生息する。出土は稀。

40　サラサノミニナ　*Zafra troglodytes*（Sowerby）（図版128、第24図）

紀伊半島以南の潮間帯岩礫地に生息。出土は稀。

41　クダマキマツムシガイ　*Pleurotomitrella pleurotomoides*（Pilsbry）（図版128、第25図）

関東以南の潮間帯岩礫地に生息。海藻のあいだに多い。本遺跡からの出土は稀。

42　フトコロガイ　*Euplica scripta*（Lamarck）（図版128、第26図）

関東以南の潮間帯から水深20*m*付近までの岩礁に生息し、海藻のあいだに多い。本遺跡からの出土は少ない。

43　バイ　*Babylonia japonica*（Reeve）（図版128、第13図）

北海道南部から九州に分布。水深約10*m*の砂底に分布し、通常はバイかごなどの漁具を用いて採取する。食用とし美味であるが、本遺跡からは貝層Fで1個体出土したのみである。

44　ナミヒメムシロガイ　*Reticunassa dermestina*（Gould）（図版128、第27図）

本州以南に分布し、潮間帯の細砂中に生息。出土は稀。

45　クロスジムシロガイ　*Reticunassa fratercula*（Dunker）（図版128、第28図）

北海道から九州に分布し、岩礫底にも砂泥底にも生息する。出土は稀。

46　ヒメムシロガイ　*Reticunassa beata*（Gould）（図版128、第29図）

日本全国に分布し、潮間帯から水深20*m*程度の岩礫底に生息する。貝層Iではふつうに出土する。

47　ムシロガイ　*Niotha livescens*（Philippi）（図版128、第30図）

本州以南の各地に分布し、潮間帯から水深20*m*程度の細砂底に生息。貝層Fにふつうに出土し、貝層Cからも近似種を検出。以上44～47までの小型巻貝も通常は食用とせず、他の海産物等とともに遺跡に搬入されたものと思われる。

48　マクラガイ　*Oliva mustelina* Lamarck（図版128、第31図）

関東以南に分布し、日本海側では佐渡以南に多い。水深5～30*m*の細砂底にもぐって生息している。通常食用にはしない。貝層Fから出土する。

49　ムシボタルガイ　*Olivella fulgurata*（A. Adams et Reeve）図版128、第32図）

マクラガイとほぼ同様の分布、生態を示すが、殻高1*cm*足らずの小型種である。貝層Cから稀に出土。

50　タケノコガイ科の一種　TEREBRIDAE gen. et sp. indet.（図版128、第33図）

螺層の一部が貝層Fから出土。このなかまは、一般に浅海の砂底に生息し、打上げ貝の中にも多い。

51　モノアラガイ　*Radix japonica*（Jay）（図版129、第1図）

日本各地の池、沼などに分布し、水草に付着して生活している。貝層Fから稀産し、他の淡水貝に伴って混入したものと思われる。

52　ヒラマキミズマイマイ　*Gyraulus spirillus*（Gould）（図版129、第2図）

日本各地の淡水域に分布し、水草や石に付着している。貝層Cに稀産。

53　コハクガイ科の一種　ZONITIDAE gen. et sp. indet.（図版129、第3図）

螺塔が低い微小な巻貝で、形態はコハクガイ科の陸貝に似る。しかし、この科の多くは移入種であるため、更に検討を要する。本遺跡からは貝層Ⅰ、Cでふつうに出土し、他に貝層F、Hでも稀産する。

54　カリガネエガイ　*Barbatia*（*Savignyarca*）*virescens*（Reeve）（図版129、第5図）

北海道南部以南に分布、岩礁に足系で固着している。内湾にも外海にも生息するが殻の形態が多少異なる。本遺跡では貝層FとCでわずかに出土するが、いずれも殻後方が広がる外海型のものである。

55　サトウガイ　*Scapharca satowi*（Dunker）（図版129、第8図）

房総、北陸以南、九州まで分布、外注に面した亜潮間帯の砂底に生息。殻表の放射肋は38本前後。赤貝の代用として食用にされる。本遺跡では貝層Aに非常に多く出土するが、他の貝層ではⅠを除き検出できない。

56　サルボウガイ　*Scapharca subcrenate*（Lischke）（図版129、第9図）

前者と同様な地域に分布するが、本種は内湾性である。放射肋は32本前後で、かつて中海に多産し食用にされた。貝層F、Ⅰ、A、Cに少数出土した。なお、破片となった殻はサトウガイとサルボウガイの区別が不可能なものもある。

57　ベンケイガイ　*Glycymeris Vestita*（*Dunker*）（図版129、第10図）

北海道南部以南に分布し、潮間帯下部から水深約10*m*の砂底に生息する。近似種のベンケイガイ　*G. albolineata*（Lischke）とは殻が厚く、大きく、肩が張ることで区別できる。食用にもされるが、厚い殻を利用して装飾品等に加工されることもある。ツメタ貝などによる穿孔痕があり、採取時にすでに死殻であったことが明らかな殻片が出土していることも、食用以外に利用されていたことを暗示していると言ってよいだろう。タマキガイに近似した標本も含めると、貝層G、Ⅰ、Cから出土しているが、破片や幼貝が少数認められるだけである。

58　イガイ　Mytylus corscus Gould（図版129、第6図）

北海道南部以南の潮間帯から水深約20*m*の岩礁に足系で付着して群生している。食用さ

れ美味。本遺跡ではすべての貝層から出土しており、とくに貝層F、Cに多い。殻はほとんどすべて成貝と思われる破片である

59　インコガイの一種　*Septifer* sp.（図版129、第4図）

イガイに似るが小型で、殻頂内部に隔板をもつ。このなかまは日本では北海道南部以南に分布し、潮間帯から潮下帯の岩礁に足糸で付着している。貝層F、Cに稀に出土するのみで、イガイに混在していたものかも知れない。

60　イタヤガイの一種　*Pecten* sp.（図版129、第7図）

殻片が貝層FとIに少数出土する。イタヤガイのなかまは北海道南部以南に分布し、水深10～100*m*の砂泥底に生息する。潮間帯の貝類が大部分を占める本遺跡では、バイとともに例外的に深場の貝である。

61　ナミマガシワガイ　*Anomia chinensis* Philippi（図版130、第1図）

北海道以南に分布し、潮間帯から水深約20*m*の岩礁や礫に固着している。標本は膨らんだ左殻のみで、貝層Iからふつうに出土するほか、本種と思われる殻片が貝層Hにわずかに認められる。

62　マガキ　*Crassostrea gigas*（Thunberg）（図版130、第2図）

日本各地の低塩分の内湾に分布し、岩や杭などに付着するほか砂泥底にも小礫や死殻などに付着して生息する。食用にされ美味。本遺跡では弥生中期の貝層AとCに限って出土しているが、量は少ない。

63　イタボガキ　*Ostrea denselamellosa* Lischke（図版130、第10図）

関東以南の内湾に分布し、岩礫に固着したり、砂泥の上に互いに付着しあって団塊状になって生息する。食用にされる。本遺跡では貝層HとIに少数の殻片が出土した。

64　イシガイの近似種　*Unio* cf. *douglasiae*（Griffith et Pidgeon）（図版130、第5図）

殻がやや厚い中型の淡水二枚貝で長い後側歯をもっている点で後述のマツカサガイに類似するが、殻表のさざなみ状の彫刻がほとんど発達しない。イシガイは全国の河川の砂礫底に生息。本遺跡では、貝層I、A、Cに稀に出土。

65　ドブガイの近似種　*Anodonta*（*Sinanodonta*）cf. *woodiana* Lea（図版130、第6図）

破片であるがかなり大型の淡水二枚貝と考えられ、側歯を欠いているので上記のように同定した。ドブガイは本州以南の河川や湖沼の砂泥底に生息。貝層I、Aから稀産。

66　マツカサガイ　*Inversidens japonensis*（Lea）（図版130、第7図）

全国に分布し、水のきれいな川の砂礫底に生息する。中型の二枚貝で主歯が太く、殻表のほぼ全面にさざなみ状の彫刻がみられる。本遺跡では貝層E以外で出土し、貝層F、Cでとくに多い。当時、食用していた可能性がある。

67　マヤトシジミ　*Corbicula japonica* Prime

全国の汽水に生息。各貝層とも多産し、現在同様、さかんに食用されていたと考えられる。

68　サルノカシラガイ　*Pseudochama retroversa* (Lischke)（図版130、第4図）

関東以南に分布し、潮間帯から水深約20*m*の岩礁に固着している。扁平な左殻が貝層Cから1個体出土したのみ。

69　トマヤガイ　*Cardita leana* Dunker（図版130、第3図）

津軽海峡以南に分布し、潮間帯の岩礁に足糸で付着している。貝層Fから少数出土した。

70　フジナミガイの近似種　*Hiatula* cf. *boeddinghausi* (Lischke)（図版130、第9図）

次種に似て殻は薄く、膨らみが弱いが大型。破片が貝層Hから出土したのみで、種を確定することはできない。フジナミガイは関東以南に分布し、潮間帯から水深約20*m*の砂底に生息している。

71　イソシジミガイ　*Nuttallia olivacea* (Jay)（図版130、第8図）

全国に分布し、潮間帯から水深約10*m*の砂泥底に生息している。ときに密集して生息し食用にされる。本遺跡では貝層A、Eを除く各層から出土し、とくに貝層Iで多産する。

72　ハマグリ　*Meretrix lusoria* (Röding)（図版131、第1図）

北海道南部以南に分布し、潮間帯から水深約20*m*の砂泥底に生息する。次種より殻が多少小さく、薄い。また、腹縁に丸みがある。淡水が流入するような沿岸部に多い。食用にされ、本遺跡では貝層F、G、I、Cに出土するがあまり多くない。

73　チョウセンハマグリ　*Meretrix lamarckii* Deshayes（図版131、第4図）

房総、能登半島以南に分布し、潮間帯下部から水深約20*m*の砂底に生息している。前種と違って外洋性である。殻は厚く、大きく、腹縁の丸みは弱い。食用にされるほか、殻は各種の加工材料とされる。本遺跡では貝層Eを除く各層より出土し、前種よりやや多い。

74　カガミガイ　*Phacosoma japonicum* (Peeve)（図版131、第2図）

北海道南部以南に分布し、潮間帯から水深60*m*の細砂底に生息する。食用にされるが、本遺跡では貝層H、Iに稀産するのみ。

75　オオノガイの近似種　*Mya* cf. *arenaria oonogai* Makiyama（図版131、第3図）

大きな弾帯受けをもつ貝片が貝層Ⅰで検出されただけである。オオノガイは北海道以南に分布し、潮間帯の砂泥底に深くもぐって生息しているが、遺跡近くでは境水道の海底に多産する。食用にされる。

参　考　文　献

とくに標本同定と生態的記述に際して参考にした文献のみを記す。
波部忠重（1961）続原色日本貝類図鑑　保育社
波部忠重（1977）日本産軟体動物分類学二枚貝綱／掘足綱　図鑑の北隆館
波部忠重・小管貞男（1967）貝（標準原色図鑑全集３）　保育社
波部忠重・奥谷喬司（1983）貝Ⅰ巻貝（学研生物図鑑）　学習研究社
波部忠重・奥谷喬司（1983）貝Ⅱ二枚貝・陸貝・イカ・タコほか（学研生物図鑑）　学習研究社
肥後俊一編（1973）日本列島周辺海産貝類総目録　長崎県生物学会
稲葉明彦（1982）瀬戸内海の貝類　広島貝類談話会
河本卓介・田辺澄生編（1956）山口県産貝類目録　山口県立博物館
吉良哲明（1959）原色日本貝類図鑑（増補改訂版）　保育社
黒田徳米・波部忠重・大山桂（1971）相模湾産貝類　丸善
奥谷喬司編（1986）決定版生物大図鑑貝類　世界文化社
内海冨士夫（1969）原色日本海岸動物図鑑（改訂版）　保育社
内海冨士夫・西村三郎・鈴木克美（1971）海岸動物（標準色図鑑全集16）　保育社

表27—1　西川津遺跡弥生層出土貝類一覧　（－；産出なし、＋；1～2個体、++；3～9個体、*；10～20個体、**；21～50個体、***；51個体以上）

		弥生前期				弥生中期		弥生後期
		F	G	H	I	A	C	E
Phylum MOLLUSCA　軟体動物門								
Class GASTROPODA　腹足綱								
Order ARCHAEOGASTROPODA　原始腹足目								
Family HARIOTIDAE　ミミガイ科								
"Haliotis" spp.	アワビ類	**	++	-	++	+	**	-
Family PATELLIDAE　ツタノハガイ科								
Cellana grata grata (Gould)	ベッコウガサガイ	**	+	-	***	+	++	-
Cellana nigrolineata (Reeve)	マツバガイ	*	+	+	**	+	*	-
Family TROCHIDAE　ニシキウズガイ科								
Monodonta labio (Linne)	イシダタミガイ	+	+	-	++	-	+	-
Cantharidus callichroa callichroa (Philippi)	ハナチグサガイ	-	-	-	*	-	-	-
Cantharidus callichroa bibalteatus (Pilsbry)	シリブトチグサガイ	-	-	-	+	-	-	-
Cantharidus japonicus (A. Adams)	チグサガイ	-	-	-	+	-	-	-
Iwakawatrochus urbanus (Gould)	イワカワチグサガイ	-	-	-	+	-	-	-
Chlorostoma argyrostoma lischkei (Tapparone-Canafri)	クボガイ	*	-	-	*	-	*	-
Chlorostoma argyrostoma turbinata (A. Adams)	ヘソアキクボガイ	-	+	+	-	-	-	-
Chlorostoma argyrostoma ssp.	クボガイ or ヘソアキクボガイ	-	-	-	-	+	-	-
Omphalius rusticus (Gmelin)	コシダカガンガラ	+	-	-	+	-	-	-
Omphalius pfeifferi carpenteri (Dunker)	オオコシダカガンガラ	*	+	++	**	++	++	-
Umbonium (Suchium) costatum (Kiener)	キサゴ	-	-	-	-	-	+	-
Umbonium (Suchium) sp.	キサゴの一種	+	-	-	+	-	-	-
Family TURBINIDAE　リュウテンサザエ科								
Turbo (Batillus) cornutus (Lightfoot)	サザエ	***	*	***	***	***	**	+
operculum of Turbo (Batillus) cornutus	サザエの蓋	***	***	***	***	***	***	-
Lunella coronata coreensis (Recluz)	スガイ	*	-	-	*	-	-	-
operculum of "Lunella" spp.	スガイ類の蓋	*	+	++	*	-	**	-
Family NERITIDAE　アマオブネ科								
Clithon retropictus (v. Martens)	イシマキガイ	***	***	++	***	**	***	-
Order MESOGASTROPODA　中腹足綱								
Family VIVIPARIIDAE　タニシ科								
Cipangopaludina japonica japonica (v. Martens)	オオタニシ（幼貝）	-	-	-	+	-	-	-
Family PLEUROCERIDAE　カワニナ科								
Semisulcospira libertina (Gould)	カワニナ	***	***	***	***	***	***	-
Family LITTORINIDAE タマキビガイ科								

表27―2

Littorina brevicula (Philippi)	タマキビガイ	*	-	-	*	-	+	-
Littorina cf. squalida Broderip et Sowerby	エゾタマキビガイに近似	-	-	-	+	-	-	-
Family STENOTHYRIDAE ミズゴマツボ科								
Stenothyra recondida (Lindholm)	ミズゴマツボ	***	***	*	**	+	***	-
Family FAIRBANKIIDAE ワカウラツボ科								
Sinusicola yendoi (Yokoyama)	イリエツボ	-	-	-	-	-	+	-
Family RISSOINIDAE ホソスジチョウジガイ科								
Apataxia cerithiformis (Dunker)	キンスジチョウジガイ	-	-	-	+	-	-	-
Family ASSIMINERIDAE カワザンショウガイ科								
Assiminea lutea japonica v. Martens	カワザンショウガイ	+	+	*	**	+	-	-
Family VERMETIDAE ムカデガイ科								
"Vermetus" sp.	"ムカデガイ（ヘビガイ）"	-	-	-	+	-	-	-
Family POTAMIDIDAE ウミニナ科								
Cerithideopsilla djadjariensis (K. Martin)	カワアイガイ	+	-	-	-	-	-	-
Batillaria multiformis (Lischke)	ウミニナ	*	-	-	+	+	+	-
Family CERITHIIDAE カニモリガイ科								
Cerithium kobelti (Dunker)	コウロギガイ	++	-	-	++	-	-	-
Family HIPPONICIDAE スズメガイ科								
Sabia conica (Schumacker)	キクスズメガイ	***	+	+	**	-	*	-
Family CYPRAEIDAE タカラガイ科								
Palmadusta cf. artuffeli (Jousseaume)	チャイロキヌタガイに近似	+	-	-	+	-	+	-
Order NEOGASTROPODA 新腹足綱								
Family MURICIDAE アクキガイ科								
Rapana venosa (Valenciennes)	アカニシ	***	++	**	***	**	***	-
Reishia bronni (Dunker)	レイシガイ	**	++	-	**	+	**	-
Reishia clavigera (Kuster)	イボニシ	***	*	+	**	++	**	-
Mancinella echinata (Blainville)	ウニレイシガイ	-	-	-	-	+	-	-
Family PYRENIDAE タモトガイ科								
Pyrene testudinaria tylerae (Griffith et Pigeon)	マツムシガイ	+	-	-	-	-	-	-
Anachis misera (Sowerby)	ボサツガイ	+	-	+	-	-	-	-
Zafra mitriformis A. Adams	ノミニナモドキ	-	-	-	+	-	-	-
Zafra pumila (Dunker)	ノミニナ	+	-	-	+	-	-	-
Zafra troglodytes (Sowerby)	サラサノミニナ	+	-	-	-	-	-	-
Pleurotomitrella pleurotomoides (Pilsbry)	クダマキマツムシガイ	-	-	-	+	-	-	-
Euplica scripta (Lamarck)	フトコロガイ	++	-	-	+	-	-	-
Family BUCCINIDAE エゾバイ科								
Babylonia japonica (Reeve)	バイ	+	-	-	-	-	-	-
Family NASSARIIDAE オリイレヨウバイ科								
Reticunassa dermestina (Gould)	ナミヒメムシロガイ	-	-	-	+	-	-	-

表27—3

Reticunassa fratercula (Dunker)	クロスジムシロガイ	+	-	-	-	-	-	-
Reticunassa beata (Gould)	ヒメムシロガイ	+	-	-	*	-	-	-
Nioth[illegible] livescens (Philippi)	ムシロガイ	*	-	-	-	-	-	-
Nioth[illegible] cf. livescens (Philippi)	ムシロガイに近似	-	-	-	-	-	+	-
Fa[illegible] OLIVIDAE マクラガイ科								
Ol[illegible] mustelina Lamarck	マクラガイ	++	-	-	-	-	-	-
Olivella fulgurata (A. Adams et Reeve)	ムシボタルガイ	-	-	-	-	-	+	-
Family TEREBRIDAE タケノコガイ科								
TEREBRIDAE gen. et sp. indet.	タケノコガイ科の一種	+	-	-	-	-	-	-
Order BASOMMATOPHORA 基眼目								
Family LYMNAEIDAE モノアラガイ科								
Radix japonica (Jay)	モノアラガイ	+	-	-	-	-	-	-
Family PLANORBIDAE ヒラマキガイ科								
Gyraulus spirillus (Gould)	ヒラマキミズマイマイ	-	-	-	-	-	+	-
Order STYLOMMATOPHORA 柄眼目								
Family ZONITIDAE コハクガイ科								
ZONITIDAE gen. et sp. indet.	コハクガイ科の一種	+	-	+	*	-	*	-
Class BIVALVIA 二枚貝綱								
Order PTERIOMORPHIA 翼形目								
Family ARCIDAE フネガイ科								
Barbatia (Savignyarca) virescens (Reeve)	カリガネエガイ	++	-	-	-	-	+	-
Scapharca satowi (Dunker)	サトウガイ	-	-	-	++	***	-	-
Scapharca subcrenata (Lischke)	サルボウガイ	++	-	-	+	+	+	-
Scapharca satowi or S. subcrenata	サトウガイ or サルボウガイ	-	+	+	-	-	++	-
Family GLYCYMERIDAE タマキガイ科								
Glycymeris vestita (Dunker)	タマキガイ	-	-	-	++	-	-	-
Glycymeris cf. vestita (Dunker)	タマキガイに近似	-	+	-	-	-	+	-
Family MYTILIDAE イガイ科								
Mytylus corscus Gould	イガイ	***	+	*	**	**	***	+
Septifer sp.	インコガイの一種	+	-	-	-	-	+	-
Family PECTINIIDAE イタヤガイ科								
Pecten sp.	イタヤガイの一種	+	-	-	++	-	+	-
Family ANOMIIDAE ナミマガシワガイ科								
Anomia chinensis Philippi	ナミマガシワガイ	-	-	-	*	-	-	-
Anomia cf. chinensis Philippi	ナミマガシワガイに近似	-	-	+	-	-	-	-
Family OSTREIDAE イタボガキ科								

表27—4

Crassostrea gigas (Thunberg)	マガキ	-		-		-		-		-		++		++		-
Ostrea denselamellosa Lischke	イタボガキ	-		-			++		++		-		-		-
Order PALAEOHETERODONTA 古異歯目																			
Family UNIONIDAE イシガイ科																			
Unio cf. douglasiae (Griffith et Pidgeon)	イシガイに近似	-		-		-		-		+		+		+		-
Anodonta (Sinanodonta) cf. woodiana Lea	ドブガイに近似	-		-		-		-		+		+		-		-
Inversidens japonensis (Lea)	マツカサガイ		＊＊＊		＊＊		+		＊＊		＊	・	＊＊＊		-
Order HETERODONTA 異歯目																			
Family CORBICULIDAE シジミガイ科																			
Corbicula japonica Prime	ヤマトシジミ		＊＊＊	・	＊＊＊	・	＊＊＊	・	＊＊＊	・	＊＊＊	・	＊＊＊	・	＊＊＊
Family CHAMIDAE キクザルガイ科																			
Pseudochama retroversa (Lischke)	サルノカシラガイ	-		-		-		-		-		+		-		-
Family CARDITIDAE トマヤガイ科																			
Cardita leana Dunker	トマヤガイ		++		-		-		-		-		-		-		-
Family PSAMMOBIIDAE シオサザナミガイ科																			
Hiatula cf. boeddinghausi (Lischke)	フジナミガイに近似	-		-			+		-		-		-		-
Nuttalia japonica (Reeve)	イソシジミガイ	+		+		+	・	＊＊＊		-		＊		-
Family VENERIDAE マルスダレガイ科																			
Meretrix lusoria (Roding)	ハマグリ		++		+		-		＊		-		+		-
Meretrix lamarckii Deshayes	チョウセンハマグリ		＊		+		+		＊		++		++		-
Phacosoma japonicum (Reeve)	カガミガイ	-		-			+		+		-		-		-
Order ADESMACEA 無面目																			
Family MYIDAE オオノガイ科																			
Mya cf. arenaria oonogai Makiyama	オオノガイに近似	-		-		-		-		-		+		-	
Phylum ANNELIDA 環形動物門																			
Class POLYCHAETA 多毛虫綱																			
Order SEDENTARIA 定在目																			
Family SERPULIDAE カンザシゴカイ科（棲管）		-		+		-		＊		-		++		-	
Phylum ARTHROPODA 節足動物門																			
Class CRUSTACEA 甲殻綱																			
Order THRACICA 完胸目																			
Suborder LEPADOMORPHA エボシガイ亜目（カメノテの殻板）			＊＊＊		++		＊＊	・	＊＊＊		＊	・	＊＊＊		-
Suborder BALANOMORPHA フジツボ亜目（フジツボ類）			＊		+		++		＊		+		++		-
Order DECAPODA 十脚目																			
Suborder BRACHYURA 短尾亜目（カニのはさみ）		-		-		-		+		-		-		-

表27—5

Phylum ECHINODERMATA きょく皮動物門
Class ECHINOIDEA ウニ綱
Order ECHINOIDA エキヌス目
Family ECHINOMETRIIDAE ナガウニ科（とげ，殻片） …… ＊＊・＊＊＊ … ＊＊・＊＊＊ …… -・＊＊＊ …… +

図　版　説　明（写真図版127～131）

図版127

1. マツバガイ、×1.2　貝層Ⅰ（弥生前期）
2. ベッコウガサガイ、×1.2　貝層Ⅰ（　〃　）
3. クボガイ、×1.2　貝層F（　〃　）
4. ヘソアキクボガイ、×1.2　貝層G（　〃　）
5. アワビ類×1.2　貝層F（　〃　）
6. ハナチグサガイ、×2.0　貝層Ⅰ（　〃）
7. シリブトチグサガイ、×2.0　貝層C（弥生中期）
8. チグサガイ、×2.0　貝層Ⅰ（弥生前期）
9. イワカワチグサガイ、×2.0　貝層Ⅰ（　〃　）
10. オオコシダカガンガラ、×1.2 貝層F（　〃　）
11. コシダカガンガラ、×1.2　貝層F（　〃　）
12. イシダタミガイ、×1.2　貝層F（　〃　）
13. キサゴ、×2.0　貝層C（弥生中期）
14. サザエ、×1.2　貝層F（弥生前期）

15a、b. サザエの蓋×1.2　貝層A（弥生中期）

16. スガイ、×1.2　貝層F（弥生前期）

17a、b. スガイ類の蓋×1.2　貝層H（　〃　）

18a、b. イシマキガイ、×1.2　貝層G（　〃　）

図版128

1. カワニナ、×1.2　貝層F（　〃　）
2. オオタニシ（幼貝）、×1.2　貝層Ⅰ（　〃　）
3. タマキビガイ、×2.0　貝層F（　〃　）
4. エゾタマキビガイの近似種、×1.2　貝層Ⅰ（　〃　）
5. ミズゴマツボ、×2.0　貝層Ⅰ（　〃　）
6. イリエツボ、×2.0　貝層C（弥生中期）
7. キンスジチョウジガイ、×2.0　貝層Ⅰ（弥生前期）
8. カワザンショウガイ、×2.0　貝層H（　〃　）
9. ムカデガイ（ヘビガイ）の一種、×1.2　貝層Ⅰ（　〃　）
10. カワアイガイ、×1.2　貝層F（　〃　）
11. ウミニナ、×1.2　貝層F（　〃　）
12. コウロギガイ、×1.2　貝層F（　〃　）
13. バイ、×1.2　貝層F（　〃　）
14. キクスズメ、×1.2　貝層C（弥生中期）
15. チャイロキヌタガイの近似種、×1.2　貝層C（　〃　）
16. イボニシ、×1.2　貝層F（弥生前期）
17. レイシガイ、×1.2　貝層Ⅰ（　〃　）
18. ウニレイシガイ、×2.0　貝層A（弥生中期）
19. アカニシ、×1.2　貝層Ⅰ（弥生前期）
20. マツムシガイ、×2.0　貝層F（　〃　）
21. ボサツガイ、×2.0　貝層F（　〃　）
22. ノミニナモドキ、×2.0　貝層Ⅰ（　〃　）
23. ノミニナ、×2.0　貝層Ⅰ（　〃　）
24. サラサノミニナ、×2.0　貝層F（　〃　）
25. クダマキマツムシガイ、×2.0　貝層Ⅰ（　〃　）
26. フトコロガイ、×2.0　貝層F（　〃　）
27. ナミヒメムシロガイ、×2.0　貝層Ⅰ（　〃　）
28. クロスジムシロガイ、×2.0　貝層F（　〃　）
29. ヒメムシロガイ、×2.0　貝層Ⅰ（　〃　）
30. ムシロガイ、×2.0　貝層F（　〃　）
31. マクラガイ、×1.2　貝層F（　〃　）
32. ムシボタルガイ、×2.0　貝層C（弥生中期）
33. タケノコガイ科の一種×2.0　貝層F（弥生前期）

図版129

1. モノアラガイ、×2.5　貝層F（　〃　）
2. ヒラマキミズマイマイ、×2.5　貝層C（中期）
3. コハクガイ科の一種、×2.5　貝層Ⅰ（前期）
4. インコガイ科の一種、×1.2、左殻貝層F（　〃　）
5. カリガネエガイ、×1.2、右殻　貝層F（　〃　）
6. イガイ、×1.2、左殻　貝層F（　〃　）
7. イタヤガイ科の一種、×1.2、右殻　貝層C（中期）
8. サトウガイ、×1.2、右殻　貝層Ⅰ（前期）
9. サルボウガイ、×1.2、左殻　貝層A（中期）
10. タマキガイ、×1.2、右殻　貝層Ⅰ（前期）

図版130

1. ナミマガシワガイ、×1.2　貝層Ⅰ（　〃　）
2. マガキ、×1.2　貝層A（中期）
3. トマヤガイ、×1.2、右殻　貝層F（前期）
4. サルノカシラガイ、×1.2　貝層A（中期）
5. イシガイの近似種、×1.2　貝層A（　〃　）
6. ドブガイの近似種、×1.2　貝層Ⅰ（前期）
7. マツカサガイ、×1.2、左殻　貝層F（　〃　）
8. イソシジミガイ、×1.2　貝層Ⅰ（　〃　）
9. フジナミガイの近似種、×1.2　貝層H（　〃）
10. イタボガキ、×1.2　貝層Ⅰ（　〃　）

図版131

1. ハマグリ、×1.2、左殻　貝層Ⅰ（　〃　）
2. カガミガイ、×1.2、右殻　貝層Ⅰ（　〃　）
3. オオノガイの近似種、×1.2、左殻 貝層C（中期）
4. チョウセンハマグリ、×1.2、左殻　貝層C（　〃　）

5a、b、6a、b、7a、b. カメノテの殻板、×1.2　貝層C（　〃　）

8. カニのはさみ、×1.2　貝層Ⅰ（前期）
9. カンザシゴカイ科の一種、×1.2　貝層C（中期）
10. フジツボ類　貝層A（　〃　）
11. ウニ類の一種、×1.2　貝層Ⅰ（前期）

16 炭化米について

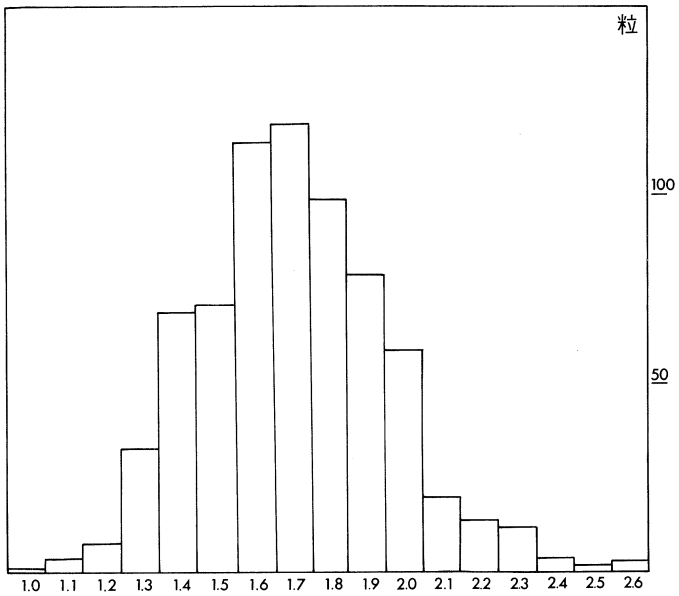
弥生時代前期～中期の土層より多量の炭化米が出土した。そのほとんどは、貝層中から出土で、貝層を洗浄中に検出したもの（図版134下）を計測した。

資料とした炭化米は弥生時代前期に形成された貝層Ⅰ（第1図）より、約5ｇを採取し、これを一点ずつ計測し長幅比を求めた。5ｇの炭化米は総計711粒を数える。

第184図は資料の長幅比の量をグラフで表わしたものである。一粒ずつの計測置は表28～表31に示した。これらによると、長幅比が1.6～1.8にピークがあり、これをはさんで1.4～2.0にほとんど集中しているという結果となった。このことは西川津遺跡出土の炭化米がジャポニカに近いものであったことを推測させる。但し、2.0以上の値を示す資料も相当量含まれており、インディカに近いものも存在した可能性があろう。

島根県下における炭化米は松江市西津田町石台遺跡の縄文時代晩期と推定される土坑からの出土資料が最古のものである（江川幸子・内田律雄「石台遺跡の試掘調査―炭化米を出土した縄文時代晩期の土坑―」『季刊文化財第62号』島根県文化財愛護協会誌　昭和63年3月）が、やはり西川津遺跡出土例に近いものである。

また、計測した炭化米5ｇの粒数を基準に、貝層Ⅰ出土の炭化米の総数を計算すると、22万粒という結果を得た。他の貝層中や包含層に含まれていたものを含めるとさらに量は増えるのであるが、このことは、数多い木製農耕具とともに、西川津遺跡海崎地区の極付近に水田址の存在を裏付けるものである。



第184図　炭化米長幅比

表28　炭化米計測値（I）

番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比
1	5.2	3.0	1.7	46	4.7	2.5	1.9	91	4.0	2.2	1.8	136	4.5	2.6	1.7
2	4.2	3.0	1.4	47	4.0	2.8	1.4	92	5.8	3.0	1.9	137	5.6	2.8	2.0
3	4.8	2.7	1.8	48	5.2	3.4	1.5	93	4.8	2.8	1.7	138	4.0	2.4	1.7
4	5.3	4.0	1.3	49	4.2	3.0	1.4	94	5.0	2.8	1.8	139	4.1	3.0	1.4
5	5.3	3.3	1.6	50	4.6	2.9	1.6	95	4.2	2.6	1.6	140	5.2	3.1	1.7
6	4.5	3.8	1.2	51	4.7	2.6	1.8	96	4.4	2.5	1.8	141	4.2	2.7	1.6
7	4.8	3.1	1.5	52	4.2	2.8	1.5	97	4.0	2.2	1.8	142	3.8	2.1	1.8
8	4.2	2.8	1.5	53	4.1	2.6	1.6	98	4.6	2.5	1.8	143	3.8	2.9	1.3
9	4.4	2.0	2.2	54	4.8	3.5	1.4	99	4.0	2.8	1.4	144	4.2	2.1	2.0
10	4.0	2.2	1.8	55	4.8	2.6	1.8	100	3.8	2.8	1.4	145	4.4	2.1	2.1
11	3.	2.1	1.8	56	5.0	2.8	1.8	101	4.8	2.6	1.8	146	4.2	2.0	2.1
12	4.5	3.8	1.2	57	4.2	2.8	1.5	102	5.1	2.6	2.0	147	3.8	2.6	1.5
13	4.5	2.8	1.6	48	4.1	2.5	1.6	103	4.0	2.8	1.4	148	4.2	3.0	1.4
14	4.8	2.5	1.9	59	3.8	2.4	1.6	104	4.7	3.2	1.5	149	3.6	2.6	1.4
15	4.9	2.8	1.7	60	4.5	2.6	1.7	105	4.4	2.3	1.9	150	4.1	3.2	1.3
16	5.5	3.4	1.6	61	4.0	2.2	1.8	106	4.0	2.4	1.7	151	4.2	2.8	1.5
17	4.8	2.3	2.1	62	5.2	3.8	1.4	107	4.8	3.0	1.6	152	4.0	2.6	1.5
18	4.1	3.0	1.4	63	4.8	3.0	1.6	108	4.3	2.7	1.6	153	4.0	2.2	1.8
19	5.8	2.5	2.3	64	4.0	3.2	1.3	109	4.2	2.7	1.6	154	4.1	2.5	1.6
20	3.8	2.8	1.4	65	5.0	2.8	1.8	110	4.0	2.2	1.8	155	3.8	2.4	1.6
21	4.2	2.9	1.4	66	4.8	3.2	1.5	111	4.0	2.1	1.9	156	4.0	3.0	1.3
22	4.8	3.2	1.5	67	4.2	2.6	1.6	112	4.2	2.8	1.5	157	4.3	3.1	1.4
23	4.3	3.0	1.4	68	4.5	2.3	2.0	113	4.4	2.8	1.6	158	4.8	2.5	1.9
24	4.1	2.5	1.6	69	4.4	2.8	1.6	114	5.1	2.7	1.9	159	4.4	2.6	1.7
25	4.1	2.6	1.6	70	4.1	2.6	1.6	115	4.2	2.6	1.6	160	4.0	2.4	1.7
26	4.4	2.3	1.9	71	3.5	2.8	1.3	116	4.3	2.4	1.8	161	4.0	2.4	1.7
27	5.8	2.4	2.4	72	4.2	3.1	1.4	117	4.0	2.1	1.9	162	4.9	2.6	1.9
28	4.3	2.8	1.5	73	4.8	2.7	1.8	118	3.2	3.0	1.1	163	4.2	2.5	1.7
29	3.7	2.7	1.4	74	4.8	2.5	1.9	119	6.0	3.8	1.6	164	4.1	2.4	1.7
30	4.3	2.4	1.8	75	4.1	2.9	1.4	120	5.0	3.2	1.6	165	4.0	2.8	1.4
31	4.8	2.1	2.3	76	4.5	2.5	1.8	121	5.0	3.0	1.7	166	4.6	2.7	1.7
32	4.9	2.5	2.0	77	4.9	2.2	2.2	122	4.0	2.6	1.5	167	4.1	2.6	1.6
33	5.1	3.0	1.7	78	4.0	2.8	1.4	123	4.2	2.9	1.5	168	4.8	2.8	1.7
34	4.7	2.6	1.8	79	4.4	2.1	2.1	124	4.1	2.6	1.6	169	4.8	2.9	1.7
35	4.6	2.8	1.6	80	6.0	3.5	1.7	125	3.8	2.8	1.4	170	4.7	2.6	1.8
36	4.1	2.7	1.5	81	4.2	3.3	1.3	126	4.0	30.	1.3	171	4.0	3.0	1.4
37	4.3	2.8	1.5	82	4.0	2.3	1.7	127	4.6	2.3	2.0	172	3.8	2.4	1.6
38	5.1	3.0	1.7	83	4.0	2.7	1.5	128	5.0	2.9	1.7	173	4.6	3.2	1.4
39	4.2	2.7	1.6	84	4.0	2.8	1.4	129	4.0	2.8	1.4	174	5.0	3.0	167
40	4.8	3.2	1.5	85	5.1	3.1	1.6	130	4.3	3.0	1.4	175	3.8	2.5	1.5
41	4.9	2.4	2.0	86	4.5	2.8	1.6	131	4.0	2.3	1.7	176	38	2.6	1.5
42	5.5	3.3	1.7	87	4.2	2.6	1.6	132	4.8	2.2	2.2	177	4.0	2.1	1.9
43	4.6	3.2	1.4	88	3.8	2.2	1.3	133	5.8	2.7	2.1	178	4.0	2.8	1.4
44	4.8	2.9	1.7	89	4.2	2.1	2.0	134	4.2	3.2	1.3	179	4.5	2.4	1.9
45	5.0	2.9	1.7	90	4.1	2.6	1.6	135	4.0	2.7	1.5	180	4.5	3.3	1.4

表29　炭化米計測値（II）

番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比
181	4.2	2.1	2.0	226	4.5	2.6	1.7	271	4.0	2.6	1.5	316	4.1	1.8	2.3
182	4.6	2.0	2.3	227	5.1	3.0	1.7	272	4.6	2.6	1.8	317	4.0	2.6	1.5
183	5.0	2.8	1.8	228	4.2	2.3	1.8	273	4.0	2.4	1.7	318	4.1	2.8	1.5
184	5.2	2.1	2.5	229	3.6	2.2	1.6	274	4.5	2.8	1.6	319	4.2	2.2	1.9
185	4.8	3.0	1.6	230	4.0	2.1	1.9	275	4.1	2.0	2.1	320	4.0	2.2	1.8
186	4.0	2.8	1.4	231	4.0	2.4	1.7	276	4.2	2.4	1.8	321	4.5	3.0	1.5
187	4.1	2.7	1.5	232	3.8	3.0	1.3	277	3.8	2.6	1.5	322	4.2	3.3	1.3
188	5.5	2.6	2.1	233	4.8	2.8	1.7	278	4.2	2.8	1.5	323	3.8	2.0	1.9
189	4.6	2.7	1.7	234	4.8	3.0	1.6	279	3.8	2.9	1.3	324	3.9	2.1	1.9
190	4.0	3.2	1.3	235	4.0	2.6	1.5	280	4.0	2.7	1.5	325	4.0	2.1	1.9
191	4.1	3.0	1.4	236	3.7	1.9	1.9	281	5.0	2.8	1.8	326	3.8	2.2	1.7
192	4.6	3.7	1.2	237	4.8	2.3	2.1	282	4.5	3.0	1.5	327	3.8	2.6	1.5
193	3.8	2.0	1.9	238	4.5	2.8	1.6	283	4.1	2.2	1.9	328	4.0	2.5	1.6
194	5.3	3.1	1.7	239	4.8	2.2	2.2	284	4.2	4.2	1.0	329	4.0	2.0	2.0
195	3.5	1.8	1.9	240	4.0	2.0	2.0	285	4.1	2.5	1.6	330	3.8	2.1	1.8
196	4.5	2.8	1.6	241	4.2	2.8	1.5	286	3.8	2.3	1.7	331	4.1	2.5	1.6
197	4.0	2.6	1.5	242	3.8	2.2	1.7	287	4.8	2.6	1.8	332	4.2	2.6	1.6
198	5.5	3.2	1.7	243	4.1	2.0	2.1	288	4.2	2.2	1.9	333	5.1	2.1	2.0
199	3.8	3.0	1.3	244	4.3	2.4	1.8	289	4.2	2.9	1.4	334	3.8	1.9	2.0
200	4.0	2.6	1.5	245	4.6	2.7	1.7	295	3.8	1.9	2.0	335	4.0	3.0	1.3
201	4.0	2.7	1.5	246	4.2	2.7	1.6	291	4.1	2.3	1.8	336	4.6	2.6	1.8
202	4.6	2.7	1.7	247	4.5	3.2	1.4	292	4.8	2.1	2.3	337	4.1	2.5	1.6
203	5.0	2.8	1.8	248	3.8	2.8	1.4	293	4.1	2.2	1.9	338	4.5	2.5	1.8
204	4.7	3.3	1.4	249	4.2	3.0	1.4	294	4.0	2.3	1.7	339	4.5	2.6	1.7
205	4.8	2.8	1.7	250	5.1	3.0	1.7	295	4.0	2.2	1.8	340	4.4	2.7	1.6
206	6.0	2.3	2.6	251	4.6	2.4	1.9	296	4.8	2.3	2.1	341	4.7	2.8	1.7
207	4.2	2.8	1.5	252	5.1	3.1	1.6	297	3.8	2.1	1.8	342	4.0	3.0	1.3
208	4.3	2.7	1.6	253	4.5	2.6	1.7	298	3.8	2.8	1.4	343	4.3	2.0	2.2
209	4.0	2.5	1.6	254	4.5	2.6	1.7	299	3.8	2.1	1.8	344	3.8	2.5	1.5
210	4.2	2.2	1.9	255	4.0	3.6	1.1	300	4.4	2.6	1.7	345	4.2	2.3	1.8
211	5.0	2.6	1.9	256	5.0	3.0	1.7	301	4.0	2.1	1.9	346	4.4	2.2	2.0
212	4.5	2.5	1.8	257	4.2	2.2	1.9	302	3.8	2.1	1.8	347	4.2	1.9	2.2
213	4.2	2.3	1.8	258	4.0	2.4	1.7	303	4.0	2.3	1.7	348	4.6	2.1	2.2
214	4.0	2.0	2.0	259	4.4	2.8	1.6	304	5.1	3.1	1.6	349	3.9	2.4	1.6
215	4.2	3.0	1.4	260	4.0	2.1	1.9	305	3.6	2.8	1.3	350	3.8	2.3	1.7
216	4.0	2.3	1.7	261	3.6	2.5	1.4	306	4.0	2.5	1.6	351	4.7	2.5	1.9
217	3.4	2.0	1.7	262	4.5	2.5	1.8	307	4.0	2.1	1.9	352	3.2	2.1	1.5
218	3.8	2.3	1.7	263	4.0	2.2	1.8	308	4.2	2.8	1.5	353	3.9	3.2	1.2
219	4.0	2.1	1.9	264	4.2	2.5	1.7	309	3.5	2.5	1.4	354	4.0	3.0	1.3
220	3.8	2.2	1.7	265	3.9	2.6	1.5	310	4.2	2.6	1.6	355	4.0	2.2	1.8
221	4.2	2.6	1.6	266	3.8	2.2	1.7	311	4.3	2.6	1.7	356	4.0	2.1	1.9
222	5.0	3.0	1.7	267	4.2	3.0	1.4	312	4.2	2.1	2.0	357	3.8	2.0	1.9
223	5.0	2.8	1.8	268	3.3	3.0	1.1	313	4.2	2.5	1.7	358	4.0	2.0	2.0
224	4.1	2.6	1.6	269	4.5	3.0	1.5	314	4.0	2.7	1.5	359	3.7	2.2	1.7
225	4.0	2.7	1.5	270	5.8	2.5	2.3	315	4.2	2.9	1.4	360	4.1	2.1	2.0

表30　炭化米計測値（III）

番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比
361	4.0	2.5	1.6	406	4.2	2.8	1.5	451	4.5	2.6	1.7	496	3.5	2.2	1.0
362	3.6	2.1	1.7	407	3.8	2.4	1.6	452	4.0	2.1	1.9	497	4.0	2.1	1.9
363	4.8	2.1	2.3	408	3.8	2.7	1.4	453	4.0	2.2	1.8	498	4.2	2.3	1.8
364	4.0	2.8	1.4	409	4.0	2.1	1.9	454	4.3	2.1	2.0	499	4.3	2.0	2.1
365	4.0	2.0	2.0	410	4.0	2.2	1.8	455	4.6	2.2	2.1	500	3.5	2.1	1.7
366	4.0	2.0	2.0	411	4.0	2.0	2.0	356	4.0	2.1	1.9	501	4.5	2.4	1.9
367	4.0	2.8	1.4	412	3.8	2.3	1.7	457	4.2	2.7	1.6	502	4.0	2.0	2.0
368	3.8	2.2	1.7	413	3.9	2.4	1.6	458	4.1	2.	1.6	503	4.1	2.2	1.9
369	4.0	2.0	2.0	414	3.9	2.2	1.8	459	3.8	2.3	1.7	504	4.2	2.0	2.1
370	3.8	2.2	1.7	415	4.0	2.0	2.0	460	3.8	2.2	1.7	505	3.3	2.1	1.6
371	5.0	3.4	1.5	416	4.2	3.0	1.4	461	4.0	2.1	1.9	506	5.0	2.8	1.8
372	4.4	2.6	1.7	417	3.7	2.1	1.8	462	3.8	2.4	1.6	507	4.1	2.1	2.0
373	4.0	2.5	1.6	418	4.0	2.0	2.0	463	3.9	2.1	1.9	508	3.8	2.1	1.8
374	4.2	2.2	1.9	419	4.5	2.5	1.6	464	4.2	2.8	1.5	509	3.8	2.8	1.4
375	5.8	3.0	1.9	420	3.9	2.6	1.5	465	3.8	2.9	1.3	510	4.0	2.2	1.8
376	4.5	2.7	1.7	421	4.1	2.5	1.6	466	4.0	2.2	1.8	511	3.4	2.5	1.4
377	4.7	3.2	1.5	422	4.0	2.1	1.9	467	4.5	2.7	1.7	512	4.0	2.2	1.8
378	4.2	2.2	1.9	423	3.9	2.2	1.8	468	4.2	2.5	1.7	513	3.3	2.5	1.3
379	4.0	2.6	1.5	424	4.2	2.3	1.8	469	4.3	2.2	2.0	514	4.0	2.8	1.4
380	3.8	2.1	1.8	425	3.8	3.0	1.3	470	4.2	2.3	1.8	515	4.1	2.6	1.6
381	4.0	2.8	1.4	426	4.1	2.1	2.0	471	4.6	2.8	1.6	516	3.8	2.3	1.7
382	3.7	2.0	1.9	427	4.1	2.1	2.0	472	4.0	2.8	1.4	517	3.8	2.0	1.9
383	4.2	2.2	1.9	428	3.5	2.1	1.7	473	4.0	2.6	1.5	518	4.1	2.6	1.6
384	4.0	2.1	1.9	429	4.0	2.9	1.4	474	4.0	2.5	1.6	519	3.8	2.3	1.7
385	4.0	2.1	1.9	330	3.6	2.3	1.6	475	3.7	2.1	1.8	520	4.2	2.1	2.0
386	4.1	1.9	2.2	431	4.2	2.6	1.6	476	3.7	2.0	1.9	521	3.3	2.1	1.6
387	4.2	2.0	2.1	432	3.9	2.5	1.6	477	4.1	2.2	1.9	522	4.1	2.4	1.7
388	3.0	2.0	1.5	433	3.9	2.4	1.6	478	4.0	2.4	1.7	523	4.0	2.1	1.9
389	4.7	3.0	1.6	434	4.5	2.0	2.3	479	4.4	2.0	2.2	524	4.1	2.0	2.0
390	4.5	2.2	2.0	435	4.7	2.1	2.2	480	3.9	2.1	1.9	525	3.5	2.1	1.7
391	4.0	2.7	1.5	436	4.4	2.1	2.1	481	3.4	2.0	1.7	526	3.4	2.8	1.2
392	4.6	2.2	2.1	437	3.9	2.0	2.0	482	4.0	2.5	1.6	527	4.1	2.4	1.7
393	4.0	2.2	1.8	438	4.0	2.3	1.7	483	4.1	3.2	1.9	528	3.5	2.1	1.7
394	4.5	2.9	1.6	439	4.0	2.5	1.6	484	4.4	2.5	1.8	529	3.9	2.8	1.4
395	4.8	3.2	1.5	440	3.7	2.0	1.9	485	4.2	2.1	2.0	530	3.9	2.8	1.4
396	4.0	3.0	1.3	441	4.0	2.5	1.6	486	4.0	2.2	1.8	531	3.8	74	1.6
397	4.0	3.0	1.3	442	4.6	2.2	2.1	487	3.8	2.1	1.8	531	3.5	2.2	1.6
398	4.0	2.6	1.5	443	4.0	2.6	1.5	488	4.1	2.1	2.0	533	4.0	2.0	2.0
399	4.0	2.6	1.5	444	3.7	2.2	1.7	489	4.0	2.2	1.8	534	3.6	2.8	1.3
400	4.2	2.7	1.6	445	4.8	3.0	1.6	490	3.8	2.0	1.9	535	4.0	2.1	1.9
401	4.5	2.8	1.6	446	4.7	2.8	1.7	491	3.5	2.1	1.7	536	4.1	2.4	1.7
402	4.6	2.6	1.8	447	461	3.2	1.3	492	4.2	2.0	2.1	537	4.1	2.4	1.7
403	4.8	3.0	1.6	448	4.0	2.6	1.5	493	4.1	2.5	1.6	538	4.0	2.2	1.8
404	4.2	3.0	1.4	449	4.0	2.0	2.0	494	4.9	2.2	1.8	539	4.0	3.0	1.3
405	4.0	3.3	1.2	450	4.2	2.8	1.5	495	4.2	2.1	2.0	430	4.1	2.8	1.6

表31　炭化米計測値（Ⅳ）

番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比	番号	長さ	幅	長幅比
541	4.0	2.2	1.8	584	4.0	2.2	1.8	627	4.2	2.1	2.0	670	3.5	2.0	1.8
542	3.8	2.2	1.7	585	4.0	2.4	1.7	628	3.2	2.0	1.6	671	4.5	2.5	1.8
543	3.5	2.1	1.7	586	3.2	2.1	1.5	629	3.8	2.2	1.7	672	4.0	2.0	2.0
544	3.6	2.2	1.6	587	4.2	2.3	1.8	630	4.2	2.1	2.0	673	4.0	1.8	2.2
545	3.8	2.2	1.7	588	3.3	2.0	1.7	631	3.5	2.7	1.3	674	3.6	2.2	1.6
546	4.0	2.8	1.4	589	4.0	3.2	1.3	632	4.0	2.4	1.7	675	4.1	1.9	2.2
547	3.8	2.2	1.7	590	3.1	2.0	1.6	633	3.1	2.2	1.4	676	5.0	3.0	1.7
548	4.5	2.8	1.6	591	3.5	2.2	1.6	634	3.5	2.1	1.7	677	5.3	2.8	1.9
549	4.2	2.7	1.6	592	4.0	2.4	1.7	635	4.1	2.3	1.8	678	6.0	2.4	2.5
550	3.8	1.9	2.0	593	3.7	2.4	1.6	636	4.5	1.9	2.4	679	5.8	3.0	1.9
551	4.0	2.7	1.5	594	3.5	1.8	1.9	637	4.6	2.0	2.3	680	4.2	2.5	1.7
552	4.4	2.2	2.0	595	3.0	2.0	1.5	638	3.8	2.0	1.9	681	5.5	3.0	1.8
553	4.2	3.0	1.4	596	3.8	1.8	2.1	639	3.1	2.2	1.6	682	6.1	3.2	1.9
554	4.0	2.0	2.0	597	4.2	3.0	1.4	640	3.8	2.0	1.9	683	5.1	3.1	1.6
555	3.9	2.8	1.4	598	3.2	1.9	1.7	641	3.6	2.0	1.8	684	5.5	3.2	1.7
556	4.0	2.0	2.0	599	3.5	2.7	1.3	642	3.7	1.9	2.6	685	7.1	3.5	2.0
557	4.0	3.0	1.3	600	3.9	2.5	1.6	643	3.5	2.2	1.6	686	5.8	3.5	1.7
558	3.8	2.7	1.4	601	4.2	2.7	1.6	644	4.6	2.5	1.8	687	4.5	3.2	1.4
559	3.7	2.1	1.8	602	4.1	2.3	1.8	645	3.3	2.1	1.6	688	6.0	3.1	1.9
560	3.2	2.2	1.5	603	3.9	2.2	1.8	646	3.8	2.0	1.9	698	4.9	2.7	1.8
561	3.6	2.1	1.7	604	3.9	2.1	1.9	647	3.9	1.9	2.0	690	4.5	2.8	1.6
562	4.0	2.2	1.8	605	4.2	2.5	1.7	648	3.6	2.0	1.8	691	4.9	2.1	2.3
563	3.8	2.0	1.9	606	4.4	1.9	2.3	648	3.3	2.0	1.7	692	4.2	2.7	2.4
564	3.5	2.0	1.8	607	3.6	2.2	1.6	650	3.9	3.2	1.8	693	5.0	3.1	1.6
565	5.0	2.8	1.8	608	4.5	2.8	1.6	651	3.9	2.0	2.0	694	4.8	3.0	1.6
566	3.6	2.1	1.7	609	3.1	2.5	1.2	652	4.2	2.1	2.0	695	6.0	3.2	1.9
567	5.0	1.9	2.6	610	3.8	2.3	2.3	653	3.3	2.0	1.7	696	4.8	2.8	1.7
568	4.1	2.2	1.9	611	3.7	2.2	1.7	654	3.1	2.0	1.6	697	4.7	2.7	1.7
569	3.2	2.4	1.3	612	3.8	2.2	1.7	655	3.5	2.1	2.4	689	5.8	3.1	1.9
570	3.5	2.5	1.4	613	3.3	3.0	1.1	656	3.6	2.1	1.7	699	5.5	3.0	1.8
571	3.8	2.6	1.5	614	3.7	3.0	1.2	657	4.0	2.8	1.4	700	6.2	3.2	1.9
572	3.3	2.6	1.3	615	3.5	2.4	1.5	658	3.0	2.0	1.5	701	5.5	3.0	1.7
573	4.0	2.9	1.4	616	4.2	2.3	1.8	659	3.6	1.9	1.9	702	4.0	2.5	1.6
574	4.2	2.7	1.6	617	4.0	2.0	2.0	660	3.8	2.0	1.9	703	4.8	2.6	1.8
575	4.0	2.2	1.8	618	4.2	2.0	2.1	661	3.5	2.5	1.4	704	4.8	3.1	1.5
576	3.9	2.0	2.0	619	3.8	2.0	1.9	662	4.0	2.0	2.0	705	4.3	2.8	1.5
577	4.2	2.1	2.0	620	4.0	2.1	1.9	663	4.0	2.0	2.0	706	4.5	3.2	1.4
578	4.1	2.8	1.5	621	4.0	2.0	2.0	664	3.5	2.2	2.3	7.7	5.0	3.0	1.7
579	3.8	2.4	1.6	622	4.0	2.2	1.8	665	4.0	2.6	1.5	708	5.1	3.0	1.7
580	4.8	2.2	2.2	623	3.8	2.1	1.8	666	3.8	2.1	1.8	709	5.0	2.9	1.7
581	4.0	2.0	2.0	624	3.5	2.1	1.7	667	3.3	2.2	1.5	710	4.8	2.7	1.8
582	3.8	1.9	2.0	625	3.8	2.0	1.9	669	3.8	2.1	1.8	711	4.9	3.1	1.6
583	3.8	2.0	1.9	626	3.6	262	1.6	669	3.5	2.0	1.8				

Ⅳ まとめにかえて

宍道湖の朝はシジミ掻きではじまる。その宍道湖へ注ぐ朝酌川中流域にある西川津遺跡海崎地区の発掘調査が開始されたのは昭和58年の初夏。雨上りの空に描かれた虹が水面に映り、水鳥の声が聞こえ、岸辺の草叢からはイタチに追われたノウサギが飛び出した。それまで若干の弥生土器と石器しか採集されておらず、遺物散布地としてしか認識されていなかった海崎地区の静かな田園風景の中に、ユンボーやトラックが走り、ベルトコンベアーの音が反響した。

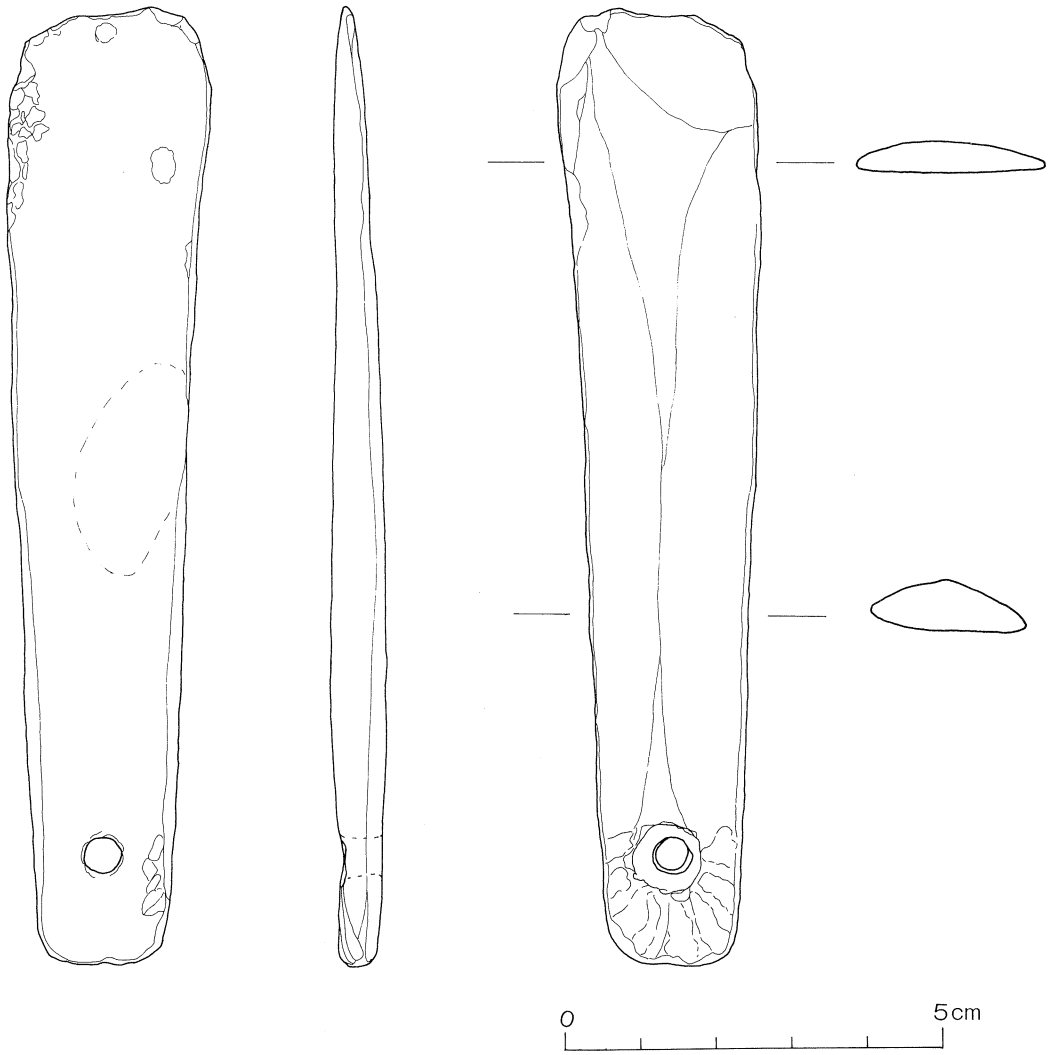
あれから6年、ここに西川津遺跡海崎地区の調査の概要を一応完成させることができた。この間には松江市大草町の岡田山1号墳出土太刀に「額田部臣」の銘文が発見されたり、簸川郡斐川町の荒神谷遺跡からは本遺跡とも時代を同じくする銅剣・銅鉾・銅鐸が多量に出土するなど、出雲のみならず日本の原始・古代史研究上大きな発見があった。しかし、西川津遺跡海崎地区に最も関係の深かったのは宍道湖の淡水化延期という出来事であったろう。なぜなら、宍道湖の淡水化は中海・宍道湖周辺に住む人々にとって、淡水化推進にしろ中止にしろ重要な歴史的選択であったと思われるが、西川津遺跡を残した弥生人達も現代に宍道湖のシジミ掻きをはじめとする漁で生活する人々と、時の流れをこえ宍道湖という生活の糧を共有していたことが知られるからである。

その頃の宍道湖は、現在の島根大学前あたりまで入りくんでおり、河口より少し奥まった海崎地区に弥生人達は居の中心を構えたようだ。彼らは今日と同じように、海水と淡水の程良く混ざり合った汽水湖となった宍道湖に出てシジミ掻きを行うのが生活上重要な日課となっていた。旧朝酌川岸に検出された海崎地区

第185図　宍道湖のシジミ漁

弥生人の残した貝塚が基本的にはヤマトシジミで形成されていたことがそれを物語っている。その貝塚からは淡水、汽水、そして外洋に生息する魚介類や陸上動物の残滓と、それを捕獲した様々な漁撈・狩猟具が出土したばかりでなく、炭化米とともに木製農耕具も多量に発見され、西川津遺跡海崎地区の弥生人の生活の具体的な姿がかなりはっきりとしたかたちで浮かび上がってくるようになった。

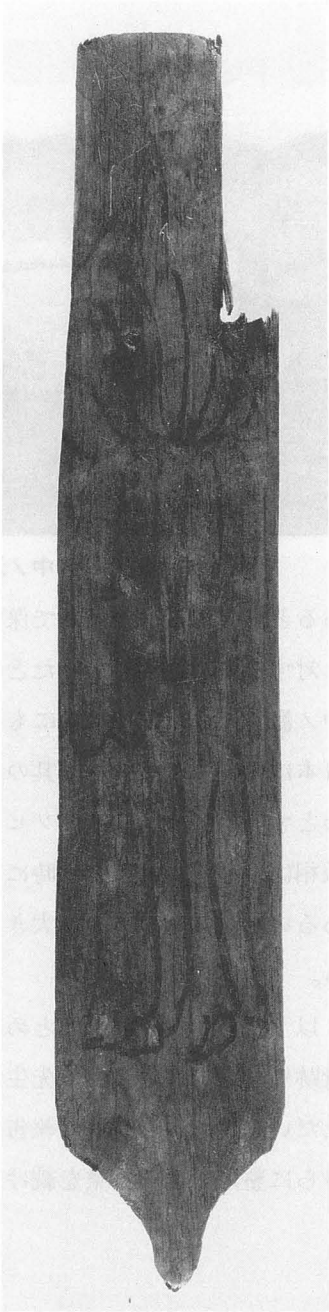
このように西川津遺跡と条件を同じくするところは、中海・宍道湖岸の所々に見出すことができるが、そこには未だ発見されていない同様な遺跡がいくつか存在すると思われる。第186図は昨年、本遺跡にほど近い松江市立川津小学校5年生原康幸君によって八束郡玉湯町の宍道湖岸で採集された鯨骨製のアワビオコシ、もしくは裁縫用のヘラの可能性があ



第186図　参考資料：玉湯町採集アワビオコシ？

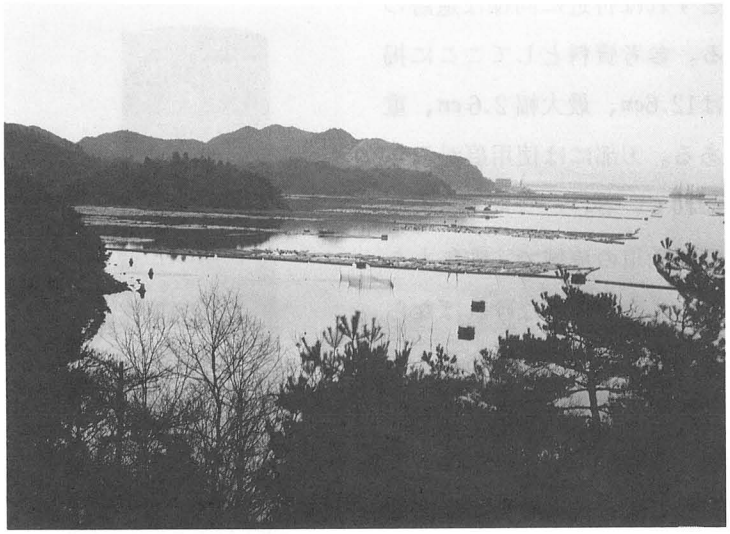
るものであるが、仮に前者とすれば付近に同様な遺跡の存在を推測させる資料である。参考資料としてここに掲げておくことにした。長さは12.6㎝、最大幅2.6㎝、重量は20.6㌘を測るヘラ状である。刃部には使用痕がみられ、握りの端には小孔が穿たれている。

西川津遺跡に関連して同じ朝酌川の流域で、昨年もう一つ重要な発掘調査がなされたことをあげなければならない。それは海崎地区の下流約1.5㎞の位置にあるタテチョウ遺跡である。このタテチョウ遺跡付近は弥生時代以降、近世の新田開発の時期まで朝酌川の河口となっていたところであり、昨年の調査では古代〜中世にかけての溝状遺構が検出された。西川津遺跡海崎地区の報告書1（『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ（海崎地区1）』島根県教育委員会　昭和62年3月）では、タテチョウ遺跡の付近に古代には「寺院や官衙」、中世には「市」といった何らかの公的施設の存在したことを、その「遺跡の位置と歴史的環境」の項において推定してきた。タテチョウ遺跡からは以前より布目瓦片や「驛」と墨書した須恵器が出土していたが、この度の調査では平安時代頃と考えられる「満」の字をスタンプした須恵器の坏や石帯、人物を描いた木製の人形（第187図）、天正年間の墨書のある木札や多量の漆品類等が発見され（柳浦俊一・大谷祐司「タテチョウ遺跡発掘調査略報」『季刊文化財第62号』島根県文化財愛護協会誌　昭和63年3月）、先の推定を裏打ちする結果となった。このことは西川津遺跡の調査の中で文献史学と協力することによって得ることのできた重要な成果の一つと考えている。これらのことも、今後朝酌川流域の発掘調査が進めば自ら明らかになっていくことであろう。



第187図　タテチョウ遺跡
出土呪詛札（長さ28.6㎝）

西川津遺跡海崎地区の発掘調査で、この遺跡から出土した農耕具をはじめとする多量の木製品が他地域から持ち運ばれたのではなく、当遺跡において原木から加工し使用・破損



第188図　中ノ海の水中貯木場

するまでの各過程を復元することのできる資料を得られたことも大きな成果であった。どうやら農耕具類と容器類ではその原木の種類や未成品の保管方法には違いがあるようだが、両者とも水中において貯木したらしいことが判ってきた。水中で貯木するのは石器による加工ができやすいこともあると思われるが、陸上で保管する時に生ずる気温の変化による割れを防いだり、害虫等に対する燻蒸効果があったと考えられよう。このような水中での貯木は今日も境港に近い中ノ海北岸の水中貯木場にも引き続がれてきている（第188図）。中ノ海の水中貯木場には日本において建築材や家具の材料となる松・杉・白樺・黄蘗、柳等がインドネシアをはじめとする南洋の国々や、ソビエト連邦等より輸入され保管されている。その国際性豊かな様相は、黒潮が北上する時に出会う島根半島の内湾に存在している西川津遺跡の、西日本あるいは東アジアという大きな視点での歴史的位置付けを考える時に極めて示唆的である。

以下、西川津遺跡のまとめにかえて、海崎地区の報告書１（前掲）で果し得なかった本遺跡について、お二人の先生からそれぞれの専門的立場でマクロな位置づけを行なっていただいた。西川津遺跡の報告は本報告書で終了したのではなく、これらの研究を踏まえ、さらに整理・報告作業を続けていきたいと考えている。

1　西川津遺跡出土漁具の文化史的背景

渡　辺　　誠（名古屋大学文学部）

1. はじめに

西川津遺跡出土の漁具の背景を、日本列島ばかりでなく、中国・朝鮮半島にまで視野を広げて、その文化史的な位置づけを試みることにする。まず全体としてもっとも顕著な特徴は、非常に多様性に富んでいるということである。この多様性の内容については二つの側面があると思う。

第一は非常に漁具の種類が豊富で、多種多様な漁業が行われていることである。具体的には釣漁が盛んで、ヤスなどの刺突漁業もあり、網漁も盛んである。

第二の特徴は、それらを個別にみていくと、縄文文化の伝統をひいているもの、弥生時代になって入ってくるもの、あるいはその折衷的なものなどがあり、文化史的にも非常に複雑な様相を示しているということである。時間的な関係からいえば、もちろん縄文文化がベースにあるのだから、具体的には弥生文化がどのように形成されていくかということで、ある意味では非常に典型的な日本文化の形成プロセスのパターンを見せてくれているということでもある。このように内容が豊かで多様性に富んでいるというところが、西川津遺跡出土漁具の非常に大きな特徴ではないかと思う。

2. 漁網錘

まず、網漁から検討することにする。西川津遺跡の網の錘は言うまでもなくパイプ状の管状土錘が主になっている。これはやはり弥生時代または縄文終末期に、中国北部から朝鮮半島を経て日本に入ってくるもので、決してそれ以前にあるものではない。

しかし、日本に網漁そのものがなかったのではなく、第189図に示したように東関東の霞ケ浦周辺を中心に、縄文中期から土器片を廃物利用した土器片錘が非常に発達する。西川津遺跡でもたくさん骨が検出されているような、主にクロダイやスズキなどの内湾河口性の魚類を主にとるために、土器片錘を用いた網漁が非常に発達する。これが内湾の遠浅の砂質の海岸で使われている時には土錘でいいのであるが、中部地方から西日本へ伝播してくるにしたがって石錘へと変化する。

京都府下には中期の後半に、土器片錘から変わった切目石錘が伝わってくる。これは河川でも使われるようになるため、川の底が砂利質になるので、土器片では割れてしまうた

め、手頃な大きさの河原石にスリットを入れて、それで切目石錘というのを作るようになる。後期中葉には西日本一帯に及んで、それがさらに間接的に沖縄まで影響することとなる。沖縄では大きな川がないので、河川礫はあまり無い。それではもともとの土器片錘などを使えるかというと、サンゴ礁では割れてしまうということで貝錘に変わる。

貝錘には多種のシャコガイなどが使われる。亜熱帯地域の貝は、たとえばハマグリなどと違って殻が厚く、重くて錘に向いている。また白くキラキラ光るので、魚の脅しにも使える。またサンゴ礁の底にぶつかってガラガラ音をたてるということで、色の面でも音の面でも脅しになる。

以上のように縄文中期から後期になると網漁業が活発な形で西日本に伝播してくる。それを西川津はじめ西日本の弥生時代の網漁の前提条件として、まず確認しておく必要がある。私達が調査した鳥取市の桂見遺跡や布勢遺跡でも、やはり切目石錘は縄文後期にたくさん出土している。

それに対して中国新石器時代の漁網錘はタイプが違う。中国の北部と南部では新石器文化の内容も違う。北は畑作地帯で、南は米作地帯であり、漁網錘も北部と南部では違う。北部は管状土錘である。これは笹などに粘土塊をつけていって必要な大きさに切ればいいのだから、非常に合理的なタイプで、必要な大きさ、必要な重さのものを簡単に作ることができる。それが現代に至るまで、中国・韓国・日本でも主流になる。一方揚子江流域の方は、私が揚子江型土錘・石錘とよんでいるタイプがある。これはほとんど日本には入ってきていないといっていいくらいである。1遺跡1個出土しているようなものを、九州などで一生懸命さがしても、10遺跡あるかないかぐらい少ないものである。そういうことも、稲作の揚子江流域からの直接的な日本への伝播が考えにくいということの、一つの客観的な材料になる。この稲作が山東半島まで北上し、それから遼東半島ないしは平壌平野のあたりに伝わって、それがさらに南下して朝鮮半島南部から北九州に伝わるのではないかと考えられるが、その時にこの管状土錘も一緒に伝播したと考えられる。

それでは中国北部でこの管状土錘がいつから出てくるかというと、意外と新しい。大まかに縄文中期に相当する時期に、それ以前の仰韶文化と以後の龍山文化の中間に位置する大汶口文化段階から管状土錘が出現する。

中国北部の黄河流域で生まれた管状土錘が、弥生時代に入り日本へも稲作と一緒に伝わり、それが西川津遺跡などでもみられるのである。それがすぐに縄文時代の切目石錘にとってかわって、漁網錘といえば最初からこのパイプ状の管状土錘であるように思われているが、ルーツを探れば中国の新石器時代へつながるもので、日本列島では弥生時代から

である。しかし、決してここではじめて網漁が伝わるということではない。網漁業そのものは日本列島の中で縄文中期の段階に特に発達して、後期になるとそれが西日本にも及んでくる。その錘の形だけが大陸から伝わった管状土錘に変わる。したがってこの管状土錘というのは、ちょうどその縄文と弥生の折衷的な要素というように考えられる。

沖縄では盛本勲氏の最近の研究で、縄文時代にも貝錘が非常に発達しているということがわかってきた。近代になって土錘が導入されたが、サンゴ礁で割れて使いものにならず定着しなかった。そういう地域なので、南島を経由して管状土錘が入るということはない。したがって一層稲作が伝わったルートと、この管状土錘が伝わったルートとは重なってくるということになる。

しかしながら弥生時代の管状土錘の良好な報告例は少ない。西川津遺跡の場合には幸いにきちんと報告されているので重要な資料となるが、西日本でこの管状土錘が弥生時代の各時期に、どの位の重さのものが出土しているかということ、これは網の規模に関係あるのであるが、そういうことを考える時に使える材料というのはほとんど無い。これはあえていうと、私共はお金にならない仕事をしているはずなのだが、本当に儲からない仕事に徹底しているかとなるとはなはだ疑問だと思う。この管状土錘のようなものは銅鐸などと異なり、いくら調べても本屋から原稿を頼まれるしろものでもなんでもないわけで、実は研究している人は誰もいない。考古学が一見華やかにみえながら、どこかで歪んでいることの一つの例ではないかと思う。

3. ヤ　ス

その次にたくさん出ている鹿や猪の足の骨を割いて作っているヤスも、縄文前期をピークとする縄文海進で非常に内海の広がった東関東地方で、縄文後期から特に発達した漁具である。内湾型漁業の代表的な漁具である。中期に網漁業が非常に発達して土器片錘が使われる。後期になるとそれに加えてヤス漁が非常に盛んになる。それが東海地方を経て西日本へも及んでくる。これは中期から後期にかけての東から西への大きな文化的な流れ（磨消縄文の展開と一致する）の一貫である。

もともとヤス漁ぐらいのことは特別なことではない。しかし活発化するのは後期からである。西川津遺跡でも早期から骨製のヤスが出ているのだから、あちこちで萌芽的に行われていたものが、特にまとまった形で発達する時期が縄文後期である、と考えていただけたらいいわけである。

だいたいにおいて、網漁の盛んなところはヤス漁も盛んだというふうにみていいと思

う。捕っている魚もだいたい同じで、スズキとかクロダイなどである。特に東関東の貝塚では、このヤスがセットになって使われていた様子のよくわかることがある。タイなどと違ってスズキはエラ蓋が5㎜位あって厚いもので、そこを突き刺したヤスの穴から、3本単位だということがわかることがある。

エイの棘の基部を加工してヤス頭にしているヤスが、西川津遺跡でも出土しているが、それには糸の跡が片側にだけついているので、やはり2本ないし3本セットになって糸で巻かれていた痕跡ではないかと考えられる。こういうエイの棘を使ったヤスは韓国でも出ている。エイのギザギザの所を利用して土器の文様をつけたりしている例もある。比較的各地でみられる漁具である。

4. 釣　針

西川津遺跡の中で一番特徴的なのはやはり釣針である。この釣針には2種類あり、一本作りの単式釣針と、二つに分かれる結合釣針との2種類に大別される。

さらに単式釣針は7種に分かれる（第190図）。かえしのない第1類、外側につく2類、中側につく3類、両方につく4類、軸の方と針の方と両方にみられる5類。この第5類は仙台湾周辺にごく数点しか出土してなかったのが、西川津で2点も出ているので驚いた。軸の方にもついているので、軸あぐ釣針と呼んでいる。第6類は錨形、第7類が逆T字形である。これは実際餌をつけると一直線になる。だから、遠くから見ていると糸だけ垂らして魚を釣っているようにみえる。周の太公望が釣魚台の上で糸だけ垂らして魚を釣っていたというのは、実際は糸ではなくて、その糸のように見えている針がえさのなかに隠れているということである。これは山東半島、遼東半島などの中国東北部に多いタイプで、日本でも北海道から沖縄までの間に若干点々とみられる。

単式釣針は縄文時代草創期からみられる。この釣針はヨーロッパでは後期旧石器時代からあり、日本では縄文時代からなので、今の資料に忠実にいえばヨーロッパからシベリアのタイガ地帯を通って日本列島に伝わるというのが一つの見方である。しかし資料の、残っている所はごく限られているので、シベリアあたりに架空の中心地があってそこから東や西に行くという可能性を考えておきたいと思う。世界的にみれば後期旧石器時代は非常に大きな発達をみた段階であって、それまで人類の棲息域は中緯度までであったのが、寒冷地適応を遂げて旧大陸の高緯度地方まで住めるようになった。そしてベーリング海峡を経由して新大陸まで人類が進出するようになったということで、前期旧石器時代、中期旧石器時代と後期旧石器時代との間には非常に大きな文化的な開きがある。むしろそれは縄

文時代と旧石器時代の開きより大きいのではないかと思えるぐらいである。日本列島の中で遺跡が増え始めるのも後期旧石器時代からである。寒冷地で人が暮らすためにはいろいろな技術が発達する。どうもシベリアがそういった重要な地域というふうに考えられる。そういう地域から北回りか南回りかわからないが、とにかく日本列島にこの釣針が入ってくる。そして各地より点々と出土している。

たとえば西日本では、西日本の縄文・弥生の釣針のリスト（表32）をみていただいたらわかるように、縄文の早期に帝釈峡で2例出土している。それから前期・中期とも若干みられる。しかし縄文後期になると圧倒的に釣針が増える（第191図、第192図）。これは東日本からの影響と言わざるを得ない。土器片錘でも釣針でも早期からあり、大陸から入ってきたのは古い。それが大規模に発達する段階は中期からで、釣針の場合には東北地方の仙台湾を中心にした地域においてである。リアス式海岸の発達した地域であり、マダイ・カツオ・マグロなどを捕るために釣針が非常に発達する。そういう二次センター的な仙台湾を中心に釣針が発達する。それが後期になると西日本にも及んでくる。そして関東地方中心の土器片錘を主にした網漁と、東北で発達した釣漁などが西日本へは合体して伝播してくるということになる。それは重要な大きな文化史的な流れであり、この西川津遺跡の単式釣針に関しても、そのような縄文文化の伝統の上に位置しているのである。

それに対して結合釣針も7種類ある（第193図）。なぜ結合釣針を作るかというと、第1は材料不足のため、第2は大型化するためである。赤御堂（あかみどう）型は縄文早期の青森県から南関東にみられ、これは材料不足の段階である。

これに関連して単式釣針の作り方をみてみると、大型化するには結合式になるということがわかる。単式釣針が最初大陸から入った段階では、シカとかイノシシの足の骨を割いて板状に作って、それをくり抜いて作っている。その他にイノシシのオスの牙の琺瑯質の部分を使うことがある。西日本にはそれが比較的多い。西川津の場合でもイノシシの牙を使った単式釣針が出ている。それらはシベリアと同じ作り方である。四角い板を作って真中に穴を開け、そこからしだいに穴を開いていく。そういう作りかけの例も西川津遺跡には1例みられた。

それが縄文前期になると東北南部の磐城から南関東にかけて、シカの角を使うようになる。シカの角を同じように輪切りにして、その表面の凸凹のところを削り、内側の髄のところをはずすようにして板を作って釣針を作る。ここに一つ転換期がある。鹿角を使うということは世界的にみても例外的なことであって、しかも日本列島の中でも関東・東北に特徴的なことで、決して日本列島に普遍的なことではない。これが縄文の後期になって西

日本に及んでもシカの角の釣針を使う場合と、イノシシの牙などを使う場合とがみられるということになる。

そして縄文中期の中頃になると仙台湾を中心に磐城海岸から三陸にかけて、特にこの釣針のサイズが中型に加えて大型も多くなる（3～5㎝を中型、5～7㎝を大型とする）。釣針がたくさん出る貝塚からは、沿岸底棲魚のマダイ、初夏に北上してくる回遊漁のカツオやマグロの骨がたくさん出土する。

アユのような小さい川魚が釣れるようになるのは、12～13世紀からである。鹿角製釣針が鉄製品に変わるのが弥生時代の後期であるが、サイズは縄文的で、太さも4～5㎜位である。それが2㎜位に急に細くなるのが玄海灘を中心にした地域の6世紀後半で、さらに1㎜という細さになるのは12～13世紀である。その段階ではじめてアユなどを釣れるような釣針が出現するということになる。

縄文時代から弥生時代にかけての釣針は、大型魚を対象にしている点に大きな特徴がある。そのなかで東日本の場合にはよりマグロ漁に比重がかかっていく。これは理由のあることで、マダイの保存性は鯛の浜焼が限度である。これに対しカツオ、マグロは燻製品として非常に交換価値の高いものである。その中でもマグロに比重がかかるのは、マグロは体長が全然違うからである。だからマグロを集中的にとろうと思ったら、結合釣針を作るしかない。それが三陸で発達した大洞型や、磐城で発達した寺脇型という結合釣針である。

5. 西九州結合釣針の意義

東日本ではマグロ漁用に結合釣針が発達するが、それとはまったく別に、西北九州には朝鮮半島系の結合釣針がある。この西北九州型の結合釣針が西川津遺跡でも出土している。そのルーツはオサンリ型と呼ばれる韓国の結合釣針である（第194図）。

最初は単式釣針が日本列島へ伝わってくる。第2段階は朝鮮半島から西北九州にだけ、このオサリン型結合釣針が入ってくる。韓国の場合には軸がスレート製、針が骨製である。これが日本列島へ入ると西川津遺跡でみられるように、軸はシカの角で、針はイノシシのオスの牙に変わる。このオサリン型は日本の縄文早期に相当する韓国の早期の段階からすでにある。日本には一段階ずれて前期から入ってくる。

この前期に意味がある。なぜかというと、前期は櫛目文土器の段階である。その櫛目文土器が日本へ伝播した場合は曽畑式土器に変わる。これはシベリアのタイガ地帯に発達した櫛目文土器の流れであって、縄文土器とは決定的に違うことが一つある。縄文土器は平

底で上の方に文様帯がかたよっている。下の方は地文の縄文や条痕があるだけであるが、櫛目文土器とか曽畑式土器は、底部にも文様があるのが特徴的である。曽畑式土器でも底部に沈線文が、口縁部文様帯と同じように描かれている。要するに文様帯構成が全然違う土器群なのである。西北九州に櫛目文土器が入り曽畑式土器が変化するその時期に、この結合釣針が入ってくる。

この結合釣針は従来縄文後期ぐらいにしか分かっていなかったが、初期の水田跡が出たということで有名な唐津市菜畑遺跡のその下層に縄文前期の層もあって、イノシシの牙で作った結合釣針の針が4本出土し、前期まで溯ることがわかった。中期はつながらないが、後期になると山口県から熊本県までの各地でたくさんみられるようになる（第195図、第196図）。そのうえ菜畑遺跡では軸の方の未完製品が弥生の前期にもみられる。また同市の柏崎貝塚から猪牙製の針が出土している。西北九州型結合釣針のルーツは韓国にあるわけだが、日本化する時に材質が変わるために、結合の仕方も違ってくる。そのうえイノシシのオスの牙で作った針が逆に韓国へも行っている。間違いなく西北九州のものが向こうへ渡っている。したがって分布上は対島から慶州南道南部までの地域で、両者が混在していることが明らかである。

さらに重要なことは、この西北九州と韓国南部とは非常に密接な関係を持っていたことを示すもう一つ別な漁具がある。九州では石鋸（いしのこ）という黒曜石を鋸の刃のように鋭くした結合式の銛がある（第197図）。これの分布がやはり西北九州型釣針と同じように西北九州に限定され（第198図）、かつ釜山の東三洞貝塚などからも出土している。朝鮮海峡をまたいだ地域は、大型釣針を使ってマグロやサメ、またこの山陰の沖合でもよくとられるシイラ、それから唐津のオクンチで食べるアラ、それにサワラなどの大型の魚を捕る、外洋型漁業が発達した地域である。朝鮮半島南部と西北九州の多島海地域では、縄文前期以来漁民の交流は非常に盛んだというふうに考えられる。オサリン遺跡を発掘したソウル大学博物館長の任孝宰教授も賛成してくれ、日韓関係は弥生時代からでなく縄文の前期以来からであると書いている。

これは稲作がどういう形で伝わったかということと、密接不可分な関係がある。稲作は中国の政治的な動乱から逃げてきた人が伝えたのではなく、漁民を介して伝えられたと考えるべきである。

その西北九州に4000年もの間、限定的に分布していた結合釣針が、弥生の前期になると突如として山陰に及んでくる（表33）。タテチョウ遺跡や西川津遺跡に、この西北九州型の釣針が入ってくる。しかも縄文の後期や晩期には単式釣針が確認されている。西北九州

は非常に独自性の強い地域であって、考古学的にもいろんな意味でこの地域にだけ分布するという遺物が多いが、そういうバリアがとけるかないしは進出するという形で、縄文の前期から晩期まで全然その西北九州から動かなかった西北九州型結合釣針が、弥生になると急に西川津遺跡まで及んでくるというところに、非常に大きな歴史的な問題があるのではないかと思う。

それが瀬戸内海にも入る。倉敷市真菰谷貝塚で出るような嵌め込み式の大型、超大型釣針といっても西川津遺跡などに比べたらやや小型のものに変化する。いずれにせよ大型・超大型の釣針が弥生の中期になると東へ進出するのである。これの背景としては農業が始まり、人口が増える。その人口圧に対して、動物蛋白の供給をどうするかという時に、シカやイノシシはしだいにとりにくくなるということで、漁業の方にウエイトがかかってくる。その結果、今までのやり方ではとれなかったけれど、多分船の問題とか釣り糸とか漁網の糸とか、いろんな技術的な問題が解決されて、より沖合に進出できる可能性が出てきて、結合釣針が導入されたということが考えられると思う。

そういう一環として、たとえば大阪湾を中心に小さな壺でイイダコを延縄でとるようなことも始まってくる。要するに農村に供給するための漁業が発達してくる。従来のような自分のところだけで食べる共同体内消費みたいなことにウエイトがある段階から、専業村落的に漁業が発達してくる。そういう段階になって、この漁具の大幅な移動があったと考えられる。そういうことで、これは一体弥生的な要素なのか縄文的な要素なのかというと、非常に複雑である。本来きわめて縄文的なものが、山陰についていえば弥生時代になって入ってくるものもある。そういう意味でこの西北九州型釣針は、西川津遺跡の場合については扱い方が非常に複雑であって、それだけに非常に面白い。

次の段階がどうなるかというと、シカの角で作るということでは不十分だったために結合式にしているわけであるが、良い素材が入ってくれば元のU字型の単式にもどる。その良い素材というのが鉄である。そして表面的には弥生時代の初頭から青銅器や鉄器はあったということになっているのであるが、釣針に使うほど消耗品的になるのは弥生時代後期からである。壱岐の唐神貝塚・原ノ辻遺跡、豊後竹田市小園遺跡、和歌山県海南市亀川遺跡、兵庫県会下山遺跡などで、弥生の後期には確実に鉄製釣針が確認できる。残念ながら特別大きい鉄製釣針が弥生の段階ではないけれども、これはみつからないだけで、その段階に入っているということは間違いないと思う。だから縄文的な漁業がさらに弥生時代になって大きな魚をより集中的にとろうとしても、素材に恵まれないということで、その中間段階で苦労して作っているのが結合釣針だというふうにみられるのである。

6. アワビおこし

それから西川津遺跡の場合には、鯨骨製と鹿角製の2種類のアワビおこしがある。この鹿角製のアワビおこしは縄文前期以来のものであって、鯨骨製のものは弥生時代になって唐津の菜畑遺跡や、壱岐・対島などの、朝鮮半島に近い地域で作られるものである。そういうきわめて弥生的なアワビおこしと、縄文的なアワビおこしとの両方がみられる。そういった点で非常に漁具の種類が多いほかに、縄文的・弥生的ないろいろな要素が組みあわさってているというところに、この西川津遺跡の特徴があると思う。

7. 捕獲対象動物とテリトリー

次に、それらの漁具で何をとったかということが問題になる。そこで一つ困るのは、この網とかヤス、ないしは単式釣針でとっているものはスズキとかクロダイとか、それからコイとかフナとかいうようなことで理解できるが、あの大きな10cm以上もあるような釣針でとっているはずのマグロ・サメ・シイラ・アラ・サワラなどの、大型魚の骨が全然検出されていない。しかも結合釣針がただ製品として運ばれているのではなく、実際には数点の軸の作りかけすらある。

また貝の中には宍道湖名産のヤマトシジミのほかに、アワビやサザエがある。アワビおこしまで出土している。そういう岩礁性の多種の巻貝なども相当とれているのであるから、多分に行動半径の問題があると思う。西川津遺跡の周辺ばかりでなく、相当外海に進出していっているのではないかと考えられる。

そうするとどうしても気になってくるのは、境外港付近の海底から引き上げられたという西北九州型の釣針の針、それから西川津では今のところ出土していないが、東北地方で発達した回転式離頭銛である。回転式離頭銛は寒流域で海獣漁用に発達したものである。その流れは一方で対馬までは下がってきている。対馬まではリマン海流が下がるので、対馬の佐賀(さか)貝塚で4本出土している。一方これが暖流域の三陸に入ると、マグロ漁に変わる。そしていろいろ形を変えながら、縄文晩期に燕形になる。それが弥生後期に愛知県まで下がってきて、そこから琵琶湖を経て山陰に入る（第199図）。

境外港の例は古墳時代初頭で、6世紀後半になると玄海灘で鉄製品に変わる。鉄製品に変わって量産されたものは俗にツキンボとよばれているもので、それが九州を中心にまた新しく広がり直しが行われる。それが最終的には火薬で飛ばして南氷洋まで行って鯨を捕る離頭銛に発達するわけだが、それは縄文晩期に発達した燕形離頭銛の形をそのまま踏襲

しているのである。そういう外洋型の漁業が中海の出口あたりで行われているということになると、当然一つはここから日本海へ出ていくという場合と、ここを避けて山越しの場合との二つの場合が考えられるわけであるが、山越しなどということが本当に考えられるかどうかはこの辺に土地勘のない私にはわからない。中海からさらに外へということになると一つは境港あたりに漁業基地があって、西川津遺跡などと対立する関係にあるのか、ないしはこちらの前進基地としてあるのかといった問題がある。これらを含めたこの地域のテリトリー論がはっきりしないといけないのではないかと思う。

そしてさらに外海の漁場に近いところで、多分大型魚類は解体されて運ばれているという可能性を考えたほうが良いのではないかと思う。あれだけ細かに魚骨をピックアップされているのをみていると、どうも取りこぼしがあるなどということは考えられない。しかもウナギの骨のような1～2㎜のものの取りこぼしではなくて、大きなものの取りこぼしなどということはちょっと考えられないわけであるから、やはり解体作業を海岸でやっている可能性を考える必要性があるのではないかと思う。

8. 私の弥生文化観

稲作で西川津遺跡の基本的な性格は規定されるであろうが、漁業が非常に盛んだということは、そのこと自体きわめて縄文的と判断せざるを得ない。なぜかというと大陸の新石器時代の農耕は必ず水牛、山羊、牛、羊、馬などの家畜を飼っている。そういう半農半牧が大陸の農業の姿である。それが実情であって、米だけ作っているなどということはない。必ず家畜を飼っている。それで動物蛋白の供給を行っている。農業が日本ないしは朝鮮半島南部を経由した時に家畜が脱けてしまう。家畜がまともに出土するのは古墳時代になってからである。結局、縄文時代以来の魚で動物蛋白の供給ができるからである。これは日本人の季節感とか自然感、動物に対する考え方の形成にとっても非常に重要なことである。今でも季節の移り変わりがテレビに映るときは魚取りの話が多い。

縄文時代の場合にはトチやドングリが主食で、シカやイノシシ、ないしは魚が副食品として組み合わせになっていたのである。このトチやドングリのことを忘れて、シカやイノシシだけを乱獲していたなどということを考える人は、動物食から植物食に変わったということになる。しかし実際は主食内で、野生植物から栽培植物に変わっていくのである。しかも飢饉の時にはやはり伝統的な食べ方が生きるということで、ドングリやトチの実が時々息を吹き返すし、その食べ方が現在にも残っているということになる。トチの実の食べ方が残っている南限がだいたい島根から広島の山間部であって、山口県へ行くとそうい

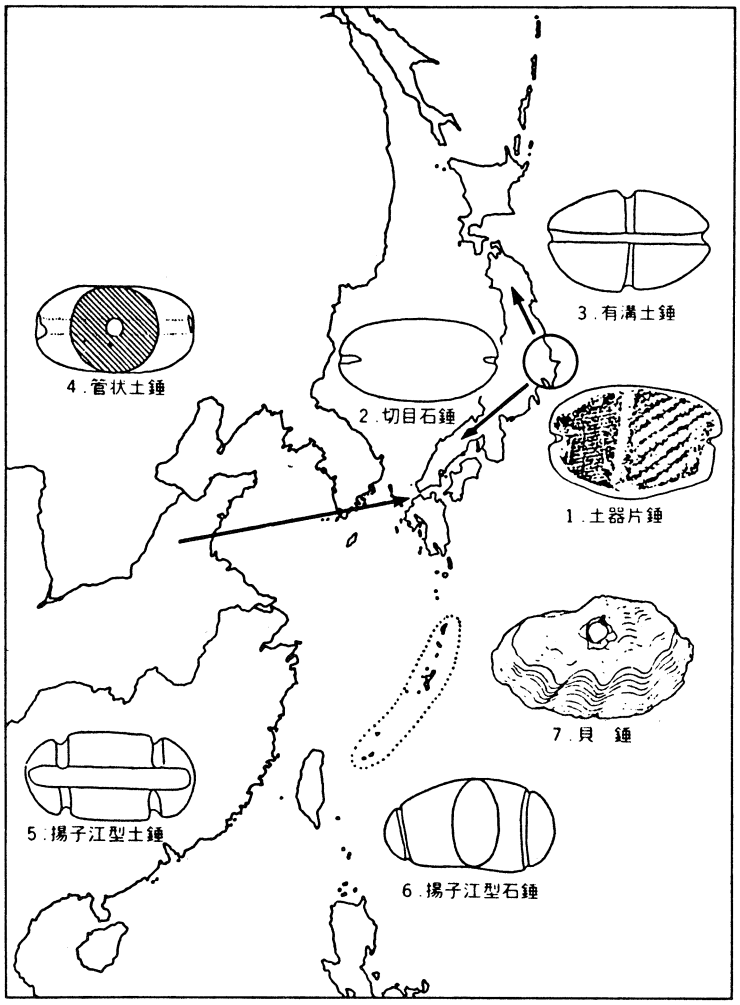
う話はなくなる。

そういう植物が主で動物が副という組み合わせは弥生になってもまったく同じで、しかもその主食の植物の中味が野生植物から栽培植物へ変わっていくが、動物のほうも変わる。縄文の貝塚からはたくさんシカやイノシシの骨が出土する。ところが弥生時代になると山と海の間に平野ができて、三区分になってくる。そして平野ではシカやイノシシがあんまり捕れなくなる。山が複雑に入り組んでいるところは別であるが、基本的には山の方でしかシカやイノシシは捕れなくなる。海岸部のほうではなおさらとれないということになると、やはり大量の動物蛋白の供給は水産資源しかないということで、より漁業に比重がかかっていく。そうするとドングリ・トチの実＋シカ・イノシシ・魚という組合わせから、米＋魚という組合わせがだんだん明確になってくる。そうして日本人的な食文化というものが形成されてくるのである。

漁業の研究は、稲作の陰に隠れて少しはやらなくてはいけないという程度のことではなく、同じ比重でやらなければいけない。そうしないと、日本文化の形成というようなことには十分な理解ができない。むしろ今のような国際化時代になってくると、近現代の政治経済史と同じ比重で、他民族国家が古代にそれぞれの環境に即してどういう暮らし方、文化を形成してきたのかということが大事なことになってくると思う。そういう歴史学をとり巻く社会的な状況が国際化してくると、やはり食文化の研究もお遊びではやっていられない。これはきわめて民族の根幹に関わることである。その証拠に外国へ行った場合に一番困るのは、食べることと言葉の問題である。

日本の食文化史上重要なのは、縄文・弥生時代であるが、しかしどこでも好資料が出土しているというわけびはない。西川津遺跡のような好資料がたくさん出土するのはいうもでもなく低湿地である。そして弥生時代の場合、この種の遺跡でこそ弥生的な要素ばかりでなく、縄文的な要素もはっきり出土し、弥生文化がどういうふうに形成されていったかということがわかる。これを九州などの大部分の弥生遺跡と菜畑遺跡を比べたらよくわかる。前者の場合には非常に農耕的な要素が明確にとらえられていて、特に低湿地でない場合には硬いものだけ、弥生式土器、石庖丁、偏平片刃の磨製石斧とか、それに若干の木器というようなことできわめて農耕的なものばかりしか出てこない。しかし、菜畑遺跡の調査結果をみれば縄文的な要素は非常にたくさんある。むしろそういうなかでどのように稲作ないしは農耕文化が定着していくかということが、非常によくわかる。西川津遺跡の場合もそういう意味で菜畑遺跡に匹敵するパターンで、農耕的なものしか出ない変則的な遺跡よりもはるかに正常な姿を示してくれているということで、非常に重要だとおもう。お

まけに大事な漁業資料もたくさんある。そういう縄文のベースの上に新しい文化がどういうふうに定着して展開していくかということからいくと、やはり低湿地でこれだけの資料に恵まれている遺跡は非常に重要である。大半の弥生の遺跡では、そういう弥生的な様相だけをみて物事を理解しているということからといくと、従来形成されてきている弥生文化の内容よりも、研究者の弥生文化観のほうが非常に問題があるのだということがはっきりしてくるのである。



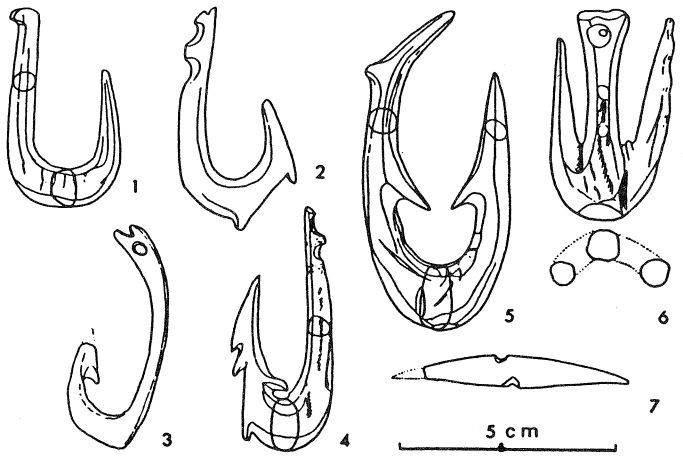
第189図　東アジアにおける漁網錘の展開

表32　西日本における縄文弥生時代の釣針一覧表（図191・192・195参照）

遺　跡　名	時　期	形態・数量(材質)	報　告　書　等	挿図番号
滋賀県 1　大津市滋賀里貝塚	縄文晩期	単式２（猪牙）	『湖西線報告』	
京都府 2　竹野郡網野町浜詰貝塚	縄文後期	単式３類１（骨）・同未成品１（猪牙）	丹後資料館資料	8・9
大阪府 3　八尾市亀井遺跡 4　大阪市東区森之宮東之町森の宮貝塚 5　大阪市東区博労町大阪第２船橋郵便局敷地内22	弥生中期 縄文後期 弥生	単式１（鹿角？） 単式１類１（鹿角）、単式２（鹿角・猪牙） 単式１類１（青銅）	『亀井・城山』 『森の宮３・４次』 『大阪府史』１巻	10～12
和歌山県 6　海南市亀川遺跡	弥生	単式１（鉄）		
兵庫県 7　芦屋市会下山遺跡	弥生中・後期	単式１（鉄）		
鳥取県 8　境港市境外港付近海底	弥生	結合針１（猪牙）	佐々木謙氏資料	T
島根県 9　八束郡美保関町小浜洞穴 10　松江市タテチョウ遺跡 11　松江市西川津遺跡	縄文後期 弥生 弥生前期 弥生中期	単式１（鹿角） 結合針１（猪牙） 単式１類６、単式３、結合軸２、同未成品２、同針３ 単式１類２、同２類４、同５類２、単式３	『日本の洞穴遺跡』 『タテチョウ報告』Ⅰ 『西川津報告』Ⅴ（未） 『西川津報告』Ⅳ	13 U P～R・V 66～73
岡山県 12　邑久郡邑久町門田貝塚 13　倉敷市真菰谷貝塚 14　倉敷市福田貝塚 15　笠岡市津雲貝塚	弥生前期 弥生中期 縄文後期 縄文後期	単式１（骨） 結合針３（鹿角）、同針２（鹿角１・猪牙１）・同未成品１（鹿角） 単式２類１（鹿角） 単式２類３（鹿角）、単式３（鹿角）	『吉備考古』84 『京大目録』１ 『県重文図録』 『京大目録』１、天理参考館、笠岡郷土館	 W・X 14 15・16
広島県 16　広島市長う子遺跡 17　福山市大門貝塚 18　福山市引野町埋立地 19　福山市洗谷貝塚 20　神石郡油木町 21　比婆郡神石町観音堂洞穴	弥生後期 縄文前～後期 縄文前～後期 縄文？ 縄文 縄文早期	単式１（鉄） 単式１（鹿角？） 単式２類１（鹿角） 単式１（？） 単式２類１（鹿角？） 単式１類２（鹿角１・猪牙？１）	 『福山の歴史と文化財』 『同上』 『芸備』10 『広大帝釈峡年報』Ⅴ	 59 60 1・2
山口県 22　長門市白潟 23　下関市六連島	縄文 縄文後期 古墳？	単式１類１（鹿角） 結合針１（猪牙） 単式１（鹿角）	『長門市の遺跡』 『山口県文化財概要』４	61
香川県 24　三豊郡詫間町紫雲出山遺跡	弥生中期	結合軸２・針２（共に鹿角）	『紫雲出』	Y
愛媛県 25　今治市阿方貝塚	弥生前期	単式１類１（鹿角）	『人類学雑誌』43―４	62

遺　跡　名	時　期	形態・数量(材質)	報　告　書　等	挿図番号
大分県				
26　大分市小池原貝塚	縄文後期	単式1類1（鹿角）	鶴崎公民館資料	17
27　大分市横尾貝塚	縄文後期	単式1（鹿角）	『横尾貝塚』	18
28　竹田市小園遺跡	弥生後期	単式1類1（鉄）	『菅生台地』Ⅲ	76
29　直入郡萩町竜宮洞穴	縄文後期	単式1類2（猪牙）	別府大学博物館	19・20
福岡県				
30　遠賀郡芦屋町山鹿貝塚	縄文前期？	単式2（猪牙）	『山鹿貝塚』	3・4
	〃 中期？	単式1類1（骨）		5
	〃 後期？	単式2類1（骨）		58
31　鞍手郡鞍手町新延貝塚	縄文中期？	単式1類2（鹿角）	『新延貝塚』	6・7
	〃 後期	単式1（鹿角）		22
	〃	結合針1（猪牙）		M
32　遠賀郡岡垣町榎坂貝塚	縄文後期	単式2（骨）	未発表	21
33　福岡市西区桑原飛櫛貝塚	縄文後期	結合針1（猪牙）	木村幾多郎氏資料	E
34　糸島郡志摩町天神山貝塚	縄文後期	単式2（骨）	『天神山貝塚』	23・24
佐賀県				
35　唐津市柏崎貝塚	弥生前期	結合針1（猪牙）	唐津市教委資料	N
36　唐津市菜畑遺跡	縄文前期	結合針1（猪牙）	『菜畑』	A～D
	弥生前期	単式1類1（猪牙）、結合軸1（鹿角）		63 O
長崎県				
37　諫早市有喜貝塚	縄文後期	単式1類1（骨）	『諫早市報告』5	25
38　佐世保市下本山岩蔭	縄文後期	結合軸1（鹿角）	『下本山岩蔭』	F
39　西彼杵郡野母崎町脇岬遺跡	縄文後期	結合		G・H
40　南松浦郡岐宿町寄神貝塚	弥生前・中期	結合針1（猪牙）	『五島調査報告』	S
41　福江市宮下貝塚	縄文後期	単式1（骨）、結合針1（猪牙）	『宮下遺跡報告』	I
42　壱岐郡勝本町唐神貝塚	弥生後期	単式1（鉄）	九大資料	74
43　壱岐郡芦辺町原ノ辻遺跡	弥生後期	単式1類1（鉄）	『考古学雑誌』42―1	75
44　上県郡上県町志多留貝塚	縄文後期	結合針1（猪牙）	『対馬の自然と文化』	J
45　上県郡峰町佐賀貝塚	縄文後期	単式6（骨）、結合針15（猪牙）	『佐賀貝塚』	
熊本県				
46　玉名郡菊水町若園貝塚	縄文後期	結合軸1（鹿角）	『若園』	K
47　宇土市西岡台貝塚	縄文後期	結合軸1（鹿角）	山崎純男氏資料	
48　宇土郡三角町浜ノ洲貝塚	縄文後期	結合軸1（鹿角）	乙益重隆氏資料	L
49　天草郡五和町沖ノ原貝塚	縄文後期	単式2（？）、結合針1（猪牙）、単式1（鹿角）、結合軸未成品1（鹿角）、同針1（猪牙）	『天草の古代文化』 『考古学論叢』3	
鹿児島県				
50　曽畑郡志布志町片野洞穴	縄文後期	単式1類1（猪牙）	『日本の洞穴遺跡』3	26
51　鹿児島市草野貝塚	縄文後期	単式1類7・単式13未成品8（猪牙・骨）	『草野貝塚』	27～53
52　川内市麦之浦貝塚	縄文後期	単式1（骨）	『麦之浦貝塚』	54
53　日置郡市来町市来貝塚	縄文後期	単式1（鹿角）	河口貞徳氏資料	55
54　日置郡金峰町高橋貝塚	弥生前期	単式1類2（猪牙）	『考古学集刊』3―2	64・65
55　西之表市上能野貝塚	弥生後期	単式1類1（鉄）	『鹿児島考古』7	
56　徳之島犬田市貝塚	縄文後期	単式1（貝）		56
沖縄県				
57　沖縄市室川貝塚	縄文後期	単式7類1（骨）	『沖国大考古』4	57

第190図　単式釣針の諸形態

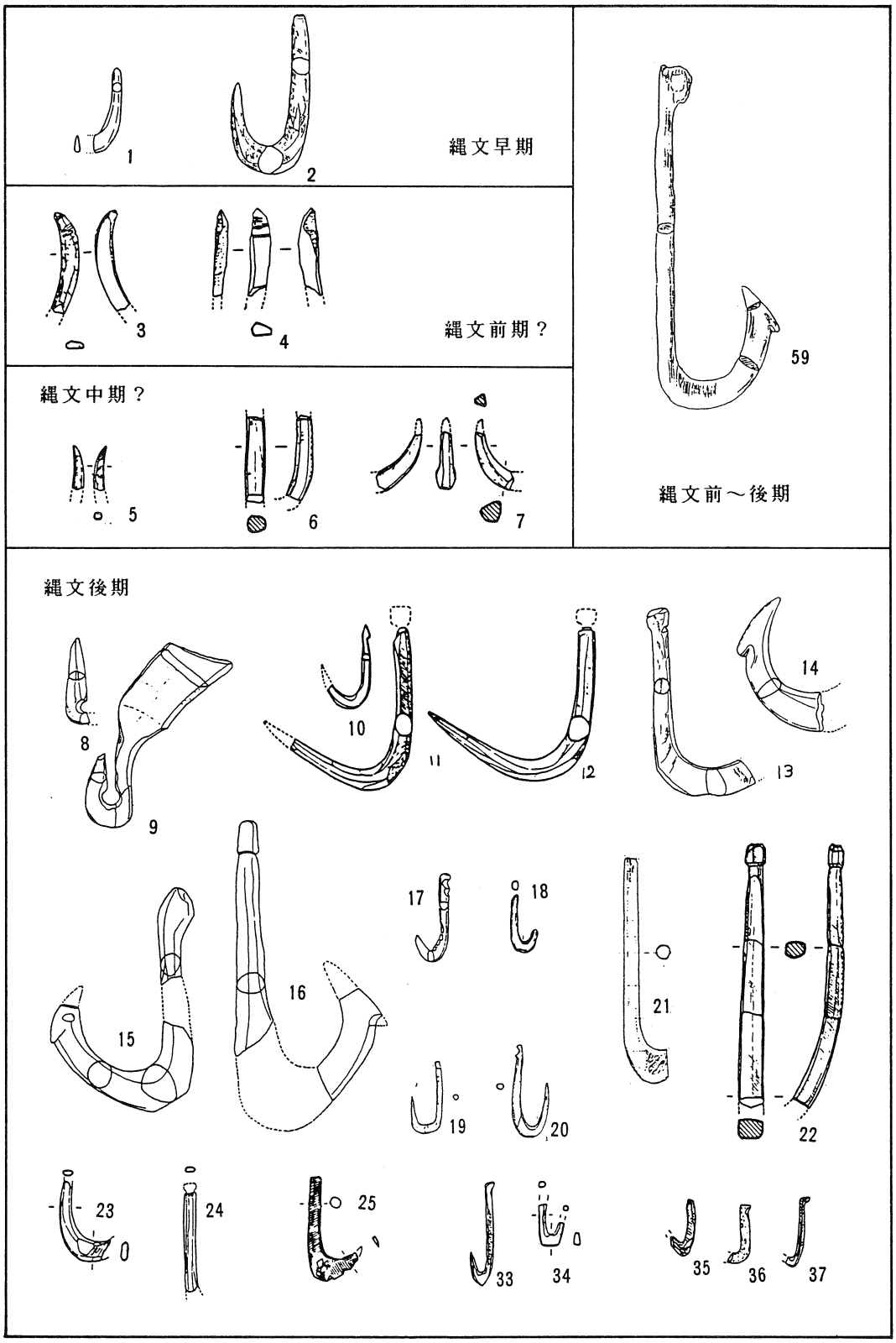


1：無鐖釣針・青森県八戸市一王寺貝塚
2：外鐖釣針・福島県いわき市寺脇貝塚
3：内鐖釣針・岩手県宮古市鍬ガ崎貝塚
4：両鐖釣針・岩手県大船渡市細浦貝塚
5：軸鐖釣針・宮城県石巻市沼津貝塚
6：錨形釣針・同市南境貝塚
7：逆T字形釣針・長野県北相木村栃原岩蔭遺跡

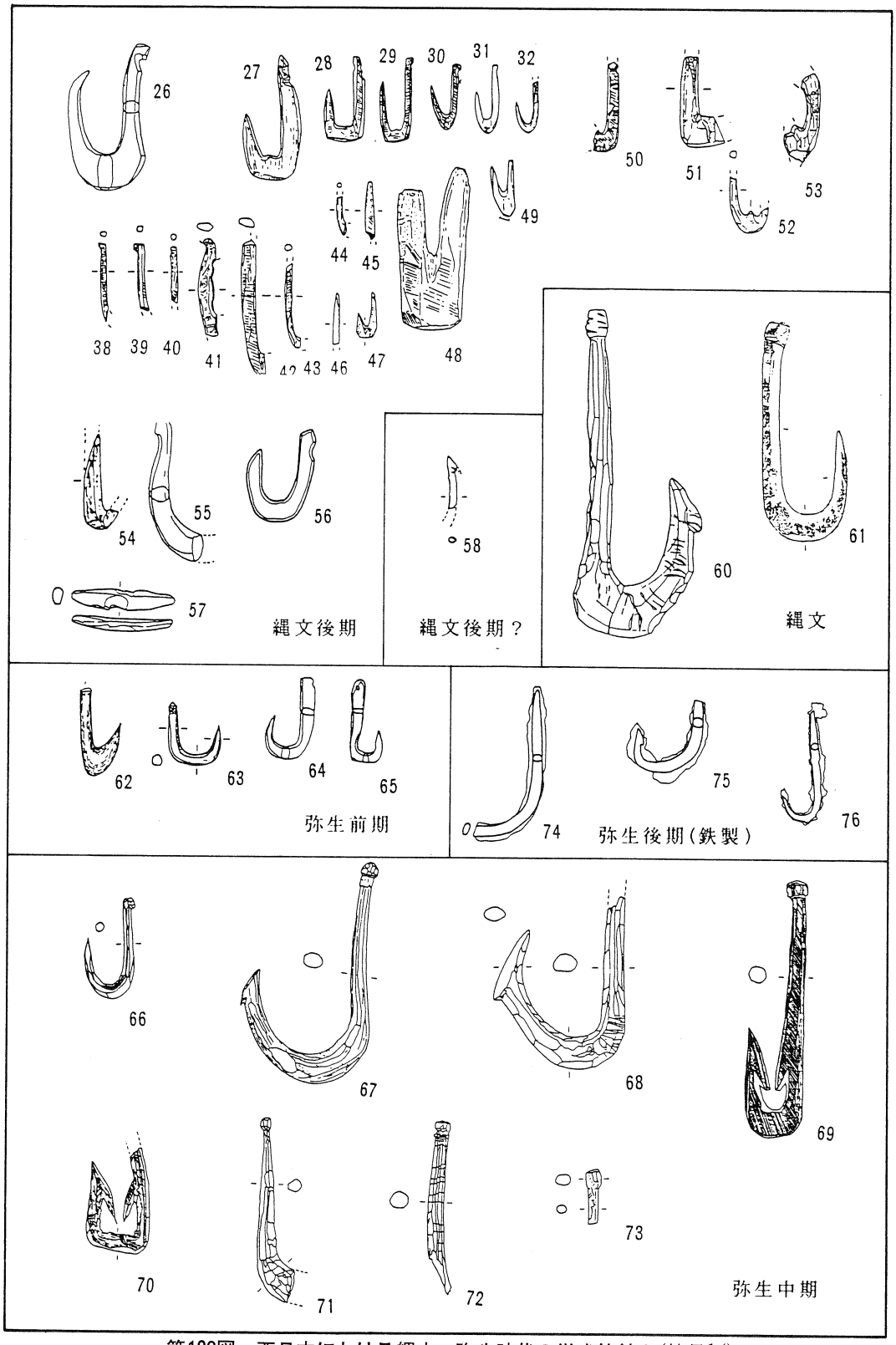
表33　釣針諸形態の時期・地域的分布表

沖縄	西北九州	九州	山陰	瀬戸内	中部	南関東	東関東	盤城	仙台湾	三陸	青森	北海道	時期	
	1・F	1	1・2・5・F	1・G		1・3		E				1・3・4	弥生	
	F				2			E					III	晩期
	↑							2・E	4	4	1・2・3		II	
							2		2・4	1・2・3・4・7・D		7・C	I	
7		1		2	1			1・2・3	1・3	1・2・3・7			III	後期
	F	1	1	2	1	2	1・2・3	1	2			1	II	
	F				1	1・2・3・4			1・2・3・6	1・2・3		1	I	
	↓				1	2		1・2・3	1・2・3・5・6	1・3		1・B	II	中期
							1			1			I	
	F					2				1・3	1・3	1	II	前期
				1	1	1・2	1	3					I	
				1		1					A		II	早期
					7	1・A							I	
						1							縄文草創期	

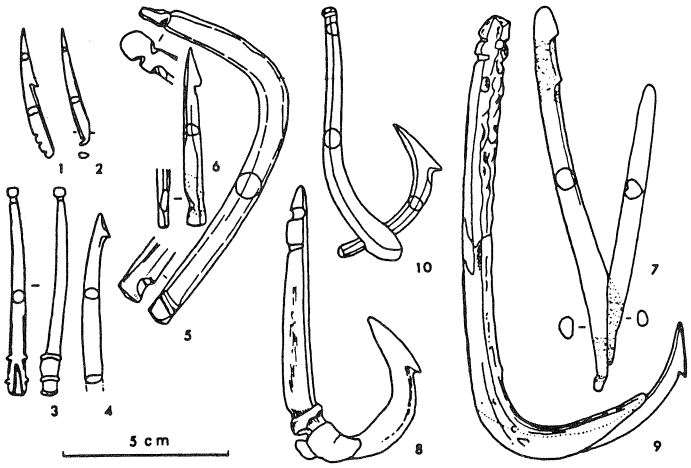
単式釣針　1：無鐖，2：外鐖，3：内鐖，4：両鐖，5：軸鐖，6：錨形，7：逆T字形．
結合釣針　A：赤御堂型，B：入江型，C：三ツ谷型，D：大洞型，E：寺脇型，F：西北九州型，G：真菰谷型．



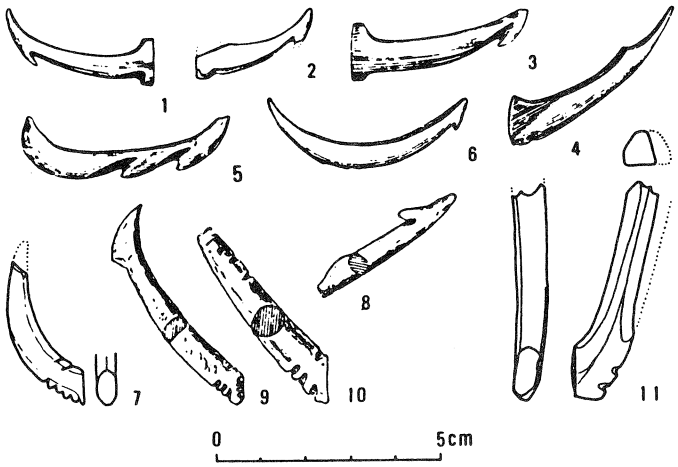
第191図　西日本における縄文・弥生時代の単式釣針１（縮尺½）



第192図　西日本における縄文・弥生時代の単式釣針 2（縮尺½）

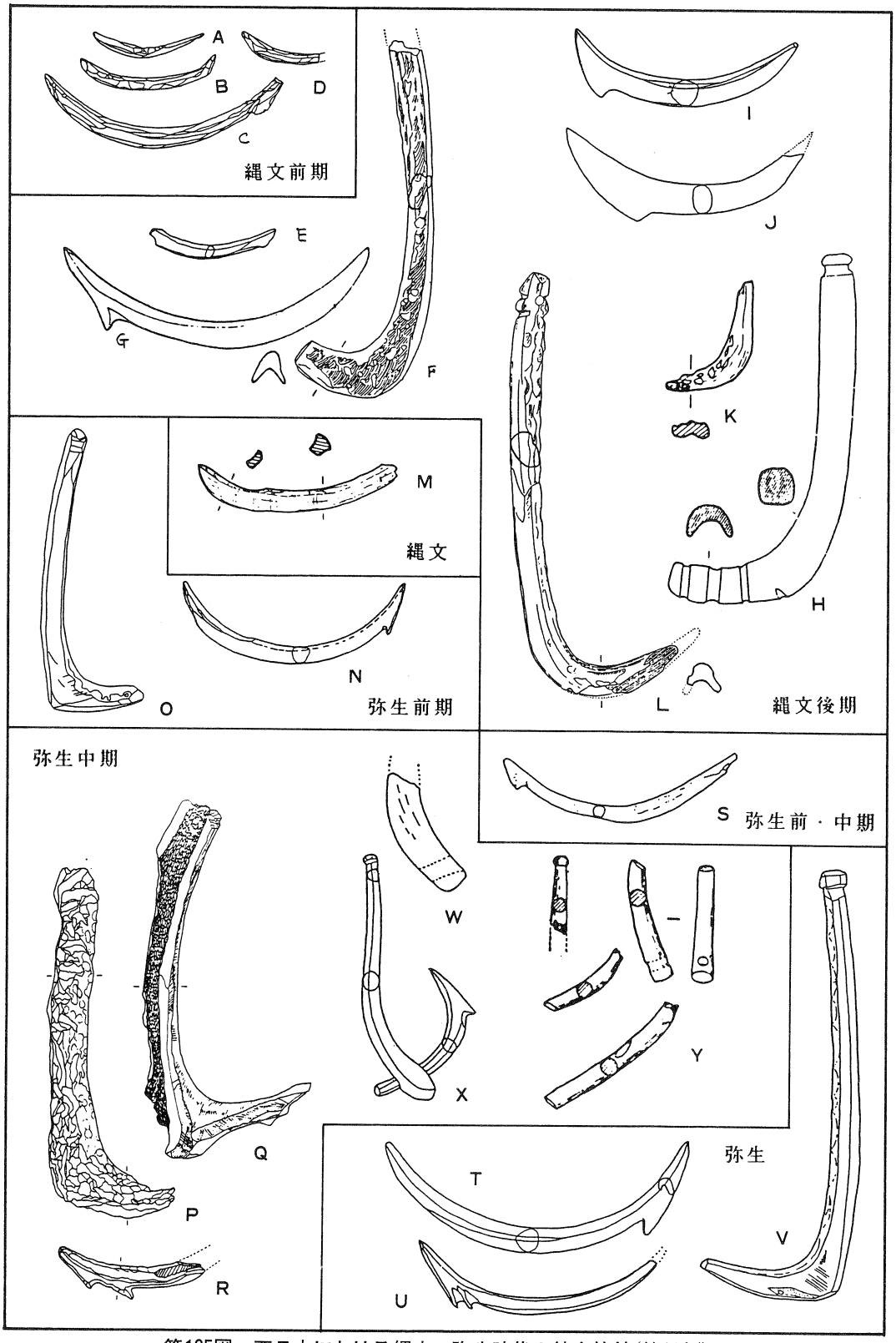


第193図　1・2：赤御堂型針・青森県八戸市赤御堂貝塚　3：入江型軸・北海道虻田町入江貝塚　4：同針・同　5：三ツ谷型針・北海道乙部町三ツ谷貝塚　6：同針・同　7：大洞型・岩手県大船渡市大洞貝塚　8：寺脇型・福島県いわき市寺脇貝塚　9：西北九州型・熊本県三角町浜ノ洲貝塚＋佐賀県唐津市柏崎貝塚　10：真菰谷型・岡山県倉敷市真菰谷貝塚

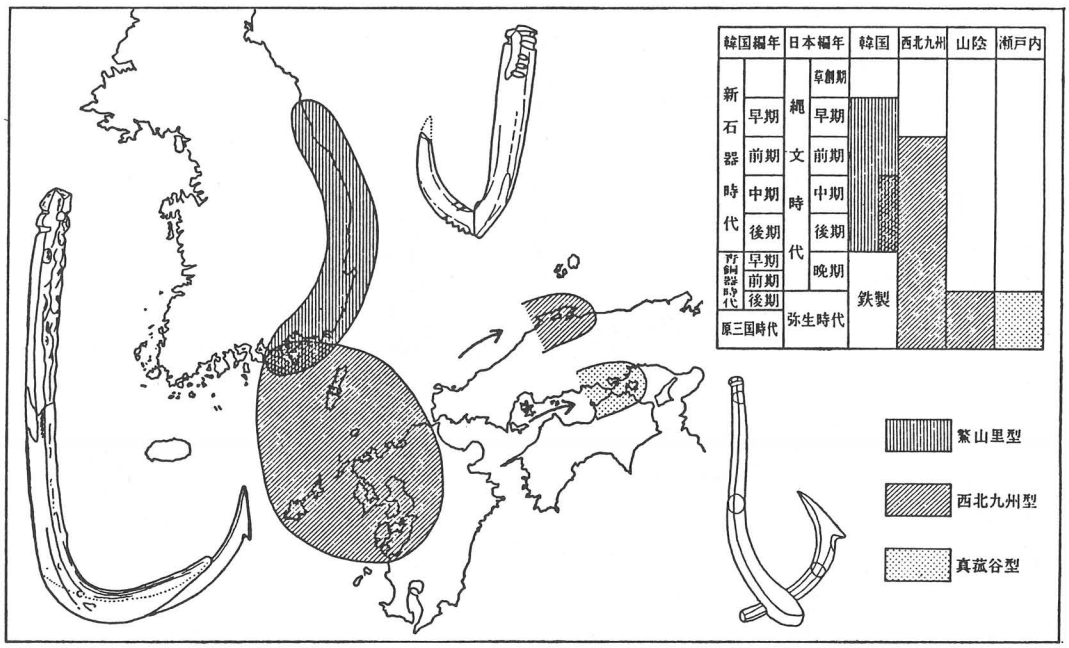


第194図　オサンリ型結合釣針

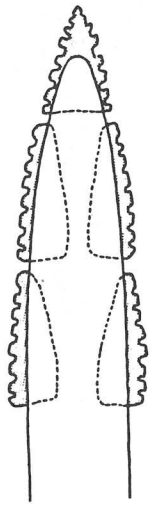
1～10：針　11：軸、ただし6は西北九州型結合釣針の針（1～6：上老大島遺跡　7：農所里貝塚　8～10—東三洞貝塚）



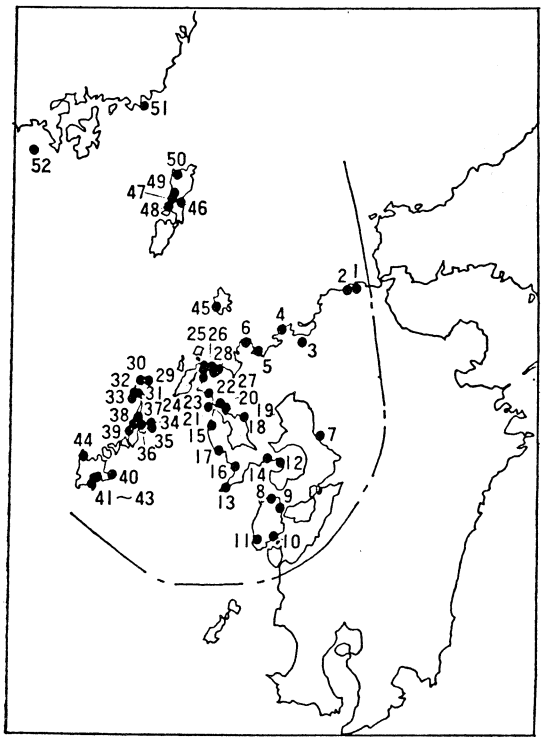
第195図　西日本における縄文・弥生時代の結合釣針（縮尺½）



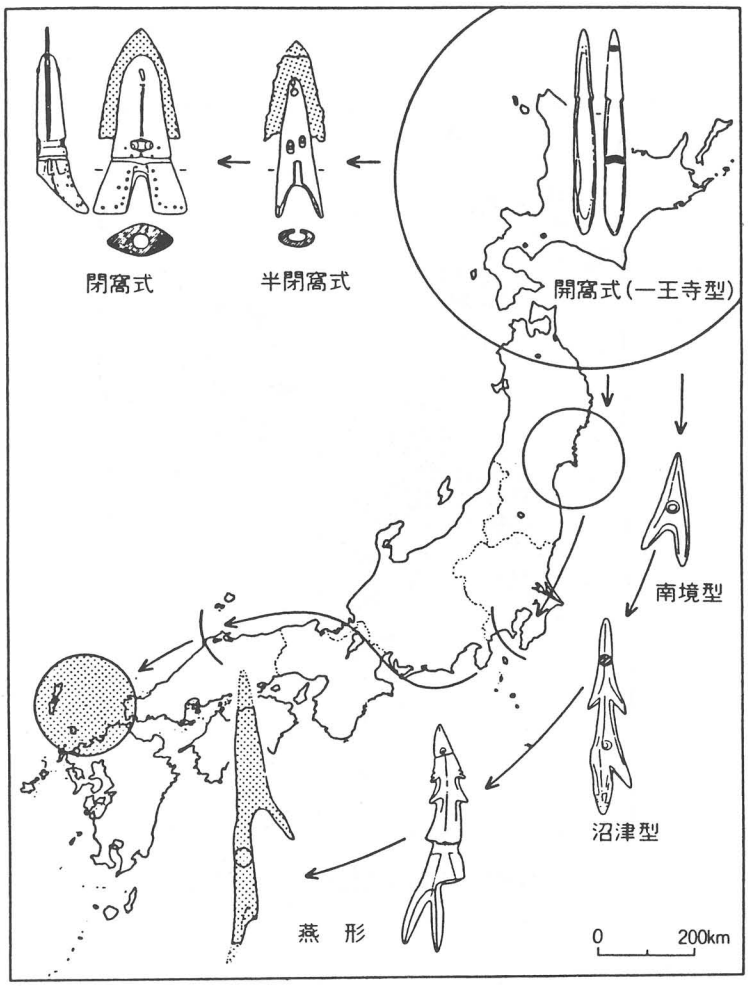
第196図　日本と韓国の結合釣針の分布と編年



第197図　石鋸　着　装　想　定　図



第198図　石鋸分布図(山崎純男氏原図)



199図　骨角製から鉄製回転式離頭銛頭への展開

2　島根県西川津遺跡からみた弥生時代の山陰地方と北部九州

下　條　信　行（愛媛大学法文学部）

島根県下における弥生時代遺跡の調査は、近年、急速な発展を逐げようとしている。その著名なものは、八束郡鹿島町志谷奥遺跡（鹿島町教委　1976）、簸川郡斐川町 荒神谷遺跡（島根県教委　1985、1986）などの青銅器を出土する遺跡ではあるが、一方において地味ではあるが、浜田市鰐石遺跡（前島　1973）、松江市タテチョウ遺跡（島根県教委　1979）、松江市西川津遺跡（島根県教委　1988）などの生活の実態解明と文化系譜を知るうえに、青銅器出土遺跡に優るとも劣らない重要な遺跡の調査もあいついでいる。

今回、西川津遺跡の縄文晩期～弥生前期編を出すにあたって、多様な課題のうちから、本稿では、西川津出土品を中心にし、島根県下、さらには山陰地方出土のこれまでの資料を援用して、特に北部九州と関連の深い文物を採りあげ、両文化の関係をさぐってみることとする。それが、この地域の文化的特性の一つを表明するものであるから。

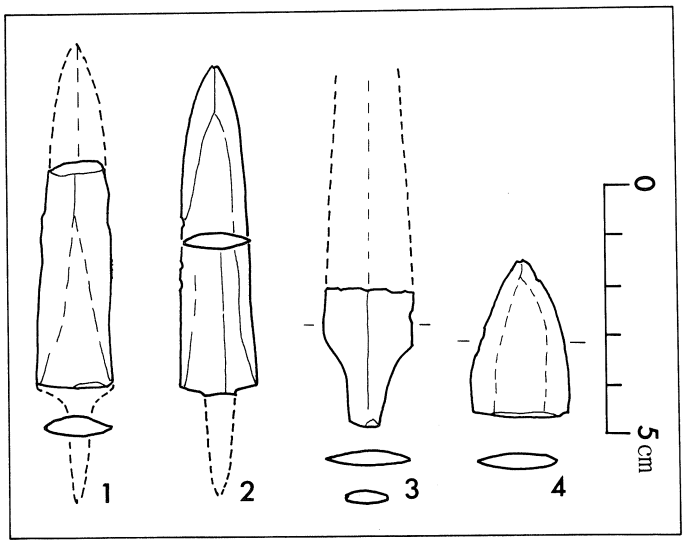
1　武器形石器

磨製石鏃　西川津出土の磨製石鏃は2点ある（島根県教委　1988）。その1（第200図1）は有茎式で、他（第200図4）は無茎の二等辺三角形の扁平鏃である。

第200図1は黒色片岩製で、身の先端と下部を欠失している。現長4.6㎝、最大幅1.6㎝、厚さ0.4㎝を測る。鎬は薄く、弱く、身の中線を走るのは先端付近だけで、下方は関の両端にむかって研ぎわけになっている。横断面は、鎬が弱く、身幅が薄いため、厚さ0.4㎝の薄い紡錘状になっている。関や茎は欠損しているため、その具体的形状は判らないが、北部九州出土例などを参考にすると、関は弱いなで肩状で、茎の断面は隅丸方形状をなすと思われる。

島根県下の類品は浜田市鰐石（第200図2）にある（前島　1973、山陰中央新報社　1978）。これは現長6.6㎝で、鋒部はほぼ残っていて、茎だけを失っている。厚みや幅は西川津例と酷似している。西川津例で欠失している身の先端は、基部より併行に鋩に向かって減幅していた両側が、急速に丸みをもって収束している。鎬は、先端付近で中線を走っているものが、ただちに両関端にむかった研ぎ分けとなっており、この点も西川津例に類する。身の横断面は厚さ0.3㎝の薄い紡錘形。関は中軸線に対し、直角に近いが、ややなで肩風の特徴が見え始めている。

このような長鋒有茎磨製石鏃は、朝鮮半島南部の初期の無文土器である孔列土器に伴う柳葉形磨製石鏃を源流としたものである。柳葉形磨製石鏃は、わが国には、初期農耕文化と共にその文化複合の一環として縄文晩期後半に北部九州に伝来したものである。そうした例として、佐賀県唐津市菜畑12～9層（中島ほか 1982)、福岡市 有田七田前遺跡（山口ほか 1983）出土品をあげることができる。これらは、身、茎とも長く12～18cmもあり、両側はあたかも定規で引いたように直線的になり、その造りはシャープである。鏃は鋌より、茎端にまで一直に通り、厚さも0.7～1cmと厚い。そのため、身の横断面は菱形、茎は六角形を呈す。関（まち）は逆棘状か直角となる。初期の柳葉形磨製石鏃は、上記のような朝鮮風の特色をそのまま表わしていたが、晩期終末から板付Ⅰ式以後になると、造り、法量、厚みなど全面において退化性を濃厚にしてくる。身長は10cm以下と短くなり、両側は中膨れ状を呈し、厚みは減じ、鏃は稀薄で、横断面は紡錘形となる。鏃は中線が下部まで通らず、研ぎ分けとなり、関はなで肩で、鏃が茎に通らないため、茎の断面は方形、長方形、円状を呈す。こうした傾向は時期が下降するに従い顕著となり、前期末をもって終末をむかえる（下條 1977、1986)。こうした観点からみると、西川津、鰐石出土例は、前期後半～終末段階のものとみることができよう。鰐石例が前期末・中期初、西川津が中期層の出土というのも、これらの例が、後出の形式であることを示している。



第200図　日本海出土の磨製石鏃
1・4　島根県松江市西川津　　3　京都府綾部市青野A地点
2　　島根県浜田市鰐石

柳葉形磨製石鏃は、九州では北部九州を主体に、東九州を除いた各地に出土する。近年九州を越えた西瀬戸内や四国南海地方にも出土することが判ってきた。高知県田村遺跡に数例の出土があり（高知県教委 1986)、愛媛県今治市町谷遺跡にも出土しているが（愛媛県埋蔵文化センター 1988）瀬戸内では目下西瀬戸内に限られている。中国地方では、下関市綾羅木（下関市 1981)、同延行に退化形、退化進行形が出土しているが、その後の東方への分布は日本海側に伸びている。鰐石、西川津、タテチョウ（下條 1987）など

の島根県下の分布をポイントとして、東は丹波の京都府綾部市青野A地点（青野遺跡調査報告書刊行会　1976）にまで及んでいる（第200図３）。青野例は身下半と茎を残すものであるが、身の扁平さ、関のなで肩風な点は、島根県下の例と共通するものである。青野にはもう一点の出土があるが、その関の造り出しは抉り関となっていて、後出性を示している。以上のように、柳葉形磨製石鏃は、瀬戸内ルート沿いには、ほとんど展開せず、北部九州―響灘―日本海を通って近畿北部にまで長脚的分布を示し、瀬戸内海側とは一の対象をなしている。このことは、北部九州の文化が東に展開するに際して、各地の在地性、北部九州との親縁性にもとづいた選択性が作用していたと考えることもでき、その証拠は単に柳葉形磨製石鏃にとどまらない。

第200図４の二等辺形磨製石鏃は柳葉形石鏃と同様黒色片岩からなり、ほぼ完形をなす。長さ3.2㎝、茎部幅2.0㎝、厚さ0.3㎝を測る。弥生中期層の出土という。北部九州では前期末が、柳葉形磨製石鏃から二等辺形扁平磨製石鏃（以下、扁平磨製石鏃）への転換期にあたる。この出現については、柳葉形磨製石鏃からの退化変形、打製石鏃の模倣などが考考られるが、筆者は、朝鮮半島の磨製石鏃の動向を重視したい。朝鮮半島では、無文土器文化の前半期である孔列土器から後半期の粘土帯土器に変わると、他の面でも変化が生じてくる。その一つは、粘土帯土器になると、有柄式磨製石剣や柳葉形磨製石鏃が消滅し、細形の銅製武器が出現してくる。細形銅利器には、細形銅剣、細形銅戈、細形銅矛があるが、細形銅剣が一等早く出現し、銅戈、銅矛が後出してくる。扁平磨製石鏃は、細形銅剣の出現に伴って現れる。忠清南道大田市槐亭洞（朝鮮考古学会　1969）、黄海道瑞興邑泉谷里（尹　1972）、忠清南道礼山邑東西里（池　1978）では、細形銅剣に伴って、扁平磨製石鏃が墳墓内に副葬されている。わが国には、前期末の段階に細形銅剣、銅戈、銅矛が北部九州に伝達されるが、朝鮮半島では、それ以前に扁平磨製石鏃は出現していたこととなる。それが継承されて、前期末にわが国へ青銅利器が到達した時に随伴してこの扁平磨製石鏃も伝わったものとみたい。したがって、この石鏃も大陸系磨製石鏃といっていいものである。

以上の二種の石鏃はいづれも大陸起源のものであり、有茎式は、初期農耕文化に伴って、扁平磨製石鏃は、大陸文化の第二波の文化伝播である青銅利器文化の伝来に伴ってわが国に伝わったものである。出土量の多寡はともかく、大陸文化伝来の各段階において、この地にも北部九州を経由した国内版が着実に伝わっていたことを示すものである。

ただし、朝鮮半島南部や九州では、柳葉形磨製石鏃に有柄式磨製石剣が伴う。瀬戸内でも西瀬戸内は、両者の分布地帯となっている。ところが、山陰地方は柳葉形は出土して

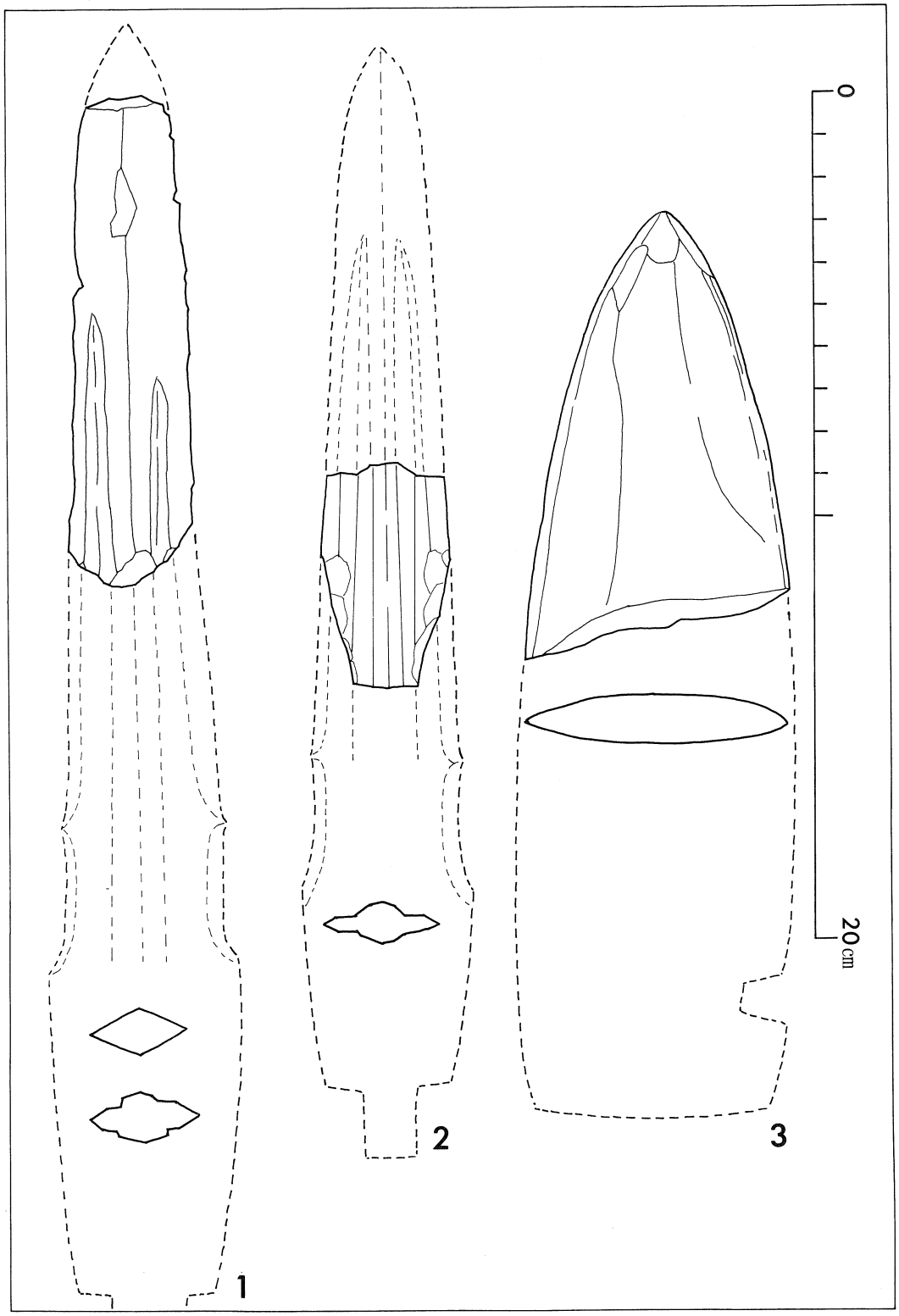
も、有柄式磨製石剣は未分布地帯となっている。こうした分布の跛行性も、より追求を深めて行けば、1つの地域性を物語るものかもしれない。

細形石剣・石矛　扁平磨製石鏃に時間的に併行する武器形石製品として、西川津に出土したものではないが標記のものが島根県下に出土している。前期末・中期初頭以降の武器形祭器の文化系譜を占うのに重要なものといえる。

その1つは、第201図2の鰐石出土の細形石剣である（前島　1973）。この石剣は、細形銅剣を模した細形石剣と言えるもので、畿内やその周辺に分布する中細式銅剣を模した有樋式石剣とは異なったより古式のものである。現在、剣身中央部付近が5.3㎝ほど残っているだけであるが、幅は3.4㎝と細形銅剣と同じである。中央に1.4㎝の一段高い棟が走り、葉部の溝は樋状にならず、水平となっている。法量、断面形とも細形銅剣の特徴をよく残している。鰐石では前期末・中期初頭の土器を伴っているのも細形銅剣の時期とよく符合している。北部九州では、前期末に細形銅剣が出現し、この地方では松江市竹矢に細形銅剣が伝わっているので、これらをコピーしたものと考えられる。朝鮮半島には、いはゆる鉄剣形石剣はあるが、細形銅剣を忠実に模したものはないので、細形石剣はわが国で考案されたものと考えられる。こうした考案はすでに北部九州に出現していて、第201図1に示すような福岡県飯塚市川島に出土例がある（嘉穂地方史編纂委員会　1973）。川島例は先端付近を11.5㎝ほど残すものであるが、前末・中初頃に比定される福岡市板付田端出土の銅剣に類似している。中央に一段高い棟と水平の刃をもっている。細形石剣の出土はこの二例だけであるものの、その分布は柳葉形磨製石鏃やこれから述べる石鎌、大形石庖丁、石矛の分布と軌を一にしたものであり、扁平磨製石鏃の項で指摘したように、弥生文化の第Ⅱの画期である前期末以降においても、前期以降の文化ルートは確実に継承されていることを示している。

西川津、タテチョウには多数の陶塤を出土している。陶塤は細形銅剣伝来期の前期末に出現し、北部九州をスタートして、日本海ぞいに丹後半島にまで達している。その例をあげると、西から福岡県宗像市長尾遺跡、下関市綾羅木、島根県松江市西川津、タテチョウ、京都府中郡峰山町途中ケ丘（峰山町教委　1977）、同扇谷（峰山町教委　1975）、竹野郡丹後町竹野（奥村　1987）など玄界灘―響灘―日本海と日本海沿いに東進している。こうした独自の日本海ルート伝播文化と上記の武器形石製品は帯同して展開をしたものとみていい。

第2は筆者が石矛と称しているもので、タテチョウに出土している（第201図3）。先端付近を10㎝ほど残すだけであるが、その下端での幅は6.4㎝と石戈よりも一段と大形であ



第201図　日本海出土の磨製石鏃

1・4 島根県松江市西川津　　3 京都府綾部市青野A地点

2 島根県浜田市鰐石

る。全体は木葉状となり、茎端は幅広く手では握れない。茎端の一側に抉りが入れられるのを通例とする。これは北部九州に弥生前期末に出現し、九州を中心に広がったものである。前期末に朝鮮半島より伝わった三種の細形銅利器は北部九州でそれぞれ石器にコピーされる。細形銅剣はいはゆる鉄剣形石剣や細形石剣に、銅戈は石戈となる。そこで同時に出土し、しかも柄を付さずには把握できない武器形石製品といえば、銅矛を模した石矛であろうと考えたのである（下條　1982）。従って、その誕生も北部九州にあり、この地方に広がったものである。この例も、瀬戸内にはみられない。こうしてみてくると、北部九州に生まれた武器形石器の日本海への伝播は各種に及んだ重層的なものであり、単なる偶然的の所産になるものではない。山口県宮ケ久保出土の中期後半の石戈もこうした流動の中で把えることができる。

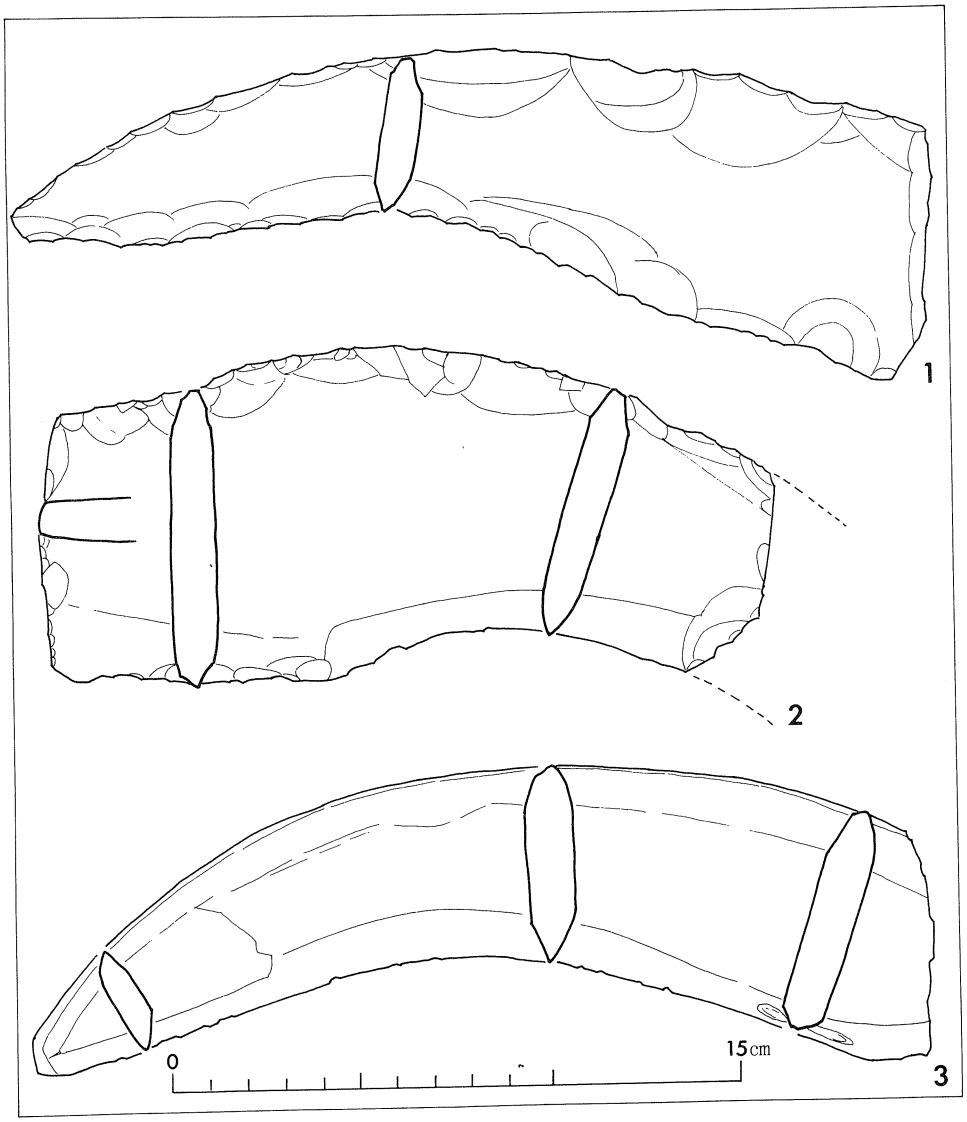
2　石庖丁・大形石庖丁・石鎌

日本海における石製収穫具の研究は今一つ十分ではない。石庖丁においても、まず形態的特徴を押さえることが重要である。西川津遺跡において、その形態を明示する完形品は第126図26の一点しかなく、多くは破片ないし転用品となってその型式同定を行うのは困難である。そこで、浜田市鰐石出土品、青島出土品（山陰中央新報社　1978）などの完形品や各地の石庖丁の一般的特徴などを援用して西川津出土品の中から石庖丁と認定されるものを抽出すると7～8点を取りあげることができる。そのうち刃部、背部をかろうじて残し、形式認定に耐えうるものは5点ほどある。この5点は二形式に分けることができる。1は比較的に背が直で、刃が外湾するいわゆる外湾刃半月形に近いもので、第126図26、32、39の3点がある。他は、程度を問わず背部、刃部が湾曲する杏仁形（紡錘形）で第126図40（大形石庖丁の可能性もある）、第126図28の2点がある。いづれも両刃であるが、山陰地方の前・中期の石庖丁は両刃であることを特徴としている。唯一の完形品である第126図26は、両側の造り出しが粗末であるが、基本的には外湾刃半形であり、前期層から出土しているという。そうであれば、島根の前期の石庖丁は、北部九州と共通する形態をなしていたことになるが、これは西日本全体においてもいえることである。問題は杏仁形の出現期と汎用期であるが今のところその決め手はない。島根県鹿足郡前立山遺跡の後期の例には直線刃半月形のものがあり、後期には形態変化が起こっている。これからすると、杏仁形はその前段階の中期段階に使われていた可能性が強い。杏仁形の例は、鰐石、青島に見られるほか、鳥取県米子市目久美（米子市教育委員会　1986）や丹後にも広がっており、中期段階のこの地方の一つの地方的形態を示すものかもしれない。瀬戸内にも、この形態が前期末から中期にも広がっているが、今後この形態の時期的確定、他形式

との組成比などを煮詰めて、他地域との比較を行って行く必要がある。また西川津の石庖丁の出土量は、遺跡規模に比して、量的に少量である。この点も、一つの地域性を表明しているものかもしれない。他遺跡などでの検証をまちたいところである。

用途も明確でなく、用語も適切とはいえないが、大形石庖丁が多数出土しているのも西川津遺跡の特徴である。大きさは小形で横長21cm、縦長10cm（第124図３）。大きいものは、横長30cm、縦長13cm（第124図１）もある。厚さは1.5～2.5cmとぶ厚い。刃部は直刃か軽い外湾状をなす。背部は直背となるか軽い円弧をなすが、両側上端を打ち欠いて、背部が横長の有肩状になるのが特徴で出土量も多い。その仕上げは、刃部付近は研磨するものの、それより背部にかけては打製のままか、自然面のままで完了させるという、粗造な作りであるのも特徴の１つということができる。有肩の大形石庖丁は、西川津のみならず、島根を遠く東に行った、京都府途中ケ丘遺跡にも出土している。横長35cm、縦長11cmの西川津と変わらない大形のものであるが、ここでは、西川津と異なって全面を研磨する丁寧な作りになっている。有肩の例は、西の方に多く存在する。福岡県の東部を北流する遠賀川流域から周防灘、響灘にかかる地域に分布するもので、この地域の有肩は、「凸」字状より、「T」字状になることが多い。いづれにしても、この両タイプは、背部に突起をつくりだすことにおいて共通しており、西川津は西方の「T」字状を「凸」字状に改変したものと考えられ、両者の間には有機的関係が存在したものとみられる。西川津には破損した部分品が多いので、あまり明確に指摘できないが、たとえば第124図３のように、背部に突起をつくりださないものも存在する。これには二つのタイプがあるようで、その１つは、鰐石例にみられるように、全形が台形をなしている。他の１つは、背部が円弧状になるもので、下関市辻や西川津に出土している。これらには肩がないので、紐をかけるための孔が穿たれている。以上のように山陰大形石庖丁には、有肩タイプと、無肩タイプのものがあり、これらは他の地域の大形石庖丁にみられない多様性を示している。ことに有肩タイプは、この地方の大形石庖丁の系譜をよく示している。

ここで大形石庖丁の由来と展開をふりかえってみると、大形石庖丁はそもそも大陸系磨製石器と呼べるものかどうかあいまいなものであった。北部九州では大形石庖丁は、かつて前期末からしか明確でなかった（下條　1977）。それが、菜畑遺跡で弥生前期初頭の板付Ｉ式に出現することが明らかとなり、古くから存在していたことが判ってきた（中島　1982）。北部九州の大形石庖丁は全磨製の外湾刃半月形で、外湾の両側に有抉をもつもの、有孔のものなどがある。一方朝鮮半島の南部でも、特に西南部では石庖丁の大きさは大、



第202図　日本海出土の石鎌

1 島根県浜田市鰐石　　2 京都府熊野郡久美浜町
3 鳥取県米子市蔭田

小の両極に分かれ、少数ながら特大のグループがあることが判ってきた（下條 1988）。この大形は全羅北道佳井、同青雄面に出土したもので三角形ないし外湾刃半月形をなし、横長17～19cm、縦長８～11cmで、形態、大きさ共、北部九州の大形石庖丁に近く、両者の親縁関係が看取される。こうした点からすると、大形石庖丁も大陸系磨製石器の一種と考えた方がよいように思われる。また慶尚南道欲知貝塚出土の大形石庖丁は外湾刃形の背部に突起が付くタイプで、その形は「T」字形ではなく、直角をなしている。

さて、こうして日本に伝わった大形石庖丁は、穂摘用石庖丁と同様、日本各地において

地域的形態をもつようになる。北部九州に伝わった大形石庖丁は直背外湾刃半月形であり、福岡西部、佐賀に広がり、遠賀川を東限としている。遠賀川の東より響灘、周防灘にかけては、北部九州と形を替えて、前期末以後外湾刃の背部に「T」字形の凸起がつくタイプが出現する（下條　1977)。福岡東部から山口にかけては独自の形態をもっているのである。最近では、有肩タイプは宮崎県持田遺跡や愛媛県松山市六丁場遺跡にも広がっていることが判ってきた。山口県下関市綾羅木遺跡にもこのタイプのものがよく出土している。瀬戸内ぞいには、愛媛より東の方には、あまり展開しないようで寡聞にしてその出土例を知らない。そして日本海沿いに、先記のように、独自のものが展開して行くのである。畿内の大形石庖丁は、頂部がやや平坦で、その下方に孔を持つ、握り飯状の三角形をなして、また独自の形態をなしている。このように、西日本においては、瀬戸内中・東を除く、各地は独自の形態の大形石庖丁をもっていた。その中で山陰石庖丁は、福岡東部・山口に有機的関係をもつ独自の有肩形の大形石庖丁を生みだしていたのである。そして、西川津や途中ケ丘では、穂摘石庖丁を凌駕するほどの量の大形石庖丁が出土している。これもまた、山口西部を除いては、他地域にみられない地域的特徴である。

西川津遺跡は石鎌の出土量の多さでも目を引く遺跡である。石鎌はいうもでもなく大陸系磨製石器である。中国竜山文化に生まれ、竜山文化から殷文化の間に中国遼東半島から西北朝鮮に伝わり、それが南下して南部朝鮮に達し、やがて北部九州に伝わったものである。近年、南部朝鮮の初期無文土器の遺跡である慶尚南道大坪里、忠清南道松菊里などから石鎌が出土し、わが国でも縄文晩期の福岡市板付遺跡（福岡市教委　1979)、板付Ⅰ式の菜畑遺跡8上層、福岡市十郎川遺跡（住宅・都市整備公団　1982）の初期農耕遺跡から出土するようになった。朝鮮半島でもそうであるが、北部九州でも石鎌の出土量は石庖丁に比べてきわめて限られた数しか出土せず、必ずしも多用されたとはいい難い。これに変化が起るのは、遠賀川流域から山口西部にかけての地で、石鎌の出土量が漸増する。それでも遠賀川流域で、石鎌が石庖丁を凌駕して出土することはなく、両者が均等に近く出土するのは下関市綾羅木遺跡においてである。瀬戸内海にはほとんど石鎌は展開して行かず、西瀬戸内の松山平野に2～3の石鎌が出土するだけで、石鎌は日本海を走るのである。西川津では、石鎌は13点出土し、これに対する石庖丁は8～9点と石鎌がわずかながら多い。これは、先に記した山口県下関市周辺と同傾向かその延長上にあるので、両者の緊密さを示すものである。こうした石鎌の多さは日本海沿いに長脚の分布を示すことになり、島根県浜田市鰐石（第202図1)、松江市西川津、同布田、鳥取県米子市陰田（第202図2)、京都府熊野郡久美浜町芦原（第202図3）にまで分布している。以上、大形石庖丁、

石鎌にみられるように、これらの諸具は、福岡東部から山口西部、なかんずく山口西部との親縁性の上で、瀬戸内にはみられない独自の文化圏を形成していたものとみることができる。

3　伐採石斧・抉入片刃石斧

西川津の伐採石斧は比較的簡略な製作技法をとっている。その特徴は原材料にある。原材料は幅、厚さが5～6㎝から8㎝前後の棒状の石材を素材としている。これを15～20㎝前後の適当な長さに折り、1600～1900ｇの素材をつくる。その後、断面隅丸方形の四隅の稜を打欠によって落としていく。これが、いわば粗割工程であるが、原材が石斧の形態、法量に近いので、軽微な労働でこの工程をクリヤーすることができる。この後、細かな打裂によって成形し、敲打を加えた後研磨を行う。

こうして完成した石斧は、大きさによって三つの群に分かれる。大は長さ15㎝以上、基部幅5～6㎝、刃部幅6.2㎝、厚さ4.5㎝前後で、重量は600～700ｇである。中は長さ12～14㎝、基部幅4～5㎝、刃部幅5～6㎝、厚さ4㎝前後で、500～600ｇの重さになる。小は長さ10～11㎝、基部幅3～5㎝、刃部幅4～5.5㎝、厚さ3～4㎝で、重量は300～400ｇである。量的には中、小が多く、主要なタイプとなっている。個々の石斧の時期が判明しないので、時間にそった動向は捉え難いが、この程度の重量は北部九州では縄文的色彩を残した弥生前期の石斧に共通している（下條　1986）。しかし、石斧の形態は身が厚く、頭部と刃部幅が接近した弥生化した厚斧になっている。石斧の厚斧化は普通前期後半段階に起る。西川津の石斧も十分そうしたものであるが、他地域に比べて小形である。

柱状片刃石斧も個別の時期が明確でない。ただしこの遺跡の片刃石斧にすべて抉りがある抉入石斧となっているのが特徴である。柱状片刃石斧は、日本には抉入石斧（韓国の有溝石斧）として伝わり、北部九州では、最後まで抉りが残る。西日本各地には前期の段階に抉入石斧として各地に伝わり、中期以後独自性を生み出す地域も出現してくる。畿内がその代表例で、ここでは中期以後、抉りのない柱状片刃石斧となる。しかし、東海では抉入石斧が存続する。西川津はそうした中で抉入石斧の分布地帯となっている。

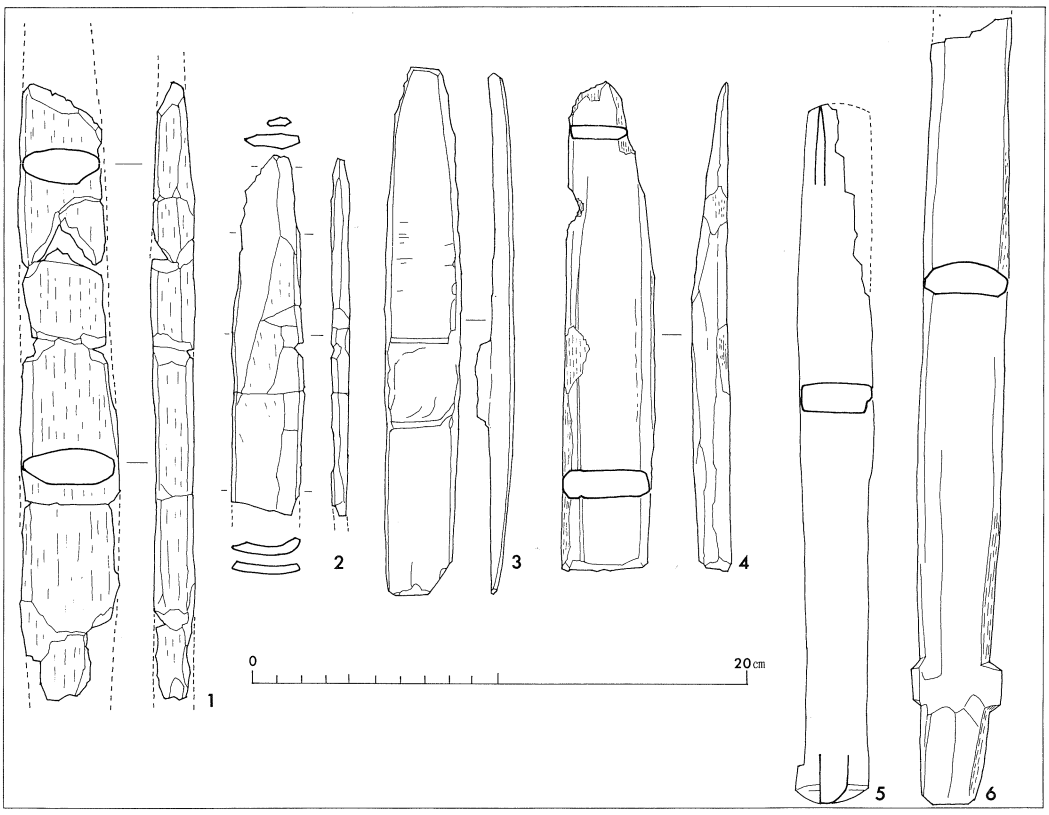
4　漁　　具

漁具には、北部九州との繋がりを示すものが多い。

その1つは西北九州型結合式釣針である。これについては渡辺誠の論攻がある（渡辺1958ａ、1958ｂ）。結合式釣針は九州の縄文前期の曽畑式土器の段階に朝鮮半島より伝わり、後期に西北九州を中心として盛行する。佐賀県菜畑遺跡では、板付Ⅰ式に伴って出土

し、弥生時代にも継承利用されていたことを明らかにしている。縄文〜弥生を通して軸を鹿角、釣を猪牙で作るのをルールとしたものである。菜畑の弥生のそれは、軸が長さ8.9cmもある大形のもので、外洋性の漁業に供されたものである。西川津では弥生前・中期に伴っており、前期の段階に伝わってきたものであることが判る。軸が鹿角、釣は猪牙で作られており、この点も西北九州のものと同じである。その大きさは、成品で10.5〜13.3cmもある超大形品を含み、外海大形魚を盛んに狙っていたことが判る。大形の未製品も数点出土し、この地において、定着した漁法になっていたことを示している。

第2にはヘラ状鯨骨製品がある。これは岡崎敬がアワビオコシと考えたもので（岡崎1968)、西川津には二点出土している。その1つ(第170図22）は、長さ19.8cm、幅3.2cmの半円状の棒状品で、鯨骨製である。柄部と刃部よりなり、ほぼ半ばで分かれている。柄部は一段と低く削って把握に便となっている。刃部先端は斜に削り落として鋭くしている。他の1点（第169図21）も、アワビオコシの可能性があるものであるが、鹿角を利用した珍

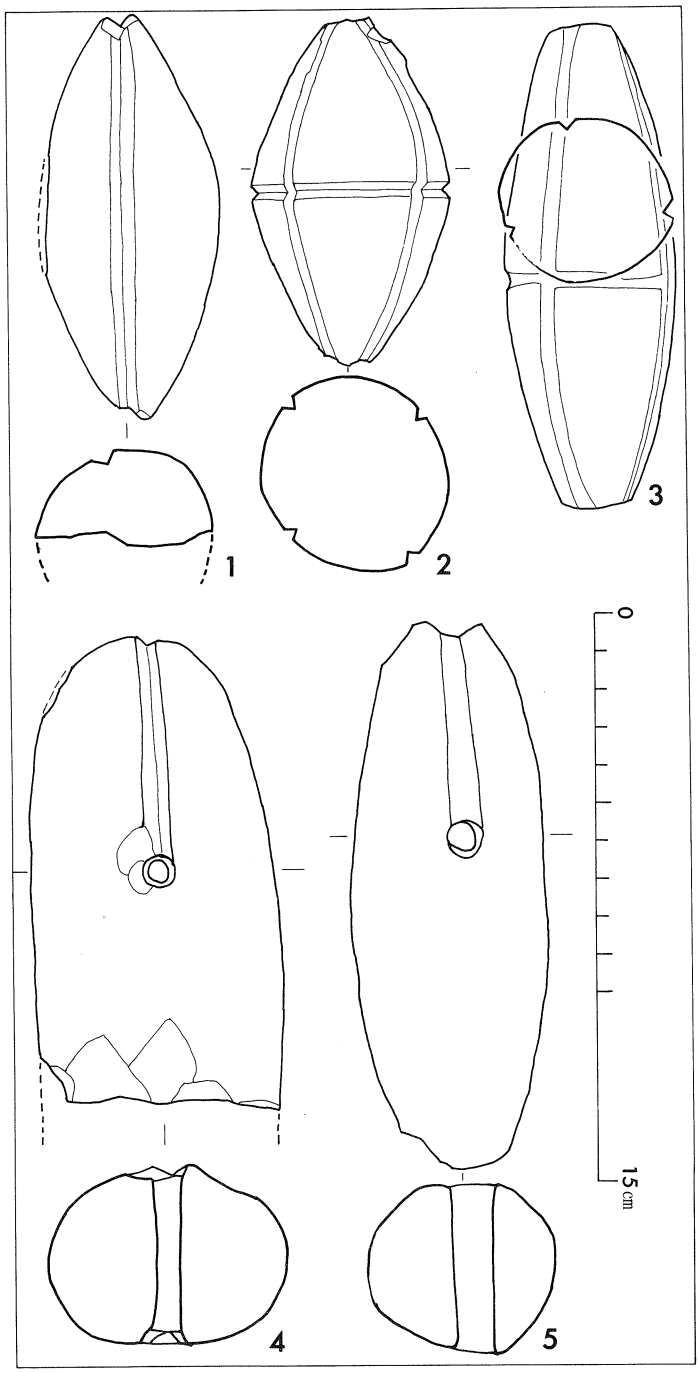


第203図　ヘラ状鯨骨製品（アワビオコシ）

1・2 佐賀県唐津市菜畑　　4 山口県下関市吉母ケ浜
3 福岡県粕屋郡夜臼　　5・6 長崎県壱岐郡原の辻、カラカミ

品である。

骨製アワビオコシは、玄海灘沿岸に縄文時代に出現する。佐賀県菜畑遺跡では、縄文時代中期に出現している（第272図21）。アワビオコシが盛行するのは、弥生時代に入ってからで、玄海灘沿岸を中心とした地域に広がっている。西は五島列島に、玄界灘には第203図5、6の壱岐島のカラカミ・ハルノツジ遺跡（岡崎　1968）、第203図2の佐賀県菜畑遺跡、第203図3の福岡県夜臼遺跡（森　1961）、東には響灘に第203図4の下関市吉母浜遺跡（下関市史編修委員会　1965）がある。夜臼、菜畑遺跡例は弥生前期に、カラカミ・ハルノツジ例は弥生中後期に属し、弥生全期に渡って鯨骨製アワビオコシは使われていた。一方、前期後半には長さ24cm、刃幅2.47cmのアワビオコシかと考えられる板状鉄製品が菜畑に出現し、以後、福岡県御床松原にみられるように、弥生後期から古墳時代にわたって鉄製アワビオコシが汎用されてくる。御床松原では、古墳時代になる

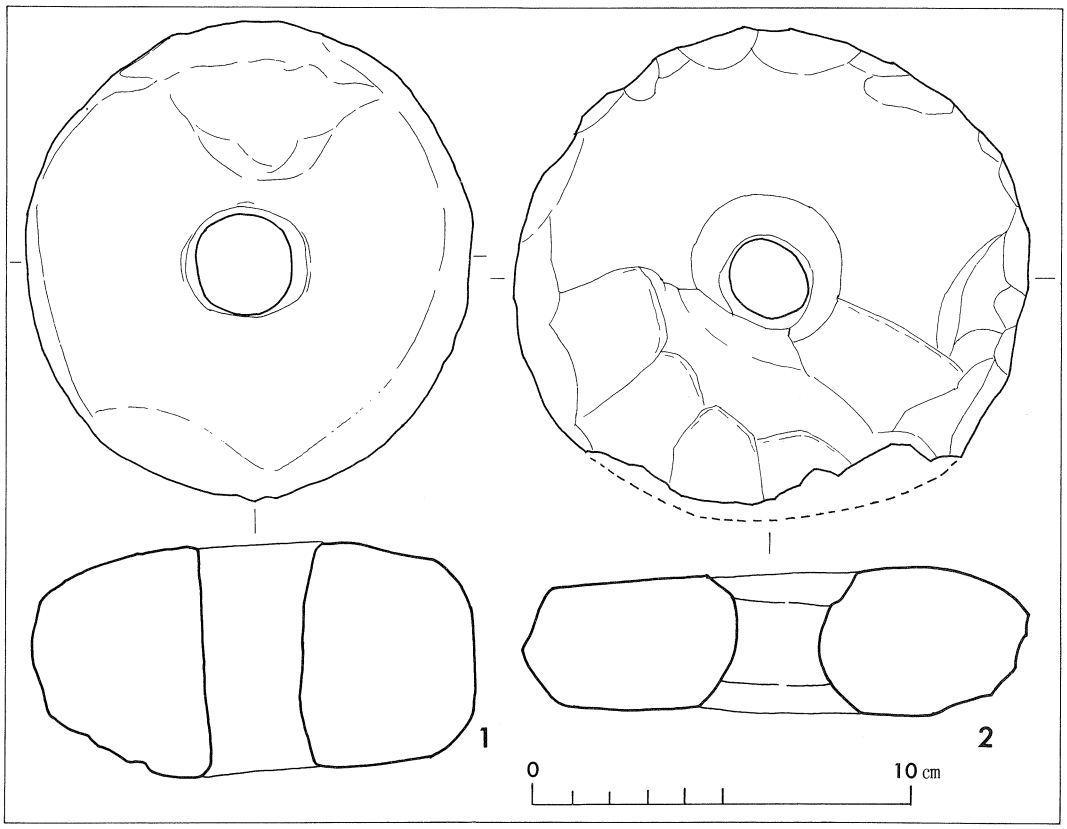


第204図　日本海出土九州型石錘

1・2 島根県松江市西川津（B型）　3 鳥取県米子市青木（B型）
4 京都府熊野郡久美浜町函石浜（A型）
5 福井県小浜市岡津（A型）

と現用例と類似した柄部を直角に曲げたものも出現してくる。西川津出土例も玄界灘―響灘と東方に拡大する弥生漁業文化の延長上に捉うべきもので、現下その東限例となっている。瀬戸内海には知られていない。

第3には九州型の大形石錘がある（第129図8）。これは長さ10cm前後の紡錘形品のその長軸に沿って1～数条の溝を入れたもので、九州型石錘大形Bと筆者が分類したものである（下條　1984）。溝が縦1条のものをBⅠ、複数のものをBⅡとした。横軸に溝1条を入れるものもある。重量は100～400gで、100～200gのものが最も多い。これまでB型は九州の玄界灘沿岸と山陰（鳥取県）に分布していた。九州では弥生中期に出現し、古墳時代前期まで使われた。西川津では、BⅠが1点（第204図1）、BⅡが1点（第204図2）の計2点が出土している。いづれも、弥生後期に属するという。BⅠは長さ10.5cm、幅4.5cmの紡錘形で縦方向に半ばを欠いているが現重量117.5gで、復元200gにはなる。長軸に1条の溝が走る。BⅡは、長さ9.1cm幅5.2～4.7cmで、重量190gを測る。長軸に4条の、横軸に1条の溝が刻まれている。重量、大きさ、形態ともに九州出土品と類似したもの



第205図　玄界灘出土の「碇」石

（1　福岡市西区小葎　2　福岡市東区和白）

で、海を媒介とした両者の密接な交流が推定できる。鳥取県青木遺跡出土品も弥生後期のＢⅡの類例である（第204図３）。

島根、鳥取には今のところ出土していないが、山陰には九州型大形Ａ型石錘も出土している。京都府熊野郡久美浜町函石浜（第2.4図４）や福井県小浜市岡津（第204図４、５）、同三方郡三方町食見などの丹後から若狭などにかけて出土するもので、弥生後期から古墳前期にかけてのものである。このように、弥生後期においても、九州の玄界灘沿岸と山陰地方とは、海洋漁業を媒介とした、両者のコンスタントな交流は継続されている。島根県隠岐島の北北西33㎞、海深260ｍの海中より、九州系の弥生後期の土器が漁民により引きあげられている（鹿島町立歴史民俗資料館　1987第206図）。これなどは、山陰と玄界灘との交流を物語る好例であり、それが後期の土器であるというのも、九州型石錘が山陰に、西川津に出土する時期とうまく符合している。

第206図　日本海より引き上げられた弥生土器
（鳥取県立博物館蔵）

このほか西川津には、長径13.5㎝、短径10.3㎝、厚さ4.8㎝の平面楕円形で、中央に2㎝の孔をもつドーナツ状の石器がある（第129図８）。滑石質の軟質材で作られ、重さは1㎏ほどある。実は北部九州の玄界灘沿岸には、九州型石錘と共存して、しばしばこの種の石器が出土し「碇」と呼んでいる。大小、厚薄種々であるが、滑石系の軟質材を使っている点も類似している。弥生後期から平安時代まで使われている。

西川津に近い例をとりあげると、福岡市小葎例がある。その①は、径11.7㎝、厚さ6㎝、孔径2.6㎝、重量1200ｇ（第205図１）、その②は径12㎝、厚さ6.5㎝、孔径1.6㎝、重量1350ｇ、その③は径14.7×12.5㎝、厚さ8㎝、孔径1.6㎝、重量2000ｇで①、②は西川津に近い。そのほか、福岡市今宿五郎江例は径11.8㎝、厚さ4.4㎝、重量1150ｇ、福岡県御床松原例はいづれも破片であるが、復元で①は径18㎝、孔径2㎝、②は径23㎝、孔径2㎝、福岡市和白例は径13.5㎝、厚さ4㎝、孔径2.1㎝（第205図２）で、相当に九州例と西川津例とは大きさ、材質において近い関係にある。

ただし、西川津例が、外縁4ヶ所に抉りを入れ、その出土時期が弥生中期と九州例よりやや出現が早い点が異なっている。両者の関係を今速断するのは尚早であるが、今後の類

例の増加を測りつつ、更に検討してみる価値はありそうである。

5 おわりに

以上のことは、次のように要約することができる。まず、弥生前期の段階に柳葉形磨製石鏃に代表されるように、北部九州を渕源とした文化が伝わり、次いで前期末・中期初頭を大きな画期として、新たな北部九州系の文物が出現する。それは、陶塤、城ノ越～須玖Ⅰ式土器、細形石剣、石矛、扁平磨製石鏃、結合式釣針、アワビオコシなどの祭器や漁具を顕著とするものであり、石庖丁、大形石庖丁、石鎌、抉入石斧なども関連するものであった。西川津遺跡で、他の遺跡にみられない遺物の特徴は、結合式釣針やアワビオコシなどの九州系の漁具の出土である。なかんずく、結合式釣針は大形の外洋漁業用のものであり、これの存在は、九州と山陰との交流が、一方においき陸路によるものがあったにしても、他方において、外海を道とした海路交通による結びつきが存在していたことを示している。こうした、海路を基盤とした歴史的結合が、弥生後期にも引きつがれることは、九州型石錘大形B型や隠岐沖海底出土の九州系壺形土器の存在として立証される。

遺物の性格からすると、柳葉形磨製石鏃、陶塤、細形石剣、石矛、扁平磨製石鏃などの祭器や結合式釣針、アワビオコシ、九州型石錘などの漁具は、北部九州と山陰の間の地域性を無視させる共通形式のものであり、その間の伝播はより直接的であるといえる。そして、これらの多くは、瀬戸内海地方ではあまり発達しない九州―山陰の独自のものである。

一方、石鎌、石庖丁、大形石庖丁などの農耕的生活具は出土量、形態などにおいて、北部九州とは間接的結合であり、遠賀川～響灘地方と深い親縁性を示している。これらのことからすると、山陰と北部九州との関係は、弥生時代全体を通して間接、直接の二重性の中で結ばれていたものとみられる。

引用文献

青野遺跡調査報告書刊行会　1976　『青野遺跡A地点発掘調査報告書』綾部市文化財調査報告書第2集
愛媛県埋蔵文化財センター1988「特集町谷遺跡」埋文えひめ9号
岡崎　敬　1968　「倭の水人」『日本民族と南方文化』
奥村清一郎　1987　「竹野遺跡出土の陶塤」京都考古45
鹿島町教育委員会　1976　『志谷奥遺跡』鹿島町立歴史民俗資料館，1987　『目でみる鹿島の歴史』
嘉穂地方史編纂委員会　1973　『嘉穂地方史、先史編』
韓国考古学会　1969　「大田槐亭洞出土一括遺物」『考古学』第2輯
高知県教育委員会　1986　『田村遺跡群』第2分冊
山陰中央新報社　1978　『さんいん古代史の周辺』(上)
志摩町教育委員会　1983　『御床松原遺跡』福岡県志摩町文化財調査報告書第3集

島根県教育委員会　1979　『タテチョウ遺跡発掘調査報告書１』
島根県教育委員会　1985　『荒神谷遺跡一銅剣発掘調査概報』，1986　『荒神谷遺跡発掘調査概報（2）』
島根県教育委員会　1988　『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
下関市史編修委員会　1965　『下関市史一原始～中世』
下関市教育委員会　1981　『綾羅木郷遺跡Ⅰ』
下條信行　1977　「九州における大陸系磨製石器の生成と展開」『史淵』114
下條信行　1982　「石矛の提唱」『賀川光夫先生還歴記念論集』
下條信行　1984　「弥生・古墳時代の九州型石錘について」『九州文化史研究所紀要』29
下條信行　1986　「日本稲作受容期の大陸系磨製石器の展開」『九州文化史研究所紀要』31
下條信行　1988　「日本石庖丁の源流」『日本民族・文化の生成』
住宅・都市整備公団　1982　『十郎川遺跡』
池　健吉　1978　「礼山東西里石棺墓出土青銅一括遺物」『百済研究』9
中島直幸　1982　『菜畑』　唐津市文化財調査報告５
福岡市教育委員会　1979　『福岡市板付遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書49
前島己基　1973　「浜田市鰐石遺跡」季刊文化財22号
峰山町教育委員会　1975　『扇谷遺跡発掘調査報告書』
峰山町教育委員会　1977　『京都府峰山町途中ケ丘遺跡発掘調査報告書』
森　貞次郎　1961　「福岡県夜臼遺跡」『日本農耕文化の生成』
山口譲治　1983　『福岡市有田七田前遺跡)』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集
尹　武炳　1972　「韓国青銅遺物の研究」『白山学報』12
米子市教育委員会　1986　『目久美遺跡』
渡辺　誠　1985ａ　「西北九州の縄文時代漁撈文化」『列島の文化史』2,1985ｂ　「漁業の考古学」『日本技術の社会史』2

図　版　典　拠

なお下図については下記の報告書・論文より再トレースしたものである。

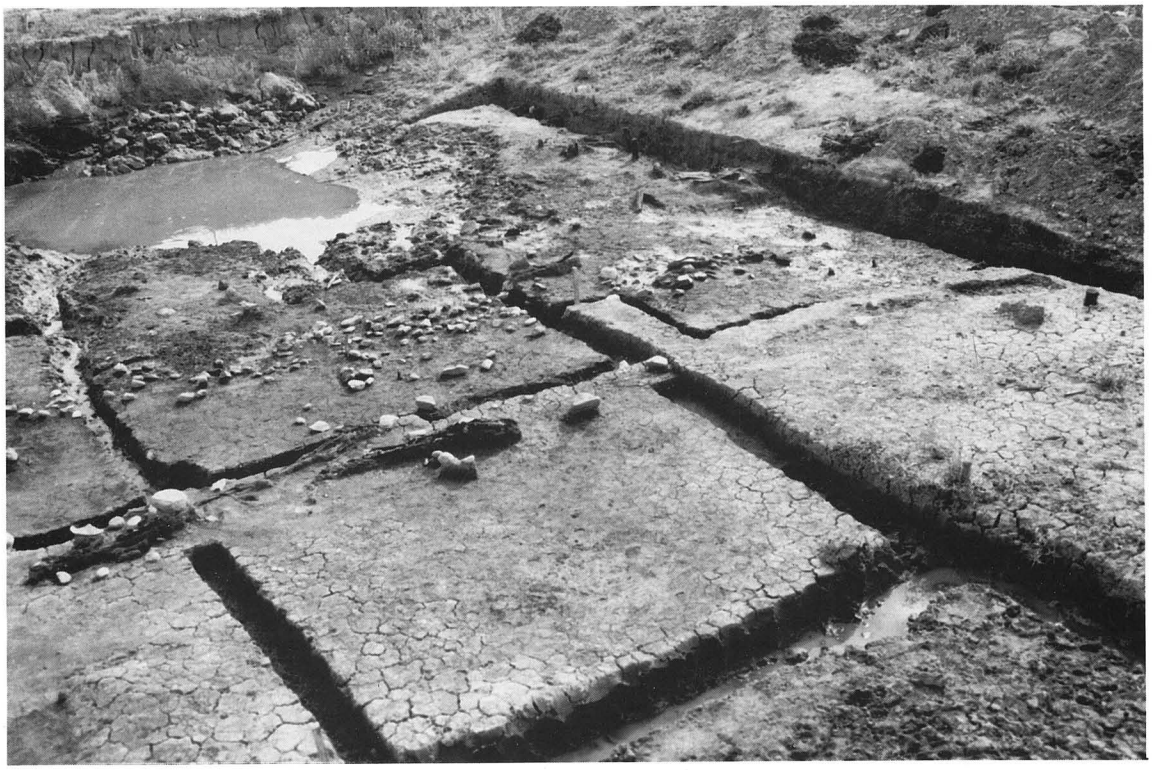
第200図３　（『青野遺跡Ａ地点発掘調査報告書』　1976）
第201図３　（『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』　1979）
第203図１・２　（『菜畑』　1982）
第203図３　（「福岡県夜臼遺跡」　1961）
第203図４　（『下関市史』　1965）
第203図５・６　（岡崎　敬　「倭の水人」　1968）

写　真　図　版

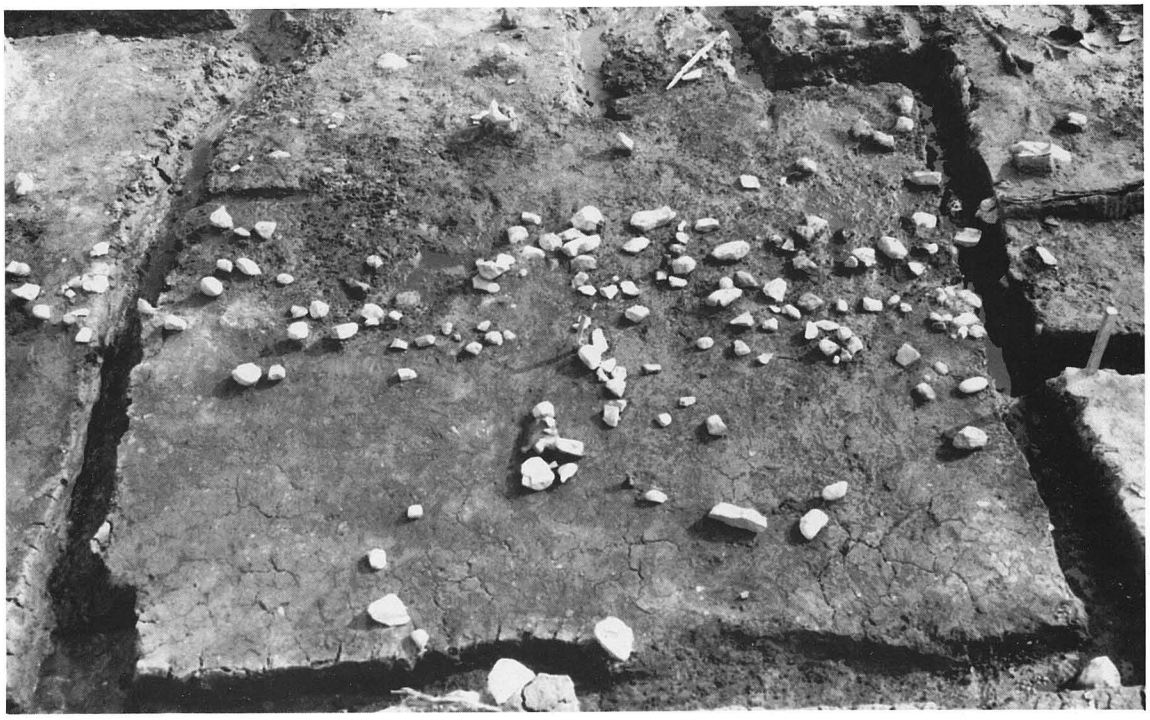
溝状遺構（北側より）

溝状遺構（南側より）

図版 2



最下層上面（昭和 59 年度調査区）

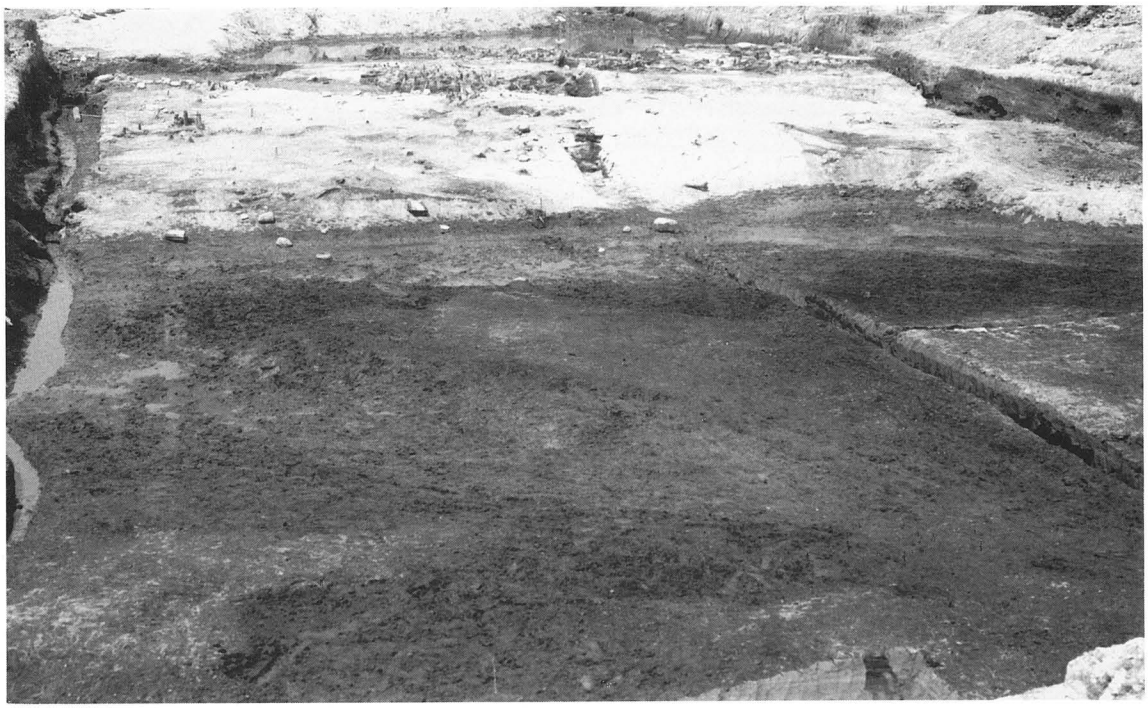


最下層上面（昭和 59 年度調査区）

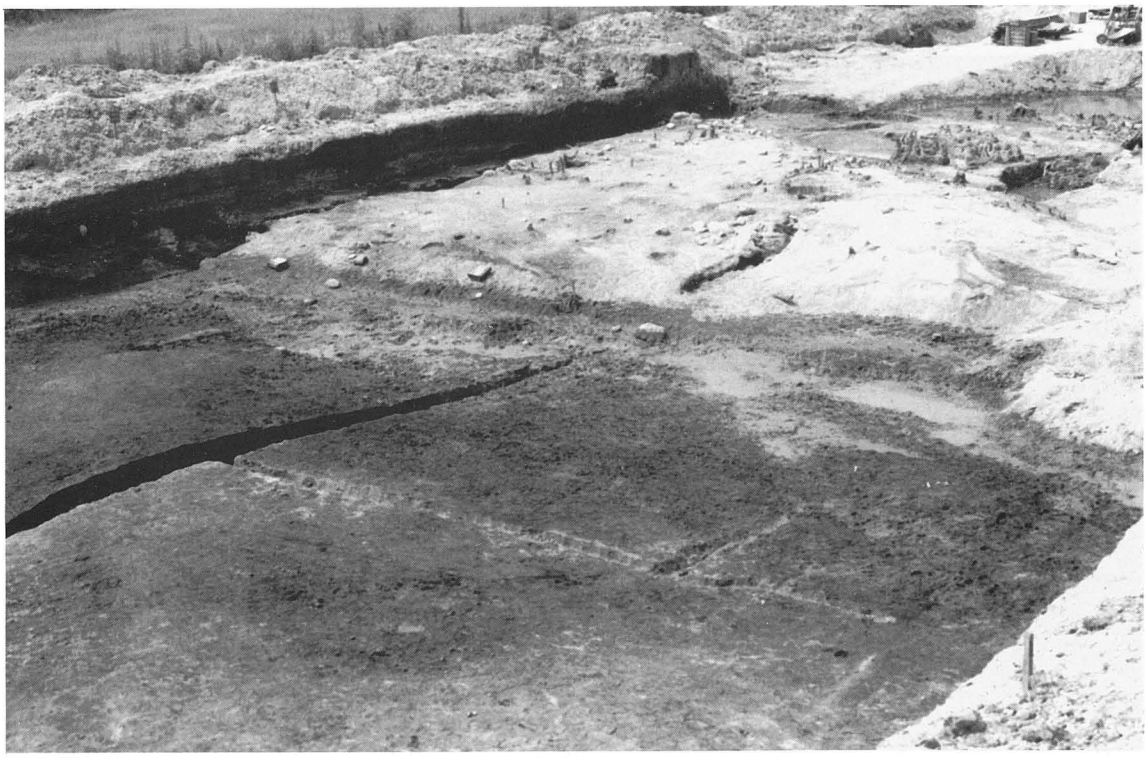
最下層上面（昭和 60 年度調査区）

最下層上面（昭和 60 年度調査区）

図版 4

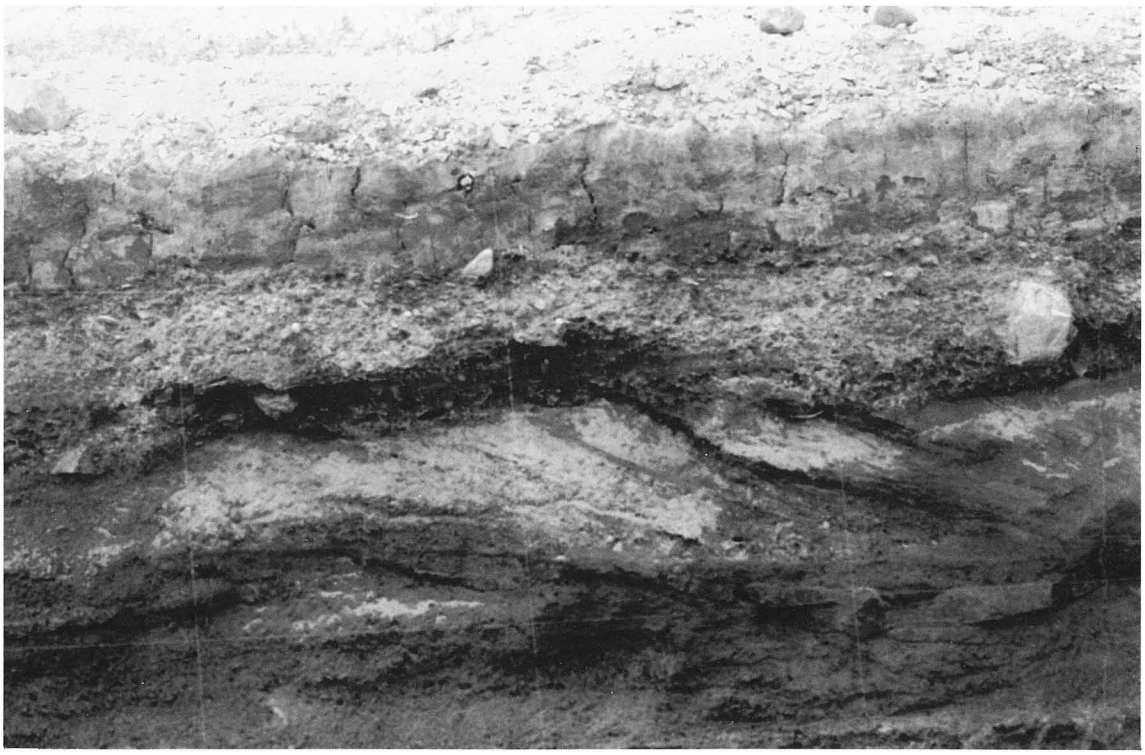


最下層上面（昭和 60 年度調査区）



最下層上面（昭和 60 年度調査区）

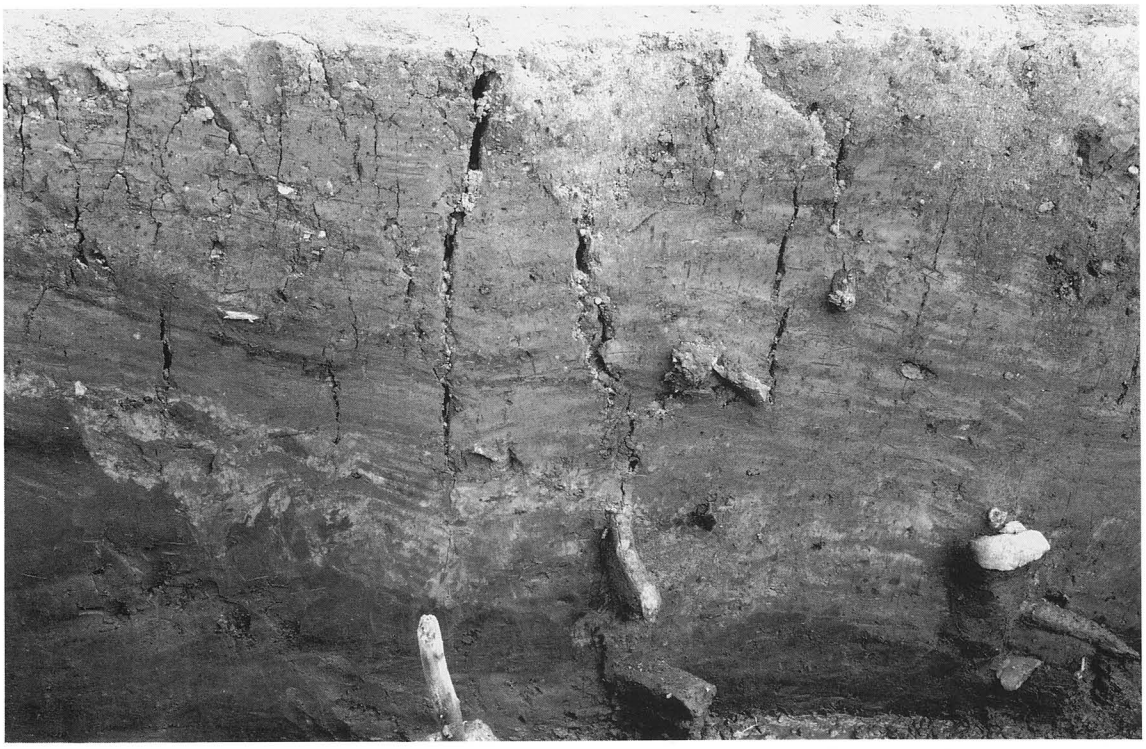
発掘調査区　北壁



発掘調査区　南壁

図版 6

発掘調査区　南壁



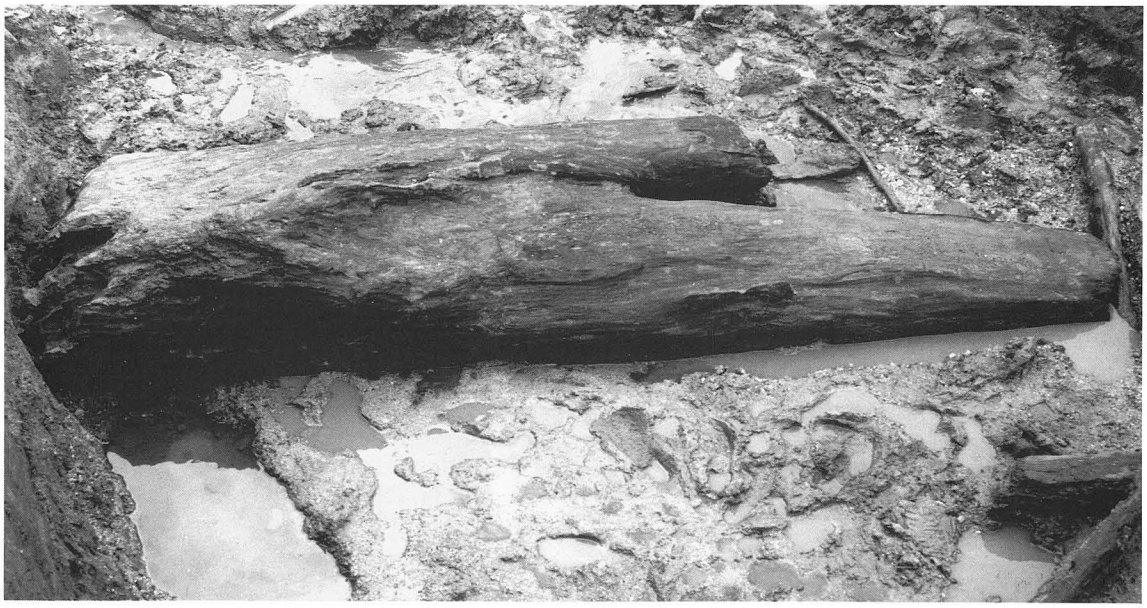
発掘調査区　南壁

SZ024

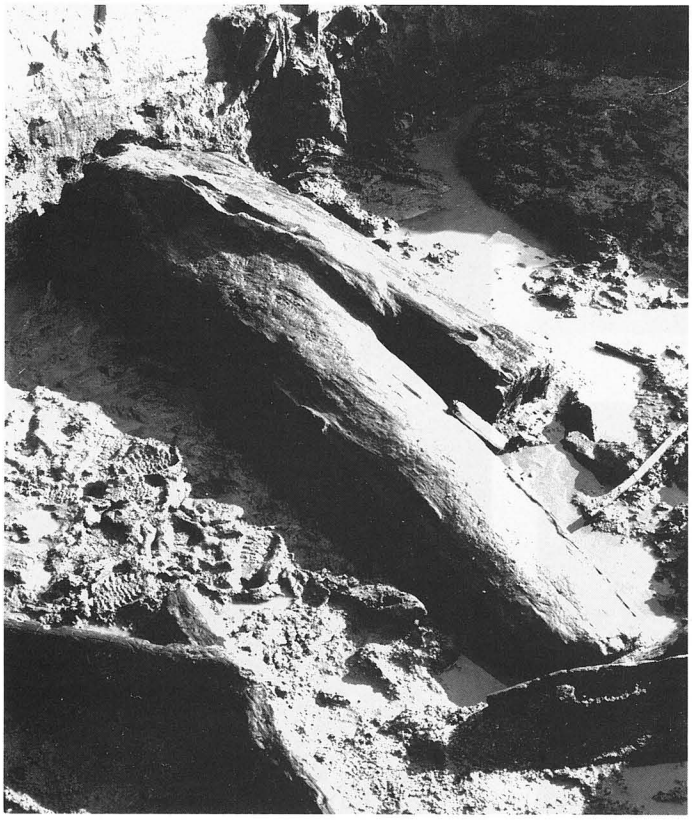
図版 8

SZ025・026

SZ025・026

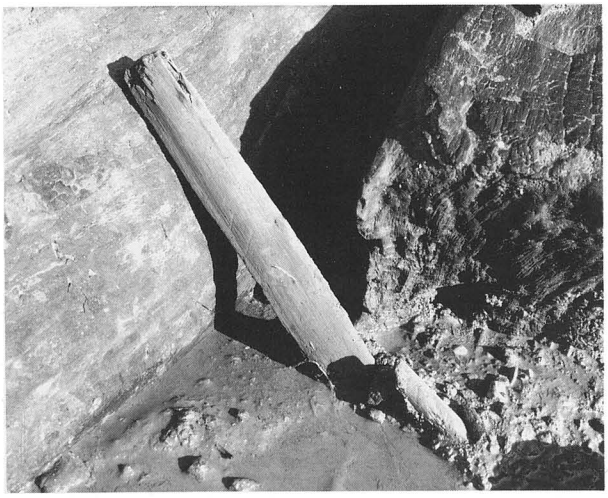


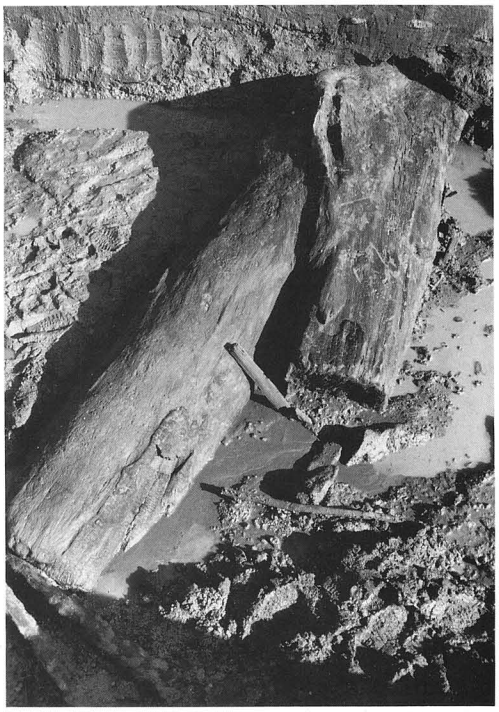
木材の出土状態（長さ 3.3 m）

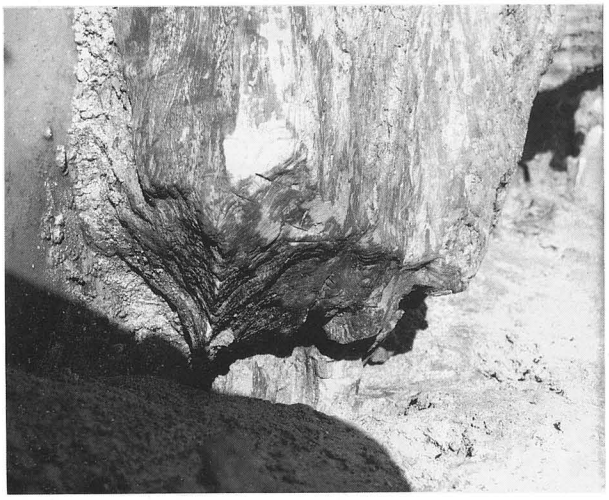


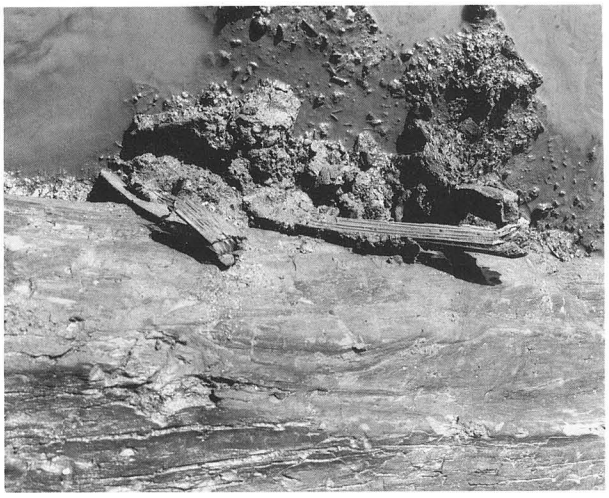
木材の出土状態（長さ 3.3 m）

図版 10





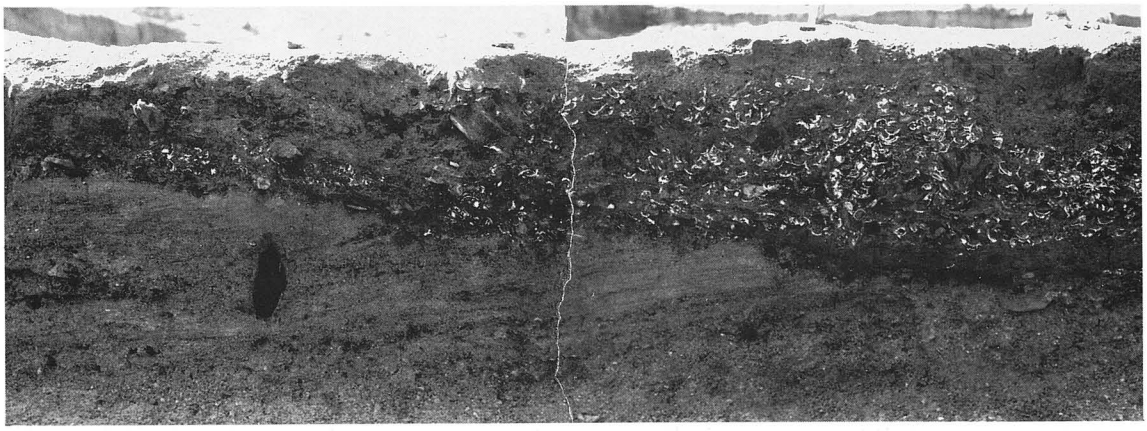




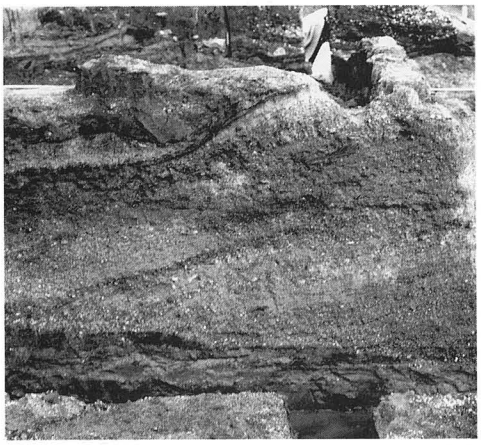
木材の出土状態（細部）

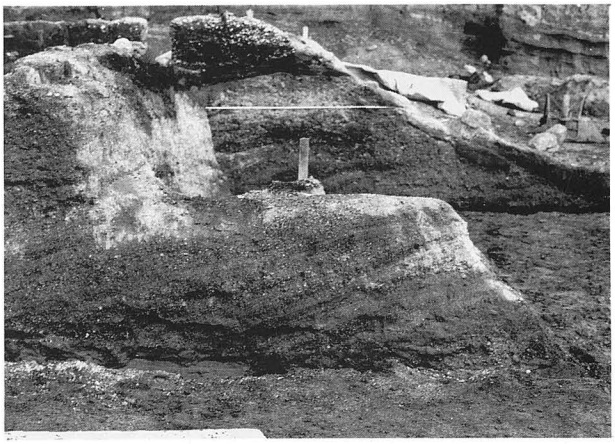
木材の出土状態（長さ 2.2 m）

図版 12

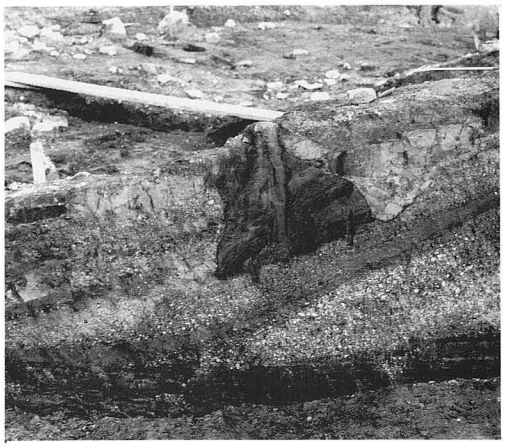


貝層Ⅰ断面

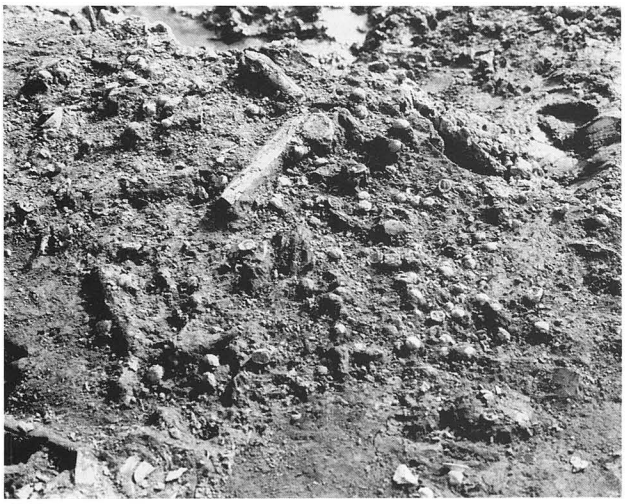




溝状遺構西側土手断面（縄文時代後・晩期層）

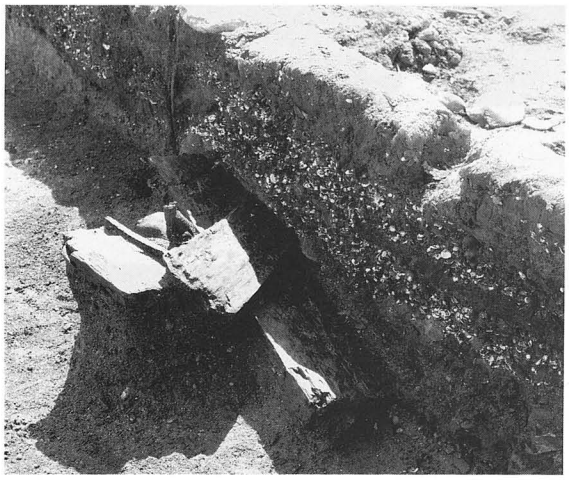


（同上）



クルミ出土状態

クルミ出土状態（細部）



貝層Ｉ断面　木製品出土状態

貝層Ｉ断面

貝層Ｆ断面

貝層Ｆ断面

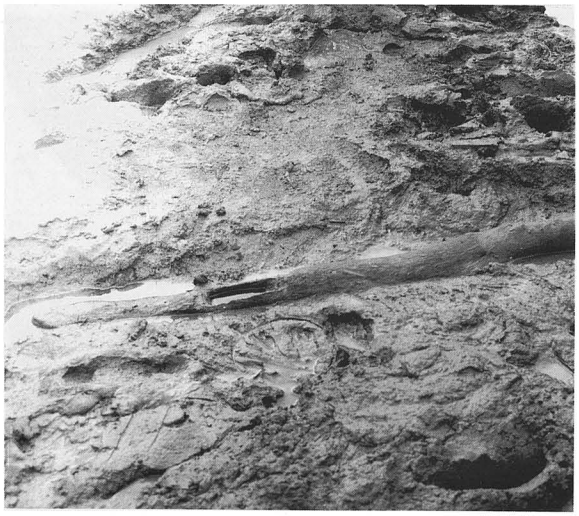
図版 14

90—103

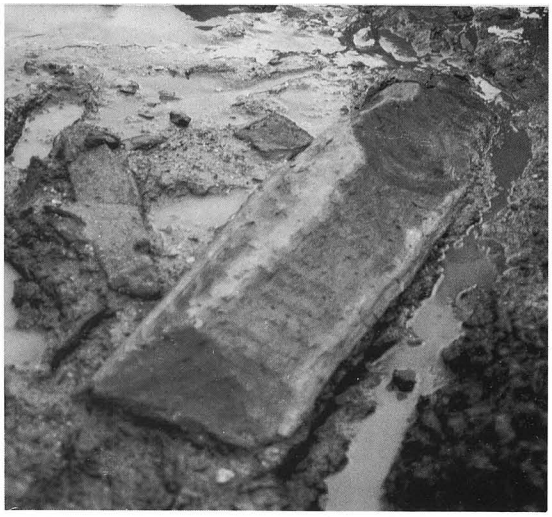
90—103

80—45

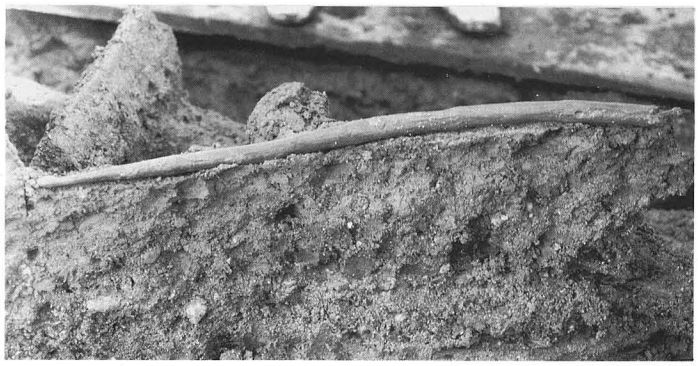
79—41



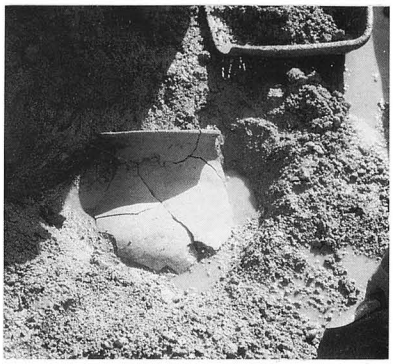
92—119



72—21



89—100

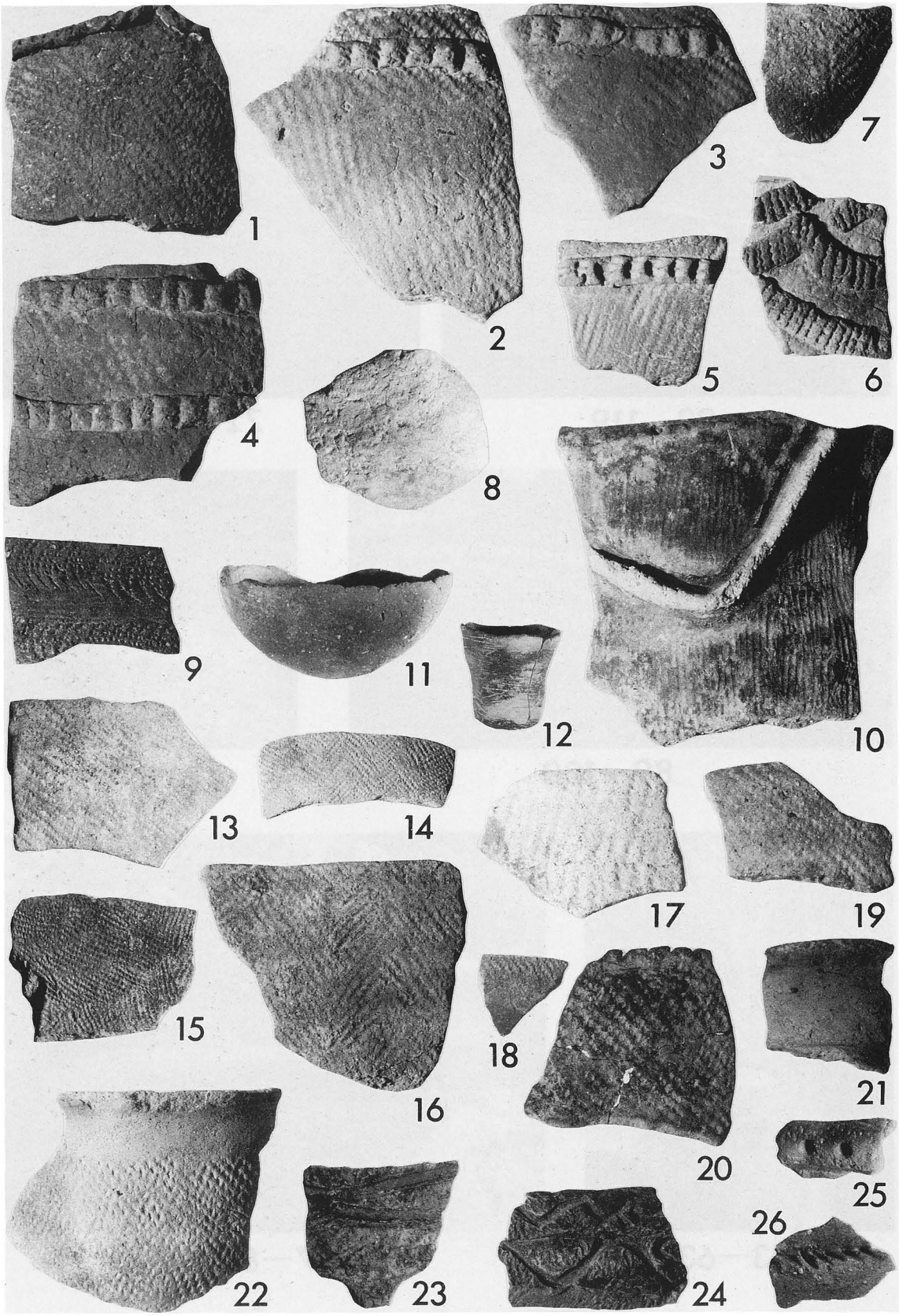


56—541

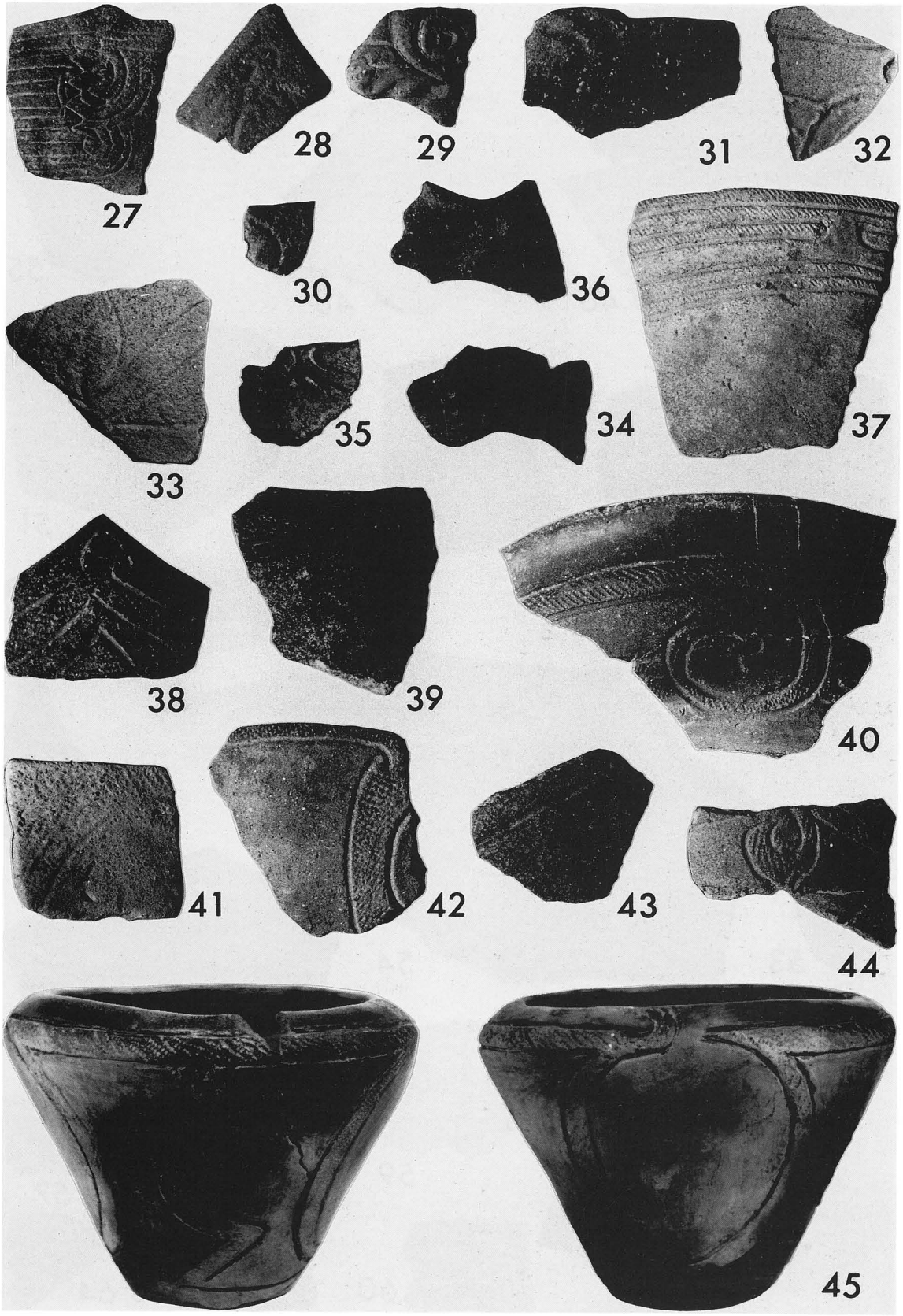
63—637

87—88

図版 16

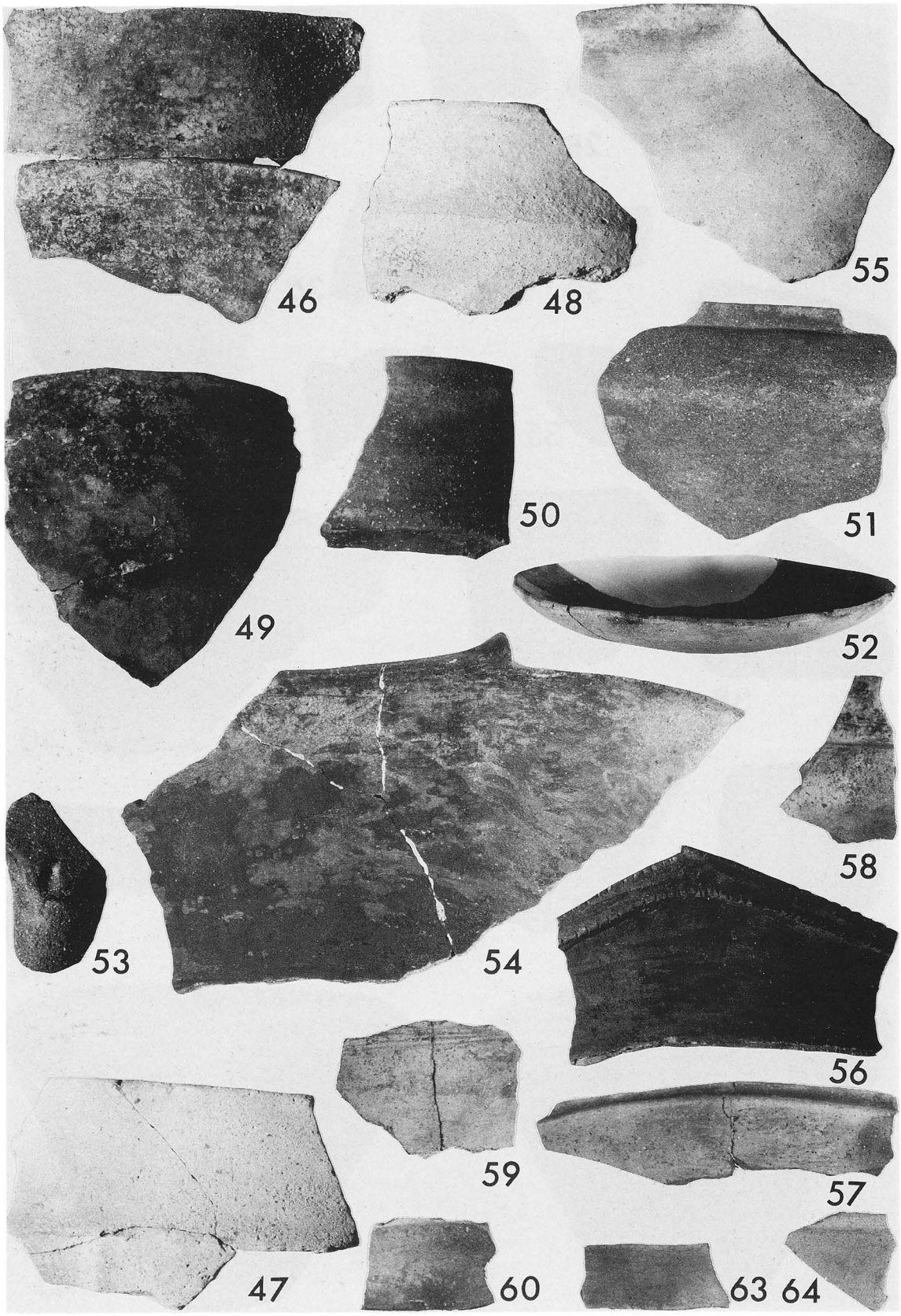


縄文土器

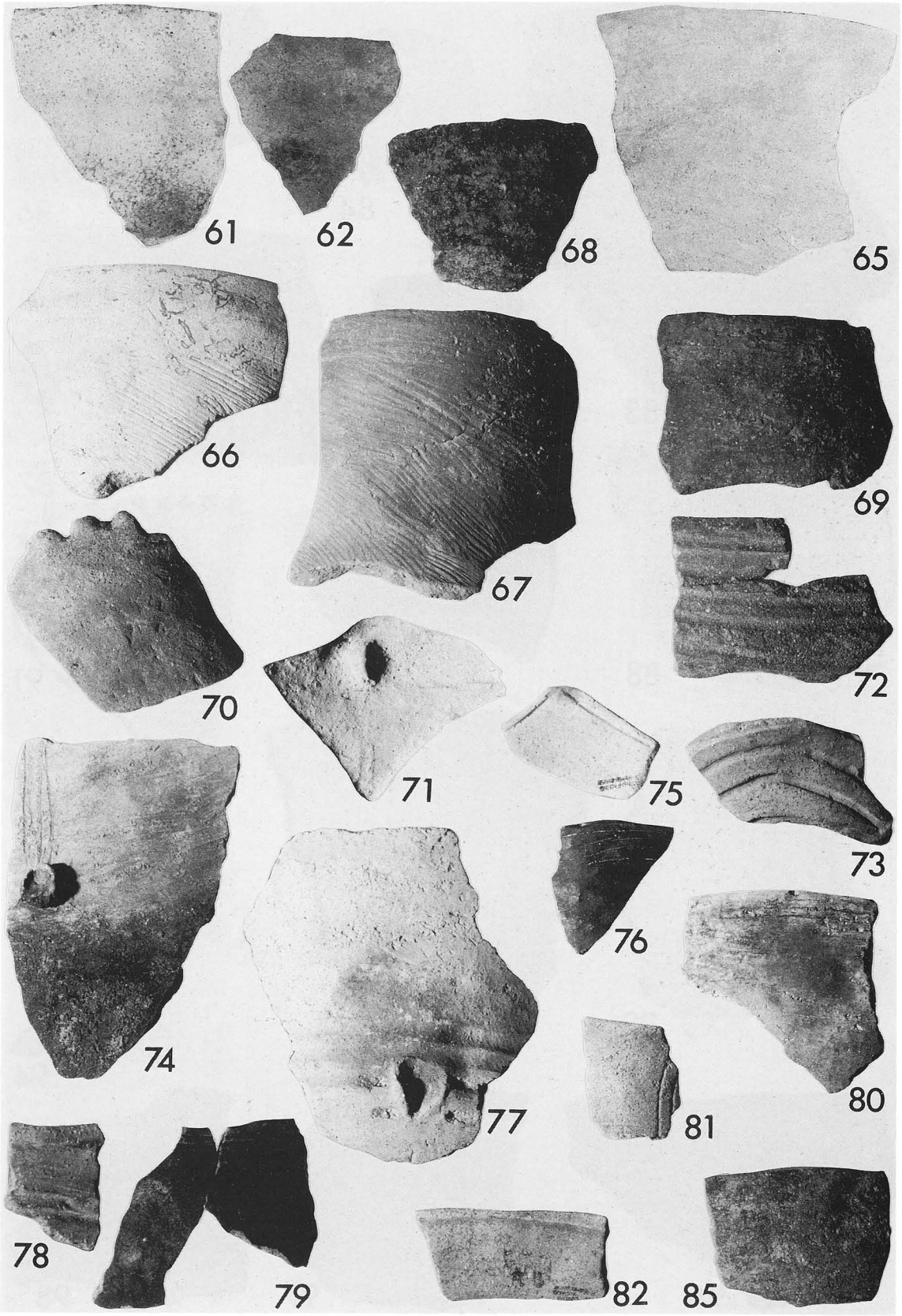


縄文土器

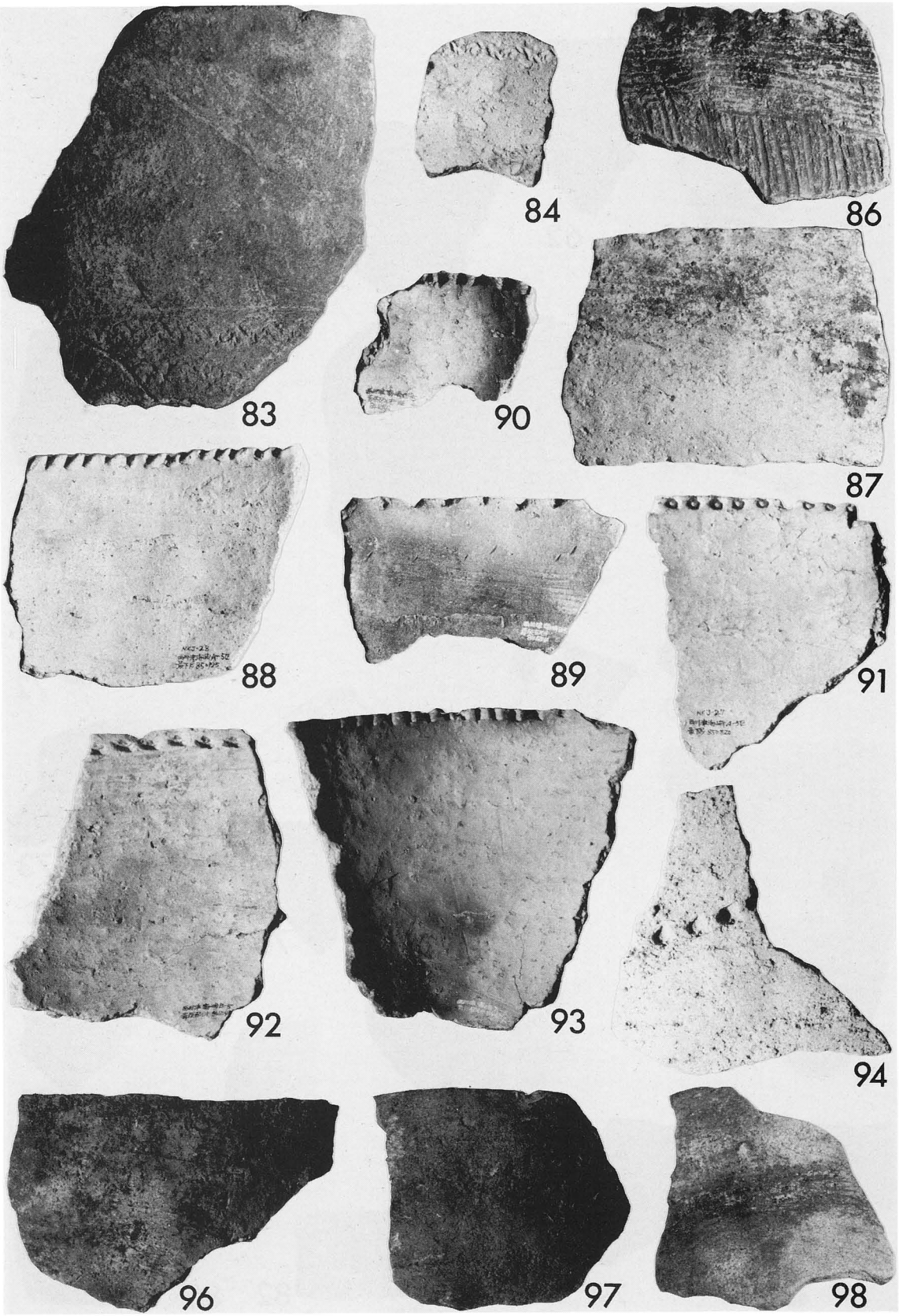
図版 18



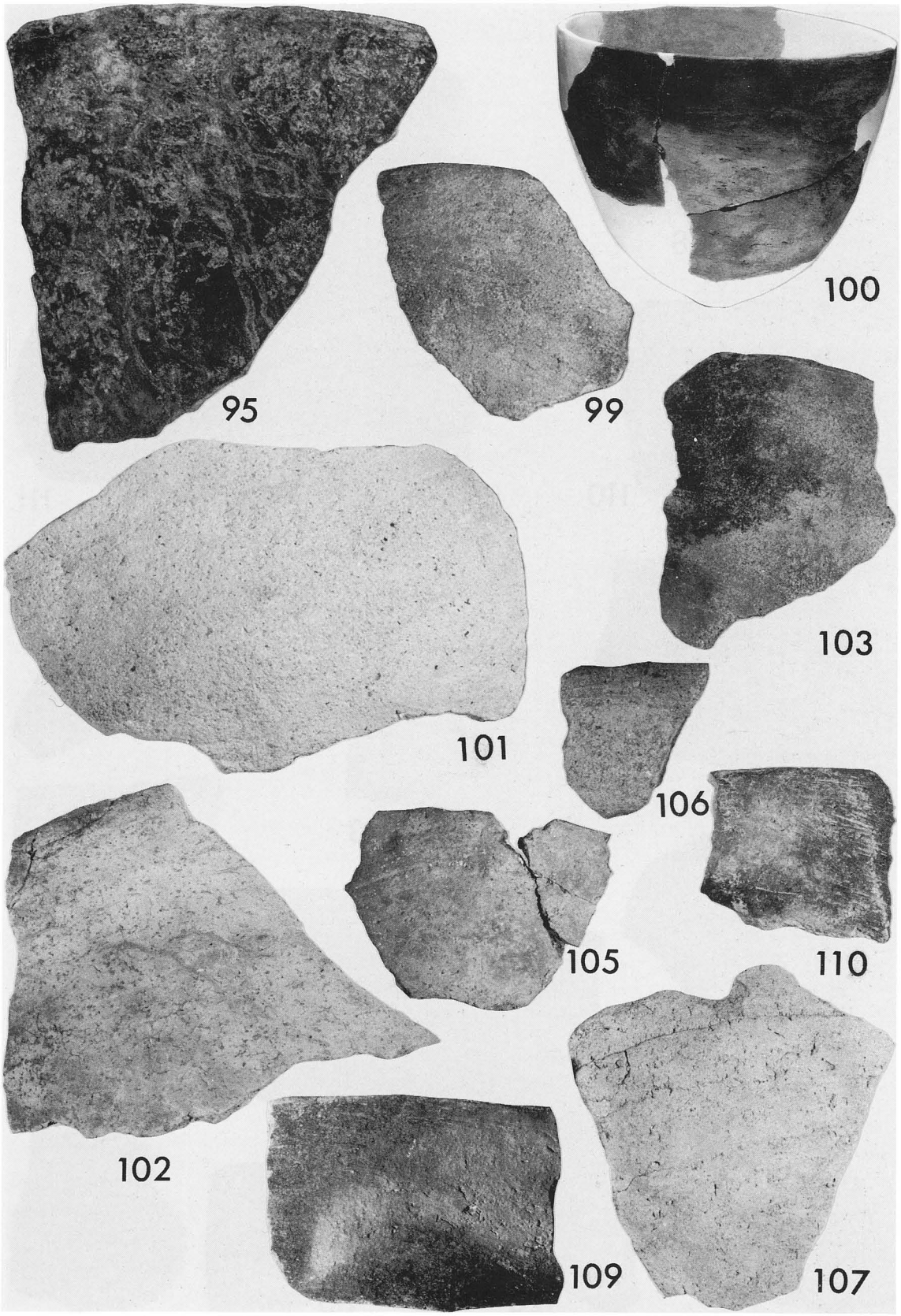
縄文土器



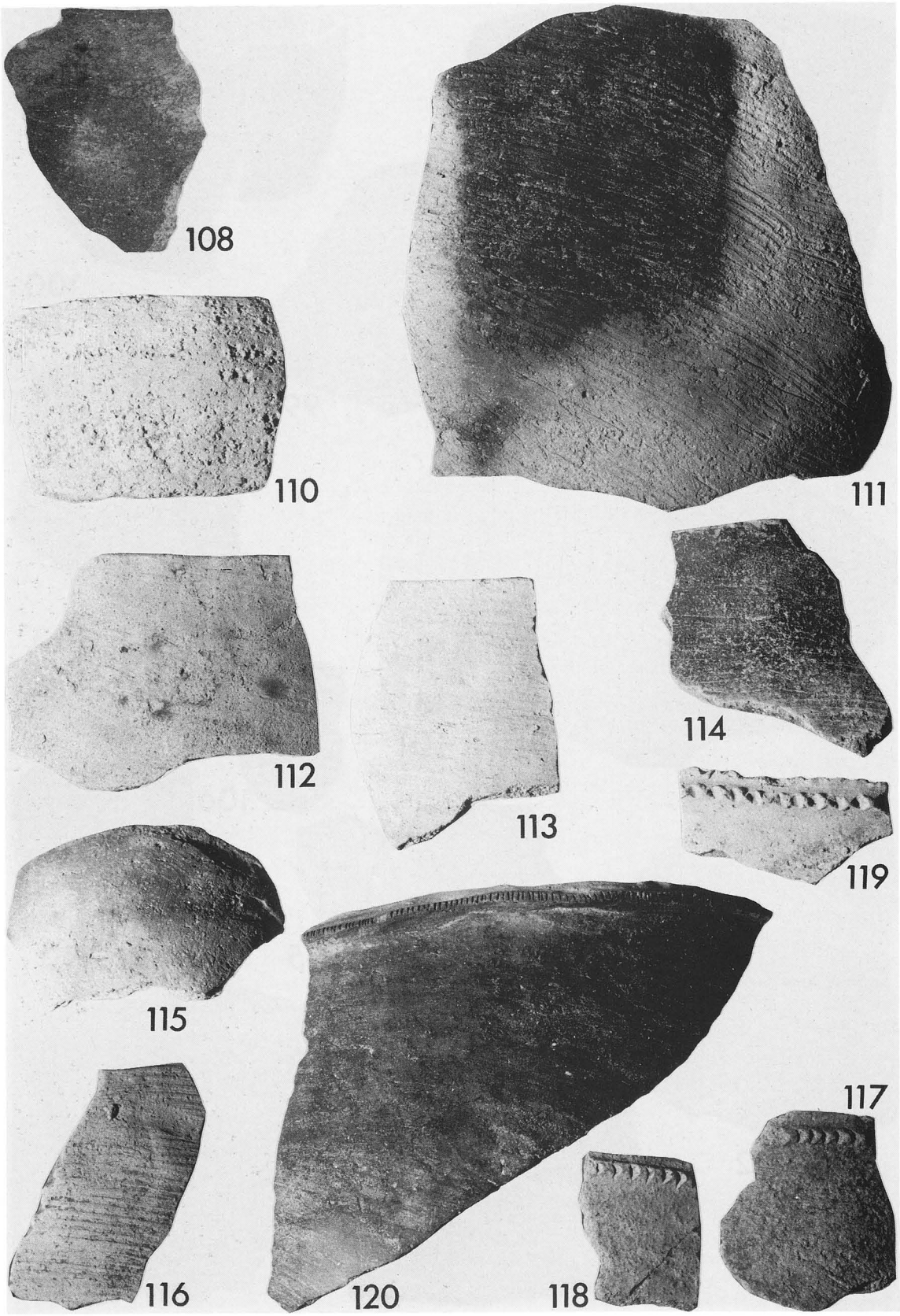
縄文土器



縄文土器



縄文土器



縄文土器